

Title	羽田亨日記
Author(s)	羽田, 亨; 京都大学大学文書館
Citation	京都大学大学文書館資料叢書 (2019), 1: 1-200
Issue Date	2019-03-29
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/241006">https://doi.org/10.14989/241006</a>
Right	
Type	Book
Textversion	publisher

京都大学大学文書館資料叢書 1

# 羽田亨日記

京都大学大学文書館 編

京都大学大学文書館資料叢書 1

# 羽田亨日記

## はじめに

京都大学文学書館は、京都大学の歴史に係るさまざまな貴重な資料を所蔵しています。このたび、そうした資料のなかから「京都大学文学書館資料叢書」を刊行することになりました。その最初として、西域史の著名な研究者であり戦時期の京都帝国大学総長でもあった羽田亨の総長時代の日記を翻刻することとしました。羽田の克明な日記からは、戦時下の京都帝国大学の姿が見てとれるだけでなく、一人の大学人あるいは家庭人として、羽田が戦争といかに向き合おうとしていたかが浮かび上がってきます。ご味読いただけましたら幸いに存じます。

最後になりますが、『羽田亨日記』をご寄贈くださった羽田の令孫藤田昌子様に厚くお礼申し上げます。

二〇一九年三月

京都大学文学書館長 伊藤孝夫

# 目次

## I 解説編 『羽田亨日記』と戦時下の京都帝国大学（西山伸）

はじめに 3

一 羽田亨の略歴・人物像 3

二 『羽田亨日記』の概要 6

三 『羽田亨日記』からみる戦時下の京都帝国大学 7

おわりに 14

## II 翻刻編 『羽田亨日記』

一九三八（昭和二三）年 19

一九三九（昭和一四）年 34

一九四〇（昭和一五）年 53

一九四二（昭和一七）年 68

一九四三（昭和一八）年 98

一九四四（昭和一九）年 128

一九四五（昭和二〇）年 159

I  
解  
説  
編

# 『羽田亨日記』と戦時下の京都帝国大学

西山 伸

はじめに

本稿では、『羽田亨日記』読解の助けとすべく「羽田亨の略歴・人物像」「羽田亨日記」の概要」「『羽田亨日記』からみる戦時下の京都帝国大学」の三項目について、簡単に解説する。『羽田亨日記』に主に記されている内容および筆者の能力の問題から、解説事項は京都帝国大学に関する事項に限定していることをあらかじめお断りしておく。

## 一 羽田亨の略歴・人物像

### (一) 略歴

西域史の研究者として著名な羽田亨は、京都帝国大学の学内行政にも深く関わっていた。<sup>①</sup>

羽田の略歴は次のとおりである。<sup>②</sup>

一八八二（明治一五）年 五月一日	京都府中郡五箇村（現京丹後市）の吉村家の四男として出生
一八八九（明治三二）年 一月五日	羽田家の養子となる
一九〇四（明治三七）年 七月一〇日	第三高等学校卒業
一九〇四（明治三七）年 九月	東京帝国大学文科大学入学
一九〇七（明治四〇）年 七月一〇日	東京帝国大学文科大学卒業
一九〇七（明治四〇）年 九月 一日	京都帝国大学大学院入学
一九一三（大正 二）年 四月二八日	京都帝国大学文科大学助教授

一九二〇（大正 九）年 一月二九日

言語学およびウラル・アルタイ語研究のためイギリス・フランス・デンマーク・中国に留学のため出発

一九二二（大正一一）年 三月一日

帰国

一九二二（大正一一）年 五月二七日

文学博士

一九二四（大正一三）年 四月一四日

京都帝国大学文学部教授

一九三二（昭和 七）年 一〇月 七日

京都帝国大学文学部長就任

一九三四（昭和 九）年 一〇月 八日

京都帝国大学文学部長退任

一九三六（昭和一一）年 一〇月 一九日

京都帝国大学附属図書館長就任

一九三八（昭和一三）年 一月二五日

京都帝国大学附属図書館長退任

一九三八（昭和一三）年 一月二五日

京都帝国大学総長就任

一九四五（昭和二〇）年 二月二一日

東方文化研究所長就任

一九四五（昭和二〇）年 一月 一日

京都帝国大学総長退任

一九四五（昭和二〇）年 二月一九日

貴族院議員

一九四六（昭和二二）年 三月一九日

京都帝国大学名誉教授

一九四七（昭和二三）年 五月 三日

貴族院廃止とともに議員退任

一九四八（昭和二三）年 三月三一日

東方文化研究所長退任

一九五三（昭和二八）年 一月 三日

文化勲章受章

一九五五（昭和三〇）年 四月一三日

死去

羽田が出生した吉村家は、近世には峰山藩の家老であったという。羽田は幼少時から非常に優秀で、高等小学校卒業後一四歳にして地元の分校で助教として教えはじめたというが、学問への情熱から京都府立第一中学校に編入学した。<sup>③</sup>それと機を同じくして、当時京都府中郡の郡長を務めていた羽田信明とその妻エンの養子になっている。実子のなかった信明が地元の峰山中学校の校長に養子を探してくれるよう依頼し、校長が推薦したのが亨であった。<sup>④</sup>

その後羽田は第三高等学校を経て、一九〇四年東京帝国大学文科大学に入学した。ちなみに、一八九七年に創設された京都帝国大学にはこの時まで文科大学は設置されておらず（設置は一九〇六年）、当時文科大学は東京帝国大学にしかなかった。東大では白鳥庫吉に師事して東洋史、なかでも元代史を専攻し、卒業論文の題目は「蒙古窩濶台時代の文化」であった。

卒業後、新設間もない京都帝国大学文科大学の大学院に進み、一九一三年に助教授、一九二四年に教授に就任し、東洋史学第三講座の担任となった。その間、ヨーロッパおよび中国に留学し、さらに一九二二年には「唐代の回鶻に関する研究」で文学博士を授与されている。

羽田は一九三一年に『西域文明史概論』を上梓する。同書は、これまでの羽田の活発な研究活動の積み重ねの上に立って書かれたもので、「羽田の学問の到達点を示すものであると同時に、その後の発展を予感させるものでもあった」と評されている。しかし、その直後から羽田は学内の要職を歴任していくことになる。

一九三二年から三四年まで文学部長を務めたが、ちょうどこの間に、法学部教授滝川幸辰がその学説を理由に休職処分となり、抗議した法学部教官計二二名が辞職したいいわゆる滝川事件が起こっている。また、一九三六年一〇月に附属図書館長に就任した際には、この年一月に起こった附属図書館閲覧室の全焼事件を受けて、新しい図書館の建設が求められており、羽田はそのため奔走することになる。

一九三八年の総長就任に至っては、おそらく羽田にとって全く予想外であったと思われる。この前年から総長であった羽田の親友の浜田耕作が病氣となり、現職のまま一九三八年七月に死去したことが羽田就任の直接の理由であった。浜田の在任中は、京大で職員の汚職が相次ぎ「肅学」の真つ最中にあったことに加え、羽田や浜田とも交流が深かった医学部教授清野謙次による文化財窃盗事件という不幸事も発生していた。さらに、浜田の死を契機に、当時文部大臣

であった荒木貞夫が帝国大学における従来の総長選考方法を問題視し、文部省と各帝国大学との折衝によって新たな任命方法が定められたときに当たっていた（後述）。そして言うまでもなく、総長就任後は、日中戦争の長期化、さらに対英米開戦から敗戦まで、戦時下が起こったさまざまな事態への対応を余儀なくされることになった。

京大以外の公職としては、総長在任中の一九四五年二月に東方文化研究所長に就任、総長退任直後には貴族院議員に勅選されている。前者については、東方文化研究所の京都大学人文科学研究所への統合とともに退任し、後者は貴族院が廃止されたため退任となった。

## （二）人物像

羽田の厳格な人柄については、周囲の証言が少なくない。特に弟子筋にとっては、大変こわい先生だった。羽田が総長就任の頃の学生であった小畑龍雄は「羽田先生といえば、こわかったということがまっ先に来る。こわさにもいろいろあるが、先生のこわさは何でも知っていて黙って見守っておられる眼のこわさである」と証言している。また、のちに京都大学教授となった佐藤長は、「師弟の関係と云うものは不思議なものである。若し私が羽田先生の講筵に列ならず、先生の御仕事を手伝うようなことがなかったならば、私はこうも先生を「こわい先生」とは感じなかったであろう。昭和十年から私は先生の教を受けたが「こわい先生」と言う感じは年月と共に深まり、なるべく先生のもとでは長居は無用と考えるようになった」と述べ、内藤湖南の三男にあたる内藤戊申は「夢にまで先生に叱られ」たことがあると回想している。そうした人柄は新聞にも紹介されており、総長就任時には「浜田前総長程に好人物でとぼけたところがなく考へ方が真面目でソツがない」などと書かれていた。

とはいえ、いつもそのようであったわけではなく、長男の明は「平素は煙たい父であった」としながらも「爾汝の交りを結んだ友人たちとの諧謔に満ち



た応酬には日常の父を見なおさせるものがあつた<sup>(10)</sup>」と浜田耕作や東洋史研究者で東京帝国大学教授の池内宏など、親しい人たちといるときのかつろいだ素顔を語っている。また、身近な人への思いやりも深く、のちに東北大学教授となつた曾我部静雄は「私は学恩を先生からうけただけでなく、私事についても、種々と御心配御指導に預り、かゝることについて恩師や先輩から貰つた手紙の数は、先生のが一番多いのではないかと思う。その内容は、いつも慈愛に溢れるものであつた。このようなことは単に私だけでなく、先生の教を受けた者は、誰人も感じていることと思う<sup>(11)</sup>」と回想している。ともに働いていた事務職員に対しても同様で、長年学内で一緒に仕事をしてきた吉田孫一庶務課長が急死した際には、日記に

驚愕夢の如き思に同氏宅に駈付く〔中略〕暗然言葉も出でず深き無常観に沈みて引取る。昭和七年余が文学部長として就任以来不断に密接なる關係を持続し献身的熱誠と忠実とを以て余の職務を助け大学に奉じたる過去十年の歩みの絵巻の如くに繰り上げらるゝも悲しき思出なり<sup>(12)</sup>

と、深い悲しみを綴っている。また、言うまでもなく妻や子供たちなど肉親に対する情愛も日記の随所に見ることができ、

一方、新聞にはその行政的能力の高さも記されている。やはり総長就任時の記事だが、「行政的手腕は定評があり名総長ぶりが期待されている<sup>(13)</sup>」と、文学部長や附属図書館長として難局を切り抜けてきた実績が評価されている。また、「前回の総長選挙においても浜田総長の獲得した票数に肉薄する有様だったばかりでなく、故浜田総長就任するや当時の文学部長小島祐馬教授と共に大いにその肅学工作を助け肅学の名トリオといはれた<sup>(14)</sup>」とも評されていた。実際には、浜田が選出された一九三七年五月の総長選挙においては、第一次投票での得票数が浜田六六で第一位に対して羽田は二八で第三位、第二次投票では浜田八一で第一位、羽田五六で第三位、上位三名の候補者によって行われる第三次投票では浜田八五に対して羽田一九であつた<sup>(15)</sup>。「肉薄」という表現はあまり適当で

はないように思われるが、浜田と並んで同じ文学部の羽田が第三次投票まで残っていたこと自体が、学内で羽田の行政手腕が一定程度認められていたことを示すものであろう<sup>(16)</sup>。

また、交友関係も広いものがあつた。浜田耕作や池内宏との親しい関係は前述したが、そうした交わりは世間にも知られていたようで、「浜田、清野の關係には単なる友人以上の親しさがあつた。これに文展の太田喜二郎画伯（京大講師）羽田現総長などを加へ、京都における一つの文人グループをなしてゐるほどの親しさであつた<sup>(17)</sup>」と清野謙次医学部教授や太田喜二郎なども含めた交友について記す新聞記事などもある<sup>(18)</sup>。

研究者以外の人物との交流が深かつたのも特筆されるべきことである。よく知られているのがカルピス株式会社創業者の三島海雲との関係である。三島はのちに羽田との交友について次のように語っている。

『西域文明史概論』の著者で、京都大学の名総長とうたわれた羽田亨は私の無二の親友だつた。明治四十年、同窓の野村礼讓（のち久邇宮家事務官）の下宿で、当時東大の講師をしていた羽田と知り合つて以来、昭和三十年彼が死去するまで、互いの心の底まで理解し合う仲だつた。有名な崔子玉の座右銘のへき頭に「人の短を言うなかれおのれの長を説くなかれ」というのがあるが、羽田と私は、短を言い、長を説く仲だつた。つまり親きょうだい以上の仲だつた<sup>(19)</sup>。

当然のことながら『羽田亨日記』中にも三島は頻出する。ただ、あまりにも親しい仲だったからか、日記中に三島の人柄について記された箇所はほとんどない。唯一、空襲による深刻な被害を相次いで受けたあととも前向きに事業に取り組む三島の姿勢を高く評価した次のような記述をみることができる。

三島君東京ノ会社焼災ノ後甲府ニ会社ヲ移シテ経営ノ準備中ナリシ所七日マタ全焼ノ厄ニ逢ヒタル由今日通知シ来ル積年ノ苦心一瞬ニシテ水泡ナラヌ火焰ト化シ心境想像ニ余リアルガ書中一行ノ泣キ言モ見エズ十六日ヨリ

山中ニ移リライ麦ノ栽培ト馬鈴薯ノ種子ヲ作りテ県民ニ配給スルコト等が戦争中ノ自分ノ仕事ニ御座候と見ゆこの辺同君の面目躍如たるを覚ゆ

〔一九四五・七・一三〕

また、武田薬品工業の創業家である武田家とも親しい関係にあり、五代目武田長兵衛、六代目武田長兵衛（はじめ鋭太郎、一九四三年に相続）も日記中に頻出する。ちなみに、京都市北区大宮に一九六六年に設置された羽田記念館（内陸アジア研究所、現ユーラシア文化研究センター）は、三島が起こした三島海雲記念財団と武田長兵衛の寄贈によるものである<sup>20</sup>。

他にも、前述の太田喜二郎や、朝日新聞社の上野精一社長などとも親しい関係にあったことが日記からも見てとることができる。

## 二 『羽田亨日記』の概要

『羽田亨日記』（以下、「本日記」と表記）は、二〇一七（平成二九）年十二月、羽田亨の令孫藤田昌子氏より、京都大学文学書館に寄贈された。

寄贈された日記は合計二〇冊で、年代は次のとおりである。

一九一五年	一九一六年	一九一八年	一九一九年
一九二三年	一九二八年	一九二九年	一九三一年
一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三六年
一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九四〇年
一九四二年	一九四三年	一九四四～五〇年	
一九五四年			

このうち、一九四四～五〇年以外は市販の日記帳である（一九一五年から一九年までと、一九二八年から四二年までは博文館の当用日記の中形もしくは大形、一九二三年は積善館の当用日記、一九四三年は「職域奉公日記」と名づけられた日記帳、一九五四年は旺文社の社会人日記）。一九四四～五〇年のみは、大

判（ほぼA4判）で革製本された無地のノートが使われている。

日記の存在は家族には知られていて、長男の明は一九七五年に開かれた座談会で日記について「ちょっと調べたら大正三年から戦争直後ごろまでのがあるんですけどね。大体はやっぱメモ程度です<sup>21</sup>ね」と述べている。

確かに、一九三七年までは本日記の記述量は極めて少ない。時々思い出したように断片的に記されていたり、何か社会的に大きな事件が起こったとき（例えば米騒動、関東大震災、室戸台風など）に記述が見られる程度である。しかし、一九三八年から記述量は急増し、一九四六年の七月まで時折未記載の日はあるが書き続けられる。そしてその後はまた断片的な記述に戻ることになる。

そこで今回は、記述量が急増する一九三八年一月から翻刻を行った。この年の一月、羽田は総長に就任しており、戦時下の学内行政により深く関わっていくことになる。そして、羽田が総長を退任する一九四五年の十二月までと



『羽田亨日記』。左から1938年、1939年、1940年、1942年、1943年、1944～50年。



りあえず翻刻を打ち切った。戦時期の京都帝国大学に関する貴重な一次資料として本日記を位置づけたからである。

ただし、総長在任期間中のうち一九四一年の日記は残念ながら欠落している。一九四一年といえば、京大にとっては結核研究所や工学研究所の設置、学友会の同学会への改組、在学年限短縮の開始など戦時下の重要な出来事が相次いだ年であり、さらに言うまでもなく対英米開戦の年でもあった。羽田がこうしたことにどのように関わり、何を感じたかは追うことができない。

本日記の記述内容は多様である。学内行政に関する記述が多いのは当然として、帝国大学総長会議、文部省や文部大臣との交渉、学外で羽田が関わっていた東方文化研究所や『大東亜史概説』<sup>(2)</sup> 関連、友人たちとの交際、家族との関係、さらには国内情勢や戦局の動向への感想なども述べられていて、興味深い。以下次節では、戦時期の京都帝国大学に関連するいくつかの事項について取り上げて解説する。

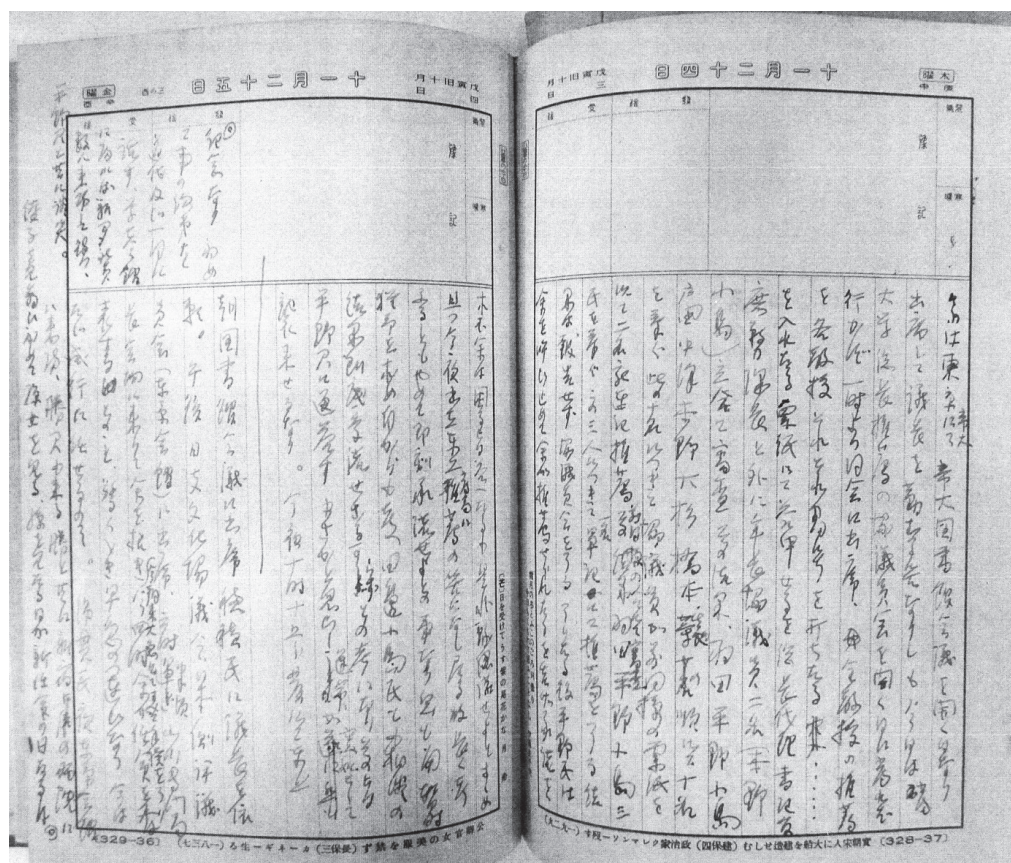
### 三 『羽田亨日記』からみる戦時下の京都帝国大学

#### (一) 総長就任・再任

京都帝国大学における総長の任命にあたっては、一九一九年の荒木寅三郎(再任)以来、学内の教授による選挙で候補者が決定される仕組みが出来上がっていて、他の帝国大学も以後同様の方法を採用していた。しかし、前述のように一九三八年七月の浜田耕作総長の死去を契機に、当時の荒木貞夫文相が、各帝国大学の総長や学部長および教授・助教授が学内(総長以外は当該学部内)の選挙によって事実上決定されていることを問題視し、文部省と各帝国大学との間で折衝が繰り返される事態となった。<sup>(3)</sup>

その結果、総長については「全教授ノ意見ヲ徴シテ後任候補者ヲ銓衡シ之ヲ文部大臣ニ推薦」すること、「教授ノ答申ハ署名セル文書其他責任ヲ明カニス

ル方法ヲ以テ之ヲ為ス」<sup>(4)</sup>、すなわち学内の教授の意向は確認するものの、それは選挙ではなく答申という形で、記名入りで行われることとなったのである。京大では、十一月一〇日の評議会で「総長候補者銓衡手続内規」が決定され、



『羽田亨日記』1938年11月24日条。総長候補者として推薦された日の記載。

そこではまず「教授ハ各答申番号ヲ記シタル用紙ヲ以テ現総長並ニ教授中ヨリ候補者二名ヲ連記シ答申ヲ為スヘシ」(第四条)とされた。その上で各学部から三名ずつ推薦された協議員による協議員会において、答申多数の上位一〇名から二回の答申で総長候補者を決定する(第一〇条、第二二条)こととした。<sup>(25)</sup>

羽田は、この年の八月二〇日から約一カ月中国に行っており、文部省との折衝には関与していない。また、本日記にも八月初旬から一〇月上旬までは記述がないため、この間文学部や羽田がどのような動きをしていたのかは分からない。羽田は、前述の協議員に推薦された「一九三八・二・一六」ため、一月二四日に開催された総長推薦のための協議員会に出席している。そのときの様子は次のように記されている。

けふは東京帝大にて帝大図書館会議を開く日なり出席して議長を勤むる筈なりしも今日は当大学総長推薦の協議員会を開く日に当れば行かず一時より同会に出席、全教授の推薦を各教授それぞれ番号を打ちたる……………を入れたる票紙にて答申せるを総長代理書記官庶務課長と外に年長協議員二名(本野小島)立合て審査「一九三八・二・二四」

この結果、第一位の羽田を含む上位一〇名が選出され、その後協議員会における二回の答申によって最終的に羽田が候補者として推薦されることとなった。<sup>(26)</sup>羽田にとっては「まさかと思ひし運命が突如として襲来」「一九三八・二・二四」した気持ちであった。

その後羽田は総長に四年間在任して一九四二年一〇月二四日の学部長会議で辞任を表明「一九四二・一〇・二四」、総長選考作業が始まることになる。<sup>(27)</sup>一月一六日の総長候補者決定の様子は次のように記されている。

総長候補者答申日ナリ朝九時迄ニ各学部ヨリ持チ寄リノ答申ヲ九時半ヨリ開封書記官庶務課長ノ外ニ年長部長小川(医)落合(文)ノ両氏立会フ第一次答申中ノ高点十名ハ羽田戸田中沢森島小嶋大杉高田山田松本信一鳥養ノ順、第二次ハ羽田戸田中沢第三次過半数(七二以上)トシテ羽田トナリ

答申ハ之ニテ結果ヲ得テ終ル「一九四二・二・一六」

羽田はこれにより再任されるのだが、ここで注意しておきたいのは候補者選考の方法である。前回は、すでに述べたように全教授による答申は一回で、あとは協議員会における答申で選考されていたが、この時は協議員会による答申に関する記述は本日記中がない。実は、一九四一年二月一八日の評議會で新たな「総長候補者銓衡手続内規」が決定され、そこで協議員会が廃止されて計三回の答申をすべて全教授が行うように改正されていたのである。<sup>(28)</sup>

学内でどのような議論の結果この改正が行われたのかは、本日記の一九四一年分が存在しないこともあって残念ながら不明である。ちなみに羽田は、この再任の際辞退することを考えたが、近藤金助農学部長の強い説得を受けて撤回している「一九四二・二・一六」。<sup>(29)</sup>

## (二) 人文科学研究所設置、経済学部講座増設

京都帝国大学唯一の人文科学系の附置研究所である人文科学研究所は、一九三九年八月二日に設置された。設置の直接の契機とされるのが、同年一月四日に開かれた荒木文相と六帝国大学総長との懇談会であったとされ、この後京大において人文科学に関する総合的研究所設置を求める空気が一挙に高まったと言われている。<sup>(30)</sup>確かに、当時の新聞には懇談会で各帝国大学総長の意見が一致した項目として「東亜新秩序建設といふ新段階に相応し大学の研究殊に文化科学の講座に対し検討を加へ、欧米の紹介的翻訳的なものから独創的、日本的なものへ、学問の分化から総合へと方向を進め人文科学の総合的な研究所には講座を新設する<sup>(31)</sup>」ことが挙げられている。

当時、内地の帝国大学でただ一人の文系総長であった羽田がこの時果たした役割は大きいものがあつたと思われるが、人文科学研究所に関する本日記の記述は意外なほど少ない。荒木との懇談会についてはその内容について全く触れておらず、学内での具体化への動きについても第一回の人文科学研究所計画小



委員会の開催についてわずかに記している「一九三九・二・一〇」のみである。ところが、二月一八日になって状況が急変する。

十八日長寄主事東京文部省山川氏よりの伝言を齎し帰り先日余より計画中の人文科学研究所を追加予算として要求したと申し送りたるに對し本年は既に時期遅く間に合はぬ故来年度にまはす外なしとのことなりしが急に意見変り至急追加予算として出してくれよとの事なりよりて月曜日に緊急に同計画委員会を開くこと、し一時より開会その旨報告、小委員会にて得たる案を討議す「一九三九・二・二〇」

右によると、帰洛した長崎太郎学生主事への山川建専門学務局長の伝言として、今年度の設置は無理と考えられていた人文科学研究所が省内で「急に意見変り」、至急追加予算で申請せよとのことで、二〇日の月曜日に緊急に計画委員会を開くことにした、というのである。この後京大は人文科学研究所設置に向けて一氣に進んでいくことになる。

これと並行して動こうとしたのが経済学部による講座増設運動であった。この年二月一〇日に経済学部長に就任したばかりの石川興二が、新任の挨拶に文部省に行った際に次のようなことがあったという。

石川経済部長新補挨拶の為文部省に出頭山川局長及び大臣に逢ひ経済学部にて企図せる講座計画を話したる結果大臣乗氣になり急に追加予算として日本東亜に関する十七講座を要求せよとのことなりしとて俄に経済学部にて起案すること、す「一九三九・二・二二」

石川は東亜経済学科を新設する構想を抱いていて、その構想が荒本文相に強く支持されて一七講座増設案を急遽作成することにしたというのである。当時の経済学部には一〇講座しかなかったから、一七講座の増設はかなり大胆な計画といえた。早くも二月二三日の評議会には、人文科学研究所設置案と並んで東亜経済学科設置案が提出されている。その様子を本日記ではこのように記している。

一時より二時まで人文科学研究所小委員会を開きて成案を作り二時より評議会を開き先づ研究所案を附議小委員会案の通り承認ついで経済学部より臨時附議として提出せる東亜経済学科新設案を議す異論百出田辺氏主としてかゝる学科を別に設くることの無理を主張石川氏強くこの案を主張せるも反対気分去らず余は今議決することの非を思ひ重ねて二十七日月曜日二時より評議会を開きて協議それまでに互に慎重考慮すること、して散会「一九三九・二・二三」

人文科学研究所設置案はすんなり承認されたが、東亜経済学科については評議員であった田辺元をはじめとして相当な反対があったことが分かる。<sup>(32)</sup>結局、次の評議会で計画は五講座に縮小された形で承認され、さらに実際にこのとき増設されたのは日本経済理論講座と東亜経済政策原論講座の二講座にとどまった。

### (三) 石川興二教授休職

前項の東亜経済学科設置を構想した石川興二経済学部教授は、一九四三年三月一八日付で休職となっている。後年の石川自身の証言によると、石川が一九四〇年に刊行した『新体制の指導原理』中に治安維持法を批判した箇所があり、それが議会や枢密院で問題とされた。さらに、天皇が橋田邦彦文相に経過について問い合わせたため、文相から羽田に事態の展開が伝えられるに至った。羽田は二年後に人文科学研究所教授に就任させることを前提に、石川を休職させることとし、経済学部の教授会も了承したとのことである。

枢密院では一月三日の会議で三土忠造顧問官が「或大学教授ハ「マルクス」ヲ釈迦ヤ基督ニ比スベキ予言者ナリト礼讃シ私有財産制ノ擁護ヲ目的トスル治安維持法ヲ罪惡ノ立法ナリト非難セリ」<sup>(33)</sup>と述べているが、これが石川を指していると考えられる。一方、議会では二月六日の衆議院予算委員会、作田高太郎が「或ル大学ニ於テ若シ其ノ教授ガ表面上ハ共產党ニアラザルガ如キ措辞ヲ

並べて置イテ、事実ハ共產党其ノ儘ノ方式ニ依リ経済原理、社会組織等ヲ説クト云フコトニナレバ、是ハ由々シキ大事デアリマス」<sup>(36)</sup>とした上で、「或ル大学ノ教授デアリマスルガ、名前ハ申上ゲマセヌガ「新体制ノ指導原理」ト云フ本ヲ書イテ居ルノデアリマス」と、明らかに石川と分かる形で「斯ウ云フコトハ構ハナイト御考ヘニナツテ居ルノデアルカ」と橋田文相を追及していた。これに対して橋田は「教授ヨリ一時退ク、或ハ少クトモ謹慎シテ、能ク自己ノ学説ノ熟達鍊磨サレルマデハ慎ムベキモデアルト云フコトヲ、大学総長ヲ通ジ、又本人ニモ戒告ヲ与ヘテ置イタノデアリマス」と答弁していた。

この件が本日記に出てくる最初は、谷口吉彦経済学部長が文部省で近藤寿治教学局長から聞いてきた話として伝えた一九四三年一月二五日の記述である。

谷口部長来訪東京にて近藤氏より枢密院本会議の席上某氏発言中に京大石川教授は赤なりと主張せりとのことを聞ける旨伝ふ石川氏は今朝谷口氏を訪ひ兎角学部内にデマを飛ばすものありて困る故この次同様の事あらば責任をとらず事にしたしと主張し自己の反省を欠けるは困ったことなりと同意氏話せり。間もなく石川氏来訪、谷口氏との話合により枢密院のこと及び文部当局にても氏に嫌らざるものある旨判然と告げ単にデマによりて此等の向きが氏を視て居るには非るべきをいひ反省すべき点あらば反省すべきを諭せり。「一九四三・一・二五」

羽田が石川に対し「反省すべき点あらば反省すべき」と諭しているのが印象的である。

その後、二月初旬に上京した羽田は文部省に近藤局長を訪ね、石川のため「利益あるやう考へくれ度旨話し」たところ「局にて目下著述につき調査中なり」「一九四三・二・二」との近藤の回答を得ている。文部省側が、石川の自発的休職を求めたのは前述の議会でのやりとりの後の二月一六日のことであった。本日記には次のように記されている。

朝近藤氏学士会館ニ来訪石川氏ノ論述精査ノ結果本人ガ共產主義者トハ認

メネド論述中ニハ非難ヲ蒙リテモ致方ナキ点アリトテ一々指摘ス全部ハ同感ニハ非ルヲ述べ又経済学者ノ立場ヲモ考ヘザル可ラザル点ナドモ述べ午后大臣ニ逢フコト、ス、三時半大臣二面晤、要スルニ近藤氏ノ云フ所ト同ジ而シテ本省ノ所置ヲ待タズシテ本人ヨリ自発的ニ休職ニナルヤウ願出ルヤウニ総長ニ於テ計フコトヲ希望スル旨話アリ余ハ大臣ガ石氏ヲソノ論述ニヨリ共產主義者トハ認めザルコト、休職ハ復職ノ望アルモノ、単ナル噂ノ如キニヨリテ所置セントスルモノニ非ズ論述ヲ根拠トスルモノナルカ等ノ点ニツキテ確メ大臣ハスペテ之ヲ肯定シ其ノ学説ノ大成ヲ希望スル旨ヲ確言セリ依リテ考慮シテ適當ノ方法ヲトルベキヲ答ヘテ帰ル「一九四三・二・二六」

大学に戻った羽田は、石川に「従来ノ経過ヲ詳細ニ告ゲ自発的ニ静養ヲ願出ルコトガ此際最モ適當ナルベキヲ説」「一九四三・二・一八」き、石川本人から「静養ノ名義ニテ休職ヲ応諾ノ旨返事」「一九四三・二・一九」があった。経済学部の教授会は二月二一日に開かれ、羽田は次のように報告を受けたことを記している。

十時ヨリ開会ト聞キシ経部教授会ノ結果ヲ午后三時近ク谷口氏ヨリ電話アリ投票ヲ用ヅズ全員一致ニテ石川氏ノ要求ヲ承認ノ形ヲトリタリトノコト委細明日面晤トノコトナリ「一九四三・二・二一」  
このように、教授会の承認により石川は休職となった。<sup>(37)</sup>

この件はこれで終わりではない。翌一九四四年三月二九日、文部省に岡部長景文相を訪ねた羽田は「石川教授を復職して人文科学勤務に致したき希望をも述べ」たところ、文相は「然るべし」と答えていた「一九四四・三・二九」。さらに翌日も文部省に行った羽田は近藤教学局長と次のようなやりとりを行っている。

午後近藤教学局長と会谈石川君の今直に旧位置にではなく人文研究所員として復職を希望することを述べこの事は先般近藤氏自からの示唆に基づけ

るものなることを述べ更に満一年前石川君休職処置の当時の話を思ひ出さるゝことを求め氏の意向を聞きしに大体諒承の意を示し次官と相談して返事すべしと約せり「一九四四・三・三〇」

これを見る限りでは、休職した石川を人文科学研究所に復帰させることは、休職を求められた際の羽田と近藤局長の話し合いのなかで近藤が示唆したようである。

その後復職への動きがなかなか進まず、業を煮やした羽田は一月に文部省を訪れて近藤に督促している「一九四四・一・二二」。そして、年の明けた一九四五年一月二二日、交通事情の悪化するなか羽田は東上するが、その目的を次のように記している。

此ノ形勢下ヲ特ニ東上スル第一ノ要件ハ石川問題ヲ片附ケルコトガ主眼ナリ休職満期ハ三月十八日ナレバソレニ間ニ合フヤウニ復職問題ヲ処理シ余ノ責任ヲ全フスルコトガ面倒デモ何デモ余ノ職責ト考フルガ為ナリ

「一九四五・一・二二」

翌日、藤野恵次官と会見した羽田は、「難関ト思ハル、石川氏問題ヲ端的ニ切り出し」たところ、懸念していたよりもすんなりと要求が通り、「此ノ鬱陶敷問題モ文部省ニ関スル限り解決ヲ見ルニ至リ俄ニ肩ノ荷ノ下リタル氣持ヲ感じタリ」「一九四五・一・二三」と、安堵の気持ちを記している。

残るのは学内の調整であつた。当時人文科学研究所長であつた高坂正顕は、はじめ石川の就任につき在職期間を三年とする旨羽田に述べていた「一九四五・一・一九」が、その後二年に短縮したい意向を羽田に示し「一九四五・一・二四」、石川もこれを了承して「一九四五・二・二二」、人文科学研究所への復職が決定した。

羽田にとっては、石川教授にまつわるこの問題は、総長在任中でも印象深い出来事であつたようで、敗戦後総長退任の決意を記した日には、わざわざ次のように触れている。

六月以来兎角健康勝レズ積極的ノ行動ニ出デ難キ情態ニテ今日ニ至レリ事局ハ益々多事多難トナリ教育界モ必ズ間近ニ種々ノ大問題ヲ生ジ帝大総長トシテ積極的活動ヲ要スルコト多カルベキハ必然ノ勢ナルニ此ノ健康ニテハ心細キト共ニ一面過去七年ノ学内統率方針トハ全ク別個ノ立場ニ立チテ将来ニ処セザル可ラズ過去ノ方針ハ勿論国家ノ大学教育方針ニ従ヒ乍ラ然モ出来得ル限り學術ノ府トシテノ立場ヲ守ルニ勉メ石川教授ノ事件ノ如キモ此ノ精神ニ於テ対処シ来リシコトナルガ然モカク俄ニ情勢ノ一変ニ逢ヒテハ之ニ適応善処セントスレバ余リニ急激ニ姿勢ノ変改ヲ要スルモノ多キニ忸怩ノ感無キ能ハズ「一九四五・一〇・四」

#### (四) 文教政策との関わり

羽田は、文部省から非常に信用されていたという<sup>(38)</sup>。本日記中にも、頻繁に文部省を訪れて種々話し合い、時には大臣と踏み込んだ意見交換を行ったり、叱咤激励することがあつた様子が記されている。例えば、一九四四年三月二九日に東条英機内閣の岡部文相と会談したときのことは次のように記されている。

午后二時より文相官舎にて開会の国史編輯準備委員会に出席三時散会後四時十分まで時余に亘りて岡部文相と会談、目今大学教育に対して文相が如何なる方針を持するやを問ひたるに如何にしてよきか考立ち居らずとのことなり考を立て、も情勢の変化により次から次にと変へなければならぬ為なりとの事なりこれが実情にて何とも致方もなき事なれど然も仮令変へて行かねばならぬとしても方針としては理想としては此の際かくやりたしとの考だけは持つて居らねばなるまじくそれともしといふにては文教掌理の責任者として困ることなりとも直言し置けり「一九四四・三・二九」

かねてより交替の激しい文相の「無力無策痛嘆事ナリ」<sup>(39)</sup>「一九四二・八・二二」と嘆いていた羽田にしてみると、こう言わずにはいられなかつたのであろう。ただ、羽田が高等教育政策に何らかの形で具体的に関わつた例は、本日記か



らでは多くを見つけない。その一つは、一九四三年に導入された大学院特別研究生である。前年の九月くらいから、新しい大学院制度についての記述が見られるようになり「一九四二・九・一〇」、一九四三年三月には九州・大阪・名古屋の各帝国大学総長と対応方針を打ち合わせていることが記されている「一九四三・三・一九」。七月上旬には、文部省内で大学院特別研究生についての法令案が作成されたようで、羽田はその案を「秘扱にて受領」「一九四三・七・二」している。次の日には東京帝国大学の内田祥三総長に会って同案について打合せを行い「一九四三・七・三」、京都に帰ってからは次のように学内で同案を示し、渡辺宗太郎法学部長に別案作成を依頼している。

渡辺鳥養落合大杉四君に文部省の大学院特別研究生に関する勅令案を私的に示し渡辺氏に別案作製を依頼す本省案が余りに大学の権限を押へたるに對し西寄課長に不服を表し置きたればその意味にて対案を得んとするなり

「一九四三・七・五」

そして、七月八日に修正案を送付している。「余りに大学の権限を押へた」文部省案が不明なので修正の経緯は分からないが、実際に公布された省令<sup>(39)</sup>の第一条には、「文部大臣ノ指定スル大学令ニ依ル大学ハ其ノ大学院又ハ研究科ニ入ルベキ者ノ中ヨリ本令ニ依リ特別研究生ヲ選定スベシ」とあるように、選定の主体が大学となっているので、ある程度羽田の意向が反映されたのではないかと思われる。

また、前述したように内地の帝国大学唯一の人文科学系の総長として、羽田はともすれば自然科学系に偏重する科学振興政策を是正させることに努めた。例えば、自然科学関係に限定されようとした助教・助手への優遇研究費の設定を人文科学系にも要求して変更させたり「一九四〇・七・二一」、第二期の大学院特別研究生が文科系を募集しなかったことに抗議をしたり「一九四四・九・四」していた。

なお、文部官僚の中では一九四〇年四月から四四年七月まで専門学務局長・

専門教育局長を務め、「大学ニ関シテハ善カレ悪カレ殆ンド永井氏独リニテ処理シタルモノト言フベク」「一九四五・一〇・二八」と本日記中に評された永井浩と特に親密な関係であったことが記されている。

### (五) 海軍との関係

本日記からは、京大と陸軍との組織的な関係は窺うことはできないが、海軍との関係は散見される。その一つは南方研究の関係、もう一つは木材研究所の関係である。一九四〇年五月には海軍省を訪ね「農学部の特産植物研究の盛なると規那研究の成功とを語り海南島に演習林を得たき希望ある旨を話し置」「一九四〇・五・二八」いたが、これは実現しなかった。

次に海軍との関係で注目すべき記述は一九四二年三月一日である。この日の日記には次のように書かれている。

三時ヨリ海軍調査課長高木大佐ト総長室ニ会談各学部長列席、各学部ニ成立モシクハ成立シツ、アル南方研究会トノ間ニ連絡ヲ話合ヒ夕景ヨリ鶴屋ニ会食「一九四二・三・一一」

京大を訪ねてきた海軍省官房調査課長兼南方政務部副部長の高木惣吉大佐と羽田および各学部長が会談、南方研究会の件について話し合っている。対英米開戦後間もないこの時期、京大の各学部では南方を対象とする研究会が相次いで組織されていた<sup>(40)</sup>。のち、これらの研究会を束ねて附置研究所を設置する計画が立てられるが、これにも海軍が関与していることが次の二つの記述から分かる。

豊田氏宿所鉄道ホテルニ訪ヒ来ル打合ノ後同伴シテ海軍省ヲ訪ヒ軍務局第二課長矢牧大佐ト会談木材工学研究所設置及ビ南方研究所設置ニツキ後援ヲ依頼快諾ヲ得「一九四三・一一・二二」

夜海軍々務局課長矢牧中佐はじめ課員諸氏文部省永井局長西寄課長柴沼課長園部マカッサル研究所長等を志ほ原に招く

先般来此等諸氏に支援を求めたる南方科学研究所設置予算通過し海軍側に



は別に演習林についても世話になりたるにつき謝意を表する為なり豊田久二氏及び福原河田、外に当日上京の佐藤演習林長も出席「一九四四・一・一三」

京大が構想した南方科学研究所設置が盛り込まれた一九四四年度予算案は、一九四三年一月一日に閣議決定されており、そこに海軍の力添えがあったことが右の記述から分かるが、実際には設置されないまま敗戦となった。一方、やはり海軍が支援した木材研究所は一九四四年五月に設置されている。<sup>(41)</sup>

この他にも、一九四三年一月には海軍技術研究所の分所を京大に置き、総長を分所長としたとの依頼が海軍側からあり、羽田は「研究ハ本学研究体制ノ中ニ取入レ進捗ヲ計ルニ異議ナキ旨ヲ答」<sup>(42)</sup>「一九四三・一〇・二五」えている。

#### (六) 学徒出陣

一九四三年一月二日公布の勅令第七五五号「在学徴集延期臨時特例」によって、大学をはじめとする高等教育機関在学者の徴集猶予が停止された。いわゆる「学徒出陣」である。この在学者の徴集猶予停止を含む「国内態勢強化方策」については、勅令公布の一〇日ほど前の九月二二日に東条英機首相によってラジオで国民に知らされていた。それを聴いた羽田は次のように記している。

今夕東条首相国内態勢強化ニツキテ放送学生ノ徴兵猶予停止、理工科系学生ノ入営延期制等新聞記者ノ今日午後伝へ来リシ件々モ概括的ニ演述セリ  
「一九四三・九・二二」

これが徴集猶予停止について本日記に出てくる最初である。さらに翌日には、前日のラジオ放送の内容を敷衍して、次のように記している。

情報局発表ノ新聞ニ載せらる、所ニより昨夜の東条放送ノ具体的内容ヲ知ル

法文系大学専門学校ノ統合整理モ行フト見エ文部当局談ニハ法経文科ノ大学ハコノ際学業ヲ停止スル訳ナルガ教育要員ノ確保徴兵不合格者、帰還者

等ノ為ニハ矢張り継続ヲ考ヘ居レリト見ユ「一九四三・九・二三」

筆者は、以前この徴集猶予停止について事前に大学に打診があったかどうかについて考察したことがある。<sup>(43)</sup>そのときには本日記の存在は知らなかったが、いくつかの状況証拠から、これは大学をはじめとした高等教育機関にとっていわば寝耳に水ではなかったかと結論づけた。

本日記によると、この後九月二六日に東上した羽田は、翌二七日東大の内田総長を訪ねている。その折の「午后東大を訪ひ内田総長ト会谈新態勢ニツキテハ尚ホ何事モ分リ居ラズ」<sup>(44)</sup>「一九四三・九・二七」という記載からすると、やはり東大の内田にとっても、羽田にとっても、徴集猶予停止は事前の打診は全くなく、不意打ちであったと言えるのではなからうか。

一月二〇日には京都帝国大学において出陣学徒壮行式が挙行されている。この日、羽田は次のように記している。

本学出陣学徒壮行会ヲ運動場ニテ挙行千七百名許りの出席、緊張ト感激裡ニ終了、引続キ出デユク学生ハ構内ノ正門ニ出デ行クヲ残留学生ト教職員ガ正門マデノ沿道ニ見送り、更ニ平安神宮ニテ祈願祭ヲ執行三千ノ学徒戰場ニ功ヲ立テ、帰り来ルモノ幾人ゾ、壮キ毗ノ裂クルマデ緊張セルヲ見ルカラニ有リ難キ涙ノ湧キ出ヅルヲ止ムル由モ無シ「一九四三・一一・二〇」  
この時、羽田の三男董も徴集猶予停止の対象となり、一月一日に陸軍に入隊している「一九四三・一一・一」。羽田にとっては、公私ともに感慨無量であつたろう。<sup>(45)</sup>

なお、この壮行式の際羽田は「諸君、行き給え。しこうして帰り給え。大学は門を開いて諸君を待っている」という言葉を出陣学徒に贈ったという説がある。<sup>(46)</sup>しかし、本日記の記述を見る限りでは、羽田がそのような言葉を贈ったとは考えにくい。

## おわりに

以上で解説した諸点以外にも、本日記の内容は多様で、戦時期の京都帝国大学史のみならず東洋史を中心とした学術文化史の観点でも新たな発見が少なからずあるものと思われる。一人でも多くの方に利用されることを願う次第である。

## 〔註〕

- (1) 羽田亨の評伝は管見の限り存在しない。羽田の死去後もない一九五五年一月に刊行された『東洋史研究』第一四卷第三号に、周囲の人々が羽田の思い出を記すとともに、羽田の略歴および著作目録が掲載されている。その他、『東洋学』第五〇号（一九七五年七月）・第五一号（一九七六年一月）には「先学を語る―羽田亨博士」として、羽田の業績が合計一〇名の座談会によって語られている（なお、この座談会は財団法人東方学会編『東方学回想Ⅳ先学を語る（3）』刀水書房、二〇〇〇年、に収録されている）。さらに、間野英二「羽田亨東洋学の系譜Ⅱ」（『しにか』一九九一年二月号）および羽田正「羽田亨」（今谷明・大濱徹也・尾形勇・樺山紘一編『20世紀の歴史家たち（2）日本編下』刀水書房、一九九九年）には、短文ではあるが羽田の学問的業績や人物像が要領よくまとめられている。
- (2) 前掲『東洋史研究』第一四卷第三号および京都大学大学文書館教員履歴データベース（<https://kensaku.kual.archives.kyoto-u.ac.jp/rirek/>）より作成した。
- (3) 前掲「羽田亨 東洋学の系譜Ⅱ」一〇一頁。
- (4) 前掲「羽田亨」一五三頁。
- (5) 同前、一五五頁。
- (6) 前掲『東洋史研究』第一四卷第三号、七頁。
- (7) 同前、四三頁。
- (8) 同前、一八頁。
- (9) 『東京日日新聞』一九三八年一月二六日付。
- (10) 前掲『東洋史研究』第一四卷第三号、三七頁。

(11) 同前、一六頁。

(12) 『羽田亨日記』一九四二年一月一五日程。以下、『羽田亨日記』からの引用については、引用文のあとに「一九四二・一・一五」のように表記する。

(13) 『大阪朝日新聞』一九三八年一月二六日付。

(14) 『京都日出新聞』一九三八年一月二六日付。

(15) 『総長選挙一件書類自大正八年至昭和十二年』（京都大学大学文書館所蔵、識別番号MP00128）。ちなみに第二位はいずれの投票においても医学部の戸田正三であった。

(16) その反面、次のような羽田評もある。一九三三年の滝川事件当時法学部長であった宮本英雄は、当時の小西重直総長（文学部出身）を「誤らせたのは、あれは羽田さんですな。羽田さんが、小西さんの参謀みたいになっていたんです。あの先生があまりいいことを考えてなかったですな。〔中略〕羽田さんはなかなかの策士ですわ」（拙稿「滝川事件について―宮本英雄氏聞き取り―」『京都大学大学文書館研究紀要』第六号、二〇〇八年、九五頁）と、一九六六年に実施された聞き取りで語っている。宮本の羽田に対する評価の具体的理由はよく分からないが、文部省による滝川休職要求を大学自治の問題として対処しようとした法学部に対して、「工学部とか文学部は滝川擁護だというふうに持っていこうとしたんですね。あれは、ちょっと作爲的にそんなふうに持っていこうとした」（同前、七八頁）と宮本が語っていることと関連しているかもしれない。

(17) 『大阪毎日新聞』一九三九年二月七日付。

(18) それゆえ、前述の清野謙次の文化財窃盗事件は浜田や羽田に大きな衝撃を与えた。特にすでに病氣入院していた浜田には大変なショックであった。羽田の記述によると、病床を訪れた羽田に対して浜田は

涙を流してこの度の事件を痛恨し同胞の如く交り来れるもの、この非行につきては全く裏切られたる感に不堪一年間努力し来れる肅学の志も今は沮喪して此の上総長在任の勇氣なく加ふるに健康もこの有様なれば自分としては辞任の決心をしたれば予め意志を表示す「一九三八・七・二」

と、総長の任を辞す意向を語っていた。

(19) 三島海雲「私の履歴書」(日本経済新聞社編『私の履歴書』第二九集、日本経済新聞社、一九六七年、二五一頁)。

(20) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』部局史編一、一九九七年、五三頁。

(21) 前掲『東方学』第五〇号、一三二頁。

(22) 『大東亜史概説』は、文部省教学局によって一九四二年から着手されたもので、羽田は池内とともに編纂者の選定に大きな役割を果たしたという。『大東亜史概説』については、奈須恵子「戦時下日本における「大東亜史」構想―『大東亜史概説』編纂の試みに着目して―」(『東京大学大学院教育学研究科紀要』第三五巻、一九九五年) 参照。同書は結局完成しなかったが、調査囑託の一人であった京都帝国大学文学部の小牧実繁が所蔵していた同書の「序論」「前編前期第一章第五節」については、富永望「資料紹介『大東亜史概説』」(『京都大学大学文書館研究紀要』第一四号、二〇一六年) に紹介されている。

(23) この事件については、東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』通史二、一九八五年、八七七―八八六頁参照。

(24) 同前、八八四頁。

(25) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』資料編一、一九九九年、二五八頁。

(26) 総長答申の具体的な方法について、東京帝国大学では「その推薦・投票・用紙(「答申書」)の真中にミシン線を入れ、投票者(記名者)と候補者(被推薦者)の双方に番号を打った上、集計の際に記名の部分は切り離して別に保管する――すなわち、実質上の無記名投票という慣行が成立して、実行された」(前掲『東京大学百年史』通史二、八八六頁) という。この事実、寺崎昌男『東京大学の歴史』(講談社、二〇〇七年、一四二頁) で紹介され広く知られているが、京大で同じ方法が採られたかどうか確たる証拠がなかった。しかし、本日記の記述に「……………を入れたる票紙にて答申」とあることから、京大でも同じように実行されたことが判明した。

(27) 前述の一九三八年における制度改正以前は、京大総長の任期は四年と定められていたが、この制度改正で任期に関する取り決めは姿を消していた。羽田がこのタイミングで辞意を表明したのは、表面的に任期に関する取り決めはなくなつて

も内々に四年任期と定められていたからか、取り決めはないが羽田自身が従来の例に従つて四年が適当と考えたからなのかは不明である。

(28) 『総長選挙に関する内規及び学長選挙基準自大正八年至昭和二十四年』京都大学大学文書館所蔵、識別番号01A01316。

(29) さらに羽田は、一九四五年五月にも「近頃健康衰へ思ふやうの活動も出来ざること、現情勢下身心共に壮健の人の大学を統率することが特ニ必要と感ぜらるゝにかゝる老年と健康とにて到底自信なきこと、諸事今恰も一段を画くし得る情態に在ること」などを理由に学部長に辞意を表明している「一九四五・五・一五」が、各学部長の説得を受けて撤回している。

(30) 京都大学人文科学研究所『人文科学研究所五十年』一九七九年、五〇頁。

(31) 『東京朝日新聞』一九三九年一月一日付。

(32) 評議会の公式の記録においても、この日の東亜経済学科の件については「本件ニツキ石川経済学部長ヨリ増設理由ノ説明アリ各評議員ヨリ意見ノ開陳アリ決定ニ至ラズ」(「評議会議事録自昭和十四年至昭和十六年」京都大学大学文書館所蔵、識別番号MP0004) とあり、かなり反対意見が出たことを推測させる記載となっている。

(33) 京都大学経済学部『思いで草』一九六九年、一八〇頁。なお、京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』総説編、一九九八年、四四四頁にも石川の休職についての記載があるが、多くは『思いで草』に拠っている。

(34) 石川興二『新体制の指導原理』(有斐閣、一九四〇年) は、石川が過去に書いためた論文をまとめた著書である。そのうち、資本主義批判を展開している論文(一九三三年七月執筆)に、皇室に対する罪と私有財産制度に対する罪とが同列に並べられている治安維持法について、「日本国民固有の共同社会を一貫せる根本原理」であるところの皇室と、それとは全く原理を異にし本質的に矛盾する資本主義原理に基づくところの私有財産制度を同一条例に含ませると批判していた(一四四頁)。

(35) 「大学令中改正ノ件」JACAR (アジア歴史資料センター) RefA0303807400 枢密院会議筆記(国立公文書館所蔵)。

(36) 「第八十一回帝国議会衆議院予算委員会会議録（速記）第十回」一九〇頁（帝国議会会議録検索システム、<http://reikokugikai.ndl.go.jp>）。

(37) 『思いで草』における石川の証言記録中、聞き手となっていた出口勇蔵（同書刊行時経済学部教授）が、石川休職時に学部長であった谷口吉彦から聞いた話として、「色々なことがあったけれども、結局先生〔石川のこと―引用者〕の辞任を認めた。その時は、総長がこの学部の教授会を放っておくと、うまく行かないだろうから、俺が主宰するといわれ、総長官舎でやったんだ。羽田総長が主宰して、そこで決めた」というエピソードを披露している（前掲『思いで草』一八二頁）。もしこれが事実であれば、「学部自治の破壊」といえるが、本日記を見る限り、羽田は谷口から電話で教授会についての報告を受けており、自らが主宰して総長官舎で開催したとは記されていない。この後の三月六日に、羽田は谷口を含む経済学部教官八名を官舎に呼び「石川問題ノ経過ヲ報告シ併セテ学部振興ノ為ノ新発足ヲ希望ス」「一九四三・三・六」と伝えているので、谷口はこの日のことと混同したのかもしれない。

(38) 宮崎市定は「総長時代から、いや総長をやめられてから後でも、先生は文部省でとても信用があったんですね。〔中略〕それで先生がこういうような事業をすると言えば、文部省のほうで安心して金を出したということがありますね」、貝塚茂樹も「文部省の信用は絶大でしたな、先生は。総長になられてからもそうですけど、総長以前からそうでしたな」と証言している（前掲『東方学』第五〇号、一四〇頁）。

(39) 日記中には「勅令」とされているが、実際には大学院特別研究生については一九四三年九月二九日公布の文部省令第七四号「大学院又ハ研究科ノ特別研究生ニ関スル件」で規定された。

(40) 二月に理学部に南方科学研究会、三月に文学部に南方文化研究会と農学部に南方農林資源研究会、五月に工学部に南方工学研究会、六月に医学部に南方医事研究会、同じ頃医学部薬学科に南方生薬研究会、さらに時期は不明ながら経済学部にも南方経済調査会、法学部に南方法制研究会がそれぞれ組織された（前掲『京都大学百年史』総説編、四四二頁）。

(41) 前掲『京都大学百年史』総説編、四二四頁。

(42) 木材研究所の設置については、当時農学部教授だった近藤金助が次のように回想している。「木材研究所は終戦間際のことですすからして、文部省の予算関係でも陸海軍の力が非常にかぶさっているんです。その時に京都大学は総長みずからが文部省へ来て、この研究所を何とかしてくれと。それは鉄材その他がなくなつて、木材で飛行機をつくり、木材で船をつくるということをやらなきやという時ですから、海軍の保証もあったんです」（前掲『東方学』第五〇号、一四二頁）。

(43) 拙稿「徴集猶予停止をめぐるいくつかの問題について」（『京都大学文書館研究紀要』第一四号、二〇一六年）。

(44) 董はその後航空隊に入り、群馬県館林で訓練を受けている（一九四四・四・一一、一九四四・一一・二〇）。第二期特別操縦見習士官に採用されたと考えられる。一九四五年五月一日には突然帰宅し、「電灯モツケヌ儘ニシテ今次賜暇帰宅ノ事情ヲ述ブ母ニハ告ゲズ父ニノミ密カニ語ル雄々シキ決意」（一九四五・五・一三）を羽田に語っているところから、特攻隊に編成されたことが分かる。なお、董は敗戦後無事復員している（一九四五・九・二）。

(45) 前掲「羽田亨」一五一頁。

(46) 現在残されている出陣学徒壮行式の告辞にもそのような文言は記録されていない（京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』資料編二、二〇〇〇年、四六六頁）。

II  
翻  
刻  
編



## 凡例

一 本翻刻編は、『羽田亨日記』（京都大学大学文書館所蔵）の一九三八年、一九三九年、一九四〇年、一九四二年、一九四三年、一九四四年、一九四五年分を翻刻したものである。

二 翻刻は原則として原史料のとおりに行ったが、次の事項は例外とした。

- ① 漢字は常用漢字を使用した。
- ② 原史料の欠損による判読不明文字は□で示した。
- ③ ②以外の判読不明文字は■で示した。
- ④ 誤字、書き間違いと思われる箇所は、横に「」で修正するか、「ママ」と表記した。
- ⑤ 原史料中、文が途中で切れていると思われる箇所は「以下欠」と表記した。
- ⑥ 原史料中の欄外への書き込みについては、当該日の記述の最後に「註」で記載した。
- ⑦ 日記中に挿まれた別紙については、【別紙】として挿まれた当該頁の記述に続いて記載した。
- ⑧ 原史料中、数行分空白がある箇所については「アキママ」と表記した。

三 翻刻は西山伸（京都大学大学文書館教授）が行った。

## 一九三八(昭和一三) 年

一月五日

須磨に幸子を見舞ふ元氣なり

住吉に武田鋭太郎氏を訪ひ蒐集を見る、夜十一時過ぎ帰宅

一月十日

教室にて狩野博士と会す外務省文化事業部より狩野博士の一日の書面(研究所の東京との分離従つて予算要求の形式につきての照会等)に対して何の返事もなき故余が上京を幸にこれにつきての経過見込等を尋ねまた滝博士とも逢ひて研究所存立の上に悪影響を及ぼす如き言説を為すものあらば弁護の態度を以て臨まれたきことなどを依頼し置くことなど打合せたり

今夜十時十五分東上

明より来書、ハッカン氏より滞留を延期しては如何とす、められ日仏会館長よりそれに関連して滞留の希望あるや否や一月末位までに返事を求められたりとして意見を問ひ来る

ハッカン氏の親切より出たること、思はる

大連伊佐寿氏竹田省博士の紹介にて来室骨刻一片持参

一月十一日

外務省文化事業部に電話したれど林宮崎両課長とも病氣欠勤  
東洋文庫に至り岩井和田氏等と話す白鳥博士も来庫、四時過ぎ辞して帰る  
夜青木恒熊氏とヒゲ天に会食、綾子の時計の改装を依頼す

一月十二日

本田四郎に電話したるも不在

十一時頃文化事業部を訪ふ両課長ともなほ病氣欠勤なりとてヨナイ山氏に逢ふ分離の件は既に文書として発送の手続になり居り、予算は分離しても大蔵省にても差支なかるべしといふ岡田部長に逢ひ更ためて分離につきての始末の経過を尋ねたるに部長はよくも知らずヨナイ山氏を喚びて調べさせたる結果指令の文書は課長の手許に滞り居り出勤後直に発せらるゝことなるべく予算の件は部長も差支なしと信ずと言明すよつて念の爲もし大蔵省にて故障が起らばこの問題の過程の上より考へても是非通過させることに努力せられたき旨を述べ部長も承知の旨答ふ。池内氏を玄関に訪ひ転じて谷中上根岸に中村不折氏を訪ひ四時過ぎまで蒐集品参看、同氏所蔵の敦煌文書目録は夏にでも人を派して写させることに領会を得たり

四時半学士院に出席この日池内君初めて出席

一月十三日

昨夜富山房より持参の中等東洋史末尾の一節の加筆を終りたるものを更に見直し伊藤氏を呼び渡す

十時半滝博士を麻布市兵衛町の国華社に訪ひ、人文科学資料調査会の仕事としての不折氏所蔵品の目録を写す件及び狩野博士と打合せ置きたる件につき話し合ふ

転じて池内君を訪ひ二時間半程を費し同座の斎藤菊太郎君に送られて直に停車場に至り三時発の富士にて帰西  
十一時帰宅

一月十四日

研究所二至り狩野博士に東京にての経過を話す小島伊津野両氏同席

一月十五日

高楠博士宛に西脇氏経巻代価を住友小切手にて送付

一月十六日

政府対支声明を發表し<sup>(附)</sup>自後国民政府を相手とせず帝国と真に提携するに足る新興政権の成立發展を期待し是と国交を調整して更生新支那の建設に協力せんとすといふ

明に発信留学延期は任意ニ決して可なる旨返事す、先日彙文堂より明宛てに送らせたる満和辞典三部は明よりペリオ、ハッカン、ギメー図書館等に持参せよと書く

朝梅原氏午後吉田司書官来訪

菊池三重子帰東の途来宅、夜時之谷勝綾子また来る

一月十七日

宮崎市定君に発信同氏より昨日来信六月中留学を私費延期したき旨申越せるに對し承知の旨を書けり

二月十七日

教授会。此の日昨年六月末提出ノ那波氏學位論文ノ審査ヲ報告シ可十六否一ニテ通過。

部長ヨリノ報告中総長ノ希望トシテ講座分担ヲ廃メ将来若シ必要アル時ハ年限ヲ切りテ分担スルコトニシタシトノコトナリトイフコト希望ハ或ハ法学部ノ如キ現勢ニ鑑ミテ起リタルモノナルカモ知レネドカ、ルコトヲ突如教授会に報告スルハ現在文学部ノ実情トシテハ分担セルモノニ對スル一種ノ侮辱ナリ文学部ニテ分担トナリタル初メハ政府ノ大学經費削減ノ企アリシ時（新城末期カ）文学部ニテハ講座担任者無キモノ多カリシ為折角苦心ノ結果出来上リタル講座ガ

奪回セラル、恐アル為分担者ヲ設ケ常に必要ヲ感ジタル講読ノ如キヲ受持ツコトニシタルモノニシテ自カラ進ミテ分担ヲ求メタルニハ非ズコレニ對シ分担ガ性質上善カラザルモノ、如ク言ヒテ其ノ起源ヲ知ラザル新教官等ノ列席前ニテ恰モ分担者ヲ非難スル如キ報告ヲ為セルハ侮辱ナラズトセズ余ハ為ニソノ起原ヨリ説明シ此ノ席ニテカ、ル伝達ヲ為セルニ對スル不滿ノ意ヲ述ベタリ余自カラ東洋史講座ヲ分担セル故此ノ感特ニ深キナリ

四時過ギ散會後大阪二行キ鋭太郎君ノ明日ノ応召ヲ送ル。田中君と共に夕食、御霊神社附近ニテマタ鰻料理ナリ少量ノ酒に酔ヲ發シ鰻ニヤラレタルカト疑懼ス。鰻はヤラヌことなり

島村夫人十四日永眠ノ訃音ニ接ス弔電ヲ發ス

二月十八日

小島部長ニ講座分担辞退ノ意ヲ通ズ

二月二十一日

教授会。那波小牧兩氏教授昇任ヲ決議ス那波氏否二、小牧氏否一人事ニ関スル教授会ニテハ不在投票ヲ考慮シテハ如何ト余提議ス考ヘ置クベキナリトノコトニテ散會

會後植田氏ヨリ懇談ノ形ニテ娘ヲ講師以上ノモノニ嫁セシムルコトノ可否ニツキ規定ヲ希望ストノ珍問題ヲ提議、此人ノ非常識驚クベキ也

三月二日

研究所評議員會。狩野所長三月末ヲ以テ第三回目ノ任期終ルヲ以テ新所長ノ選出ヲ求メ且ツ自カラハ留任ヲ堅ク辞退スト宣ス小島氏現任教授ノ多忙ヲ述ベ来年度移管ノ実現セザリシ今ノ状態ニ於テハ所長ヲ名譽教授ノ評議員中ニ求メザルヲ得ザルヲ述ブ余モマタ同様ノ意見ヲ述ブ投票ノ結果松本文三郎氏當選、辞



退アリタルモ考慮ヲ請ヒテ散会

三月五日

天野氏著書「道理の感覚」が軍部との間に悶着を起したる由聞きしがこの日著者が自らこれを絶版に付することを声明して落着したる由なり、このこと翌日曜日に新聞にて見て知れり十日学校にて田辺氏より五日の京都日々新聞に大々的にこの悶着を報道しある旨を聞き初めてそれを見る煽動者の影躍れるを推知す困ったものなり

三月六日

谷大野上、研究所宮川来ル

午後小川如舟博士来訪、研究所問題ヲ論ジテ帰ル、談中誤解ニ基ケリト解セラ  
ル、モノ不尠対主事ノ考ハ兎モ角五十年の交友君山博士に対スル憶測ハ浅まし  
その間別に余の知らざる事情でも介在するにや万一子を思ふ親の情より発する  
ものならば恐るべきことなり

三月九日

柊屋に本庄大将を訪ふ 昨夜東京村上直二郎氏よりアンリベルナル氏今朝入  
洛是非逢ひたしとのこと故夕景の日仏学館の茶会に出席して面会してくれとの  
速達来る五時半迄都合して大学にて待ちたれど同氏奈良より帰洛の時間遅れて  
会談の時を不得

三月十一日

我が軍昨河曲より黄河を越えて陝西に入れりと報ず

三月十二日

三月十日以来三日に互る卒業者口述試験今日を以て了る

午後研究所評議員会松本老博士新所長を引受けの報告あり新制による研究員側  
の評議員は能田塚本二名と報告あり

ヒットラーが昨日オーストリアに対し十六日に行ふべき人民投票をやめしめ内  
閣改造を迫りたる結果投票は見合はせとなりシュシュニク宰相は国民の流血を  
避けて武力に屈する悲愴な演舌をして何れかに跡をくらし塙のナチス頭領ザ  
イスが宰相となりしを新紙報ず夕刊には英仏の独逸に対する強硬抗議が送られ  
伊は英の勧めを退け独自の立場より、対独態度を定むと宣したりといふ

三月三十日

卒業式

午後研究所評議員会新設ノ東方文化研究所理事ヲ選挙ソノ結果小島氏ト余トガ  
選出セラル、研究員側ヨリハ塚本当选

三月三十一日

大阪美術館ニテ開ケル大毎の東亜美術展覧会を観ル道代綾子同伴

四月一日

研究所ニ於テ狩野松本旧新所長ノ交迭ト東方文化学院ヲ解体東方文化研究所ヲ  
開クニ至リシ披露ニ兼ネテ同所ニテ晚餐会アリ出席

閉会後狩野博士ヨリ始メテ浜田君ノ血圧高ク飯塚国手ノ心痛ノ旨ヲ聞ク

四月三日

田中富美子結婚披露ヲ御影公会堂ニ催スニ列席道代綾子同伴

四月四日

飯塚国手研究室ニ来訪浜田君ノ容態ヲ仔細ニ聞ク血圧二二〇ニ上リ注意ヲ要スル旨ヲ聞ケリ

明ニ英貨八〇磅送附許可手続を日本銀行京都支店にて為す許可までに二週間位かゝることとなり

四月五日

夜浜田君ヲ訪フソレト無ク注意ヲ勸メテ帰ル

四月六日

飯塚君ニ電話シテ浜田君ヲ訪ヒ可成静ニスルヲ可トスル旨話シタルコトヲ通ジタルニ丁度浜田君受診中トノコトニテ午後更ニ飯塚君より電話アリ血圧ハ更ニ高ク二四〇ニ上リ尿ニ赤血球モ交リ居リ前回診察ノ時ヨリモ更ニ悪シソレ故今晚東上ハ出来ルコトナラバ見合セ奈良ニデモ行キテ静養スル方可なるベシト勸メ置キタリトノコトナリ夜浜田君ニ電話シタルニ東上ハ見合セ明日奈良ニ行クトノコトナリ

四月八日

浜田夫人来訪浜田君昨日気分勝レズ藤野氏ヲ招キテ検血シ其後気分回復セリトノコトコノ事今朝飯塚君ヨリ電話アリテ既ニ聞キタルコトナリ昨夜飯塚君モ見舞ヒ直ニ奈良ニ行カズトモ行キタル積リニテ静養スベキ由勸メ置キタリトノコトナリ

浜田夫人ヨリ今日小川夫人来訪勢い子さんと環樹君との縁談を申入レラレタリトノコトニテ環樹君の人物につきて尋ネラル

四月九日

小川如舟博士来訪今朝浜田夫人答訪ノ結果明日両方当家ニ落合ヒ見合ヲシタケレバ承諾セヨトノコト快諾ノ旨答フ

四月十日

田中両人来訪過般文子結婚につきての挨拶の為なり

二時小川夫人と環樹君来リ聞モナク浜田夫人及び息女勢以子さんも来訪一時間程会談して去る

浜田君少しく血圧降下の由なり

加茂ノ兄来訪コレモ血圧二百二、三十とのこと、過日警戒を注意し置きたれば相談ノ為ノ来訪ナリ

四月十一日

文部省会計課長大学に来るにつき研究室のものをを見せてくれとのことにて研究室にて成吉思汗牌古經などを示す

時野谷勝東京より面会の為東上を促し来りたれば今夜出立したく両親風雨の為けふ湯寄よりの帰宅をのぼしたれば卓に今夜留守番に来てくれとのことにて夜九時頃卓先方にゆく

明より来書

四月二十日

守屋氏ヲ訪ヒ敦煌遺籍卅三種ヲ借用研究室ニ持帰ルソノ内大光義品一種ハ近ク国宝ニ指定セラレタル由ニツキ写真後内田氏ヲシテ返却セシム

守屋氏所蔵ノ王守仁ノ書ヲ見ル■■■■ニ酷似ス

教授会

故市河三祿教授ノ葬式ニ列ス

四月二十一日

大学ニテ浜田君ニ逢フ十三日以来奈良ニ静養中ナリシナリ大シタルコトモナキ様子乍ら何トナク元氣無キ様子ナリ同君より勢以子嬢と小川環樹氏トノ縁談昨夜小川氏来訪成立セリトノ由聞ケリ

仲介を依頼セラル

宅ニモ浜田夫人来訪ノ由

大学ニテ部局長会議開催判任官定年制ヲ議定判任満五十五才ニテ退職嘱託雇員之二準ズ現任者ニハ経過規定トシテ特例数条ヲ認ム

四月二十二日

明ニ英貨八十磅 (邦貨一千三百七十二円四十二銭) 住友ヲ経テ送付帰朝旅費其他ノ為請求シ来レルモノナリ

小川夫人来訪道代ニ縁談成立ヲ告ゲ仲媒ヲ依頼サレタル由ナリ

四月二十四日

清野飯塚両氏来訪浜田君の療養方法につきて飯塚氏より浜田夫人に返事する約あり入院か奈良ホテルかそれとも他によき方法あるかを相談する為なり余は病院は賛成せず (早急に快癒の病症に非ず病院にても回復せずとて退院すればその際は総長の職についても考へねばならぬ結果となるを恐る、為なり) 妙心寺徳雲院でもかりて家庭近き所にて暫く静養して見ては如何といふ両君とも賛成、徳雲院のことは余より明日にも浜田君に通じること、約す時之谷君若夫妻と共に来訪若きものの東京移転送別の為に会食

四月二十五日

浜田君に大学にて逢ひ徳雲院の話をす気分まかせとして或はその中依頼するやも知れずとのことなり

四月二十六日

靖国神社臨時大祭

四月二十七日

明に送金通知の葉書を出す

今夜東上の予定の所 (外務省に満蒙研究終末報告の為) 朝来不快遂に授業も休み引籠る午時検温三十八度

今夜の東上をとり止む

清野君飯塚君を伴ふて来訪浜田氏入院のことに決したるを告ぐると共に余の病気を飯塚氏に診せる為なり感謝に不堪飯塚氏は流行性感冒と断じ投薬してくれらる

綾子今夜勝君と共に東京に立つ二年間予定の転任なり修養によるべし

四月二十八日

引籠り静養、夕景に至りほゞよし腹の工合もいつもの如くにはあらねど穏かならず

四月二十九日

太田君来訪満開の藤を賞して帰る

飯塚君より電話にて容態を尋ねらる感謝し浜田君昨日大学病院に入院之由飯塚君より聞く

加茂の兄来訪

四月三十日

此日殆んど全快尚大事をとりて在宅

池内清野川上三君来訪池内君は北京に川上氏は哈爾濱に共に明日出発といふ夕

食を共にし浜田君のことそれぞれ語り合ひて帰る

道代小川浜田両家訪問

長谷川支那艦隊司令官横鎮司令官に転じ及川中将之に代ると号外報ず

五月十一日

今夜東上、満蒙史研究終了ヲ文化事業部ニ報告、兼ネテ狩野前研究所長慰労ニ対スル事業部ノ考（記念品贈呈）ニツキ当方希望開陳（記念品料ニスルコト昇勲ノコト）ノ件、人文科学資料調査会出席、学士院例会出席等ノ為ナリ

五月十二日

朝文化事業部ヲ訪ヒ宮寄第三課長ト会談、記念品料ノ件ハ容易ニ同意、昇勲ノ件ハ既ニ工作シタルモ現官ナラザルガ為ニ成立セザリシトノコト、文部省ニヨリテ勝ニ逢フ、藤井甚太郎氏ト会談  
午後学士会館ニテ開催ノ人文科学資料調査会ニ出席了リテ上野学士院例会ニ出席

夜三島君ニ招カレ目黒茶寮ニ会食、勝綾子モ列席

帰途三島君と共に勝ノ新居ヲ見ル

五月十三日

朝十一時頃綾子来ル昼前綿貫哲雄君来訪築地のレストランにて昼食、二時過ぎノ汽車ニテ出発品川ニテ綾子下車三島君乗込ム、山中の花雲荘ニ夕景着、泊、山気爽快なり

五月十四日

十一時頃花雲荘を辞し三島君を誘ひて甲府ニ向ふ三ツ峠三坂峠等の峻険をバスにて楽々と越え二時前甲府着湯村常盤ホテルに投ず五時頃三島君山中に引返す

五月十五日

十一時の準急にて中央線に乗込ム予定ニテ停車場に行きしにこの汽車今は取消しとのこと止むを得ず身延電車にて東海道富士駅に向ふ富士川の溪谷を南下するなり景観平凡なり、富士近くにて前刻電車とバスの衝突ありて余の乗れる電車は進行を沮止せらる大あはてに慌て、徒歩連絡地点を通過（タクシを求むれども無し）駅に馳せつけば列車は既に到着せり息切りて馳せつけ辛ふじて乗込む静岡にて四十分を待ち特急鷗に乗りて十時頃帰宅

五月十九日

この日皇軍遂に徐州を陥れて入城す

五月二十日

午後毎日新聞社京都支局後援富民協会主催の北支資源調査座談会に出席  
浜田君を病院に訪ふ、経過宜しき様子なり  
宇都宮夫人昨夜大学病院にて急逝せりとの報あり、同院屍体室に弔問

五月二十一日

道代宇都宮氏宅を訪ふ

五月二十二日

大阪に武田氏を訪ふ満蒙史研究に援助を謝する為なり

五月二十五日

研究所商議員会

清野君図書館に来訪

五月二十六日

狩野前研究所長慰労会を旧評議員にて左阿弥に催し出席  
宇都宮家告別式に弔問

五月二十七日

此日小牧実繁君欧洲に向つて出発和蘭にて開催の地理学会出席の為なり

五月二十八日

皇軍帰徳を占領入城を新紙報ず

六月五日

此夜皇軍開封を陥る

荒木新文相来学午餐会に列席

六月二十六日

朝高柳君来訪、午後六時より同君を都ホテルに答訪左阿弥に案内して夕食を共にす同君は来月十五日アメリカに向つて出発、アメリカにて漸く擡頭の勢にあるIntervention派の氣勢を殺ぐ使命を果すなりといふアメリカより欧洲にまはり十一月十一日までに帰る予定といふ成功をいのる

六月二十八日

予算を更に緊縮すべく文部省より図書館建築の請負額を問ひ来りしにまだ請負の運びになり居らず剩へ現存建物の取払ひには文部大蔵両省に手続を要するにそれさへ出来居らずこれからその手続をせねば請負契約も出来ぬとの有様吉田氏より電話し来る孺子遂に事を過る今年こそはと氣を揉みて鞭撻して漸く敷地問題も建築案も通過し已に請負契約に入れる頃と思ひたるにこの有様到底今

年も望み無からんかゝる連仲<sup>④</sup>を対手にして事業の進行を図ることの今更に至愚なるを悟る早く見切をつけてやめることなり

六月二十九日

教授会、支那出張のことを可決

六月三十日

吉田君より重ねて前記の経過を聞く

病院に浜田君を訪ひ高柳氏より聞きたる東京に於ける留学生問題解決案としての交換学生の方の進行状況を話したるまた図書館建築問題につきて昨日来聞きたる処を話しせめて建築の一畝の入るを待ちて辞職したしと思ひ居たれど到底それも見込みなければ急に後任者を物色ありたき旨話して帰る、四時過ぎより大阪に至り武田氏に佐々木より持参せる図書本記古写本の件その他を話して帰る

七月一日

午後三時過ぎ毎日藤田氏より電話あり昨午後清野君高山寺の經典を持出し太秦署に遅致され検事が家宅捜査の結果同種のもの二百巻許りを発見本日午後一時半その次第を検事局より新聞記者に公けにせりとのこと岩井氏よりも更に委しく同様の電話なり到底信ぜられぬことなれど事実には間違なきが如し浜田君に電話したるに戸田前田氏等よりその旨報じ来りて知りたりとのこと、取あへず清野君とは廻縁<sup>④</sup>と聞たる守屋弁護士に相談して見るべく同氏を訪ふ同氏はまだ何も聞知せずとのことに却つて余より伝聞のまゝを話して見込を聞く何とも致方なけれど今夜検事正を訪ねて見るべしとのことにて辞す更に毎日に岩井氏を訪ひ更に委しく経過を聞きて帰る、蒐集癖が高じてのこと、簡単に考へ得ることに非ず精神病とでもいふ外なかるべし困ったの一言以外何ともいひやうもなし



夕刊に大字見出しにて少しはばかり乍ら書けるを見て涙も出でず

## 七月二日

清野事件各新聞に書き立てる所によれば行為の期間も点数も箇所も初め聞きたるより益々多くなり驚愕と痛恨を深らせしむるのみ

浜田君より十時頃逢ひたしとの電話あり病院に訪問したるに小島天野両氏も招かれて既に在り、浜田君は涙を流してこの度の事件を痛恨し同胞の如く交り来れるものゝこの非行につきては全く裏切られたる感に不堪一年間努力し来れる肅学の志も今は沮喪して此の上総長在任の勇氣なく加ふるに健康もこの有様なれば自分としては辞任の決心をしたれば予め意志を表示すとのこと三人みな涙を以て聴き一応共に考ふべければ返答するまで他に口外無からんことを希望して大学に引上ぐ。三人相談の結果は理の上よりはかゝる責任をとる要なきもその心事を考ふれば真に止むを得ぬ儀とせざる可らざるがたゞ時期につきては今夜書記官も帰り来ることにもあり明日までに熟考し置くべきを約して別る。引き続き狩野博士来訪

## 七月三日

小島部長と電話にて打合せの結果午後二時天野君研究室にてまた三人会合書記官も小島君に今朝浜田君と逢ひ同君より決心を聞き止むを得ぬこと故格別とめもせず自分も総長よりの求を待たず辞表呈出のことにすべしと返事せりと語りし由を聞く

昨日来余も熟考したる結果清野事件は進展如何を待つまでもなく明白なることなる上当分浜田君が静養を続けても急に健康が目立ちて良くなり大活動に差支なき程には至るまじければ今直ちにやめて一般に責任を重んずる人たるを示すことが同君を生かす所以なるを思ひ直ちに辞任するがよからんとの結論に達しその旨両君に語る両君もまた同意見なり、よって明日午前十時訪問してその旨

返事のことす

余は更に念の為田辺君にこれにつきての意見を聞き置きては如何と提議すこれ浜田君より必要あれば三人以外の人にも聞きくれてもよしとの話もありまた田辺君は平素より浜田君のことを氣にかけくれたる人なればなり乃ちこの為に小島君を煩はすことにす

## 七月四日

十時浜田君宅を（昨日来一時帰宅せりとのこと）三人にて訪問昨日相談の結果を返事す、田辺君も同意なりし由小島君より報告、天野君は別に西田幾太郎博士に昨日右の次第を話し考をきゝたるに吾々と同感との旨なりし由を話す、明日にも緊急評議會を召集し各部長に辞表を披露し評議會にはたゞ総長より辞任申出の次第を話すことにするとのことなり

図書館員の担当事務変更をそれ／＼通告十一日発令と共に実施のこととす  
皇軍湖口占領

## 七月五日

大雨加茂川の出水一時は如何になるべきかと案ぜらるゝ程なりしが二時頃より雨やみ漸次減水せるは仕合なりき、阪神沿線より神戸は被害甚大にて住吉の住友久原安宅等の富豪の邸宅惨害を蒙り死者行衛不明者多数の由夕刊報ず  
幸子より十時過ぎ電報来り無事安心あり度旨通じ来る

## 七月六日

臨時教授会午後一時半開会部長より昨日部長会議にて総長より引責辞職の申出あり次の総長選挙手続開始の請求あり各部長より籲意を求めたるも決心動かず更に緊急評議會にもその旨総長より報告し評議會にても再考を求めたるも総長は応ぜざりし次第を述べ投票用紙を配布、本月十一日に一、二、三次の投票を開

票し即日選挙を終ることに成りたる旨を報告す文部省へ右電話にて報告したるに今朝同省より選挙手続開始を見合すやう電話あり総長が此際責を負ふに及ばずとの意向なりしも総長は之に応ぜざりし次第も報告あり、余は更に総長辞職の心事を人を派して精しく文部省に報告する要あるべき意見を述べ置きたり会後教官との雑談中田辺教授も同意見を述べ

須磨一の谷の療病院も大雨の為病室倒壊死者二十名程を出したる由朝刊にて知る幸子の電報はこの為に寄越したるものとわかる

七月十二日

朝富士にて東上

学士院出席高楠博士布哇に一年間講演に赴くを送る晩餐会に出席宿に帰りて後時之谷夫妻来訪

七月十三日

朝三島君来訪

外務省文化事業部に宮崎書記官及び参謀本部に高島中佐を訪ひ本夏の支那旅行につき紹介のことを依頼して帰る

夜時之谷夫妻と銀座中華第一樓に夕食、更に三人にて池内氏を訪ふ

七月十四日

朝東洋文庫に白鳥博士を訪ふ午餐に招かれ鉢之木に至るそれより直に駅に至り一時の鷗にて帰る綾子駅に見送る

七月十六日

浜田君を見舞ふ けふ午前官舎に移りたる由なり居宅の暑さに堪えかねたるによる理髪の為か左程やつれたやうにも見えねど頻りにシャクリを出す

夜荻野氏に招かれて八坂の佐々木に夕食中島君けさ入浴今夜九時四十分東上とのことに宴席を半に辞して都ホテルに同君を訪ひ共に駅までゆきて見送って帰る

七月十八日

午前一時岩井君より電話あり浜田君少しく容態悪しきが如く辻教授と真下教授と二人深更より診断中との報あり

朝になりて辻氏に電話して容態を聞けるに昨夜胸苦しとて診察を求められゆきて見たるに心臓の弱りが現はれたれば真下君をも招致したるなるがこのまゝ、落ちつくべしとのことなり

池内君東京より来る輯安の出版物につきて梅原氏と相談旁々浜田君を見舞へるなり同君の言ふ所によりて昨夜来浜田君左肺より少々出血せるを聞く、真下君に電話して聞けるに高血圧の為の鬱結(鬱)の為と思はるこのまゝ、安静を保てば大事に至らずしてすむべしとのことなり、夜池内君来る。

狩野松本両氏図書館に来訪、八月中旬北京に開催の東亜文科協会(文)発会式に研究所を代表して出席を文化事業部より求め来れる故余に参列を求めらる、余はこの会の性質、大学よりも誰かを出すや等につきて事業部に聞き合せたる上考ふべきを約して別る

七月十九日

午時大学庶務課より電話ありて大学にも外務次官より東亜文化協会発会式に総長の出席を求め来りもし都合悪しくば別に代表者の推薦を依頼し来れりとのこと、午後大学に至り中村書記官及び小島部長と会し此際病中の浜田君とは相談することを見合せ余に出席を求むることにし、後に機を見て浜田君に話すことにしたしとのこと余は予定よりも二十日許りも早く出発すること、なり暑さの為にその他の用事の為に困れど致方なく出席を承諾しその旨本部より外務

に返事すること、して別る

## 七月二十日

けさ中村書記官小島部長等東京にゆき宮本部長も今夜出発して之に加はり文部当局に浜田総長辞職につきその心事を委細伝ふること、なれりとのことなりこの事昨日小島中村両氏より聞けり両部長が東上することは部長会議に総長よりその代理として両部長に東上説明を求めたるなりとのこと□くして八日以来停頓して寸歩も進まざりし□題に進む道を開かんとするなり

太田夫人夜来訪、夫人の令妹の縁談につきてなり、相手は内藤家の親戚田口氏なり

峯山の吉村兄来訪松尾君に関することを依頼の為なり

□の日暑氣三十七度華氏百度以上に上る

## 七月二十一日

藤井厚二教授去る十七日夜遂に遠逝

けふ建築教室にて告別式を催す参列

岩井太田両君研究室に來訪、岩井氏の車にて両君と共に帰宅宅にてまた夕景まで話して帰る

## 七月二十二日

真下教授に電話にて浜田君の容体を聞けるに昨日よりけさにかけて出血もなく熱もなくまづよき方なれど依然食欲のなきと尿量の少きとが心配なりとのこと同氏の言にては必ずしも樂觀を許さぬやうなり困ったことなり瓢亭より鮎鯨を持らせやる食欲誘起のことにもならんかとの慕無き望みなり

## 七月二十三日

渡支の準備として市の保健所にゆき今村国手より種痘と窒扶斯の注射を受く(岩井君の紹介による)十一時頃大学に至りしに浜田家より電話あり小島天野両氏と共に余の來訪を求めたりとのことに蒼皇として総長官舎に駆けつく先づ辻教授より容態を聞くに既に重態と思へば尋ね置くべきこともあるべく家族親戚等はこの状態を通知せしめたりといふ病室に入れば待ち兼ねたるが如く手を差しのべ既に覚悟の態にて「宜しく頼みます」とのことその手を握りたるま、応答の言葉も出でずたゞすべて安心し給へと僅にいひ得たるのみ小川博士親子余につゞきて枕頭に在るを認め同じく手をのべてまた宜しく頼みますといふ博士は特に環樹君を帯同し来りたれば共に後事は安心してくれと繰返して述べたり坐に堪えず暫時にして枕頭を去る午后意識漸々朦朧となりゆくも是非なし

## 七月二十四日

終日浜田家に在りて様子を気遣ふ愈々頼みなくなり行くのみ昨日來苦痛に堪えざるやうに軋軋(軋軋)反側見るに忍びず医師の言によれば一昨日來尿毒症を發し心臓の働き頓に弱り来れるなりといふ今夜は事なかるべしとのことに九時頃一先づ帰宅

## 七月二十五日

まだ夜の明けぬ三時過ぎ電話あり浜田君の危篤を報じ来る差廻されたる自動車 of 走るも遅しと天野君の宅にまはって共にかけつく八時卅二分遂に辻氏臨終を宣す噫々万事休せり

小島中村両君と余とにて葬儀の相談に入る

## 八月一日

朝九時教授会開催部長より平野氏の二十八日荒木文相より聞き来れる次第を報



告あり各学部よりこれに対する協議員三名宛を選出することになりとのことにて投票選出の結果小島、羽田、田辺三人当選余は眼前に支那旅行を控へ居れるも出発迄に一二回の会合あるべくそれにて小委員を選出すること、なるべければともかく引受けよとのことに応諾す

新城博士病氣重態の由梅原君の注意によりて読売新聞にて知る帰途狩野博士を訪ひたるに今朝五時 分同氏逝去の由今荒木氏より得たる通知を新村氏より通じ来れりと聞く、凶事頻出長嘆痛恨す  
更に浜田氏遺族を訪ひて帰る

十月十二日

今朝京漢線の信陽完全に陥落

また南支〇〇湾より虚を衝きて皇軍上陸と報ず

十月十三日

夜十時半岩井君より東伏見伯家の家令星島氏五時半頃検事局の調をうけ収容せられたり何に関してかは明らかならずと報じ来る次々に忌はしきことのみ生起することなり

十月十九日

此日正午明神戸に帰着の由昨日無線にて通じ来りたれば道代卓董等神戸に迎ふ午後四時半京都に着く旨神戸より電話し来りたれば京都駅にて迎ふ太田君吉村中兄も迎へくれたり、二年振りに元氣なる顔して帰り来れり。

十月二十一日

此日皇軍早くも広東に入城ノ由ラジオにて報ぜらる

十月二十二日

新聞紙は昨日の広東陥落を報ず大した戦闘もなく我軍の迫るを見て敵軍は逃走したりといふ

今夜三高に於る公民教育講座に出講

けふ大学制度調査委員会を開き小島氏平野氏より先日來文部省との交渉の顛末を報告、各大学聯絡の結果殆ば京都案に近き（内容は同一）案を文部省に提出大臣もこれを受領七月二十八日以来の問題も一応終結の形となれりと報ず更に評議会教授会にても同様報告

十月二十五日

此日皇軍早くも漢口の一部を占領と報ず

吉村まさ子中村氏に嫁す万養軒にて披露参会

十月二十六日

峰山の兄來訪夜山端相模屋にて三兄と田中と加藤氏とにて明の帰りたるを種に会食

十月二十七日

午後五時半武漢三鎮を確実に占領

尊攘堂例祭

新村博士と大学にて逢ふ。学士院より連合学士院会出席の為來春歐洲にゆきては如何との話あり

三時より大学制度委員会

宮内省より電報にて帝室博物館顧問依頼したきにつき差支の有無を問ひ来る

十月二十八日

貴志浪子嬢斎藤家に嫁したる披露宴に出席大阪新ホテルニ至ル  
太田君同道

十月二十九日

夜末広君より電話あり入京したれど急ぐ為に逢はずに帰る由の挨拶なり  
桑原両夫人内藤老夫人と乾吉君来訪、貴重書売値につきて返事あり  
一一五、〇〇〇にて譲ることに定む

十月三十日

奈良博物館長山口氏来訪博物館顧問委嘱の為なり一昨日大学より既に差支なき  
旨返事したることを答ふ

十一月三日

武田鋭太郎君来訪大学にて逢ひ内藤家善本譲受に関する件同家にて異議なく承  
諾の旨委細話す 同君と昼アラスカに昼食  
三時過ぎより今夏北支旅行中に写したる八ミリ映画を試写す不成績なり

十一月九日

今夜東上明日博物館開館式に参列の為なり

十一月十日

八時東京着九時半博物館にて聖上陛下の台臨を迎へ奉る愈々御健やかに涉らせ  
らる、聖容を拝し歓喜に不堪、十一時過ぎ還幸あらせらる館内を一覧全巡程四  
キロに亘るといふ建物も美陳列も優皇師外に武威を発揮し文運内に隆昌す聖代  
の名に背かずといふべし

晩三島君と銀茶寮に夕食道代会会す

博物館より池内君と共に文庫に立寄る白鳥博士及び和田君と会談明の身上につ  
き色々高配をうく感謝の極なり

十一月十一日

朝和田君来訪重ねて明のことにつき懇談東亜研究所に推薦の意ある旨昨日白鳥  
博士より聞きたることを重ねて懇示せらる暫く考へてその上にてお願すること  
に返事

午後一時発にて帰西道代宿に来て駅に見送る  
綾子まだ出産の徴候なしとのこと

十一月十二日

寒気強し、昨夜より今晚にかけて雪ふる

午前十一時より狩野博士銅像除幕式を研究所にて举行、参列す老博士の謹直の  
風貌よく出来たり学者として初代研究所長として全力を尽されたる功績のかく  
て永久に伝へらる、ことゆかしくも目出度き極なり老博士の心情を推量して慶  
祝に堪えず近來の快心事なり

夜入洛の林宮崎両氏を請じて瓢亭に夕食松本所長狩野小島両博士と余と同席  
明東京に行く

十一月十六日

けふ教授会新制による総長推薦の協議員を各学部三名選出余と小島田辺三人当  
選、推薦期日は十一月二十四日とのこと同日は東京にて今年の図書館協議会の  
初日にて余が議長を勤めることになり居りたるもこの為上京出来ず東京に電報  
にて断ることに手続を吉田司書官に依頼す

十一月十八日

菊池君郷里より帰満の途立寄

四時頃東京勝より来電ジョシシッセイボシケンザイと報じ来る遂に祖父となれり多少の感慨なきに非ず

夜太田君を招き菊池君と三人鼎坐夕食十時に至りて太君帰る

十一月十九日

菊池君と神光院に蓮月尼の旧居を弔ひ転じて太田君宅に至る余は午時楽友会館にゆき史学研究会大会の講演を聞く村田君の遼代の建築東京板沢助教授の日唐交通に於ける国書問題の二を聞き原君の戦争と人間を聞き残して帰る菊池君今夜出發といへるが為なり然し菊君卓董を伴ひて都ホテルに夕食帰り来りて更に一泊す

蜂屋文化事業部長より廿四日評議員協議会を開催する故三時外務省に参集を求め来る、同日は大学の協議員会の為出席出来ずその旨電報す

十一月二十日

菊池君十時廿二分の電車にて西下大阪に向ふ

午時前武田鋭太郎氏来訪近く北支にゆくにつき諸種打合す、小野森両氏に紹介のこと、し手紙を書く

原与作君も明日出發にして北支見学の旅に上ることにてやはり両氏に紹介し案内を頼み置けり

十一月二十一日

東洋史研究会大会を午後楽友会館ニテ開ク講演者十一人

十一月二十二日

河瀬松三君大学に来訪東京よりの帰途なり

滝松本両博士と瓢亭に夕食、滝博士より東亜研究会より研究所ニ依托ノ件ニツキテ話ヲ聞く

十一月二十三日

けふは此頃に珍らしく終日家居午後大谷瑩誠氏来訪、東伏見伯家令星島氏ノ件ニツキテ委細ヲ話サル封建時に通有のお家騒動を目のあたり見聞の心地なり  
武田鋭太郎氏に小野勝年氏宛百七十円封中の手紙を依頼することにし同封の手紙を書くこの額は

一一八元 六角 元板宋史 帙

六〇〇元 永楽大典輯書

メ七一八、六

こゝに 五五〇元 橋川君に預け

差引 一六八、六 借りの処にこれだけ送れるなり

十一月二十四日

けふは東京帝大にて帝大図書館会議を開く日なり出席して議長を勤むる筈なりしも今日は当大学総長推薦の協議員会を開く日に当れば行かず一時より同会に出席、全教授の推薦を各教授それぞれ番号を打ちたる………を入れたる票紙にて答申せるを総長代理書記官庶務課長と外に年長協議員二名(本野小島)立合て審査その結果、羽田平野小島戸田中沢本野大杉橋本其他等の順にて十名を挙ぐ此の十名につきて協議員が前同様の票紙を以て二名宛連記推薦前同様の人々にて審査その結果羽田平野小島三氏を挙ぐこの三人につきて一名単記にて推薦を了る結果は報告せず協議員会を了る了りたる後平野氏は余を呼び止めて余が推薦せられたるを告げ承諾を求む余は困る旨答へたるも是非承諾せよと

す、め且つ今夜出立東上当局に推薦の筈になし居る故長く考ふこともやめて即刻承諾せよとの事なり兎も角暫時猶予を求め自からも考へ田辺小島氏とも相談の結果到底受諾せざる可らずとの考になりその旨平野君に返答すまさかと思ひし運命が突如として襲来せるなり。今夜十時十五分發にて東上

十一月二十五日

朝図書館會議に出席穂積氏に議長を依頼。午後日支文化協議会日本側評議員会（東京会館）に出席、三時半頃山川専門局長会場に來りて余を招き今朝來大急にてすべて手続を了り今四時余が任命を發表すること、驚くべき早急の運びなり今はたゞ成行に任せるのみ。綿貫氏夜東京会館に來訪、勝君も来る勝と共に新宿の病院に綾子を見舞ひ初めて孫女を見る、孫を見たる日が新任命の日なるは記念なり初めて事の次第を道代及び一同に話す、学士会館に帰れば新聞社員数人來訪して待つ、平野君と共に談笑。

十一月二十六日

朝來の打合により朝十時文部省に至り（中村書記官同行）山川、伊東、堀池、橋本氏を始め当局と逢ひ更に荒木大臣二面会官記を受領大臣と会談二十分時許にして辞す大臣との会談は不得要領なりしもいふ所は現在日本の文化の指針無く特色なきを論じ国民的特色ある文化の創造に力を用ゐくれたしとの意なるが如し山川氏を更に訪ひて図書館建築予算の査定に当り通過に尽力を希望して別る

正午前図書館に至り挨拶す會議出席が妙な始末となり了れり帰途更に東洋文庫を訪ひ白鳥和田兩氏と話して辞す

三時過ぎの汽車にて熱海に向ふ道代同伴綿貫氏夫妻同行、四人熱海ホテルに投ず

十一月二十七日

朝長与前東京総長とホテルにて邂逅、一時間許心境を聞く、四人にて熱海を散策午時前車を驅りて伊豆山より湯河原を経て真鶴の綿貫氏別墅に至る海に臨める崖上に位置しよき所なり二時過ぎの富士に沼津にて乗るべく真鶴を發す道代は東京に引返す

十一月二十八日

朝大学に行き明日よりの挨拶廻りの予定など打合す

十一月二十九日

御陵を始め諸方に挨拶

朝道代帰宅

十一月三十日

挨拶、此朝七時卅二分富士にて東上

夜新村博士と共に虎の門霞山会館に陽明文庫竣成披露会に出席、近衛公水谷川男河原田稼吉理事長孤野氏細川侯大山公木戸侯等を始め三四十人会合

十二月一日

朝九時半より日支文化協議会（帝大講堂）に出席午時水谷川男に招かれ築地錦水に新村博士と共に出席、大山公河原田氏同席午後文部省を訪ひ挨拶更に荒木前総長を自宅に訪ふ

山川局長、菊地<sup>④</sup>教学局長官と東大総長室別室にて会談山川氏より書記官、学生課長を如何にするかとの話ありなほ考へなしと答ふ、菊池氏よりは教学局参与受諾を求めまた田辺氏にかねて近衛公より便利の時話を聞き度旨申出ありたれば輕き意味にて承知を求むる旨伝達を請ふとのことなり

十二月二日

朝滝博士来訪会議に出席、午後宮中に天機奉伺引つゞき秩父、東伏見、久邇宮家等に奉伺転じて成城町に小西博士を訪ひ帰途駒込に出で三島君を病院に訪ひて帰る

十二月三日

朝会議に出席午時富山房長谷川島内氏に招かれ築地宝屋に長寄料理の饗応に預る更に文部省前にて勝に会し案内せられて代田二丁目のその宅を訪ひ綾子及び赤坊と逢ふ

今夜中央亭にて東亜研究所理事原林唐沢岡本氏等と会す松本滝池内氏等同席外に研究所の主事大上氏等二三ありかねて東亜研究所に依頼ありたる研究依頼事項につき隔意なき相談をなす

十二月四日

朝林出氏入京の旨電報あり肥後君を島内氏に紹介後山王ホテルに林出氏を訪ふ幸楽に午食、池内氏を訪ひて昨夜の後相談を遂げ三時の富士にて帰る

十二月八日

就任後始めての正式の評議会

会後各部長に対し既に定めある総長推薦規定の再考と共に教官推薦及び学部長推薦の規定を考へたく各部委員三人の推薦を求む

此日評議会の終りに石川評議員より大学全体の制度調査を希望する旨申出あり諒承可成早き機会に着手することを考慮する旨答ふ

十二月十五日

此夜今夏総長推選に関する規定制定に当りたる委員の懇親会を丹栄に開く

十二月十六日

朝十一時より就任式、了りて教官食堂にて評議員等発起の歓迎宴

十二月十七日

本年度軍事教練査閲、昨夜雨の為室内にて行ふ査閲官館少将、夜査閲官軍事教官等と会食

年末賞与案につき相談、うるさきことなり

十二月十八日

中川小十郎立命館総長に招れ瓢亭に夕食、京大立命大法学部教官の間に前年滝川事件以来醸せられたる対立関係が解消したる挨拶の為なりとのことなり



# 一九三九（昭和十四）年

一月三日

午後吉村桑原太田氏を歴訪

一月四日

御用始めの為大学に行く

昼前岩井氏より電話あり内閣総辞職せりとのこと支那事變の新段階に処する為といふ理由なりとのこと、後は平沼男に組閣の命あるべしとの事なり昨年末以来新聞が内閣補強の名の下に屢々内閣主脳部の往來を報じたる行動の結果なり、従来の声明を翻して蔣政権を相手とするの意味ではなく益々国家総力を實現し統制をすゝめて強き組織の下に長期戦に処する方針に進むなるべし狩野博士來訪清野に対し戒告の要あるべく如何にすべきかとの話あり、余は近く先づ单独にて逢ふて見たき旨返事す

帰途新村氏を訪ひ図書館長の人選につき相談本庄氏に賛同の意見なり

一月六日

けふ本庄君を訪ひ図書館長引受を依頼す

一月九日

都ホテルにての懷徳堂招宴に列す

一月十日

此日経済学部教授会にて本庄氏図書館長就任を承認したれば就任を受諾すと本庄氏より電話ありたり

一月十一日

高田経済部長より部長辞表を提示、後任として石川教授を推す旨口頭にて話ありたり

一月十二日

本庄氏図書館長補任申請の書類を文部省に発送

一月十三日

大学本部高等官をアラスカに招きて夕食  
今夜十時十五分東上

一月十四日

午後二時より文相官邸にテ帝大総長懇談会、荒木大臣と総長との間に六時頃迄懇談夕食後更に継続八時過ぎ散会、四月には正式の会議を開催の筈とのことなり会議要領別に控あり

午前十時に三島君來訪、最近同氏家庭内の苦痛を語る先日より不眠症にかゝり神田長谷川病院に静養中とのことなり明日畑毛温泉にて一宿閑語を期して帰る天野教授学生主事兼官を免ずを発令したりとのこと秋田書記文部省にて聞き来る

一月十五日

三島君と畑毛温泉にて話合ふ約束なりしもけふ午後出かけて明日朝早く東京に引返し午後の会議に出ることの徒に疲労を招く結果に過ぎざるを思ひ中止の旨電話にて同君に通知更めて今夜星ヶ岡にて会談のことゝす

午後久振りに神田より日本橋の通りを三越まで散歩、山手線にて時野谷を訪ふ夕景勝君を案内に和田君の宅を訪ひ六時過ぎに星ヶ岡に至る、大阪加藤氏夫人

三島君より入院治療の電話をうけとりあはて、けふ着京せりとて既に三島君と共に座にあり同氏家庭の細事を聞く筈なりしも加藤夫人同席の爲極めて大体を聴取せるに過ぎず要するに病的夫人と別居せんとしその処置につきて批評を求むる爲余との会談を希望せるなり

一月十六日

朝東亜研究所を訪ひ唐沢原兩理事と会談林理事支那に出張中とて不在なり

午後零時半文部省に至り學術振興會理事會に出席、四時池内君を訪ひ雜誌研究所にて池内氏より提出の研究依頼項目に多少の不滿ある旨をも伝へ報告は先方希望の線に沿へるものを出すことに無論諒解の筈なるも更にこの点に力を入れることにお互に致したしと話し置けり五時過ぎ島村君も来り會し新橋二見屋に會食原田君も來會東亜考古學會京都側委員として梅原、幹事として水野氏を依頼することに相談せり九時卅分發にて帰洛の途につく

一月十七日

朝七時五十分京都着、十一時黒田源次君來訪ワールマンハ調査につき相談、内地より四五千円の費用に對し田村氏を頭に京都より小野今西と今一人東京より斎藤氏が加はり外に満洲より黒田氏が何人かを引率参加のこと、し報告起草を中心に調査に従事することに相談せり

午後大学にゆく。田村氏起草の旅費旅費概要を余の名にて杉村氏に發送のこと、せり

本庄氏図書館長今日發令せりと文部より電報し来る

この日午後二時清野氏判決あり懲役二年三年間執行猶予とのことなりと

長寄主事を學生課長に任ずる辭令を渡す

石川教授來訪

一月十八日

小島君に梅原論文審査のこと、総長懇談會の内容等を話し書記官進退について余の考をのべ同氏の意見を聞く書記官としては余の■■■■信任するものを任用する外なかるべしとて余の考に賛成

吉田司書官杉山教授西田教授羽溪教授來訪

川端署長の名刺を持ちて大野部長外一名來訪

一月十九日

貞明會にて講演

夜紀元二千六百年奉祝準備會に出席(京都ホテル)

佐々木侯爵副會長として挨拶アリ

一月二十日

學友會財政調査ニツキ部長ノ集合ヲ求メ各部ノ負債狀況報告ヲ今年年末迄ニ提示ヲ求ム

一月二十一日

長寄君夫妻來訪(宅)

一月二十二日

高島重衛來訪(宅)

一月二十三日

浜部工學部教授葬式機械工學教室にて舉行につき參列弔辭を読む

小西博士大學に來訪

二月一日

朝八時東京着午後一時より桜井錠二博士葬儀に参列

武者小路宗峯寮総裁学士会館に車を寄せ右葬場青山祭場に同行帰途宮内所の同寮に寄り広幡子も来り合して東伏見伯家の件につき談合

夜勝と会館に夕食

二月二日

十一時過ぎ鈴木三郎助氏を味之素ビルノ事務所に訪ひ転じて大学に至り池内君と会談、午食中に平賀総長と逢ふ食後同総長に誘はれて総長室に至り経済学部事件につき総長より経過と意中を聞く

東洋文庫を訪ひ白鳥博士和田岩井氏等と語る、六時より星ヶ岡に三島君に招かれ国分鈴木氏を合し四人にて会食、九時四十分発にて帰西

二月三日

朝八時着京

午後大学に至り薬学科教授候補者 君を慶松氏が伴ひ来れるに会談

二月十日

皇軍今午前二時海南島に上陸ト報ぜらる

午後一時より人文科学研究所計画小委員会第一回を開く

二月十一日

紀元節拜賀式挙行訓話一席

梅原君来訪

二月十二日

園部野村来訪

二月十三日

左阿弥にて文学部事務室員招宴小島西田新旧部長と共にせるなり

二月十四日

池内家へ勝を代理として結納を納む電報にてこの旨通知池内家よりも返電あり収納の旨通じ来る勝よりも結納無事納むと電報し来る先は目出度次第なり小川夫人来訪明婚儀の祝品を贈らる

けふ寄宿舎卒業生予饒写真撮影

舎内を見る出来れば今少しく大規模の寄宿舎を作りたきものなり

田中昌太郎氏（本札幌検事正）来訪

二月十九日

池内夫人来訪結納返しを持参挨拶あり、終りて宿より舒子も来宅、午後道代を伴れて太田男を訪ふとて帰る

二月二十日

十八日長寄主事東京文部省山川氏よりの伝言を齎し帰り先日余より計画中の人文科学研究所を追加予算として要求したしと申し送りたるに對し本年は既に時期遅く間に合はぬ故来年度にまはす外なしとのことなりしが急に意見変り至急追加予算として出してくれよとの事なりよりて月曜日に緊急に同計画委員会を開くこと、し一時より開会その旨報告、小委員会にて得たる案を討議す

午後五時半より池内氏兩人を山端に招きて夕食浜田夫人をも招き道代明と余とにて六人にて会食



二月二十二日

石川経済部長新補挨拶の爲文部省に出頭山川局長及び大臣に逢ひ経済学部にて企図せる講座計画を話したる結果大臣乗気になり急に追加予算として日本東亜に関する十七講座を要求せよとのことなりしとて俄に経済学部にて起案すること、す

二月二十三日

一時より二時まで人文科学研究所小委員会を開きて成案を作り二時より評議会を開き先づ研究所案を附議小委員会案の通り承認ついで経済学部より臨時附議として提出せる東亜経済学科新設案を議す異論百出田辺氏主としてかゝる学科を別に設くることの不理を主張石川氏強くこの案を主張せるも反対気分去らず余は今議決することの非を思ひ重ねて二十七日月曜日二時より評議会を開きて協議それまでに互に慎重考慮すること、して散会

二月二十四日

山川局長に電話し経済講座増設及び研究所新設の追加予算につき文部省側の意見を質す両方とも大臣の意向により提出を求むとのことなり但し経済はその内二講座だけを要求することにしたしとのことなり

二月二十五日

文部有光課長より余帰宅後電話あり経済学部長より聞きたる計画の中二講座のみを要求する形にて大至急追加予算要求ありたしとのことなり研究所につきては如何といへるにこれは更ためて慎重に考慮したしとのことなり故余は強く其ノ非を主張し大学にては経済講座のことは新に聞きたることにて当方より発意の要求には非ず然もこれも求めのとおりに提出すべけれど第一の要求は研究所に在りこれも追加要求を得ざれば此の際承服し難しといひたるに然らば両案とも

提出されたしとのことよりてまた大学に至り趣意書其他を自から執筆し石川部長の作れる講座要求と共に携へて山本庶務課長を十一時 分の汽車にて上京せしむ

二月二十七日

山本課長一時頃帰り来る兎も角一応説明し来れりとのことなり

午後一時物理化学研究会理事会にて来年度の予算及び今年度の報告あり

二時より臨時評議会を開き前回の経済学部提出の追加予算請求案を議す前回以後経済学部にて考慮の結果学科新設を撤回し来年度に於て日本東亜に関する経済五講座新設案を提出すこゝに於て前回の議論は消え去り一同承認す  
今夜十時十五分東上石川部長入江會計課長同道

二月二十八日

午後〇時半より學術振興會理事會に出席理事長選挙は初め規則には選挙とあれど前例なければ推薦にしたしと財部氏より諮れるに對し長岡氏強く反対投票を求む投票の結果小野塚松岡財部各一票の外の十三票は長岡氏に集り同氏受諾ついで學術部長は理事中の役員相談の結果林春夫氏を推薦同氏受諾、予算は提案の通り可決

四時半より山川有光氏及び橋本會計課長と局長室にて会見橋本氏はもはや追加予算として提出の時期後れ大蔵省より特に締切りを通知し来れる後故提出六つかしといへるをとにかくも宥めて応ぜしめ六時頃より石黒次官を文相官邸に訪ひて更て説明、更に一同にて大臣に逢ひ委細は局長次官に話しあればとて大体を説明、予算追加要求は事務的には困難にて解決し難かるべければ大臣より大蔵大臣に交渉し政治的に解決して貰ひたしと話し大臣も領承して別る既に七時過ぎなり

石川入江氏と共に銀茶寮に夕食せんとして行きしも満員附近の小料理屋にて食

事す

更に八時過ぎ池内氏訪問挨拶す

三月一日

平賀総長を東大に訪ひ、東洋文庫に岩井氏を訪ひ明結婚のことを話す転じて白鳥博士を目黒に訪ふ博士には午後往訪のことを電話にて通じ置きたるなり既に洋服に着換へて待たるところにかけらるゝ前かと思ひしに余の来訪を待ち余が総長就任を祝する為会食に出かける積りとのこと余は既に先約あるをいひて辞退、明婚儀のことを披露して帰る池内君との関係上感情如何と案じたりしも左る様子は見えず先は安堵せり

三島君を会社を訪ひ孺山荘にて夕食更に同行して時野谷を訪ひ九時過ぎ東京駅に至り九時四十分の汽車にて帰る

三月二日

昨午後三時前枚方の陸軍倉庫爆発大騒ぎを演じたりとの事なりこの事昨夜出発の際入江君車中に訪ね来り京都よりの電話ありたりとて略ぼ聞きたりしも聞きしにまさる大騒ぎなりし由にて死傷も多く大学よりも真先きに救護班二班を出しけふ陸軍より答礼の挨拶ありたる由なり

戸田松本両教授余の帰学を待ちうけ医学部にて発案せる東亜民族生活科学研究所を追加予算として要求したしとのことにて予の見込を聞きたしのこと余は到底その実現の困難を説きて別る

三月三日

荒木北京満鉄調査所赴任の件一昨々日入江君より電報にて確定の旨通知し来れるを東京に移電して知りたりしが昨日更に手紙来り委細を知るを得たり荒城（アビ）を呼びてその手紙を渡す

三月九日

十一時より京都経済懇談会に出席、実業家を招じて趣旨を高木氏より話せるなり

評議会 会後大学制度調査委員会を開く、総長被選推薦範囲は法経文は現在の儘農医は拡張工理は幾分か拡張の方が有力の程度委員会にてはこの結果を資料として現制二よるか拡張するか意見を戦はしたる後挙手によりて拡大と現状維持との数を検したるに出席十八が九ト九トの半々に分れたりこれを更に熟考して（教授会に諮るものはその意向を数によりて報告を聞くこと、し）次回に決定することにして散会、協議員を今の通り設くるや否や設くるとするも前にするや後にするや等の問題は更に次に攷究すること、す

三月十日

午食後平野、野満、長谷川三氏と共に大阪に至り災害科学研究所を見る阪大工学部内に設けたる三米突半直径の風洞を見更に勝山通りの气象台内の研究設備を見て帰る着阪時より降雨

三月十一日

午後二時より薬学委員会、六時前までかゝる。

六時より小西氏を瓢亭に招じて晚餐、小西氏は岸公判ノ証人として弁護士より喚問請求八日法廷に出で、調べに応じたるなり気の毒之次第なり薬学委員会の席に在りたる戸田男を同伴したり

東上中の汐見教授より人文科学経済講座共都合よしとの電報あり

三月十二日

朝汐見氏より電話今帰りたりとて昨日の電報の意味を更に委細伝へらる終日家居答案調べなどす 日曜の有難さを痛感す

海南島事情（東洋協会調査部発行）と題するパンフレットを読ミ了る二三日携行し乍ら読む暇も無かりしなり

三月十三日

けふ文部省より電話の間に研究所と経済講座とが追加予算に計上せられたる旨通知ありたる由聞く

三月十四日

今夜石川経済部長東上、予算問題につきてのお礼をかねた挨拶の為なり

三月十七日

石川君帰来、文部省にて予算要求に頗る困難したるも次官はじめ大尽力にてやつと漕ぎつけたる旨き、たりとて大体の話を聞く

三月十八日

日仏文化協会主催のマルシャン送別会に出席

三月十九日

立命館卒業式に出席祝辞を読む中川総長ノ珍形告辞二時間に亘れるに悩まされる。

三月二十一日

朝同志社卒業式に招ぜられ祝辞を読む一昨日といひけふといひ妙な仕事をせねばならぬことになりたるものなり

午後一時より石原莞二少将（第21軍）の講演を聞く（楽友会館）予て聞きし通りの元気な人なり今の軍部の中にありて早く支那事変に結末をつけよとかくまで大びらに

叫ぶ意気は頼もしソ聯対策一日も忽にすべからずとの確信に基けばこそなりこれ程の具眼者がもし多ければけふの難局は招致せずに済みたるに相違なきを惜しき極ミなり

けさ東京より入洛したりといふ松田駒井の二君蒙古研究所案を齎して協力を求む楽友会館にて水野田村内田愛宕外山君等も同席して語り合ふ研究所といふも蒙古学編輯の強化に外ならず当方同人相当に仕事多ければ期待程の合力は出来難きも出来る限りは協力すべき旨語り置けり

三月二十五日

浜田君遺骨埋葬式午後二時より法然院にて営まるゝに列す

池内君東京より来り会す友情掬すべし

三月三十日

卒業式挙行

夜学士会に出席

四月一日

小川浜田両家婚儀三時頃より挙式六時前より披露宴、浜田君在世当時よりの媒酌の約を果す、浜田君あらばとてもかくまで簡素にゆかぬ儀式なれど此方却つてゆかし未亡人の満足そうな顔を見るにつけても浜田君あらばと今更に悲し池内君も東京より再び来る、けふ以後滞在して五日の式を挙ぐる筈なり

四月二日

小川新夫妻来訪昨日の礼の為なり

岸氏突然来る相変らず自己弁護をなす東伏見伯二此頃屢々呼ばれ家政の相談をうくる有様より家政の困難を話し余が過日伯に金子氏を推薦したることもよく

知り居りしこれが財政困難ノ為支給の途なかるべきことなども話し暗にかゝる推薦を断念せよと勧むるに似たり伯より西田氏を経て金子不採用の旨通じられる裏面を覗り得たりかくては何人を推すも無効なるを知る、恐らく岸自からその位置を希望せるならんか

#### 四月三日

朝太田君を訪ひ明後日の式の事を打合せ依頼す池内君も坐にあり  
昼池内君と楽友会館にて昼食、昼食後嵯峨に大谷氏を訪ひ東伏見伯の前後策につき過般来ノ経過を語り岸氏が伯の帷幄に参加する以上何人を伯の家政に当らしむるも功果<sup>効</sup>当分なかるべきを話して帰る大谷氏明日用事にて東上とのことにその旨武者小路氏等に伝言を頼む

帰途小川博士訪問更に明の新借宅に立寄り池内夫人の納められたる舒子の荷物を一見、女の子にかゝる面倒を見綾子の時の事など思ひ浮ぶ

#### 四月五日

午後二時半を少しく遅れて都ホテルにて明舒子結婚式を挙行太田君夫妻に媒酌の労を煩はす七時頃より披露宴、主客合せて五十九名、白鳥老博士五時半態々東京より来賀せられ宴に列しけれらる芳情謝するに辞なし当人等時間の都合にてホテルに一泊す

#### 来会出席芳名

狩野博士夫妻、白鳥博士、矢野博士夫妻、小川博士夫妻、内藤郁子、同乾吉、西田直二郎、原随園、那波、小牧、梅原、本庄、小島、石川、田村、貴志亀子、瀬戸、武田、志保田、松本、平井、水尾、小山、マルシャン夫妻、沢山夫妻、宮本、桑原夫妻、中村、鴛淵、池内夫妻、一、上田夫妻、吉村盈夫妻、保夫妻、雄、田中夫妻、余夫妻、卓、董、時之谷勝夫妻、太田夫妻、本人二人、浜田、藤井

#### 四月六日

明夫妻奈良ニ向ッテ出発  
白鳥博士宅に来訪、共ニ大学に至り楽友会館にて昼食、田村氏案内して檀原に向つて出発せらる  
池内君夫妻来訪

#### 四月十日

朝九時四十分鷗にて東上、沼津に車を変へ四時関南着畑毛温泉栄屋に一泊明夫妻此の宿に在るに会す  
温泉は温度低けれど場所は閑寂なり

#### 四月十一日

朝十時半の汽車にて東京に向ふ一時着、五時文部省に至り山川局長菊池長官岩松課長等と会談、更に山川氏と目黒驪山荘に夕食す

#### 四月十二日

朝三島君来訪、午少し前水野内田愛宕君等来訪、正午頃東京会館に至り善隣協会計画の蒙古研究所創設会議に列す、下相談は円滑に出来居るものと思ひしに充分ならず席上協会の調査部員より新研究所案に対して少からず不平の気分あるを看取す然もこゝまで運びたること故兎も角白鳥博士を所長に池内氏を常任評議員に外に和田氏及び余が顧問に加はることに一応の相談をまとも池内氏は熟慮して返事すとて直には引受けずして解散五時よりの学士院例会に出席、七時より銀茶寮にて三島君に招かれ池内氏と共に出席夕食す

#### 四月十三日

朝より文部省に至り大臣に逢ひ昼を勝と共に例の鰻屋にてすます午後更に文部



省にて会計課長次官、山川氏等に逢ひ転じて外務省にて宮崎米内山、市川、三谷氏等と会談一旦学士会二歸りて夕食、更に池内氏宅を訪問

#### 四月十四日

富山房にて島内伊藤氏と逢ひ、東亜研究所にて唐沢氏と会談、東洋文庫に至りて岩井氏に逢ひ省線にて白鳥博士邸を訪ひ謝礼を述べ老博士不在、四時より国際文化理事會に出席ノ途三島君を會社に訪ふ、国際文化には初めての出席なり善隣協會理事大島氏より面會を求められ池内君と共に東京會館にて夕食し乍ら語る昨日池内君宅にて編輯に當る筈なりし東京松田江上、京都の水野田村以下ノ諸君に逢ひしに到底一昨日の儘にては纏まらぬ姿となりし故大島氏には今日迄の發展を一応打切り白紙狀態に復つて再挙すべきを余の意見として答ふ池内氏も同意見なり 九時四十分發にて出發歸西

#### 四月十五日

朝八時京都着

幸子十日に須磨を引上げて歸宅し居れり綾子は昨十四日卓に送られて東京に歸りたり

#### 四月十六日

訪日北支經濟調查團の一行を島津製作所が迎へて正午北白川の同社長邸に園遊會を開けるに出席夜は八新に日滿文化京都分会にて一行中の（実業部長）王蔭泰、鄒泉蓀團長、馬登洲、喻熙、傑鈕秘書、峯旗囑託等を迎へ岡部子爵、松本文博士、余と伊津野氏等出席して談話夕食す

#### 四月十七日

けふの新聞に内務拓務等の官吏入替に當り文部省の菊池山川両氏が辞め藤野普

通局長が地方官に転出確定を報ず十一日には山川氏はなほその話を受け居らざりしは確なるが然も次官との折合の悪しきをこぼしもし地方転出となればやめると語り居りしが十四日一寸逢ひたる時には既に話は口を切り居りしか態度調子の落つかぬ所ありしを氣附きたり菊池といひ山川といひ文教の府にありても重要なものをかくて退かしめ代ふるに地方官を以てす明らかに石黒人事の大失敗なり

#### 四月十八日

山川菊池氏等のこと確定發表せらる綿貫の顔が眼前に彷彿せらる西田幾博士総長室に來訪かゝる有様では参与を辞めることにしたくその手續を書記官に聞きに來れりとのこと書記官はけさ東上したるて留守なり、余は辞めるには更に時期の一層適切な時を選はれたしと説き賛成して歸らる西田氏ハ曾て大臣に文政の府には殊に教学局の如きには單なる官吏ならずして教学の適任者を据えざる可らざるをいひ菊池氏等の如きまづ適任者を動かさぬことにする要を説きたることありて大臣も共鳴したるに此の有様にては逆も駄目なりと嘆ず

#### 五月六日

午前九時より宣誓式

午後二時一分二条駅發にて峯山に向ふ四時半橋立駅にて長兄と松原君迎へられて下車玄妙庵にて夕食保兄七時半來り會す十時卅五分發にて峯山に至り長兄宅に泊す

#### 五月九日

人文科学資料調查會に本年度予算二万円請求ノコト通知

杉村氏より送附ノ慶州調査旅費住友為替二千元を昨日歸宅して領収本日同為替



書を田村君に交付す

五月十八日

評議会

会後部長会議ヲ開キ本務以外ノ嘱託業務ニツキ之ヲ応諾スル場合ノ時間ノ標準  
―又タ承認ニツキ各学部ニテ教授会ニハカリ講義時間ニハ標準、他ノ嘱託ニハ  
教授会ノ承認ヲ経ル等適當ノ方法ヲ相談協議シテ其ノ結果ヲ来月廿二日ノ評議  
会後ニ開クベキ部長会議ニ報告セラレタキコトヲ求メ

更ニ来年ヨリ名分上如何ハシキ入学試験手当ヲ廃止シタク入試ニ從フ迷惑ハ各  
員ニテ引受ケル立場ニテ交互ニ全教官ガ従事スルコトニシタシ特種事情ニテ特  
定ノ人ニ限ラザル可ラザル場合ハ特ニ考慮スベシ而シテ一方ニ於テ全教官ノ年  
末手当ヲ増加シコノ名ニ於テ入試ノ面倒ニモ報イタシ特種事情アル入試関係者  
ニハ此ノ手当ニ於テ差等ヲ考慮シタシト述べ諒解ヲ得タリ

五月二十日

午後燕にて東上

五月二十一日

時之谷を訪ひ転じて中村不折氏を訪ふ夜池内氏を訪ふ

五月二十二日

陸軍現役将校学校配属二十年記念御親閲式に参列聖上陛下出御四十余分に亘り  
て御親閲台上に立たせられ全国学生ノ分列行進を見そなはせらるる学生の感激緊  
張その極に達せり式後学生群を二隊に分ち一は靖国神社に一は明治神宮に参拝  
して開散す

夜時之谷兩人と銀茶寮に夕食

五月二十三日

朝鈴木氏を訪ひ令嬢結婚を祝賀す

帰途外務省に行き第二課長市河氏箕田事務官等に会し伊国交換学生として決定  
の角田氏のことにつきて聴取、法学部より推薦の同学生が選に洩れたる事情を  
聞く同氏は第三位となりたる由にて予定計画ノ増員が実現の際にはその第一位  
たるべき筈なりとのことなり島村氏に偶然出会同氏と昼食、それより国際文化  
を訪ふ

夕景斎藤氏来訪同氏に招かれて鮎飯を食ひ九時半列車にて帰西

五月二十七日

国際文化振興会京都地方会にて柳宗悦氏講演此日振興会の常任理事永井氏及び  
黒田伯入洛

六月十二日

今朝富士にて東上

五時より学士院例会に出席

夜三島君宅を訪ふ

六月十三日

東亜研究所を訪ひ林桂理事と会談

東洋文庫にて白鳥博士和田博士と会し前回一旦白紙状態になりたる善隣協会蒙  
古研究所の復興につきて聞く目下協会ノ大島理事張家口出張中故帰来細かに聴  
取定免て更に依頼すべしとのことなり白鳥博士に招かれ文庫諸員と共に鉢ノ木  
に夕食

夜池内君を訪ふ

六月十四日

十時より文部省にて開催ノ法隆寺壁画保存調査会に出席午後二時半了ル来月十四日委員一同法隆寺に至りて先づ実情ヲ見同寺にて会議ノコト、定ム  
三時発列車にて帰洛十時四十五分京ト着

六月二十一日

皇軍今朝汕頭に上陸

六月二十二日

吉村敏満洲に奉職のこと、なりて明日出發する由き、昨夕訪問したるも家内皆不在、今朝重ねて訪問す

人文科学研究所準備委員会今日にて研究題目ノ編成ヲ了リ研究所員ノ人選ニ入ル小島委員長所長ノ任ニ就クコトヲ承諾ノ旨委員会ニ自ラ報告アリ

七月六日

総長会議於文相官邸

正午賜餐於豊明殿賜茶菓於千草間

夜文相招宴

【別紙一枚目】

(八月十日迄ニ予算ヲ嚴ニ出サバル可ラズ)

一現下時局 現ハレルベキモノガスベテ現レタリ

軍事同盟、汪兆銘政権樹立問題 経済関係 物資要求関係ハ人ノ問題ニ及ビ

朝鮮人ノ使用ニ迄モ及ベリ其ノ質ノ問題

天津租界問題、(概シテ樂觀ヲ許サズ) ハルハ国境状況

之ガ解決ハ自主独往ノ力ヲ向上培養スル外ニナシ思想問題道德問題人物養成

問題ノ要項ハ依存心ヲ止メザル可ラズ

ニ大学振興策ノ昨年来ノ進歩ニツキ世間ノ信頼高マルヲ見タルニツケテハ関係者ニ感謝ス昨年来希望ノ要点ヲノブレバ教育ノ基ガ教育勅語ニアルハイフヲ待タズ大学ハ大学令ニ拠ルハイフ迄モナシ十九年ノ聖諭記ノ内容古精神科学ニツキテ聖勅ニヨリテ御希望アリ之ヲ実現セザル可ラズト注文セリコレガ為ニ結論トシテ次ノ要領ノ如キコトヲイヘリ「今日我国ハ文化ノ發達ニ於テヤ、モスレバ外国追随ヲヤメ我が国イ發揮シ東西文化ノ融合ニヨリ世界的文化ノ教養アルモノノ養成ヲ望ムト希望セリコノ点ニツキテ努力ハ感謝ス、ソノ進歩モ認ムベク感謝、サレド尚ホ進マザル可ラズ」

【別紙二枚目】

過般此ノ思想勢ニ対シテカランヲ計ルモノアリ之ニ対シテ満支<sup>(國)</sup>ヨリ大規慕<sup>(國)</sup>ノ破壊ヲ企ツルモノアリ外国大学留學生ガ主工城破壊要人暗殺ヲ始メ諸種戦慄スベキ計画アリテ三月以来檢挙セリ南京領事館ニテノ毒殺セラレタルコトアリ唯物研究会ノ殘党ガ先日檢挙セラレタリ国際的攪乱計画ナリ如此マダカ、ルコトノアルハ憂慮ニ堪エズ希クハ

大学ノ學生ガ他ノ學生ヲ率キテ進ムヤウノ勢ヲ希望ス

文理高師ノ學生ノ青少年勅語ニ対スル感激ヲ聞ケルニ対スル心理研究ノ答ニ

感激ナシトモノアリ

コレガ指導ハ教官ヨリノ徳化ニ在リ、工夫ヲ望ム、教官ニ熱意アルヲ望ム

三大学ノ任務 大学令第一条ノ「兼テ人格ヲ陶冶シ」ノ兼テガマタ問題トナル

文句ハトモカク人格養成ガ從ナルニハ非ズ。自然科学方面ニ人文ノ科学ノ考ガ及ビ綜合大学ノ実ヲ挙ゲテ聖諭記ニ論サルル如キ結果ヲ得タシ

【別紙三枚目】

視察ノ結果設備ノ不備ノモノ等モ感じタリ之ニツキテハ考フベシ教授助教ノ選任ヲ嚴ニシ教官ヲ通ジテ學生ニ望ムコトニシタシ

大陸方面ニ多数ノ人ヲ要ス大陸ノミナラズ大洋ニ向ッテモ然リ働ク部面広ク

ナレリ、探検調査等實際問題ニ從フヲ要ス從ツテ学生モカ、ル方面ニ向フ様ニ導クヲ望ム、海洋方面ニ対スル教育方面ノ人大学生等ヲ船ニ乗セテ出セルモ此ノ為ナリ、大陸方面ニ学生報国隊ヲ出セルモ此ノ為ナリ（本年ハ準備不充分ナリキ）此等ニツキテハ当方ヨリ考案シテ派遣シタモノナリ

国力進展ノ動向ト大学ノ関心 事變ノ目的ガ漸次外レテ行ク傾アリ此間ニ思想物の共ニ我が国固有ノモノガ失ハレツ、アルヲ見ル、之ニツキテハ大学側より保存ヲ守張セラレタシ例ハバ金製美術品ノ保存ノ如シ古墳発見ノ金環ノ如シ金以外ニテモ此ノ際スベテ犠牲ニ供スベシト主張ニツレ破壊ガ伴フ高砂方面工場拡充ニ伴フ名勝地ノ破壊ノ如シ時變後無味乾燥ノ焦土ガ残ルコトハ心外ナリ

### 【別紙四（六枚目）】

精動、力強ク行ク方針ニナリ居レリ大学ニテハ之ヲ待タズ之ニ導カレズシテ別ニ考ヘテ却ツテ導ク方面ニ進マレタク如何ナル簡素趣旨ニナリテモ氣品礼節秩序ノ保持ニ注意ヲ願フ殊ニ粗野野鄙放漫惡シキヲ追フニミ進ミテユクヲ戒メザル可ラズ恭儉ヲ失ヒ粗放ニ流ル、ヲ謹マザル可ラズ

東大 四百名教官中一九三ガ学外公共事業ニ委嘱事柄軍部多シ二百五件

事務局関係出張一八九名 大学ノ時局関係ノ力ヲ添フ多キヲ知ルベシコ  
レノ得失

将来計画、重ナルモノ、一科学振興会企画院等ニテ技術者要求多キニ鑑ミ数年来力ヲ尽シツ、アリ今来年ノ工学部臨時増員ヲソノ次ノ年ヨリハ一四〇人ノ増員トシテ定式化ス考ナリ、二医専関係トシテハ今来年ハ之ヲ入レサ来年ヨリハ医学部ヲ拡張シ今ノ一四〇ヲ二〇〇トシタシ、三法文経、農ノ一部ニテ東洋文化研究所ノ設立自然科学モドレヨリモ参加シ得ルモ主体ハ法経文、支那ニ止マラズ要アル時ハアジア全部南洋ニモ及ブ、四理学部貧弱、五全般ニ學術の二大陸進出ガ必要ナリ此方面ニツキテモ興亜院トモ交渉シ考ヘツ、アリ、六教官ガ身ヲ以テ学生ヲ率キルコ

トニツキテハ意ヲ用キツ、アリ

東北 日本文化研究所 研究ト共ニ自然科学方面ノ人ニ講義訓化スルモノ

貧鉞精鍊研究所

温泉研究所

教授助教教授ノ数ノ関係ヨリ助教教授ヲ教授ト同様一人ニシタシ

九州 人文科学綜合研究所 特ニ經濟ヲ中心トシ政治法律農業等ヲ總括シテノ研究

九州文化ノ文掘資料ノ拾集研究

イ学部植民衛生学 工学部学生増員

流体工学研究所 水産学科 講堂 体育館等運動設備

北海道 昭和五年以来ノ夏期労働愈々進ミ三百人に達す、集団労働に対する出席率65/100 軍事教練好成绩、応召学生三十名、杭州上海中支防疫班、診療班派遣

研究 雪ト氣象ノ研究、長短波線ノ応用、石炭液化（昨年燃料工学講座設置）、薄荷増産（現在北海道世界ノ83/100）、阿麻ノ連作研究、熊篠バ

ルプ工業化、養蚕ヲ全国ニ施キ興亜院三十万円、全国女学生ニ頼ミ真綿

チョッキヲ作り現地ニ発送、大河南ニ短期架橋（小野教授）、癌ノ早期診断

将来

日本文化研究所ノ為文学部創設、二農林部ノ設置、三低温研究室ノ

拡張、海洋学氣象学研究ニ必要、四農学部水産学科設置、工学部ノ化学施設、四、閑地農業ノ研究施設、医学部学生増募、理学部予科設置

名古屋 思想問題等ヲ如何ナル文化的研究設備ニヨリテセントスルカ考ヘ居レリ

大阪 将来航空医学、理学原子研究、纖維研究講座、航空、精密機械ノ拡大、

微生物研究所、産業科学研究所七千坪地面 官制發布次第始メル筈 温

泉研究所（白浜）土地ハ寄附ズミ、建築一時的ノモノ出来居レリ

## 【別紙七（二）枚目】

企画部長

思想犯罪、人民戦線運動ハ弱クナリ居リシガ最近ソノ文化運動ガ相当盛シナリ居レリ元ハ唯物論研究会ガ機関雑誌ヲ持チ居リシガ之ガ更ニ「学芸」トイフ雑誌ヲ出セリ昨年十一月廿九日一斉検挙一般関係者五十何名学生<sup>138</sup>教職員8戸坂潤沼田秀サト等ガ東京ノ大学其他ニ働キカケ学生層間ニ会員獲得ニ努力セリ各学校ノ合法団体中ニ入り込メルモノアリ或ハ非合法研究団体ニモ入り込ミメンバー獲得ニカム昨年八月代表者等ガ依リテ各学校ノ連絡会議ヲ計リ旧学聯ノ如キ組織ニ更ヘテ拡大ニ力メタリ、十二月十日一月十八日六月二十八日等数回ニ検挙セラル

エスペラント、仮名文字会、羅馬字会

国語ノ普及ヲ利用シテ勢力ノ発展ニ力メツ、アリ、最近更ニ党員獲得ヲ急トスル旨ヲ説キ居レリ 東大<sup>註</sup>10、九大4、東商19、早21、広26、東農大、明1、法1、専修大1、東外21、松高6、東高2、教職員東大1、東府立中1、福岡中1、文化学院教師一、小学校深川京橋一名宛

中国共産党東京支部、今年春中華国ヨリ派遣サレ東京警察講習所ニ留学生王シクシタリシモノ検挙サレテ発覚、臨時政府ニ入り国民党政府ニソノ内情ヲ報告シ居レリ、之ガ組織ヲ命ゼラレテ東京ニ来リ満洲国留学生会館ニ支部ヲ作り執行委員会ヲ作り日本ノ加工場ヲ破壊重要工場地帯ノ火災、急進的主義論者■要人ノ殺害、瓦斯其他重要機関ノ破壊、共産党ニ資金与ヘルコト、満洲治安攪乱ノ為流言ヒ語、党員二十一名、明大12、日大3、法大1、専修一、早大1、駒沢卒一、明大卒一 皆満洲国出身ノ留学生

灯台社検 六月廿一日未明 検挙91 明石<sup>順</sup>ジュン<sup>三</sup>蔵経営、機関誌黄金時代ソノ後慰サメト改題 信者トシテ164名獲得 昭和八年頃ヨリ雑誌内容ヨリ注意セラレルコト、ナレリ、内容ハ日本初メカ、ル国家ハサタンノ作レルモノ故ニ之ヲ破壊スル要アリトナスモノ

更ニ検挙継続スラ秘密ノモノナリ

余項目

兵役法改正ニ伴フ就学ニ関スル件

期間短縮（明年四月以降ノ入学者が適用ヲウク）

卒業期繰上等ニヨリテ便宜ヲ計ラレンコトヲ望ム

東大意見、本年入学者ガ卒業時ニハ非常ニ多数コレニカ、ルモノアリ（満二十五以上）

二千二百ニ対スル七百九人ガ年令超<sup>通</sup>加トナル此前ノ総長会議ノ時一割位トノ話ナリシモ之ニ反シテ全学ニテ32/100ニ当ルモノガ卒業前召集サル

来年以後入学者ガ如何ナルベキカ多分同ジカルベシ僅ノ人数ナラバ特別取扱ヲシタク思フモカ、ル多数トナレバ其ノ見込ナシ

大学ノ学年ハ一月ニ初メルトノ必要モ生ジ来ルニ非ズヤ、モシ入学時期ヲ更ヘルコトニデモ成ルベキカ從ツテ高等学校中等ノ入学時期ニモ及ボサブル可ラズヤト思フ、研究ヲ乞フ

各大学ノ事情ニ応ジテ各大学ガ進ムコトニテヨカラン之ニ就イテ制文化<sup>感</sup>シ施設ヲ要スルモノアラバ間キ効果ヲ挙グルコトヲ期ス

大学ノ振興ニ関シテハ屢々希望シ幸ニ実現シツ、アルハ喜ブ今後ニ於テモ大学ニ対スル方法ハ今意見モアリシ通り大学ガ教養アル学生ヲ以テ成リ教官ハ自信ヲ有スルコトナレバ大学ガ自カラ立チテ行クヤウニ希望スル故考通りニ進メテホシ

多数ノ卒業生ハ直ニ社会人トナリ仕事ヲスルモノ故今ノ日本ノ位置ガ非常ニ大ナル望ヲカケ居ルモノ故大ナル鍛練ヲ為シ置カサル可ラズ多少学問方面ニ於テ時間ガ少クナルモ此際鍛練ヲ充分ニシテホシ学風ヲ左様ニ導キテホシ之ニツキテハ学問ガ落チル恐れアリ之ヲ落サバ<sup>ル</sup>ト共ニ当面ノ国家ガ要求スル処ニ副ハレタシ

学校ニ学風ノ存スルハ尤モ必要ナリ学生ニホコリヲ持ッテホシ大学ノ自覚ニ待



チ当局トシテハ実ハ控エテ居ル所モアルナリ

思想問題ニツイテ突キ進メバ問題ハ直ニ憲法ニ入ル憲法ノ基礎ガ何レニアルカハ人文科学ヲ問ハズ通ジ置クベキナリ如何ニシテ極メテ簡易ニ了得サセ置クベキカヲ研究シテホシ

学生生活上ノ問題下宿ノ主人ニ警告ヲ発シテモヨク寄宿舎モヨシ

学生ノ修学態度（高文目的ノ如キニテハ低級ナリ）学問ニ対スル見識 就職ト

離シテ進ムヲ望ム

徳操ノ問題教官先頭ニ立チテホシ

綜合大学ノ実ノ挙ルヤウ希望ス（施設ハ出来ルダケ努力ス）

図書其他ノ整備ニツキテハ学校ノ苦心ヲ諒トス出来ルダケ力ヲ添フベシ

研究ニ要スル材料当用等ノ現下ノ事情上困レルコトモ察ス

細カキ目録説明等ヲ添エテ出サルレバ出来ルダケ努力ス

学生ノ中、中核人物ノ見込立ツモノアレバ注意シテ学問ニ従事セシメ万一ノ場合中絶スルコトナキヤウ後來ノ養成ヲ留意シテホシ（国ノ将来ハカ、ルコトナシト思ヘド粗成<sup>要</sup>乱造ノ間ニ合セノモノノミニテハ困ルナリ但シ之モ要セラル、ナリ）

精神総動員、国ノ情態ヨリ是非ヤラネバナラスコトニナリ居ル故学生層ヲシテ之ニ応ゼシムルヤウ導カレタシ精動ニヨリ学生ノ断髮禁酒等モ行ハレタシ 禁煙ハナキモ準ズベキナリ

次官（以下欠）

〔註「東大」より線を引き、欄外に「5松本、5東高四月ヨリ入レルモノナリ東大総長説明 外ニ3名昨年入レルモノ 目下ハ平靜寧口右翼ノ極端ナルモノヲ注意セントスルナリ」との記述あり〕

八月八日

けふ富士にて東上道代董同伴

四時半文部省ニ至り関口氏と会談予算につきて談合す。岩松氏と会見、中村氏の支那赴任不調に終った事件につきて話合ふ  
第一ホテルに泊

八月九日

朝文部省に至り岩松氏及び石黒次官に会し次官にはまた予算要求の説明を為す余がこの為にけふ迄文部省を訪はざりし理由を説明すまた学徒隊につきて質問す会計課長に逢はんとしたれど不在、京大係りの 氏に逢ひ人文科学研究所にて計画の百科辞典の編纂予算につきて説明しおけり  
二時半山中湖に向ふ道代董同伴五時過ぎ到着

八月十日

花雲莊滞在、五時過ぎ三島君来る

八月十一日

三島君に案内せられて五湖廻りす少々疲労を覚ゆ

八月十二日

花雲莊を出で十一時東京着直ちに文部省を訪ひ荒木大臣と会談、先づ新聞に見ゆる学徒隊のことにつきて質問、大臣なほ委しく知らず今七人の省員を外に派し案の作成中なりといふ、大臣より過般高島大佐が大臣を訪ひたる時の話に今の大学の国家的に役に立たざるを論じかゝる大学は潰すべしとし京大総長も同意見なりと頻りに余のことを大臣に話せりとて暗に注意すべきを諷す高島氏の真意のある所解し難きがもし果して然らば驚き入りたることなり。四時より東方文化協議会渡支員打合会に出席

平賀氏と列席にて学徒隊のことにつきて話合ふ



夜九時四十分の汽車にて帰る

八月十四日

道代今夜帰来

八月十五日

董今夜帰来

八月十六日

新村猛君執行猶予にて帰宅の由昨夜新村博士より電話ありたるにつき今夜挨拶の為訪問。二年に近き間の一家の煩悶今更に同情に不堪

八月二十二日

独逸ソ聯ト攻守同盟ヲ結ブノ報世界ヲ驚カス

八月二十三日

平沼内閣外交責任ヲ負ヒテ辞任ノ様子ナルコト新聞ノ記事ニテ想像セラル

八月二十四日

明日出発北京ニテ開催ノ文化協議会ニ出席ノ積リナリシモ天津水害ノ為ニ交通不便公務ニ在ルモノトシテ帰路ノ不自由モ考ヘラレ且ツ少々気分勝レズ遂に見合セノ決心ヲナシ東京ノ協議会事務所ニ電報ス

吉田課長ヲ招キ明日神戸迄行キ平賀総長ニ船上ニテ逢ヒテ学徒隊ニ関スル其ノ後ノ本省ノ意向如何ヲ聞カセルコト、ス

欧洲風雲漸く急にして英独ノ交渉危機に入ルト報ゼラル

八月二十五日

吉田君神戸ニ至リシニ平賀総長モ亦出張ヲ見合セ片山氏ニ托シテ余ニ書面ヲ送りシモ余が見合セタル由ヲ片山氏東京ニテ聞キテソノ書ヲ平賀氏ニ返シタリトノコトナリシ由

八月二十八日

朝平沼内閣辞表捧呈 夜八時廿分阿部信行大将宮中ニ召サルトラジオ報ズ後継内閣組織ノ大命降下セルナリ

八月三十日

阿部内閣成立

九月一日

独逸が英に発したる対波蘭十六ヶ条の要求は波の容るゝ所とならず波は総動員令を発し北部シレジア地方に於て既に衝突を演じ今朝独飛行機はワルソー以下の波の諸都を襲ひヒットラーハ波を討つべき命令を軍に下したりと議会ニ報告せる旨無電に報ず英の態度はまだ報ぜられねど遂に大乱避け難かるべきか攻守同盟の締結批准を終りソ聯の使伯林に至ると報ぜるが此使は進みて軍事同盟を結び波羅分割を両国の間に結ぶ為ならんと新紙報ず

九月三日

今夜九時四十分のラヂオは公報には非るも本日午前十一時 分英は独逸に対し戦争状態に入りたることを通告したる旨チェムバレン首相がラヂオにて放送しけふ迄の忍耐に拘はらずかゝる通告を發せざる可らざるに至りし残念さを推察ありたしと述べたりといふ昨日独に対し英より独がポーランド侵略地より引上げた上独波の和を議すべしと通告したるに對する独ノ回答がこれに應ぜざ

るものなりしなるべし必ず英は戦を開くには至らざるべしと思ひたるに事件の発展は道理ある予想を裏切り遂にこゝまで来れるなり

九月九日

独軍早くもワルソーに突入すと報ぜらる

九月十日

新文部大臣河原田稼吉氏桃山山陵参拝の後午前九時十五分来学五十分辞去

九月十一日

今夜東上

九月十二日

文部省にゆき関口氏と話す

夕景東大理学部長寺沢寛一氏来訪平賀総長所勞の故関口氏と打合せ総長に代る意味（代理には非ず）にて来訪せるなりついで関口氏も来訪鼎坐学徒隊のことにつきて相談両氏の意向は余に明後日の審議会にこれにつきて質問を求むるにあるが如し余は審議会にては平賀氏が仮令健在にて出席するも之に当るは不可余の当るも不可その故は両者共に既に前内閣の大臣及び次官に強くその不穩当を主張しあり今の大臣にも兩人よりまた次官には明日余より大学側に相談なしにこれを実施することの不可を強張する筈なればかく大学側として当局に已に意見を述べ居るものが更に審議会にて質問することは宜しからず別の人が審議会の立場より之を試みる方が有効なるべきをいひ遂に穂積氏に依頼すること、し穂積氏が八時半頃に帰宅せりとの通知ありしかば寺沢氏よりその旨電話にて一応依頼、更に明日打合せこと、して辞去

九月十三日

藤寄氏来訪

午后一時大村次官に文部省にて逢ひ学徒隊問題につきて意向を聞きたるに前内閣当時の考の如く軽々に実施し得べきに非ず熟考を要すと考ふる旨答あり余はこの事の甚だ重大事項なることを説き少くとも大学に關しては大学に相談なしに之を行はんとすれば大なる摩擦を生ずるに至るべきを説き慎重なる態度を繰返し希望し置けり、鐘江氏につきて大村氏の考を聞く、織田博士より聞きし通り自分よりも推薦したけれど今の自分の位置上その運には致し難けれど幸問はれたればとて極力同氏を推奨せり

夜綿貫氏に招かれせやまに会食山川氏同席

九月十四日

朝鐘江氏来訪昨大村氏を通じて今朝面会を求め置きたるなり

十時首相官邸の教育審議会に出席正午田所特別委員長の説明終るや穂積氏立ちて学徒隊につきて質問、次官（幹事長）より此のこと尚ほ成案なしもし案を得るに至らば本会に諮るべしと答へたり

会議早くすみたれば代田に時野谷を訪ひ九時四十分の汽車にて出発

九月十五日

朝八時十分京都帰還

帰宅すれば一昨日来菊池悦子来宅して滞在せり十年振りの帰洛なりといふ

九月二十六日

昨日の府議選挙に峯山の兄当選の由新聞に見ゆ

九月三十日

正午今夏興安青年勤労報国隊二加はりて北支蒙疆満洲等に赴きたる学生の歓迎会を楽友会館に開けるに出席

夕景太田氏を訪ひ文子嬢のことにつき赤松氏に関し尋ねられたることを西田梅原君等につきて聞き合せ置きたればその結果を伝ふ同氏夫妻を誘ひ家族及び菊池悦子と共に桃園亭に会食

十月一日

一両日少々腹工合悪しけふは朝より静養午後に至りて大に気分好し  
松本君に依頼されたる色紙に揮毫

十月三日

一時卅六分燕にて東上九時東京着三島君に迎へられ同家に泊

十月四日

朝文部省に至り法隆寺壁画保存委員会第三部会に出席午後二時より教育審議会に出席

二日附けにて審議会特別委員会委員の依頼辞令をうく大学制度の審議に入れるなり

夜三島君に招かれ浜作に食事

九時四十分出発帰西

十月五日

帰宅後直ちに更衣龍谷大学開校三百年記念式に列す

午後評議会

十月八日

十時より京大関係の戦歿者慰霊祭を執行師団聯隊区海軍よりそれぞれ代表者参列

午后人文科学研究所兼任所員の会合に列席

夕景峯山吉村来訪宿泊

十一月八日

朝教学局参与会議

午後教育審議会に出席

夜東亜文化協議会副会長の招待会（星ヶ岡）

十一月九日

四時文部省にて勝と会し代田に至る

十一月十日

教育審議会に出席

四時半より文相招待総長懇談会に列す。審議会特別委員会を今日にて了り次回より整理委員会に入る余は整理委員会委員には入らずこれにて暫く此の会よりは手が抜けたり

十一月十一日

朝東亜研究所二原理事を訪ふ

午時学生会招待の昼餐会

三時発にて帰る

十一月十五日

この日我が軍北海方面欽州湾に入り上陸と十六日号外あり

十一月十七日

朝七時半富士にて上京道代同伴

十一月十八日

朝文部省に至り専門局長会計課長春山氏等二逢ふ

二時藤寄山本両家の結婚式の媒酌の役を東京会館の式場にて勤め六時頃より披露宴に連り挨拶

十一月十九日

朝九時燕にて帰る

十一月二十一日

栄原氏大学に来訪夜瓢亭に招きて夕食、列席者栄原水野杉村陳松齡鐘江氏と余と

十一月二十三日

日満文化協会総会を京都ホテルニ開き閉会後鶴屋にて宴会列席者栄原、杉村、水野、狩野、矢野、新村、池内、岡部、伊津野氏と余と

十一月二十四日

夜道代帰る

十一時東福寺に至り栄原氏供養修補の古書を見る

十一月二十五日

昨夜来木枯し吹き荒び俄に寒氣襲来

外務文化事業部鮫島囑託外一名来学、修文会の敷地を見分す

十一月二十六日

武田鋭太郎君来訪一乗寺の菜園を見山端に夕食して別る

寒さ強し僅かながら初雪降りとのこと

十一月二十七日

夜十時二十分工業化学教室失火の電話あり、幸に実験台の一部が焦げたる程度にて鎮火したりとの報ついで至る

十一月二十八日

滝精一博士来訪両東方文化研究所理事評議員等と外務文化事業部幹部との懇談会を来月三、四、五日の間に開くことにしたとの話あり、食事後小島君にその旨伝へ置けり

学旗学歌審査を午後開会

新村博士と共に帰る

十一月二十九日

文部省本田学芸課長来訪

黒田氏外務省ニ至り伊太利講座ノコトヲ話シ前二年額一万円ノ寄附ニテ一講座経費ニ余裕ヲ生ズト述ベタルヲ訂正その結果近日簗輪氏が来訪スルコトニナリタリト報ズ黒田氏ニ新村博士トヨク談合スベキナリト告グ午後新村博士来訪黒田氏トモ話合ヒタリトテ如何ナル順序ニテ今後話ヲ進ムベキカニツキ相談アリ簗輪氏ノ来学マデニ一応文学部長ノ意向ヲ新村氏ヨリ聞キ置キ貰ヒタシト云ヒ

置ケリ

朝日毎日同盟日出記者ニ京大在郷軍人分会設置ノ経過ニツキテ話ス本日ノ中外ニ載セタル妄誕ノ記事ヲ訂ス意味ナリ

岩松五郎氏より来翰福原氏之件ニツキ関口秘書課長ノ諒解ニ行違アルヲ知り関口氏ニ電話シタルモ不在、依テ電報ニテソノ旨報ジ速達郵便ニテ委細報知ス岩松氏ニモ速達ニテソノ旨通ジオケリ

十二月三日

今夜東上

十二月四日

文部省ニゆき大村次官永井課長ニ逢ひ正午霞山会館に至り陽明文庫評議員会に出席また文部省に至り関口専門局長ニ逢ひ留学生ノ件ヲ確ムマダ決定せずとのこと岩松氏ニ逢ひ福原氏ニつきての行違を弁ずけさ関口秘書課長よりこれにつき氏の誤解の為間違を生じたりとて陳謝ありたり

四時より東亜文化協議会に出席

大倉営繕課長今夜東上来訪

前者には教授職員賞与用設定の困難なる事情と図書館復旧費ノ五万円査定ニ不服ヲ強調ス

十二月五日

朝文部省にて大倉氏と打合せ、五万の図書館来年度建築と査定を文部予算掛長の手許にて十万にする故それにて辛棒せよとのことなりと大倉氏伝ふ余は更に入江氏をして増求せしむる積りにてたゞ十万円だけは確保し其他は帰学の上余と協議すると返事させ置けり。春山属に化学研究所の官制發布を急ぎくるやう話す、更に関口専門局長に教授減員の件の無理なるを談じおけり、転じて外ム

省に至り市川簀輪氏より原田積善会より寄附の意志ありといふ伊太利講座設置につき黒田氏より聴取の趣を確む、三谷部長後藤課長と寄宿舎の件を話し合ふ夜常盤屋の東西両研究所の文化事業部員招待会に列す九時半発にて帰京

十二月七日

評議会

校歌校旗懸賞募集せるものにつき制定委員会にて決定

十二月十一日

一時卅六分燕にて東上時野谷に泊る

十二月十二日

三島君を会社を訪ひ内藤博士の書翰二通を贈る東洋文庫評議員会に出席東大に平賀氏を訪ひ福原君のことを話し置く今朝電話にて関口秘書官と話し福原の後任は文部省にて推薦することに相談し置きたればその旨を平賀氏に通じたるに福原氏転任のことは異存なきも文部省と東大との間に人事上の遣り繰りにつきて繋連ありこれが福原氏の位置にも関し居れば文部省にて早く之を処置すればそれと同時に転任実現差支なく時期はその時のこと、諒解あり度旨返事あり余は文部省に福原氏の転任実現早く出来るやう運びくれと督促する旨話しおけり学士院に出席

十二月十三日

朝八時帰洛午後登学

六時より国際文化振興会京都地方委員会に出席本年秋季講演講師慰労及び来年計画相談の為なり

東京より青木主事来会



十二月十四日

病院和進会食堂今夜十一時十分頃発火焼失

十二月十五日

朝病院焼跡を見る

十二月十六日

本年度教練査閲、査閲官福栄少将八時半ヨリ終日ヲ費ス

十二月十九日

京都振興審議会（市長公舎）に出席国粹文化保存顕揚策の一として市に大博物館設置ノ要アルヲ稲畑氏主張ヲ賛シテ述べ文化振興策の一として学都としテ京都ノ適性ヲ述べ帝大トノ互助ヲ考フベキコトヲ述べ  
ケフ朝来薄雪降り寒氣強し

一九四〇（昭和一五）年

一月五日

菊池並河氏及び会計河田氏理学部吉村書記と共に先づ紀州瀬戸臨海実験所を訪ひついで大島に問題の農場候補地検分の為出発  
夕景白浜白良荘に投宿

一月六日

朝臨海実験所を見十一時白浜発江住にて連絡のバスに乗換へ一時間をゆられ通して串本に着こゝより汽車にて勝浦に至り腰ノ湯旅館に投宿、この宿は聞きしに勝るよき宿なり

一月七日

朝浜の温泉に一浴串本に引返し大島よりの迎への有志に案内せられて大島に渡る候補地の山林中を踏査石の如き折詰飯を山中に喫す三高魚の目ざし焼きは時にとりての一興なりき検分を了りて夕景串本に帰り一泊

一月十二日

並河氏ノ紹介により橋田齒科医に受診

一月十三日

橋田氏に受診

一月十四日

今夜十時二十分東上

今夕米内海軍大将に組閣ノ大命下ルト九時四十分ノラヂオ放送す

一月十五日

文部省にて関口専門局長と逢ひ奥山氏の件、新村秀一氏之件を話し伊太利講座ノ件ヲ永井氏に相談すべきことをも話す午時藤井君と勝を伴ひ新橋新富鮎飯屋に昼食、再び文部省に至り秘書課長に逢ひて福原氏之来任之件挨拶偶然田中経太郎氏と此室にて逢ふ夜分学士会にて再会を約して別る岩松氏にも福原氏の件につき挨拶

大村次官此度の政変にて辞任のこと、思ひ面会せんと思ひしも午前午后とも行違ひて逢へず、外務省に至り三谷氏及び市河箕輪氏後藤氏等と逢ひ一課関係にては寄宿舎建設を依頼して図面と説明書を渡し二課関係にては伊太利講座が文学部にて応諾の見込を話し明夕までに積善会より年二一万五千寄附の意志を表せる書面を自分宛に届けることに相談す

夜田中氏来る此日静岡大火数千戸焼け汽車不通と報ず田中氏十一時過ぎの汽車にて帰任すとて去る

一月十六日

学術振興会総会（精養軒）に出席午後常置委員会、東亜考古学調査ノ小委員会設定申請ノ件ヲ可決、費用年額二五〇〇〇、第一期五ヶ年トス

文相松浦鎮次郎氏に決せりと新紙伝ふ

東洋文庫ニ立寄り和田氏と逢ふ

夜綿貫氏及び勝綾子来る三人学士会にて夕食  
九時四十分発にて帰る

一月十七日

今夜新京建大の作田氏を瓢亭に招きて夕食、小島、石田、西田、吉田氏等列席

齒科医橋田氏に受診下齒一枚抜く

一月十八日

橋田氏に受診

一月十九日

文部次官赤間氏ニ決定と夕刊にて報ず松浦赤間のコンビにてはあまりに旧型に  
帰り過ぎたり

一月二十日

橋田氏に至り下の入歯の修繕されたるをはむ

一月二十一日

矢野夫人新夫人を伴ひて挨拶に来らる

道代病臥

今夜十時二十分東上

入歯工合悪し午後橋田氏を訪ひ修繕す工合よし

一月二十六日

十時より結核予防会（京都府地方会）に出席本部より荒木寅副会長古川静一常  
務理事来り京都地区にては知事が幹旋して有志を集め資金を募集するなり  
午後三時より市長の催せる市の校長会に出席して支那文化の大観といふ講演を  
為す

菊池豊三郎氏教学局長官に再び任ぜられたる由夕刊報ず不取敢お目出度うの祝  
電を送る石黒人事の真正面の修覆なり次官にてもした方が却って穩当なりしな  
らんを痛快乍ら少々拙なり

一月二十七日

旧臘嶽の使用申右腕上部の筋違を起し以來痛み去らずけふ遂に近藤教授の診察  
を受く上膊の肩に接する処のジン帯の一部が切れたるにて大したことは非ず  
とのことなりユシチマールエーチルアルコールといふ塗布剤をあてがはれて帰  
る

幣原坦氏眼科に入院の由名刺に書いて報じ来らる夜盛教授に尋ねたるに網膜剥  
落症にて来週火曜手術の筈手術後三週間程安静を要すとのことなり

一月二十九日

日本発送電会社は成立以来兎角の批評ありしが近時電力供給の不足を補ふこと  
を得ず本夏の干魃に大蹉跌を生じついでや、これを回復せしも頃日来石炭の供  
給意の如くならず遂に大巾の供給減量を為さざる可らざること、なり此朝大学  
に対しても八千六？百キロワット時の使用量に対し五千五百を限度としこれを  
超過する時は発送を停止する旨京電より通じ来れり中沢岡本両教授と相談の結  
果午后一時より電力委員会を召集し対策を練る岡本氏に京電の石川常務を訪ひ  
大学の研究及び病院等の特質を述べて通報の量を超過するも直に停電すること  
無きやう依頼を乞ふと共に内部に於ては極力使用減を図り部局に通報して事態  
を告げて自制を求め且つ巡視員を派して取締らしむ

一月三十日

昨日の電気使用量五千五百を超過すること三百余、一時より重ねて対策を講じ  
更に減量を強化、連日委員会を開くことに定む  
市の伴、戸沢両氏先日 of 講演の礼の為来訪

中村元麻呂君けふ西本願寺に出頭阿部氏と会見一週一度宛内事局に出仕のこ  
と、なる

一月三十一日

昨日の使用量五千五百キロワット時以内に止め得四百許りを剩す、この情態を一兩日続けて見ることにす、もしこれが続け得れば一昨日以来一部中止し居れる実験を多少とも復興しました五時以後消灯のことにし居れる諸室の電灯をも或る時間延長のことにする方針を建てたり

二月二日

今夜桃山参陵之為入洛の河原田前文相を鶴屋に招き晚餐を共にす前秘書官と丸山属官星野教授鐘江書記官同席

二月三日

昨日衆議院にて斎藤隆夫議員の支那事變の處理につき試みたる質問演舌が議會の一部及び陸軍にて大問題となり問責の紛擾を生じつゝ、ありと朝刊新紙報ず夕刊には斎藤氏が責を引きて民政党を離党したるも尚ほ懲罰に進むを免れざるべきを報ず

一方浅間丸問題は日英の間に昨日の谷クレイギ会見にて円満解決の諒解成りたる旨を報ず

二月四日

玄塚高松氏隣接の土地を見る菊池氏の為なり

二月五日

東京滝博士大学に来訪

二月十一日

朝拝賀式

午后一時卅六分燕にて東上

沼津に下車乗換へて八時熱海樋口旅館に着一泊

二月十二日

八時五十五分發にて東京に向ふ

学士会館に投ず十一時半過ぎ東亜研究所に原氏を訪問大上氏を交へて清朝異民族研究員の二人を本年も支那に派遣の事を確かめ置けり明の別に東亜研究所の費用にて派遣の領解を求め置けり

一時半より学士院に於ける東亜民族調査の準備委員会に出席

二月十三日

午前九時發燕にて出發四時半帰洛

二月十四日

午後電力委員会

旧臘以来右腕に痛あり廿九日頃鍼を振つたはづみにグキリと音して痛みたるが始めなり（一月廿七日日記參看）一月廿七日近藤氏の診察を受けたる後二三度塗薬せしも効果著しからず二月九日近藤教授よりマッサージを勧められけふより整形外科にてこれを始む三十分電熱にて暖め引続き十分間右腕を揉むなり

福恵少将<sup>(参)</sup>の三江省穆陵に赴任するを駅に送る

浜田稔君明後日南京に陸軍技師として赴任すとて挨拶に来る折大成駅にて加賀谷助役に逢ひ極近所の寄附土地の事につき話合ふ書記官を近日市役所に遣し委細話すことゝす

二月十五日

第二回マッサージ 大に輕快を覺ゆ

道代浜田家を訪問稔君の赴任につきての挨拶の爲なり

東亜研究所の玉置氏<sup>(藏)</sup>来訪重ねて研究員及び明の支那派遣のことを理事に伝へ置くことを依頼す玉城氏来訪は列国の勢力の東亜浸透史研究の爲先づ史料の諸大学研究所等に存するもの、目録を作る爲に本学への依頼なり宮崎助教を紹介し余が前回原氏に話し置ける先づコルジエの支那研究目録ヨリ抄出の方法を实地指導することを依頼す

二月十六日

第三回マツサージ

江藤来ル道経類書返却

舒子異状と明来り報ず三井氏に電話にて相談す格別のことに非る如し

和田君に発信明の三高はなしにつきてなり

鐘江氏市役所に賀加谷<sup>(加賀)</sup>助役を訪問当方の希望を委しく伝ふ

東亜文化協議会委託の良書の翻訳につき東方文化研究所にて拾ひ上げたもの、原稿を松本所長より送附し来る、これを田村氏に渡し別に研究室同人にて歴史関係のものを主として拾ひ上げることを依頼す

二月二十三日

一時卅六分富士にて東上

二月二十四日

午前十時ヨリ如水会館ニ於ケル學術振興会第二常置委員会ニ出席午後四時頃終了、会議中関口局長来訪西田教授ヲ皇学館大学長兼任ノ希望アリ、困難ノ旨答フ

和田清君宿所学士会館ニ来訪

石田君亦来訪

三島君に招かれ西銀座七ノ四鶴ノ屋にて夕食  
八時半帰宿関口局長来訪

二月二十五日

昼前より池内君訪問午後時野谷を訪ひ夜宿に帰る

田中経太郎君学士会館に泊り合せ夜十二時頃まで話す

二月二十六日

朝島内俊三氏来訪。東亜研究所に林桂氏を訪ふ

夜三島君に招かれ浜鮮に会食国分氏及びカルピス会計秋山氏同席

二月二十七日

朝富山房の坂本栄市氏石川氏と共に来訪、過日石川氏が京都に來り栄市氏ノ計畫に賛同を求められたるに對し直接同氏より意向<sup>(ウヤ)</sup>き聞きたる上にて考ふべしと返事したるに依る更に近く京都に來訪を求め懇談を約す

東洋文庫に至り和田、岩井両氏と逢ふ、五体清文鑑訳稿の体裁を相談す

転じて文部省に至り菊池教学局長官と会谈、五時より法曹会館ニ於ける學術振興会理事會に出席

夜九時四十分發にて帰西

三月一日

森三高長来訪明三高奉職を本人に話すべきにつき前以て一応自分に從來の経過を話し置くとのことなり余は安部氏を人文科学研究所に招聘の話を森氏に口切りたる時以來後任として明を推す積りでもある如く思はるゝことを避け一切後任問題には触れず今日迄來れるにて今も尚ほ自分より依頼する積りは無きと共にもし森氏より同人を採用する意あれば之を拒むにも非ず要するに余には関



係なき事として処置せられ度き旨を答ふ

三月二日

午後東洋史研究室にて東亜研究所の清朝の異民族統治方針研究中の諸氏と会合、研究所にて原理事より聞きたる研究方針につき伝達  
幣原氏を見舞ひたるも睡眠中なりし故逢はずに帰る

三月三日

終日籠居依頼されたる揮毫に半日を送る  
夜新村博士宅を訪ひ関口局長と会談

三月四日

中村恒三郎氏台湾商業會議所に赴任の話ありて二三日中に相談の為東京に行く  
とて挨拶の為来訪、先日來病氣と聞きしが（数日前宅を訪問の同夫人より）疲  
勞の色濃し健康の注意を促し置けり

三月九日

明第三高等学校二就任ノ件数日前森校長ヨリ話有リ本日引受ヲ返答スルトテ来  
談、自然ノ發展ニ任セテ斯ク成リシハ満足ナリ  
時之谷君ノ病床ヲ見舞フ籠居シテ自カラ病ヲ作り出ス勿レト勧告ス  
石井龍善君来訪

三月十日

快晴気分好し  
浜田夫人今西未亡人等来訪  
幸子を見舞ふ元氣よし

三月十五日

文学部教授会にて部長より助教授候補者の推薦を次の教授会廿六日提出を各科  
に求めたるに哲科にては会後会後打合会（マツ）を開き提出延期を求めたる由、事毎に  
円滑に議事の運ばざるは遺憾なり

三月十六日

午後小島君西田君と三人にて総長室にて会談助教授の推薦は史料にては余の去  
りたる後東史の講座が全く空虚なればこの講座に田村を助教授に推さんとする  
ものにしてこれには反対ありそうにも覚えざる旨語りたるに小島氏もよく諒解  
し（小島君には前にも此の事話し置きたるなり）その次第を部長より哲科二三  
のものに事前に話し置かば何人も異論なかるべしとてかくすべく西田氏にす  
めて話を切りたり

此日小島氏中支に出発

三月二十一日

午後燕にて東上

三月二十二日

朝満洲国教育部長田村敏雄氏来訪吉林師道高師の校長候補者の件につきて談合  
午後外務省に三谷文化部長を訪ひ伊太利講座寄附に関する謝礼を述べなほ講座  
開設の上は初代教師には伊太利の適當の学者を迎へたき意なればアウリツチ大  
使にも内々かゝる意向を有する旨伝へ果して依頼書を送る時には候補者選定を  
煩はし度旨通じ置きくる、やう依頼

転じて文部省に至りしも誰も居らず途上秘書課長に逢ひ正路教授の佳樹斯医大  
赴任の件につき大体を話す詳細は両三日中書記官上京の際打合せらるゝこと、  
す

四時より国際文化理事会六時より東亜研究所顧問会に出席、阿部前首相も席に在り大蔵氏より研究所の事業の経過及び予定につき報告あり、原氏及び斎藤氏に明の三高奉職の件を話し承認を求む、夜九時卅分発歸西

三月二十三日

朝八時歸京直に大学に至る

三月二十五日

久邇宮家彦王殿下理学部にて御入学の事先日勅許ありたりとて今朝十一時本田家職来訪御入学の思召なる旨書類にて示さる

午後二時半久邇宮家に伺ひ御入学お受けの旨母宮殿下及び王殿下に申上ぐ

四時過ぎ文学部田辺教授を宅に訪ふ鈴木氏の将来につき過日來談ありたるに對し返事の為なりなほ文学部にて助教教授に推薦の部長提案につき悶着ありその推薦候補者田村氏のことにつき委細話合ふ西田部長が提案の時期を誤りしが為にかゝる紛擾を生じたるなり

三月二十六日

午後燕にて東上、新村博士同車

三月二十七日

朝綿貫氏來訪、三重子來る、奉天に航空便を出し浩輔万一の用意に同志社予科を受けさせては如何と書き送る

十時より学振の小委員会東亜古代遺跡調査会に出席委員長仰せつかる

午後二時より学士院に至りこれも東亜民族の調査委員会に出席

五時半頃時之谷を訪問九時卅分の急行にて歸る

三月二十八日

朝八時歸洛午後評議會流石に疲労を覚ゆ

三月二十九日

朝坂本栄市氏來訪嘉治馬翁逝きて後事円滑ならず将来患ふるに堪えたり

三月三十日

十一時より本学年卒業式を挙行卒業生総数一三三八、天氣快晴温暖來賓の老名譽教授達にも好き仕合なりき

式後新村博士より関口局長の伝言なりとて中村は山田氏に於て拒絶、小西氏を電報にて呼び寄せることにせりとのこと、小西氏については二十六日夜学士会館にて関口氏と会談の際富山の公立高校長に適任者を捜し居ることとなりし故推薦し置きたるなりけふあたり東京にて会見せるならんか成功を禱りてやまず

四月十四日

東桜町元の豊岡君邸の一部に当る屋敷跡の家に住める田中二郎君を訪問昔の様なと思ひ浮べて感慨深し。田中君のは亀岡大本教建物の敷地跡が今町有となれるを大学の理学部植物園移転候補地として譲受たくその斡旋を依頼せしに快く引受けくれ直に亀岡町長矢田氏（田中君の従弟）を電話にて今夜呼び寄せ相談すべしとの事なり。夜に入りて電話にて会見の次第を通じ町長は賛成なるが大学に確実に実現の意志ありや、また話の出来たる上は急に着手する意志ありやと尋ね来る余は既にその決心なるが重ねて郡場園長と相談し確答すべしと答へ置けり

四月十五日

午前大学にて鐘江吉田両氏に昨田中君との交渉の次第を話し郡場君を招きて直接意中を質したるに巨離<sup>（里）</sup>のや、遠きは遺憾なれど他に適當の候補地なければこれにて満足すべしとの答なりよりて田中氏に電話にてこの旨通じ愈々正式交渉に出発を依頼す

この日津吉孝雄突然訪問昨夏病氣にて帰り来りその後依頼をうけて秋田の青年学校（満洲開發の爲の）を監しこの度復び北京にゆき回教法指導に従事するなりといふ。この世間離れの青年の将来如何になるべき

四月二十八日

此日朝九時半京都駅發滿洲旅行の途に就く秋田書記隨行 大陸に渡る旅客殺到し馬関埠頭の光景物凄きばかりなり電報を打ちに行きたる秋田氏満員客止めに逢ひて出航時に近づくも船に來らず纔に助役に理由を話し附き添はれて乗船するを得たりとて發航直前に乗り込ミ来る

四月二十九日

朝七時半の汽車にて京城に向ふ釜山駅構内にて秋田氏肩にかけたる写真機の爲に憲兵に拘引せられんとす陳謝して纔に事無きを得たり

一時半過ぎ京城着大谷鳥山喜頭藤田北尾夫妻等に迎へられ朝鮮ホテルに宿泊此の夜速水総長の招宴催さる相識の諸士十数人同席

四月三十日

午后三時京城を出發

五月一日

朝四時過ぎ連山関に着ほの暗き中を菊池氏夫妻に迎へられてその山莊を訪ふ秋

田氏先發奉天に向ふ

この日山莊に一泊

五月二日

八時半頃出發菊池氏夫妻と共に奉天に向ふ午時着

旧記整理処（もとの学良の宅）を訪ひ松浦氏より説明を聞く昭和七年こゝを圖書館と定めたる時の事など思ふ<sup>⑤</sup>浮ぶ

轉じて国立博物館に至り參觀黒田山下三宅松浦氏等と会談小平氏が前刻菊池氏宅に來訪の際の話に過般陳列したる羅氏敦煌文書を明日旅順に持參返却の予定といへるにその中の医書解<sup>■</sup>方を特に借りて見る

夜黒田氏等に招かれて支那料理をとる菊池氏宅に一泊

五月三日

午後重細重にて新京に向ふ四時半着榮原杉村山本藤山神尾筒井田井諸氏に迎へられ大和ホテルにて投ず

夜杉村君に招かれて天麩羅料理の饗応を受く

明日田村氏と共に吉林を訪ふことにす

五月十一日

十日独軍遂に和蘭白耳義を衝くと報ぜらる

五月十二日

今夜東上

五月十三日

朝學術振興会第十五小委員会

午后学士院東亜民族調査会及び例会に出席

五月十四日

人文科学資料研究会打合会に出席、更に文部省に至り有光永井氏等と語り赤間次官にも逢ふ次官より大臣が宮内省関係の話を為是非面会したしとの事なりしもけふ帰洛の予定故此の次の東上の時に逢ふことにしたしとて別る兼て大谷氏より聞ける御進講の件にして次官の話にては既に大臣より確定的に返事しある故断る訳にゆかずとのことなり余に相談もせずして左様の返事をする訳なしと思へど兎も角次回松浦大臣に逢ひて聞くことにする外なし三時発にて帰る

五月二十七日

今夜東上

五月二十八日

東亜研究所に原氏を訪ひ海軍軍務局長阿部少将に紹介を依頼す海南島に演習林を得たき意を通じ置かんとするなり

午後外務省に三谷部長を訪ふ不在

市川課長に逢ひ伊太利講師の経過を尋ぬ市川氏当方よりの文書を見ずといふ今一度差出すべきをいひ置きて帰らんとせしに廊下にて襄輪事務官に逢ふ氏の言によればその文書は自分の手許に在り市川氏も知り居る筈とのこと、まだ伊大使館を通じては頼み居らず条件好からぬ故もし凡庸のものを寄越されては困る為なり日伊学館に相当の人を派遣しければそれを頼みては如何と思ひ居ること。然も時日は左様にゆとりなければ急に考へくれるやう話し置けり。文部省にて赤間氏と逢ひ明日朝九時官邸にて大臣と逢ふことに約す

四時過ぎ海軍省に阿部局長を訪ふ一寸面会の後大臣の用事とて出で去り松本少佐といふに話しくれとのこと此人に当世農学部の特産植物研究の盛なると規那

研究の成功などを語り海南島に演習林を得たき希望ある旨を話し置けり

五月二十九日

九時文相官邸にて松浦大臣と逢ふ宮内省の話といふは侍従長より多分九月頃より東洋興亡史を数回に亘り(二週一回位の予定)進講しくれ度旨話ありも少し早く話したく思ひしも満洲旅行中なりし為今日に及べりと余は公務上もまた適任に非る点よりも困る意をほめかせしに既に御内意を伺ひたる後の事なれば是非引受けくれとのこと此の点甚だ腑に落ちざるも御内意を伺ひずみといへば今争ふべきに非ず兎も角今少しく具体的に事柄を承知したければ直接侍従長に面談のやう計ひくれ度しと申し置けり

更に来年度予算の方針につき懇談し現下の情勢より大学の研究の進歩を考ふるに痛切の必要なるを説き自然科学研究所案を提出すべきにつき特に考慮あり度旨懇談せり更に同邸にて永井局長に逢ひ繰り返しこの事を強調し置けり

午時文部省にて関口氏と会し同氏に伴はれて新宿に至りて鮎の昼食、五時より学振理事会に出席

三島国分両氏と新橋の鶴の屋に夕食

夜九時四十分発にて帰る

六月三日

田中二郎君大学に來訪福地氏と会談の結果大学にて亀岡土地の寄附をうけ入れてしまへば多分弁護士団よりは提訴なかるべく仮令提訴するも結果はほゞ見当つけらるとの意見なるを伝へ出来れば可成早く寄附受入を承認した方がよかるべしとのことなり

大谷聲誠氏午后来訪かねての行きが、り上松浦大臣より聴取したる件を話し且つ十五日一時―二時の間に広幡大夫に面会の交渉を依頼す委細の経過並に内情を聴き置かん為なり

谷口経済部長より大塚助教授の学位論文不合格のことをき、これに関連して経済学部の内情の面白からぬ有様を聴く相当打開の途を講ずる要あるを感ず

六月四日

昨三日午後一時十五分より数回に亘りて独空軍巴里の内外を爆撃し千余の爆弾を投下し被害少からずと新紙夕刊報ず

都ホテルに投宿の大原万千百氏より電話あり午餐ニ招かるこちらより招かんと思ひしも先方に時間なく遂に招きに応じてホテルにゆき会食

六月五日

北仏フランダール地方に於て纔に英仏連合軍の支へたりしダンケルクも昨日遂に独軍の手に帰しその入城を見るに至れりと報ぜらる。支那に於ては我軍漢水を渡り襄陽を陥れ逃退の敵軍は焦土戦術をとりて城中猛炎の中にありといふ

研究所理事会

亀岡町よりの土地寄附之件は明日の評議会にはかけず今暫く形勢を見ること、決心す六月十日までに提訴の用意ありと弁護士団より通じ来れるなればそれまでの経過も見たくまたこのまゝ形にて来年四月の時効経過期までゆくことも一法なりと考ふるによる

六月六日

評議会

六月七日

都ホテルニ於ル立命館田中学長就任披露宴ニ出席

加賀谷氏市長に当選ノ由

六月八日

御所内ノ大学研究成績品陳列物ヲ予ジメ視察ス

峯山吉村来訪

夕岩垂氏招待会（京都ホテル）ニ出席

六月九日

聖駕ヲ京都駅ニ迎フ五時卅分着御

吉村正雄夫妻来訪

六月十一日

昨夜以来独軍巴里に入りけふ大軍戦車隊を先きに入城せりと報ぜらる（十二日新紙）

御所に参進五時より堀場喜多沼田三氏の列品につき御説明申上ぐるを紹介六時終了いとも御熱心に御覧あり一々御下問あり御知見の精と博と驚くべきなり御佩剣もなき御くつろぎの体にて説明を聞き召さる終了後百武侍従長より一寸話したしとのことにてかねて文相より聞ける御進講につきての打合せあり多分十一月の諸式典を了らせ給ひたる後に始むることになるべしと事なり（ママ）

六月十四日

けふ七時半の富士にて東上一時半熱海に下車熱海ホテルに投ず東京は頃日来水飢饉にて風呂も便所も難儀なりと聞きこの地に降りて休養旁々難を免れん為なり

上野村山氏一行と名古屋より同車

六月十五日

七時の列車にて熱海発九時頃東京着学士会館にて開催の学振第十五小委員会に



出席午後文部省に至り永井局長と会談

三時の富士にて帰西

静岡より新村博士と同車

六月十八日

第三十四回創立記念式挙行

夜第一回教官親睦会を教官食堂に開く百十人程の出席

六月二十日

評議会建築委員会共通経費決算予算会。

夜稲畑勝太郎氏の招宴に連る南禅寺の同氏邸にての招待なり喜多高木各夫妻と余夫妻が客、同氏一族と日染会社員数氏が主人側なり豪壮なる邸宅と庭園なり

六月二十一日

けふ松浦文相午后来学の予定なりしも昨夜東京厚生省より落雷の為ニ火を發し大蔵省中央气象台等類焼の厄を被りしもの多きにより急ぎ帰東し視察を中止せり

六月二十二日

昨六月二十二日北仏コムピエーニユの森フォツシユ元帥列車の中にてヒットラー総統はアンチジェ將軍以下仏国代表四名ニ停戦ニ関する条件三項を提示せり即ち第一戦闘行為ヲ再ビ繰返サヌコト第二独逸が英国に対する戦闘を継続する際仏国があらゆる保障を独逸に提供すること第三新歐洲平和の爲の必要条件を作製することこれにはかつて暴力によつて独逸に課せられた不正義を訂正賠償することが必須の要件であると報ぜらる前大戰の休戦条約を結びし有様を逆にそのまゝに同じ場所に繰返せるは雪辱独逸の氣構を窺知し得ると共に仏の心

情想見にたえたり

六月二十四日

朝八時四十分東京着学士会館に投ず

十時より法隆寺壁画模写の会議に出席正午にて了る

三時より学士院の東亞民族調査特別委員会に出席

六時頃終了三島君宅に至り泊す同君令政また入院と聞き慰藉旁々訪問せるなり

六月二十五日

九時過ぎ三島氏宅を辞し時野谷に至り一日休養夜学士会館ニ歸る

六月二十六日

午後文部省に至り菊池長官と会談佐々木博士名誉教授推薦ノ件ノ進捗につき及び長崎課長追出につき同君の考慮を求む

夕景池内君を訪ひ晚餐の馳走に預りて歸る

六月二十七日

昼前東洋文庫に至り和田岩井両君と会談白鳥博士の病状また面白からぬ由を聞く

午後四時より学士会館にて開会の東亞文化協議会に出席

夜十時発にて帰西

六月三十日

三島加藤両君と共に川西知事に招かれ瓢亭に晚餐、三島君来宅一泊

七月一日

十一時三島君出発途中大学にて余は車を下り君は駅にゆく

七月二日

午後五時五十分満皇入洛ヲ京都駅に迎ふ此日三時頃より大雨御着時ほゞやむ

七月四日

評議会

今夜東上教育審議会特別委員会出席ノ為ナリ

七月五日

朝十時より文相官邸にて開催ノ教育審議会特別委員会に出席

七月六日

けふも審議会特別委員会に出席京大にて今学期より法経に実施せる指導班制度につき説明

今夜十時発にて帰西

財部教授薨去の由同宿の谷口部長より通告あり

七月七日

駅より直に大学に至り九時より支那事変一周年に賜りたる勅語皇紀二千六百年紀元節の詔書の捧読式を挙行

農学部長及び大杉教授と会見農学部敷地問題につき談合

七月十日

一時卅六分燕にて東上総長会議と学士院会議に出席ノ為なり新村博士同車

七月十一日

午前九時より文相官邸に総長打合会開会予算関係科学振興関係は主として永井局長訓育関係は主として朝日奈企画部長より説明せり科学振興の為に助教助手の優遇研究費の設定を考へ居れるは勿論可なるもこれを自然科学にのみ限れるに對し余は強硬に反対の意見を唱へ遂に人件費は両者に研究費は或程度の差は止むを得ざるもこれも両方に要求することに變更せしむ午後六時頃閉会晚餐後散会

七月十二日

午前十時より学士院にて東亜民族調査の特別委員会に出席、午後一時半よりその委員会ついで第一部会に出席

会員候補者は宇野28武田9小島3井上1藤沢1白紙1にて定数31に達せず六時宿に帰り七時より時野谷夫妻と山水楼に会食

七月十三日

朝九時の燕にて帰西新村森島両氏同車

七月十六日

日滿文化協会幹旋滿洲国絵画展覽会審査員として黒田洋画■本一葉日本画両氏渡満の為池内理事よりの依頼にて今年は京都にて祝宴を張る（つるや）三枝、後藤、両氏と清水の陶師宇野氏を客に狩野新村両氏と余とが主人側として出づ。羅振玉氏追悼会を秋の彼岸過ぎに催はすことに相談一決す。宴中号外にて本日午後米内内閣総辞職を決定の旨報ぜらる予期したる事乍ら余りに急激の感あり

七月十七日

内閣総辞職は畑陸相より政治体成<sup>(前)</sup>の強化を首相に迫り首相はその意見に応じ難しとして辞任を求め代りの陸相推薦を求めしも陸軍にて会議の結果候補者を出し難しと申出でたれば茲に内閣の総辞職を見るに至り昨夕米内首相は葉山に伺候し辞表を捧呈したりとのことなり近衛公爵は既に昨夜八時軽井沢を出て東京に急行し今日重臣会議、急使西園寺公派遣の階段<sup>(段階)</sup>を経て今夜近衛公ニ内閣組織の大命降下あるべしといふ

七月十八日

近衛公昨夜大命を拝し直に陸相海相と会見統帥府と政府との関聯を計り両相の推薦を求めたりといふ今朝松岡洋石氏を外相に陸相には満洲出張中の東条英機中将を海相は吉田善吾中将の再任と定めたり東条氏帰朝の途次天候の為飛機大邱に着陸今日の四相候補者会議にて方針熟議の機会は延びたり組閣本部といふものもその参謀といふものも設けず荻窪の近衛公私邸にて公自から事を運び先づ四相にて大方針を議し意見一致すれば愈々組閣との事、この行方大に評判よし

けふ一日家居

七月二十日

けふ朝出勤間際に舒子腹痛を覚ゆとのことに道代と共に同車せしめて大学病院に送り込む昼前電話あり分娩迫り居ればこの儘入院せしむと午後二時過ぎ無事出産せりと報じ来る女子なりと

夕景帰途病院に立寄る母子共二健全なり

けふ陸軍技術本部より柳川少将（総務部長）来学工理学部教官と談合

国民政府教育部次長戴英夫氏一行来学

部長を召集して総長会議ノ経過を伝ふ

七月二十一日

文相に橋田邦彦氏が任ぜらるゝ事と定まれりと同盟吉崎氏電話にて報じ来る

七月二十二日

近衛内閣今夜親任式

七月二十三日

梅原氏より学振第十五小委員会東亜古代遺跡調査事業ノ為派遣予定ノ調査班ノ派遣ヲ興亜院ニテ承認セヌ様子ナリト今日東京より来京の長谷部氏が語りタリトノコトニテ急ニ交渉ヲ要ストノコトナリ直ニ波多野氏ニ問合セノ電報ヲ発ス夜十一時半ニ至ルモ返電来ラズ此件既ニ一昨日書面ニテ問合セタリシガコレニモ返事ナシ梅原君ヨリモ亦問合セタレド返事ナシトノ事ナリ

七月二十五日

東亜古蹟調査班ノ派遣現地ノ治安状態悪しく且つ現地興亜院にて不急と認め承認せずとの電報ありし由学振より報じ来る

浜田君三周忌法要に列す（法然院）

日米学生協会に出席鶴屋にて昼弁当を供す

八月七日

けさ城寄に行く積りなりしも朝の気分にて見合す

昨日より六一〇ハツプなるものを湯に入れて温浴胸部ノ痒さ吹出物の治療の為なり腕痛にも善しとのことなり

八月九日

けふ迄ハツプを試みたれど大した功能<sup>(効)</sup>も認めず或はもつと続けて見るべきかも

知れねど中止す

八月十日

峯山吉村来泊

八月十一日

今夜桃山山陵参拝ノ為入洛ノ文相橋田氏を都ホテルに訪問  
けふ鐘江書記官樺太に発足

九月九日

朝七時半富士にて東上新村博士と同道

九月十日

朝如水会館にて開ける学振第十五小委員会に出席北支古代遺跡調査班派遣方の  
現地興亜院によりて拒まれたるにつきての善後策を講究、梅原氏より南京雨花  
台の梁墓調査を成し得るや否やを交渉し可能ならばこれに転ずること、す

午後二時より学士院にて東亜民族調査特別委員会に列席

夜九時廿五分発にて出発帰西

九月十二日

評議会

九月二十三日

スイス公使に転じたる三谷旧文化部長を招き氏の宿れる川西知事をも招き鶴屋  
に夕食別宴を張る成瀬鐘江両氏同席

九月二十六日

夜十時廿五分東上

九月二十七日

朝八時四十五分東京着 東大二平賀総長を訪ひ技術院、中央綜合研究所に關する  
企画院案と東大側の意見をとれる文部の対案との大略を聞く後者は余が予て  
より文部当局に開陳せる意見なり大臣次官に逢ひて重ねて余の意見を述べ鼓舞  
し置きくれたしとのことなり更に東大の学史編纂中法学部の方針につきて聞  
き、また教練の目的変更の件につきて文部より学校側に何等通達なくこの為京大  
にては今後かゝる場合の通達を強く文部に求め置く積りなることを話す午時食  
堂にて小野清一郎君より更に法学部の学史編纂方針を聞く。東亜研究所を訪ひ  
原理事に面会異民族研究は一月―三月の間を残務整理として存置のこと、その  
後を如何にする見込みにつきて不在の林課長に意見を聞きおきくれられ度旨  
依頼す、文部省に至り有光氏に教練の目的変更と通達とにつきて談合、菊池次  
官につきて平賀氏より聞けることの詳細をきく余の意見は東大の意見と同じと  
の旨を説き努力を希望し置けり  
今夜関口鯉吉博士来訪また技術院問題と更に氏の南京旅行による天文台の経営  
及び自然科学研究所長問題を話して去る  
今夜日独伊三国条約締結の件号外にて公表せらる  
夜三島君に招かれ銀茶寮にて会食

九月二十八日

九時より如水会館にて学振第二常置委員会に出席、四時頃終る五時過ぎより時  
之谷を訪問十時帰宿

この朝隣室に泊れる川西知事に逢ひ内藤乾吉氏を図書館長として推薦したく諒  
解を求め置けり川西氏は自から鈴木部長に話し置くべしといへり

九月二十九日

朝九時の燕にて発四時半頃京都駅着

朝出發前広幡侍従次長に電話しかねて侍従長より聞ける御進講は果してかゝる際やはり行はるべきやを問ひたりしに先方より書面を出さんと思ひ居りたる際なりとて多分当分六つかしかるべしとの旨返事ありたり

菊池氏宅に電話し一昨日の話のその後如何になりしかを聞かんとせしも不在の為不得要領

九月三十日

一日中來訪客に應接

工学部西村教授、食堂にて喜多部長、ついで総長室にて小島教授医学部森教授農学部大杉教授ついで狩野博士等なり

十月四日

夜武田氏ニ電話シカネテ依頼ヲ受ケ居レル武田次郎氏令嬢ノ縁談ノ経過ヲ聞ク次郎氏ソノ話ノ為目下東上中ナリトノコト今日太田君学校ニ來訪黒川氏ニソノ令息ノ一人ヲ武田家ニ縁組マシムル意ナキヤヲ東京ニテ問ヒ黒川氏ハ一応子息ノ意向ヲモ聞クベシトノコトナリシトノ話ナリシ故武田家ノ其後ノ様子ヲ聞ケルナリ

十月五日

鈴木京都府学務部長來訪内藤乾吉君ノ図書館長就任府ニテハ承認ノ旨ヲ話ス兩三日中自分ヨリ内藤君ニ話シテ見ルコトニ約束ス

夜会計検査官ト会食 帰途太田君ヲ訪フ

十月六日

大谷、丹羽、吉村諸氏來訪、夜内藤乾吉君ヲ招キ京都府図書館長ニ就任ノ件ヲ話シテ受諾ヲ勸ム、意アルガ如シ、湖南先生ノ靈果シテ如何トナス

十月七日

武田二郎氏大学ニ來訪

十月八日

内藤君ヨリ就任ノ事ニ決心セル旨電話アリ

鈴木氏ニコノ旨電話ニテ伝ヘ直接内藤君ト話シクレタキ旨依頼ス

菊池貞二君來泊

十月九日

朝菊池君東京ニ出發

十月十日

評議會

四時過ぎ菊池次官大学ニ來訪六時頃迄大学ノ中央実験所、石炭液化ノ有様等ヲ見学夜府ノ鈴木部長等ト共ニ鶴屋ニテ会食九時廿分ノ汽車にて帰東、同氏より技術院問題ノ其後ノ経過ヲ聞ク

鈴木部長ニ内藤氏決心ノ旨ヲ重ネテ伝フ同氏多忙ノ為尚ホ内藤君ト逢ハズトイフ

十月十二日

大政翼賛運動発会式東京ニテ挙行



十月十三日

府ニテ日独伊三国盟約及ビ大政翼賛記念祝賀会ヲ建礼門前ニ举行ニツキ参列

十月十四日

日本金属学会秋季大会実行委員長トシテ挨拶

十月十五日

陽明文庫第二倉庫定礎式ニ列ス河原田氏水谷川氏等東京より来会

十一月十二日

永井専門局長ト会谈柴田氏ノ經濟新体制意見ガ大阪実業家ヲ刺激シ閣議ニテモ話ニ上リ文相心配セル由聞ク

十一月二十一日

評議会

夕景ヨリ北野病院評議員会

書記官ヲ憲兵隊ニ遣シ分隊長ト病院事件ノ処置ニツキテ先日通ジ置キタル方針ニ就キテノ返事ヲ求メシムスベテ当方ノ考通リニテ諒承ノコトニ落着セリ

十一月二十二日

綾子勝岡人ヨリ女中キミノ不慮ノ事知ラセ来ル道代吉野ニ行キ不在中不取敢一書ヲ裁シ金五十円送附

午後四時ヨリ戸田前田森松本四氏ヲ室ニ招キ病院事件ノ結末処置ニツキ所存ヲ述ベ置ケリ

此日故亀川大尉ノ追悼会ヲ百万遍ニ営ム（東洋史談話会主催）

十一月二十四日

藤井有隣会ニ支那書道展ヲ見ル

夜細川侯爵ニ招カレ夕食ノ饗応ニ預ル同席狩野梅原両博士侯爵世嗣護貞氏モ列席

十一月二十五日

十一月十一日発病ノ元老西園寺公昨夜九時過ギ薨去ト新紙報ズ

## 一九四二（昭和一七）年

一月一日

大学拝賀式 東方文化研究所祝賀式

久邇宮邸参賀上賀茂神社参拝如例年 午後太田君相国寺兄来賀七時過迄食事雑談

今年は今振にて幸子も家に在りて祝の膳に着く限無き喜なり

遂に還暦といふ齡に達せり他人の身にのみ寄る年波の如く思ひしに心身共に左まで衰へたりとは思はぬ我が上にも容赦なく時は迫りしなり多少の感慨なきに非ず

一月二日

終日籠居、午少し前より大雪降る

朝鴛淵君一家来訪午後今川君来訪

一月三日

鳥養工学部長朝来訪兼て企画院文部省等との間に進行中なりし工学部拡張案は十二月十九日永井局長との間にも愈々追加要求として予算要求の事に定めたりしがその後現下の時局の為資材關係に困難を生じ昨一日午後企画院第七部長森川氏より同院議として工業化学だけを案の通りに増員し他は来年度に譲ることに定めたりと鳥養氏まで通知し来れりとのことなり目下の事情止むを得ざるベきも拡充に伴ひ共通性講座として要求しある工業数学及び力学の講座は是非新設したければ会計課長を上京せしめくれとのことなり。午後書記官会計課長鳥養部長を官舎に招き相談の結果鳥養氏が先づ上京して企画院にて果してこれを如何に扱ひ居れるやを質しその結果会計課長を上京せしむる要あれば東上せし

むること、す。帰途太田君を訪ひ夕食

一月四日

日曜なれど御用始めの為登学

夜加藤昇三君に招かれ鶴屋に会食星野教授と 助手氏同席

午時鳥養氏来室、数学講座及び工業化学並に文部案ノ採鉱鉦山学講座を置ク為ノ予算案を作成して会計課長に渡し置きたりと報告あり

一月五日

武田銳太郎氏来訪、京都ホテルグリルにて昼餐二時帰阪

一月六日

十一時水谷川氏新村氏大学ニ来訪、陽明文庫ヨリ寄託文書解約ニ就きての総長宛依頼状の原案に加筆したるものを新村氏にも提示の上水谷川氏に渡す、これにて先方同意ならば清書の上送附して解決することになるべし

午後近藤農学部長の来室を求め橋本教授に対し東亜文化協議会より北支へ出張食糧問題研究委員を依頼したき旨赤間氏より申来れる書面を示し意見を求む同氏より橋本教授もしくは教室幹事と相談して返事し来ることにすなほ農学部にて考究中の南方研究会（？）の経過につきて聞く

関口実業局長、山川、菊池次官に速達を出し今朝の新聞にて見たる高田長壽高商校長の死去の後任に長壽太郎氏の詮考を依頼す

一月七日

田中博氏午後二時来学日伊協会会長を辞任の意志を明らかにし後事を宣布依頼する旨の話あり

午后三時近藤部長来室昨日の橋本教授の件に関しこれを引受けて大学と満洲と

これとの三者を一手に引受ける意志が本人にありとすれば過重の任務にして行  
きつまりは明白なりと思ふもそれを当人に話して反省させようとする人今はな  
し故に本人次第にてその行きつく所を傍観するより外なかるべく正式の交渉来  
らば教授会に計りてその結果を返事するより外なしと考ふる旨返答ありたり  
今夜また永井浩氏に裁書長寄氏のことを側面より援助してほしき旨依頼す

# 一月八日

十一時半阪大に楠本総長を訪ひ文部省にて京大に設置希望の報国隊京都地方部  
につき大阪地方部の状況を聴取、大阪倶楽部にて午餐を受け更に阪大に引返し  
佐谷君（同部主事）及び仁礼少将（学生主事として実際にこの事に当れる人）  
も同席重ねて説明を聞き引上ぐ  
帰途豊後町に武田老人を訪ふ

今夜菊池三重子奉天に向つて去る旧臘津田英学塾を卒業せるなり

# 一月九日

此日卓明日より住友に奉職の為岡町に仮寓を定めて帰る道代同行す田中の近処  
なりといふ道代は田中に諸事依頼の為なり卓のけふまでの教育については少か  
らず心配を重ねたるが兎も角も今日に至れるは同人之為喜ばし来月は多分兵役  
の為入営するなるべし兵役が青年を鍛練して好き結果を挙ぐることに少からずと  
聞く期待をこれにけること切なり  
四方橋本黒田八木竹林諸氏来訪

# 一月十日

官舎に立寄り夕方まで揮毫

# 一月十一日

此日皇軍馬來聯邦首都クアラルンプルを占領せりと十二日<sup>（マ）</sup>のラジオは報ず  
また蘭領ボルネオ及びセレベスにも上陸<sup>（セ）</sup>しりと十二日<sup>（マ）</sup>ラジオ報ず

# 一月十二日

福原課長東京より帰学工学部拡充は採鉱冶金燃料工業化学の外に航空も認めら  
るゝこと、なりし由報告過日鳥養氏上京海軍省の希望により一時企画院にて航  
空を落し居りしを復活したるに由るなり

菊池豊三郎氏より来書長寄高商の処置は既に内定と申来る福原氏の話によれば  
岩松氏が満洲をやめ暫くこの位置に居ること、なりたるなりといふ文部の御都  
合にてこの地位を占めらるゝ、高商こそ迷惑のことなりかゝる人事にては文部行  
政の成績あがるべくも非ず

福原氏満洲転出は岩松氏のかゝる動きの為福氏より断りて帰り来れりとのこと  
旧冬来飛んだ人騒がせをしたものなり

皇学館の佐藤、鳥養、那波氏等来訪

# 一月十三日

田辺朔郎博士来訪その銅像を大学に寄附し大学より政府に献納して貰ふことに  
したしとのことを先般来両度話ありしが本日また此の催促に來られしなりもし  
かくすれば他の学内の銅像の処置にも及ぶべければ俄に同意し難くまた大学を  
経て献納せずとも直接に献納すれば足る義と考ふよりて尚暫く時期をおきて考  
慮せらるべきやう話し置けり、旧冬名誉教授四人も相ついで逝きたれば老年の  
自分はいつ不時の事あるやも知れず自分の生中にこれを処置して置きたしとの  
言前なり心情は諒解するを得るなり

外二小川医部長、森鹿三（伊勢の件につき）、牧、加藤清一諸氏来訪

一月十四日

午後三時ヨリ同学会協議員参与総部長を依頼して茶話懇談会

黒田君来訪十二日伊協会理事会を開き会長辞任新会長就任の内諾ありたる旨を報告し総会を廿三日あたりに開きたき旨話あり

一月十五日

岩松在滿教務部長来訪近く長寄高商校長に転任の事となり福原氏はこの為赴滿を欲せず折角騒がせたれど話を旧に返しくれとの事なりこの事既に先日東京出張より帰任する福原氏より聞ける所なり成行止むを得ぬこと、して諒承。京都ホテルにて共に午餐、その席に本部より同行の鐘江氏に電話ありて吉田庶務課長の訃音を伝ふ驚愕夢の如き思に同氏宅に駆け付く夫人の話に八日の夕方宮繕課長宅の不幸より帰来寒さを訴へて就褥発熱して以来昨日は熱も下りや、寒になりし様なりしが今朝なほ起つ能はず尚数日欠席静養すべしとて届もすませ十時過ぎ尚ほ平静に談話したりしが十一時廿分心臓麻痺を起して逝けりとのこと肺炎を發してその経過が悪かりし為なりといふ暗然言葉も出でず深き無常觀に沈みて引取る。昭和七年余が文学部長として就任以来不斷に密接なる關係を持続し献身的熱誠と忠実とを以て余の職務を助け大学に奉じたる過去十年の歩みの絵巻の如くに繰り上げらるゝも悲しき思出なり十七日葬儀と決したりと聞き十六日東上の予定にて調べたる急行券なども返却し更めて十八日東上の事とす高坂氏と会見人文科学研究所の経営につき話合ふ

一月十七日

朝来矢野氏の紹介による新京の市川氏東洋史の宮川、長嵩、岡山の内藤氏等続々面会を求め来る。午後一時より吉田氏の悲しき葬儀に参列、三時より学部長会議を召集この二十日より府の求め来れる防空補助隊に学生を参加せしむる件につき相談

鳥養氏より採鉱冶金の講座割につきてかねて沢村教授と共に永井局長に話したる時に冶金の選鉱講座は採鉱二属すべきものなるをいひ之を採鉱にまはして一講座とし冶金に一講座を増して二講座とすることに話したりしがこの度採鉱にも冶金にも三講座宛を増すについては之を旧のまゝにして両方とも六講座宛としたしとの申出あり、単に聴き置けり

郡場理部長より数学正教授二人一時に退官につきその後を一ケ年をまたず直ちに一講座を充たしたしとの申出あり、これは考へざる可らざるべきかと思ふ水野氏■■■の後藤氏も来訪

一月十八日

午後一時卅六分燕にて東上

一月十九日

朝宿にて岡山医大の清水氏と邂逅吉田氏の後任として先日一旦話を中止したる内藤氏を迎へたきを懇請す同氏は帰岡後相談して返事すべしと約せり

午後文部省に至り永井氏を訪ひたるも不在、伊東課長と立話して了る

學術振興会に至り満文老檔翻訳完了の書類を渡す

一応宿に帰り訪来の勝と共にその宅を訪ひ転じて三島君宅に至り宿泊加藤清一氏来り会す

一月二十日

朝池内君を訪ふ昨冬以来の衰弱まだ全癒せず静養中とのことなり

文部省に永井氏を訪ふ民族研究所長の人選と大本営より相談を受け居れる南方問題二つについての対策を個人的に徹する為に如何なる人々に依頼してよかるべきやとの相談あり考へて返事すべき旨を約す、菊池次官近藤寿治部長会計課長等と会談関口局長を訪ひしも不在

五時より學術振興會理事會に出席

夜内藤雋輔岩井大慧君來訪

局長より十九日大臣が陛下ニ拝謁の際

・日本人のみが優秀ナリト考フ可ラザルコト

・基礎研究ノ重視

・資源博物館ノ設置

・徴兵ト学年短縮トノ關係

等につき御言葉ヲ承リタル旨聞ケリ

一月二十一日

朝九時の燕にて出発歸西

出発前岩井君來訪

一月二十二日

評議會、會議後學生訓育につき懇談各学部教官の間にても此の問題を攷究あり  
度旨話す

評議會後初回體質研究會理事會開催、閉會後瓢亭にて晚餐

八木經濟部長より追加予算を要求して経済学部の東亞關係の講座と経済研究所

設立の要求をしたき旨話あり今はその時機でなかるべき旨を返事し置けり

峯山吉村兄來訪宿泊

一月二十三日

京都日伊協會總會を京都ホテルニ開催東京より三井名譽會長來會余が會長とし

て就任の事を披露しました同氏より理事を委嘱せり

卓入營期日二月一日兵種歩兵の旨通知あり

一月二十四日

近藤農学部長より橋本教授の北支食糧問題解決攷究委員及び來年度滿洲國開拓  
研究所囑託の兩項教授會の議に附し兎も角差支なしと決議したる旨報告あり直  
に東京に電報して北支出張は差支なきも出來得る限り期間を短縮したき旨通じ  
させ置けり

卓に宅より昨日会社と及び宿に電話して入營期日を知らせたるも果して電話が  
通じたるや否や不明の爲山本寛一氏を煩はして直接本人に通知を依頼す同氏よ  
り確に話したる旨返電話ありたり

夜卓歸宅

一月二十五日

午后貴志寿子嬢の結婚式披露に出席の爲神戸オリエンタルホテルにゆく太田君  
夫妻同行、歸途黒正氏浅木医師等同車

永井局長に二十日の話の返事を出す

一月二十六日

岡山医大清水學長來訪過日東京にて依頼し置きたる同大学の内藤事務官を本学  
庶務課長後任として迎へたき希望については先方にて五六月頃には非同氏の尽  
力を要する件ありて此際当方の要求に応じ難き旨返事あり八月頃まで待てば承  
認出來べしとのことなり、当方の事情はかゝる長き間空位として置くこと出來  
ざれば乍遺憾致方なし、然も万一その頃まで待ちてもといふことに考へること、  
もならばその節は更たためて依頼すべければ宣布考慮を乞ふ旨話し置けり

谷口經濟教授、吉田栄一氏等來訪

一月二十七日

森川、内藤雋輔小竹文夫氏等來訪



森川小竹二君と京都ホテルニ昼食

ホテルノ広間ニテ大橋理祐氏ト邂逅卓入営ニ関シ諸種事情ヲ聞ク

佐藤大佐ヲ訪ヒ明日入営心得ヲ聞クコト、ス

一時ヨリ部長会議ヲ召集シンガポール陥落ヲ機トシテノ祝賀行事ヲ相談又防衛ノ為ノ水溜設備差向キ四ヶ所ノ位置ヲ協議ス

一月二十八日

荒木寅三郎博士今朝八時狭心症ニテ薨去トノ電報差出人不明ニテ到ル旧臘田附政次郎氏ニ招カレテ木屋町中村屋ニ会食シタルガ最後ノ会合トナレリ森島博士及ビ荒木博士ノ細君ニ電話ニテ事情ヲ尋ネタルモ皆何事モ知ラズ荒木氏ハ二時過ぎ帰宅シテ初メテ電報ヲ見タルナリトイフ  
峯山吉村兄夫妻及ビ田中勇雄君等卓ノ入営挨拶ニ来訪  
鐘江書記官ニ庶務課長事務取扱ヲ命ズ

一月三十日

午后学校より帰り卓と共に家族一同撮影五時半桃園亭に家族と太田君相国寺の吉村兄を招きて送別の宴を催はす

一月三十一日

杉村勇造君大学に来訪

午後五時半ヨリ満洲国留日学生倶楽部開所式に出席七時前帰宅

明日は愈々卓の入営の日なり前の家の小島巳三郎氏諸種世話をしてくれたれば今夜は同氏を招きて家族一同と共に食事す それとはなく卓に入営につきての激励をなす

二月一日

朝五時町内の人々卓の入営を送るとて門前に集合神酒に景氣づけて大宮小学校に至りこゝにて玄琢より入営ノ高橋某と二人の為に大宮聯合会の歓送会を開催六時半同校庭を出て上加茂バス停留場まで見送を受く生憎のみぞれは雨と変じ寒氣身にしむ一旦明の宅に立寄りて時間をまち七時半自動車にて出発明と小島巳三郎君見送の為同車八時過ぎ藤ヶ森神社境内に入り時間の来るを待つ八時半過ぎ附添一人を残して引取るやう説示に従ひ茲に卓に激励の語を与へて帰る明一人残れり午後四時前明帰り来る配將佐藤大佐九時前に藤ヶ森神社にて余を捜したる由なるも見当らず人をして卓の附添を捜し求めたれば明が之に応じて将校室に至りしに岡田部隊長及び三沢中佐に紹介し既に更衣したる卓を呼寄せて面会せしめられたりとのことなり厚志謝するに辞なし折悪しくも珍らしき雨天に当人も陰鬱を一入感ぜるなるべく家人もまた同様なり大転換のけふよりの新生活に心身を順応して見事国民の義務を尽すことを祈るや切なり  
夜十時二十五分発にて東上、荒木博士の葬儀に列する為なり

二月二日

昨夜戸田君と同車、十一時同君と同仁会の車を借りて青山斎場に至り十二時より執行の荒木博士葬儀に参列す高野の座主が衆僧を引率して葬儀を営みしがすべてが簡単且ついさゝか厳肅の氣に欠けたるを感じ遺憾なしとせず  
帰途田中館博士の車に便乗して文部省に寄り議會より帰り来れる永井局長と会談、勝と一時間を金春のニュース映画に過したる後三島君に招かれ勝と共に料亭中島に夕食、国分氏同席

二月三日

朝九時の燕にて出発、森島博士同車

二月八日

御香宮ノ射撃場ニ学生ノ実彈射撃ヲ見十一時過ギ青木配属将校の案内ニヨリテ  
卅七部隊ヲ訪ヒ支那文学出身ノ市原中尉ノ部屋ニテ其ノ所属下ニ在ル卓ヲ呼ビ  
テ面会ス入營後正ニ一週日ナリ既ニスツカリ兵隊規律ヲ吞ミ込ミ入室退室ノ際  
ノ高声ノ挨拶挙動入營前ニ比シテ全ク別人ノ如シ善キ修鍊場トイフベシ僅の日  
数ニ既ニヤ、肥満シタルヲ認ム市原中隊長代理モ本人ノ甚ダ元氣ニテ精勵シ居  
レバ安心スベキヨウ懇切ニ語リクレタリ

二月十日

マレー半島ヲ南下シテジョホールバルを占領したる皇軍は八日夜ヨリ九日に  
かけて遂にシンガポール上陸を敢行し九日午前零時二十分その西北に当る地の  
上陸に成功したりと大本營ヨリ發表ス

二月十一日

九時拝賀式

小島小竹両氏ヲつる家ニ招き夕食小島氏には送別小竹氏には昨年来ノ滞京中  
かゝる機会を得ざりし為なり

三島海雲君来泊

二月十二日

理学部郡場、川村、駒井三氏ト会见養内助教授ノ身上ニ関スル説明ヲ聞キ処置  
ヲ考フル為ナリ

谷口工業奨励会ヨリ谷口氏及ビ坂田氏等来リ自然科学関係ノ教官ヲ招キテ同会  
ノ性質ヲ説明シ京都ホテルニテ夕食、サイクロトロン設備ノ為寄附行為ノ前提  
ナリ

中座シテ瓢亭ニ招ケル三島君及び加藤君と会食

此日藥学ノ高木氏図書館ノ山鹿氏共ニ夫人ノ為告別式ヲ挙ゲタルニ参列両家共  
ニ急性肺炎ニテノ不幸ナリ

二月十三日

朝三島君東京ニ帰ル

学生主事四氏ト会シ学生訓育問題ヲ攷究

二月十五日

道代董ト共ニ卓ニ面会ノ為兵營ニ行ク

此日夕七時 分新嘉坡守將パーシバル遂ニ白旗ヲ掲ゲテ降服ヲ申入レ山下マ  
レー軍最高指揮官ノ陣營ニ来リ今夜十一時半ヲ期シテ全軍抗戰ヲ止メ全面的降  
服ヲ約スシ島ニ皇軍上陸以來七日目ナリ富ト人力トヲ竭シテ固メ難攻不落ヲ以  
テ誇リタル大要塞モ多年ノ暴圧ニ憤恚ノ焰ヲ燃シ骨髓ニ徹スル恨ヲ抱ク皇軍ノ  
銳鋒ノ前ニハ脆クモ数日ヲ出デズシテ潰滅シ了レリ世界史一転ノ第一頁ハ実ニ  
茲ニ掀セラレタリ

寒氣強ク時々雪降ル

二月十六日

京都日伊協会定款案ニツキ齋藤黒田氏ト会见

永井浩氏ニ書面ヲ出シ民族研究所長候補者トシテ高岡熊雄博士然ルベキヲ申送  
ル

二月十八日

午前十時府市商工會議所主催建礼門前ニ举行ノ第一次祝捷会ニ出席

午后零時十分ヨリ大学本部玄関前ニ於テマタ学内ノ祝賀会ヲ举行了リテ吉田神  
社ニ参拝皇運ノ無窮ト大東亜戰今後ノ勝利ヲ祈願ス七学部長及ビ学生代表参加

朝河原宗教局長ヨリ電話

二月十九日

評議会

二月二十日

杉村齋藤両氏来訪杉村氏ハ東京ヨリ帰満ノ途ナリ夕両氏ニ田村外山両君ヲ加へ  
つる家にて晚餐

下村正太郎氏早朝来訪黒川氏（K、B、S）ノ事ニ付キ談示アリ

董甲南高校入試ノ為早曉同校ニ行ク

二月二十一日

加藤昇三氏を見舞ひ、加藤清一氏より依頼の吉益正次氏の調書を渡す

夜技術院総裁井上匡四郎氏ノ招ニ応ジ都ホテルニ行キ夕食ノ席ニ列ス新設同院  
ノ披露ノ意ヲ込メ私的ニ工理教官ヲ招キタルナリ食後佐波同院第二部長海軍大  
佐ノ海軍飛行機発達署史ヲ聴ク大正八年霞浦ニ生声ヲ拳ゲタル以後ノ血ノ出ル  
如キ苦心談ナリ此ノ大戦ニ目ザマシキ功果ヲ奏セルモノ実ニ偶然ニ非ルヲ知り  
苦心ニ対シテ敬虔ナル感謝ヲ禁ズル能ハズ

二月二十二日

道代卓ニ面会ニユク

新京杉村君帰満ノ途滞洛ノ処明日出発トテ挨拶ニ来訪

二月二十三日

薫一次試験通過体格検査ヲ受ケタル由

二月二十五日

董甲南高校ニ入学許可ノ旨同校ヨリ電報シ来ル夜池内一君三高卒業帰東ノ為宅  
ニ招キ家内一同ニテ夕食

二月二十六日

午后一時卅六分燕ニテ東上

天野君ニ電話ニテ始メテ董受験ノコト及ビ入学許可ニツキテノ挨拶ヲナシ二日  
入学式ノ出席ハ絶対的ナリヤ否ヤヲ聞ク絶対条件ニテ欠席スレバ入学取消ノコ  
ト、ナリ居ル旨返事アリタリ

二月二十七日

午前十時ヨリ学士会館ニテ学振第十五小委員会開催

午后情報局ニ箕輪氏ヲ訪問シタルモ外出シテ国際文化振興会ニ在リ電話ニテ同  
氏ニ京都日伊協会会長就任ノ挨拶ノ為来訪ノ意ヲ伝フ明日午后更ニ都合ヲ計リ  
テ会見ノコトニ約束、引続キ黒田常任理事ニ伊太利学生ベンチヴェス学資補助  
ノコトヲ相談履歴ヲ郵送シ同氏ガ九日入洛ノ際委細ヲ相談ノコト、ス

文部省ニ永井氏ヲ訪ヒ七学部ノ南方研究会ノ情況及ビ農経ノ現情勢下ニ於ケル  
緊急施設要求ノ大概ヲ話シテ計画案ヲ渡シ更ニ他学部ニモ種々計画アレバ追加  
要求ヲ臨時議会ニ出スベキコト而シテ此等ノ要求ニ対シテハ文部当局ニテ充分  
尽力シテ其ノ実現ヲ企図スルニ非レバ文部以外ノ他ノ機関ヨリ大学ノ教官トノ  
諒解ヲ基トシテ同様ノコトヲ文部当局ニ迫リ其ノ結果トシテ当局ニテハ之ヲ承  
認セサルヲ得サル如キ醜キ有様ニ立至ルコトナキヲ保シ難キ旨ヲ繰返シ話シ置  
キタリ

小委員会ノ来年度経費節減案ガ学振当局ニテ考ヘタル原案トナリテ明日ノ常置  
委員会ニ諮ラレルト聞キ文部省専局長室ニ学振ノ井上主事ヲ招キ事情ヲ聴取セ  
ルニ過般波多野氏トノ相談ニテ予定ノ一八、〇〇〇円ヲ一三、〇〇〇円ニ切下ゲ

タル経過ヲ知ラズシテ他ノ委員会ト同列ニ既定経費ノ七割即チ一三、〇〇〇円ノ七割トナサントスルモノナルコト判明、井上氏ニ事情ヲ説明シタル結果夜林次長ニ電話ニテ此ノ経過ヲ説明同氏ノ諒解ヲ得波多野氏トノ諒解ノ如ク一三、〇〇〇円ニテ進ムコト、ス

夜三島君ト銀茶寮ニ会食

## 二月二十八日

十時ヨリ学振第二常置委員会

午后三時過ぎ箕輪氏ヲ情報局ニ訪ヒ広瀬課長、堀部長トモ会见日伊協会ノ為ニ挨拶、協会ニ対スル援助ハ多分五〇〇〇円程度ナルベキガ協会ノ日伊文化研究会事業タル聖徳太子憲法翻訳ノ費用ノ一部トシテ援助申請ヲ為スコトガ望マシク至急ニ差出サレタキ旨箕輪君ヨリ話アリ、又此ノ費用ハ判然援助費ガ予算ニ計上セラレル迄ハ機密費ヨリ支出セラルベク從ツテ年々右ノ如キ形ニテ何カ定メラレタル事業ニ対スル援助トシテ申請シ考慮セラルベキナリトノ話アリタリ

時野谷ヲ訪フ、折角来レル女中病臥慘憺タル光景八時同家ヲ辞シ九時二十五分發ニテ出發帰洛

## 三月一日

八時京都着 午後一時半開会ノ荒木前総長追悼会ニ出席

小川医部長ニ兼テヨリノ問題医学部学生増募ヲ無予算ニテ実施シタキ件ハ本年ニ限り或ル数(出来ル限り少数)ノ増募ハ止ムヲ得ザルベシト諒解ヲ与ヘ置ケリコレハ文部省ニテ春山氏ト会谈その例トシテハ東大ニ此ルコトアリシコトヲ知り、又コノ度目下ノ事情上止ムヲ得ズ經費ヲ学部支弁ニテ弁ジ置クモ之ヲ楯ニシテ当局ガ正式ニ増員ヲ要求スル時同様ニ自弁シテ為セト主張スベキコトハ万無カルベシト聴取シ目今ノ欠員状態ヨリカクスルヨリ外ニ方法ナシト考ヘタルニ由ル

那波宮寄両氏来訪東亜研ニテ五日上京東京側ノ西力滲透史関係ノ向ト会谈ヲ望ム旨ノ来書アリタルヲ告グ十二日六時過ぎヨリカ十三日中ナレバ同意ノ旨宮寄氏ヨリ返事ノコトトス

谷口教授来訪海軍高木大佐十一日来訪シタキ由申込アリタリトノコト承諾

## 三月三日

国際文化振興会懸賞論文当選者として北京より来遊の梁盛志君及び秘書劉君とアラスカに午餐梁君は曾て東大大学院に学び今北京師範大学副教授の任にある人篤学の士なり

## 三月四日

午后辻名誉教授と共に住友本社に至り北沢理事に逢ひて體質研究所への寄附援助を依頼す寄附願に出かけるのは好ましき仕事にあらず

董東京に行く

朝日亜細亞語学叢刊に序を書き上ぐ

## 三月五日

朝九時武者小路宗秩寮総裁来訪久邇宮家彦王御降下につき時期を定めたく何時頃にすれば御卒業の為に最も差支なかるべきか、御成績の真相及び東伏見伯の近状を聞きたしとの用向なり何れも取調べの上返事すべきを約す

けふ評議会と部長会議開催

## 三月六日

朝理学部に至り吉田荒勝両教授に逢ひ家彦王殿下の件につき聞き合す帰途官舎に寄り畑地を見る日蔭の僅の面積失望す

丹波村出身井上君夕方来訪

三月九日

今夜董東京ヨリ帰宅

三月十日

昨三月九日蘭印全部降服セリト新聞報ズ一日爪哇上陸八日ニシテバンドン地域ノ降服ヲ申出デ蘭印全部ノ降服ヲ迫ラレタル結果九日朝其ノ実現ヲ見タルナリ  
神速真ニ驚嘆ニ堪ヘズ大東亜戦ハ茲ニ一期ヲ画セリトイフベシ

辻国手ニ依頼シ幸子ノ診察ヲ請フ左部依然不良右部故障無シ營養甚ダ良コノ儘  
安静ヲ保ツベシトノ事ナリ

下鴨兄危篤ノ報ニ接シ直ニ見舞フ既ニ意識不明瞭時間ノ問題ヲ残セルノミト医  
師宣ス施スニ術ナキヲ長嘆ス

三月十一日

朝下鴨ヲ訪フ容態益々悪シ

午時前下鴨兄雄永眠ノ報ニ接ス直ニ同家ヲ見舞ヒテ永訣

三時ヨリ海軍調査課長高木大佐ト総長室ニ会談各学部長列席、各学部ニ成立モ  
シクハ成立シツ、アル南方研究会トノ間ニ連絡ヲ話合ヒ夕景ヨリ鶴屋ニ会食  
八時前三度下鴨ヲ訪ヒ六時到着ノ峯山ノ兄及ビ相国寺ノ兄等ト後事ヲ談合十二  
時過ギ帰宅

三月十二日

朝下鴨ヲ訪ヒ今日午後東上ニツキ明日ノ葬儀ニモ列シ得ヌコトヲ断ル遺憾千万  
ナリ

一時卅六分発ニテ東上

三月十三日

朝文部省ニ至リ永井局長ト会ス

正午ヨリ東亜研究所ノ打合会ニ列席京都ヨリ宮寄氏出席東京側ヨリ神川、植田、  
英三氏出席原理事福田氏及ビ今一人ト合シテ西力滲透史ヲ東京ニテハ西洋文献  
ニ基キテ研究ヲ始ムル為京都側ト会談打合ノ為ナリ

帰途富山房ヲ訪ヒタレド皆不在

今夜九時廿五分発ニテ帰ル

三月十四日

一時半過ギ海軍教育局長徳永少将随員野田大佐及ビ島中佐来訪

文部省小林事務官来訪図書館建築進捗方針ニツキ事情ヲ説明シ置ケリ

佐藤大佐来訪卓昨日幹候試験合格決定セルヲ岡田部隊長ヨリ聞キタリトテ通報  
ヲ受ク、卓ハ十二日余ノ不在中雄兄ノ訃ノ通知ニヨリ外出ヲ許サレ一寸帰宅シ  
タル由今朝帰宅シテ聞ケリ、過日来足ノマメガ膿ミテ休ミ居レリトノ事ナリ  
夜徳永局長ノ招宴（鶴屋）

三月十五日

朝十時中西亀太郎博士ノ告別式ニ列ス、十二日遠逝ノコトヲ東京ノ新聞ニテ知  
レリ

ソノ帰途ニ下鴨吉村ヲ訪ヒ院号戒名ノ主ニ変リタル兄ノ霊前ニ額ク

村上一男ハルピンより帰り来リ吉村宅ニ在リ久振リニ逢フメステイソ一人ヲ伴  
ヘリ人間ノ進路真ニ計リ難キヲ思フ

三月十六日

道代董ト共ニ甲南高校ニ行ク止宿ノ場所ヲ求ムル為ナリ夜ニ入りテ帰り来ル僅  
少ノ高校生ニ許ス寮生活モ思ハシカラヌ模様ナリ



新村黒田二氏ト会谈日伊協会ノ聖徳太子憲法飜訳着手ヲ促ス箕輪氏ヨリ先日コ  
ノ事業ニ対スル情報部援助ヲ求メタルニ対シ本年度三〇〇〇円支出決定を内報  
シ来レルニヨリ急ニ事業開始ヲ求メタルナリ

三月十七日

午后芦屋ニ董ヲ伴ヒ貴志家ヲ訪ヒ当分薫ノ止宿ヲ依頼シ快ク承諾ヲ得タリ

三月十八日

電話交換ノ有様ヲ始メテ視察ス

三月十九日

評議会

三月二十六日

大橋理祐氏張満洲国特派大使ヲ招待ニツキ招カレテ鶴屋ニテノ晩餐会ニ出席

三月二十七日

夜京都ホテルニ府市師団会議所主催ニテ張大使一行ヲ招キ晩餐

三月二十八日

卓外泊ヲ許サレテ帰宅ス董モ芦屋ヨリ帰宅ス

昼張惠景特派大使ニ招カレ都ホテルノ午餐会ニ出席久振リニ時代離レノ盛宴ナ  
リ

夜K、B、S、地方委員会ヲ開キ東京ヨリ来京ノ黒田理事ヲ迎ヘテ来年度予算  
ト事業ヲ議ス

三月二十九日

卓一時過ギ帰ル董夜帰ル

貴志博之助君来訪

三月三十一日

朝岩井大慧君ヨリ白鳥先生危篤ト電報シ来ル次イデ一時頃更ニ白鳥清氏ヨリ父  
卅日死スと電報アリ危篤ハ実ハ薨去ナリシヲ知ル近來経過良好ノ由岩井君の近  
信ニモ見エ春トモナラバ一層回復モ著シカルベキコト、思ヒ居リタルニ意外ノ  
凶報ニ愕然トシ深キ悲嘆ヲ禁ズル能ハズ明日ハ宣誓式明日ハ工学部繊維化学  
ノ記念会等ノ為弔問ノ上京モ為シ得ズ電報ノ悔モ自由ナラネバ只ダ直ニ弔問シ  
得ヌ旨ノ返電ヲ清君宛ニ出シ岩井君ニハ葬儀日取ヲ問合ス

四月一日

池内氏ヨリ速達来リ白鳥先生卅日夜十時薨去、辻堂ニテ火葬シテ東京ニ歸リて  
喪ヲ発スル旨岩井氏ヨリ電話ありたりとのこと急変が起りしものと見ゆ

夜久野の村田文蔵氏ノ末子ソノ従妹ニ当ル安達 ヲ伴ヒ ノ兄 ト共ニ  
来訪

昨年以来勤メタルよし子岡山在ニけふ帰る

此日朝九時ヨリ本年度入学生ノ為ニ宣誓式挙行

四月六日

朝七時半ノ富士ニテ東上白鳥博士ノ明日ノ葬儀ニ列シ永訣申上グル為ナリ一旦  
宿ニ落ちつき更に同家ヲ訪ヘバ早モ寒キ雨空の夕闇迫る六時ナリ既ニ白骨ト化  
シ去ラレタル白布の箱ノ上方ニ生キサセ給フ如キ写真ヲ仰ギ見テハ世ニ在セシ  
時ノ追懷セラレテ悲シトモ悲シ明治三十七年東大ノ講堂ニ初メテ颯爽タル風貌  
ニ接シタリシヨリ三十八年厚キ教導ノ恩誼ニ報イマツルコトノ薄カリシコト今

更ニ恥カシクモ申訳ナシ今宵ハ前夜祭トテ神式祭事ノ行ハル、ニ列リ九時半頃  
通夜ヲ了リテ帰ル和田石田岩井橋本加藤繁原田ノ諸氏ヲ初メ若キ東洋史出身者  
等多数通夜奉仕セリ池内君風邪引籠ノ為参列シ得ズ

#### 四月七日

朝文部省ニ至リ永井局長 会計課長有光秘書課長等ニ逢ヒ勝ト共ニ昼餐  
零時半青山斎場ニ至リ白鳥博士ノ葬儀に列ス時節柄ニ故博士ノ意向モ加ハレル  
カ祭壇ハヤ、寂シキニ過ギタリ学士院長東京大学ニツイテ京大史学科代表那波  
氏ト三弔辞朗読セラレシモ何レモ直接ノ縁故者ナラザル為カ悲痛ノ情緒ニ欠ケ  
タリ他日追悼会ヲ行ヒ門下悲嘆ノ情ヲ尽サル可ラズ  
池内君ヲ病床ニ訪ヒ葬儀ノ模様ナド話ス夜三島君ト銀茶寮ニ会食

#### 四月八日

朝九時発ニテ帰ル織田博士同車

#### 四月九日

朝東京南?ナルモノヨリ電話アリ、留守中ニモ電話アリテ是非急ニ逢ヒタシト  
ノ事ナリシ由、面会ノ趣旨ヲ聞ケルニ頭山満翁ヨリノ使ニテ余ニ対スル批難ニ  
ツキテ逢ヒタシトノコトナリ大学ニ至リ書記官ニ逢ヒテ用向ヲ話シ置クベキヨ  
ウ返事ス下手ナ強請手段ナリ終日大学ニモ来ラズ

天野君より勝ヲ甲南高校ニ迎ヘタキ故勸説ヲ頼ム旨話アリ、近ク上京ノ時ソノ  
旨本人ニ伝フベキ旨返事シ置ケリ之ヲ西田直君ニ相談シタルニ賛成ノ意向ナリ

#### 四月十日

朝長尾雨山氏邸ニ弔問、四日死去六日葬儀ヲ営ミタルナリ

此頃何ぞ不幸ノ続出スルヤ午食時宅ヨリ電話アリ東京時野谷ヨリ「今朝八時直

子死ス」云々ト電報シ来リトノコト去る七日勝ニ逢ヒタル時今朝足痛ヲ訴ヘ  
ル故医者ニ伴レ行ケリトノ事ナリシガサシタルコト、モ思ハザリシニ綾子ヨリ  
昨日ノ手紙ニ其後も苦痛止マズ然シ医者ハリユーマチスにて氣に懸ける程ノコ  
トナシト云ヒ居レリト見エシニ今此ノ悲報ニ接シたいけの可愛らしき姿ヲ思  
ヒ出シ悲嘆ニ堪えず道代今夜九時十四分発ニテ上京ノコト、ス時野谷夫人ノ来  
訪ヲ求メ善後処置ニツキテ考ヲ聞カントセシモタゞ病人(時野谷君)ノ病勢ヲ  
昂進センコトヲノミ恐レ遺骨ヲ引取ルコトノ意志モナシ兎モ角密葬ヲ一両日中  
ニ済マセ勝君ガ一旦帰リテ夫人ト相談スルガヨカルベシトテ返ス明后十二日ニ  
ハ余モ東上スルナレバ万事先方ニテ相談スベシトイヒ置ケリ

#### 四月十二日

午前九時半燕にて東上、五時半着

八重洲橋大和にて富山房坂本氏はじめ大橋青木佐寺諸氏と和田石原、市子京都  
よりの外山野上と余と会し辞書編纂の相談を終り食事後八時半頃より時野谷を  
弔問けふ既に密葬して小き白箱中の遺骨と化せる可憐の直子の前に香を焼き薄  
命を弔ふ若き両親の心中を思ひやればこらえむとすれど不覚の涙の湧き出づる  
を禁じ難し風雨の中を十一時過ぎ学士会館に帰る

#### 四月十三日

十時より丸ノ内会館に開催の東亜文化協議文学部会に出席錢氏以下と会す午後  
学士院ニ至リ東亜民族調査委員会に出席

五時半より芝愛宕下嵯峨野に於ける東亜協議会文学部懇親会に出席

#### 四月十四日

朝文部省に有光氏を訪ひ有浦事務官の件の進行情態を聞きしに既に後任も出来  
前田氏にも書面を出す処なりとの事長壽のこと秋田のことなど重ねて同氏に話

し置きたれどまづ見込なきが如し

近藤氏に立話す同氏と明朝宿にて会談のことを約す

転じて午時時野谷を訪ふ

午後三時東大に至り東亜文化協議会理事会に出席

夜、紅葉館に於ける協議会の宴会を断り三島君と銀茶寮に食事

#### 四月十五日

朝近藤君来訪大東亜史編纂につき方針を聞く同氏近く入洛更に具体的に相談の  
由

正午勝と丸ビル内にて食事一時発カモメにて帰西

#### 四月十六日

評議会、部局長会議 防衛委員会

本田学芸課長来訪京都ホテルに夕食

#### 四月十七日

有機合成化学研究所日本化学維<sup>(繊維)</sup>織研究所決算報告会議了りテつるやにて食事

少しく風邪の気味なり

#### 四月十八日

朝風邪微熱あり籠居静養午後八度六分に上る二時半空襲警報に驚かざる道代東  
京午后一時発のかもめにて帰る予定なり途中空襲関係にて汽車ノ運行如何なら  
んかと案ぜらるる大学に電話し駅にかもめの着車時刻を聞かせたるに平常通り着  
の見込とのこと一先づ安堵

董夕景帰り来る甲南高校の空を外国飛行機一機悠々飛過その後にて警報発せら  
れたりと報ず八時四十分到着の筈のかもめは十時前に漸く到着、十時半頃道代

無事帰宅その話によれば名古屋通過の時なほ火の手盛に上り居りたりと五時間  
近くを経過してなほ鎮火せざるより見ればかなりの被害と思はる

#### 四月十九日

風邪殆んど回復正午すぎ食事中空襲警報あり直ちに登学防衛の様子を見る日曜  
の事として学生の集り方なほ満足の情態ならず

五時京都ホテルニ市村博士を訪ひ滝、辻、佐々木博士等と共に明後廿一日無隣  
庵に招待夕食を供し度旨話し快諾滝氏は大阪に先約あり佐々木氏は明朝帰東と  
のことにて市村辻両氏来会を約せらる狩野新村西田氏を併せて招くこと、せり  
五時半より鶴屋に上海国立大学校長張氏及び随員を招待晚餐

#### 四月二十日

けふ午後荳屋貴志家を訪ひ書籍を皇学館に売渡の条件につき相談す小西君より  
全部を二万円二年度分納を求め来れる旨を伝へ余の案としては二万三千円とし  
残余一万余は寄附ノ形としては如何といふにあり生駒君も他の家族も同意せり

#### 四月二十一日

朝来微熱あり昨日雨中を半癒情態にて荳屋に行きし影響かと思はる三時過ぎに  
は熱も下りたれば折角招待したる老先生達の会合にもあり用心しながら無隣庵  
に向ふ隣の紫影老博士をも招き同車す途中植物園附近にて空襲警報を聞く一応  
大学に立寄り電話にて先発の書記官と連絡ともかく会場に至り書記官を大学に  
帰らすことにす、学生も職員も既にそれ／＼部署につけるは頼もし無隣庵は遮  
光装置なき故黒幕裡の瓢亭座敷にて会食

六時前空襲警報解除

市村辻狩野新村藤井西田諸氏皆来会八時頃散会帰宅

三七部隊軍旗祭に卓より入場券を送り来れるにより道代訪隊

四月二十二日

文部省教学局ノ志水課長ト時野谷勝兩人来訪東亜史編纂ニ関シ意見ヲ徴スル為ナリ暫ク話シタル後人文科学研究所ニ高坂氏ヲ訪ハシメテ（予テ余ヨリ此事ヲ通ジ置キタリ）入レ替リニ森本寛三郎氏ニ応接、同氏ハ明夕出発鮮滿北支等ニ旅行ニツキ紹介ヲ求メ来レルナリ昼京都ホテルニ至リ同氏ト会食午后三時志水氏等又来訪更ニ明日人文東洋史兩関係者ヲ集メテ談ジ合フコトニス  
勝君今夜来訪

四月二十三日

午后高坂安部那波宮崎田村氏等ト共ニ志水氏等ト陳列館ニ会談ニ時間余相談、一先ヅ此ノ程度ニテ引上ゲ多少トモ具体的編纂方針ヲ書面ニテ送ルコトニシテ解散  
三時又警戒警報出ツ暫クシテ解除

四月二十四日

山田皇学館大学学長来訪貴志家藏書ヲ同館ニ引取ニツキ相談ノ為余ヨリ入洛中ノ同氏ニ電話シテ面会セルナリ洋書評価三万三千百円（第四部音楽ヲ除ク）ニ対シ二万円ニテ引受ケタシトノ小西氏ヨリノ申込ニツキ前記（二十日参照）ノ如ク話シタルニ山田氏ハ快ク満足ノ意ヲ表シ運賃運送法税等ニツキ協議ノ上急ニ小西氏カ佐藤氏ヨリ派遣スル旨告乍ラ去ル三田村ヲ学部ニ依頼ノ希望ナリトテ余ノ意見ヲ徴セラル賛成ノ旨答ヘ置ケリ

昼同学会部長会合

今夜勝来訪夜十時前出発帰東

董婦リ来ル

四月二十五日

靖国神社大祭聖上御親拝ノ日トテ休暇  
終日籠居暫振リニ閑居ス  
有浦新任事務官来訪

五月二日

綾子小供ヲ連レテ東京ヨリ来ル明日直子ノ納骨ヲ営ム為ナリ

五月三日

午后二時天寧寺ニテ直子納骨式終リテ真如堂ノ墓ニ葬ル悲痛極リナシ、夕瓢亭ニテ食事ス峯山吉村来リ列ス  
卓式ニ列スル為外出ヲ許サレ歸リ来ル子供五人皆集ル勝モ来リ共ニ撮影ス

五月五日

卓外泊ヲ許サレ帰来

五月六日

七時半頃卓帰営ス

五月八日

五日夜ヨリ六日七日ニカケテ珊瑚海ニテ我が海軍英米軍艦ト戦大勝、米航母二隻戦艦一隻轟沈、英戦艦一隻大破甲巡一隻大破ト報ズ

五月九日

今朝卓京都駅通過豊橋教導学校ニ入学ス、道代明綾子等駅ニテ見送ル

五月十日

近衛公爵ニ招カレ大市ニテ夕食、狩野、石井、荻野、水谷川、田中氏等（外ニ公爵従者一人）同席

五月十一日

燕ニテ東上

五月十二日

朝人文科学資料研究会議

二時ヨリ学士院東亜民族調査会及ビ例会ニ出席

夜宿ニ勝来訪

五月十三日

朝文部大臣官邸ヲ訪フ大臣ハ文部省ニ在リト聞キ十一時半文部省ニ至リテ大臣ニ面晤、先日ノ学生起訴事件ニ対スル戒告ノ書面ニ付キテ対談、アノ書面ニツキテ適當ノ処置ノ攷究ヲ求ム、尚ホ先般教學局長官ノ名ニテ通知シ来レル治安維持法ニ触レ除籍セラレタル学生ノ復学不許可ノ扱ニツキテモ教育者トシテノ立場ヨリ賛成シ能ハザル旨ヲ述ブ大臣ハ司法部内ニモ兩派ノ意見アリテ一致セズ近ク歸一セシメテ新タニ通告スベキ旨ライヒ所用ノ為倉遑トシテ出デ去ル、有光課長ニ大臣ト対談ノ要旨ヲ話シ置キ戒告書ノ始末ニツキテモ適當ノ処置ヲ求メ置ケリ

午后白鳥博士ノ墓ニ詣ツ雜司ヶ谷墓地ヲ岩井君ニ聞キシヲ便リニ探セド分ラズ止ムナク附近ノ茶屋ニ案内ヲ乞ヒテ墓前ニ額ク追懷ニ耽ムヲ暫シ低徊去ル能ハズ

五時永井局長来訪、學術教育連絡會議委員ニツキテ諒解ヲ求メラル

夜新橋清水ニテ三島君ノ饗応ヲ受ク華甲寿会ナリ会スルモノ国分、近藤、沢井、

加藤、三島諸氏ナリ

五月十四日

昨夜九時廿五分發今朝八時帰着

午後大学ニ行ク

五月十五日

太田君岩井武俊君ノ發起ニテ予テヨリ余ノ華甲ヲ祝スル小人数ノ会ガ準備セラレ今夕木屋町中村樓に招カル来会主客共ニ九名發起兩君ト大谷瑩誠、田中二郎、内藤乾吉、上野精一、瀬戸保太郎、武田銳太郎諸氏ナリ厚志真ニ謝スルニ辞無し過ギ去リシ六十年他人ノ六十年ハ長キヤウニ思ヘド自カラノハ一夢ノ如キ思ナリ、六十年カ、ツテ何ヲ仕出カシタリシカニ想到スレバ今更ニ遺憾ナレド何トモ致方モナシ早ク閑ヲ得テ自分ノ畑ノ仕事ヲ済マセタキモノナリ

五月十六日

太田岩井兩君ヲ訪ヒ昨夜ノ礼ヲ述ブ

五月十七日

綾子一時卅六分燕にて東京に帰る

朝御室松本祐君より電話あり父庄三郎君今朝死去セリト伝フ如何トモ医療ノ方  
法ナキ喉頭癌ヲ病ミ昨夏以来星野教授ノ尽力モ遂ニ功無カリシハ遺憾ナレド致  
方モナシ午后同家ヲ弔問ス

五月二十日

今夜東洋史研究室ヲ中心トシテ同学ノ士廿数名木屋町銀龍閣ニ余ノ為華甲寿筵ヲ張ル



五月二十一日

卓病氣入院ヲ報ジ来ル

五月二十二日

青少年学徒ニ賜ヒタル勅語奉読式ヲ午后二時ヨリ運動場ニテ舉行分列式

三時半過ぎ大学ヲ出デ大毎ニ講演ノ為下阪、中島大毎支局長同行、夜九時半頃  
帰宅

五月二十三日

卓ヨリ軍医診断ノ結果大シタコトニ非ズ二週間程ニテ退院ノ由ト報ジ来ル  
四時ヨリK、B、S共栄圈内留学生招待会ヲ京都ホテルニ開ク東京黒田常務理  
事来会

五月二十四日

今日ノ新聞ニ出石誠彦氏病死ノ報見ユ過日白鳥邸ニテ奔走セルヲ認メタルニ意  
外千万ナリ。

終日休養

五月三十日

皇学館六十周年記念及ビ皇学館大学昇格祝賀式ニ参列ノ為宇治山田ニ行ク寺田  
随行

式後両宮ニ参拝、鳥羽待月館ニ泊ス

夜小西、佐藤両君来訪

五月三十一日

朝鳥羽ヲ出デ豊橋ニ卓ヲ見舞フ

午後二時過ぎ漸ク着渥美電車ニテ陸軍病院分院ニ至リ面会元氣衰ヘズ様子変リ  
無ケレド微熱去ラズトテ屈託顔ナリ氣ノ毒ナレド致方ナシアセラス静養ヲ勸メ  
テ帰ル夜八時過ぎ帰宅

六月六日

夜千葉君来訪作田副総長辞任新総長十五日来任ニツキ出来レバ直チニ建大ニ帰  
任ヲ求メ来レルガ如何センカトノ相談ナリ兎モ角電報ニテ終講後帰任ニテハ都  
合悪キカラ聞キ合セテ然ルベキヲ答フ  
徳雲坊夜来訪太田君ノ楊キ妃画ニ長恨歌の一節ヲ昨夕書キナグリ置キタルモノ  
ヲ持チ帰ル明日貴志君七回忌繰上ゲ茶会ニ掛ケル為トノコトナリ

六月七日

武田鋭太郎君来訪父君ノ名ニテ還暦祝トシテ花瓶ヲ贈ラル折柄来合セタル水野  
氏及ビソノ男児ト共ニ瓢亭ニ昼食

六月八日

十時卅分海軍省軍需局長御宿好中将来訪小松教授ノ割愛ヲ求ム十一日帰学後返  
答スベキ旨答フ

一時卅六分発燕ニテ東上明後日ノ民族研究所開設準備委員会ニ出席ト教学局ヨ  
リ相談ヲ受ケツ、アル大東亜史編纂ニツキテ近藤指導部長等ト打合せ及ビ文部  
関係雑件（医学部最少人員ヲ徴集ニ対シテ確保、外国留学生実習関係等）処理  
ノ為ナリ

六月九日

朝近藤氏ト鈴木俊君（大東亜史編纂ノ為文部嘱託トシテ入レル人）来訪先般高  
坂君ノ持チ行キタル京都側飯案ニ対シテ之ニ基ケル修正案ヲ提示且ツ編纂嘱託

12人中主任四人ヲ早急ニ定メタク東京側ニテハ鈴木浜口ヲ推シタシトノコト

昼三島君及ビ丁度来訪ノ田中経太郎君ト別ニ国分、片岡(満洲カルピス)君等ト共ニ三島君ニ招カレ帝国ホテルニ昼食

午后二時ヨリ宿ニテ和田君ノ来訪ヲ受ケ大東亜史ニツキテ懇談、談中兼テ聞込メル浜口氏ノ件ニツキ詳細ヲ聞ク

夕景時野谷訪問、敦氣分少シ悪シトノコトニ見舞ヲ兼テノ訪問ナリ大シタクト、見エネド翌日慶応ニユキ池内君紹介ノ中村氏ノ診察ヲ受ケルトノコト

## 六月十日

朝東亜研究所ニ原理事ヲ訪ヒ過日提出セル史料翻譯稿ノ出版ニツキ話合フ

午時前文部省ニ至ル有光秘書課長ヲ訪ヒタルモ病氣欠勤午食ヲ勝ト共ニ重細重ニトリ再ビ文部省ニ至リ近藤部長ニ逢ヒ和田君ト面会ノ結果同氏モ歪曲ノ歴史ヲ作ル積リニ非ルナラバ参加スベシトイヘル旨ヲ伝フ三時ヨリ文相官邸ニ開会ノ民族研究所開設準備委員会ニ出席

会後永井局長ト会談、一昨日ノ記事ニ書置キタル雑件二件ヲ談合

池内君ヲ訪ヒタル後九時廿五分発ニテ帰ル

池内君より更ニ浜口問題ヲ聞ク和田加藤対池内ノ対立困ったものなり

## 六月十一日

朝八時帰洛 十一時出勤

一時ヨリ評議会。法学部宮本教授ノ名誉教授推薦ヲ議ス昭和八年ノ法学部事件ニ際シ一時退官シタレバ在勤年数ハ廿二年余ナレド勤続ニ非ズ法学部教授会ニテ正規ノ手続ヲ経テ推薦シ来リタル故之ヲ評議会ニ諮リタルナリ結果出席者二十名全部可ニテ可決之ニ関連シテ退職賞与モ勤続ニアラネド事情ヲ斟酌シテ百個支出シタシト議長ヨリ提案全部賛成ニテ可決セリ

## 六月十二日

午后田辺君総長室ニ来訪日高学生主事ト懇談シタルニ矢張り転任ノ希望ヲ捨テズ更ニ考慮ヲ勸メ置キタルモ留任ノ見込無カルベキ旨ヲ報ゼラル致方モ無キ事ナリ田辺氏ノ居中斡旋感謝ニ堪エズ

近藤指導部長ニ大東亜史編纂主任トシテ宮崎安部両氏ヲ推スコトニ速達ヲ出ス(寺田代筆、電話ニテ文句口授) 同電報ヲ明朝出サシム

## 六月十三日

日高氏来訪已ニ田辺教授ヨリ聴キタルト同ジ意味(即チ学生主事トシテノ仕事ニ堪エ得ヌコトガ主)ニテ転任ノ許可ヲ求ム只ダ余ガ在任期間タル十一月末マデハ在任其後モ事情ニヨリテハ一二ヶ月モ止リテ引継ニ差支ナキヤウニシテ去リタシトノ意中ヲ告ゲ余モ諒承シ置ケリ

卓ヨリ平熱トナリタル旨通知シ来ル

董婦り来ル

けふ水野長広両君国民文化協会ヨリ龍門ノ選賞ヲ受ケタル披露ノ宴ニ招カレ出席ノ筈ナリシモ多忙ノ為断ル

## 六月十五日

綾子ヨリ来書慶応にて敦診察を受けたる結果肺門淋巴<sup>(腺)</sup>線の病に罹れること明らかとなりたりとて悲感<sup>(感)</sup>し来る。親心想像に余あり

## 六月十六日

卓ヨリ葉書到着病氣之為遂に教導学校今期教育を免ぜられたり八月頃原隊に帰り次期に更めて入学の事となること致方もなき事なり回復の早からんことを祈るのみ

六月十七日

病院に至り服部教授に時野谷の子供敦の病容を述べその意見を聴く

六月十八日

創立記念祝賀式日なり二十年勤続表彰式記念式立食講演会夜は教官懇親会終日衆人との応接に過す

山田賀一教授今朝盲腸炎手術の後死去と沢村教授より電話あり

園教授来訪

佐藤大佐を煩はし豊橋教導学校の赤池大尉にあて、卓に廿円封入の手紙の手渡を依頼す一昨日卓より小使銭の送附を求め来れる故これを渡して貰ふ為なり

六月十九日

山田氏宅に弔問

朝官舎ニ長崎課長を招きその身上につき話す

下村氏来訪黒川の身上につきてなり

午後橋本農学部教授来訪

六月二十日

水野氏羊頭窪報告の序文原稿を手渡す

六月二十七日

母数日来衰弱加はり起居不自由なり新田氏を招きて診察をうくどこも故障はなけれど尿の検査をするとのこと夜董その結果をきゝて帰る萎縮腎ありとのことなり

六月二十九日

新田氏来診

高等学校長（三高四高六高広島松江）五氏五時より大学に来訪各学部長も集り高校年限短縮問題につき談り合ふ

此日長崎氏に会談、七月中にて辞する約束は出来ずといふ約束をすると心得ることの不可をいひ置けり此人全く事体<sup>(態)</sup>を了解する力なし園氏と夜電話にて話す曰く神経衰弱なるが如しと、衰弱には非ず平素よりかゝる人なるを誰もがあまり知らざりし為にけふまで地位を保ち来りしなり

六月三十日

昨夜来例の腹工合悪しく一日静養

新田医師けふ診察せる母の半身不随の情態を説明して少しづつ、溢血あるらしく多分望みなかるべしといふ今朝より新田氏の世話にて看護婦伊藤来る

峯山吉村兄母見舞ノ為来訪

日満文化協会美術展審査ノ為渡満ノ福田平八郎須田国太郎氏ノ為ニ祝宴ヲつるやに開く狩野松本両氏参加

七月一日

母けふは容態少し好し顔色もよくなり熱も平常

竹林氏を招き館長との行きさつを問ふ今日辞表を出す積りといふ出すまでに一応新村博士に心事を述べ置くこと然るべきこと注意す

天野氏東京阿部氏<sup>(安部)</sup>の伝言を齎して会見に来る、短縮問題につき余に大奮闘せよとの注文なり自分でやったらよからそうなものなり

七月二日

薬学科ノ製薬実験室ヨリ出火(午后五時過ぎ)同室平家木造百二十余坪二階(倉

庫)二十余坪ヲ焼失

峯山吉村兄来泊

# 七月三日

長寄君ニ重ネテ本月中ニ辞表ヲ提出スベキヲ論シタルニ尚ホ事体<sup>(理)</sup>心得ズ自カラハ之ヲ提出スル意ナク然モ当方ニテ処置ヲ取ラル、ナラバ止ムヲ得ズトノ返事ナリ依リテ重ネテ熟考セヨト論シ此上ハ更メテ此ノ問題ニハ触レズモシ月内ニ提出ナケレバ適當ノ処置ニ出ヅルコトヲ言ヒ渡シ置ケリ

大東亜史編纂ノ打合ノ為昨日入洛セル鈴木君ト宮崎那波氏等会合午后ソノ席ニ一時間程出席仮案ニツキ二三ノ注意ヲナシ置ク

七時一分警戒警報発令

# 七月五日

午后十時二十五分発東上滯暑烈シ

# 七月六日

昨日ヨリ暑サノ向特ニ烈シ

朝八時四十五分東京着綾子勝ト共ニ駅ニ来リ綾子ノミ宿ニ同行携帯ノ青物卵等ヲ持帰ル

昼三島君ト帝国ホテルニ会食

午后文部省ニユキ近藤君と東亜史ノ件ヲ話ス有光氏ヲ訪ヒシモ不在偶然山川氏ト会シ長寄ノコトヲ話ス山川氏ノ談中故意カ偶然カ余ノ真意ヲ誤解セルトコロアリ一応意中ヲ話シ置キシモ時間迫リテ委曲ヲ尽スヲ得ズ  
四時ヨリ文相官邸ニ開催ノ大東亜學術教育連絡協議会ニ出席

# 七月七日

黒田伯ヲ国際文化ニ訪ヒ黒川ノ件ヲ相談、初メハ本部ニテ引受ケル場所ナシトノコトナリシガ事情ヲ仔細ニ話スニ及ビ理事長ト相談スベキヲ答フ

文部省ニ至リ柴沼会計課長ニ薬学教室ノ失火及ビ理学部予算一部変更ノ件ヲ話ス有光氏ニ逢ヒ小島君ノ名誉教授ノ件、前田君ノ同伴、並ニ長寄君ノ件ヲ話シ合フ十月頃ノ実業学校移動ノ際ニ確カニハ約シ兼ヌルモ何トカナルベキヲイヘリ更ニ前回ノ戒告書件ニツキテマタ話シ合フ

昼黒川氏ニ招カレ西銀座ノ出井ニ昼食

夜三島国分氏ニ招カレ奈仁波にて夕食、国分氏画三島君賛ノ不老長寿ノ軸ヲ贈ラル勝同伴

# 七月八日

朝九時文相官邸ニ参集帝国大学総長会議ニ列席、七帝大ノ外朝鮮代リ台湾兩総長参加常ノ如シ大暑の中ヲ昼食一時間ノ休ミノ外五時迄継続、初日ヲ終ル、格別ノ事ナシ高校短縮問題ノ説明ヲ求メタルニ対シ午后大臣ノ出席後レ明日ニ持越ス

閉会後時野谷ヲ訪問敦顔色ハ悪ケレド格別ノ事ニモ非ルガ如ク見ユ

夜八時四十分頃■■■■ノ斎藤氏訪問

# 七月九日

朝九時半頃文相官邸ヲ出デ、参内西溜間ニテ少憩ノ後十時西ノ間ニテ一同列立拝謁御菓子ヲ拝戴シテ宿所ニ引取ル午后一時ヨリ前日ニ引続キ会議、四時過ぎ終了永井局長ト共ニ一旦文部省ニ至リ局長ニ過日会計課長ヨリ説明セル予算概算要求中一、病院歯科診療室設置、二、理学部量子力学及ビ素粒子論講座要求人文科学研究所拡張等ニツキ懇談一、二ハ諒承三八困難トノ事ニテ一応話ヲ切リ同氏ト共ニ芝愛宕町嵯峨野ニ於ケル文相招待ノ宴会ニ出席、同処ヨリ直ニ東

京駅ニ至リ九時廿五分発ニテ出発帰西

七月十日

昨夜暑氣ノ為寢苦シク疲労ヲ覺ユ午后大学ニ行ク  
昨日仁川ヨリ北尾英雄見舞ノ為来宅セリトテ滞在中

七月十一日

朝郡場氏ヲ招致連絡協議会ニテ交渉ヲ求メラレタル昭南植物園管理ノ事ヲ話シタルニ幾ラカ予感アリタリトテ即座ニ承引、タゞ希望ハバイデンゾルグ植物園ニ在リトイヘリ然モ今ソレヲ問題ニシテモ困難ナレバトテ昭南ヲ引受クルコトニス、但シ九月六日ガ定年ノ日ナレバソノ後ニシタク赴任ハ十一月ニシタシトノコト

黒正氏来訪本庄君ガ大阪商大引受ノ返事ヲ為シタリト報ジソレニツキテハ黒正氏ガ大ニ勸奨シタルコトナレバトテ諒解ヲ求メ旁々報告アリタリ市役所ニ篠原新市長ヲ答訪（留守中挨拶ノ為来訪ニ対シ）夕景ノ同氏招待ノ会ニハ腹工合悪シク欠席

昌子氣分勝レズ帰宅ノ際服部教授ヲ煩ハシ同車シテ来診ヲ乞フ大シタコトニ非ズトノ診断ナリ

新京萩尾長一郎君来訪今満洲国総務部事務官トシテ官吏任用試験関係ニテ来学セルナリトイフ蒙語辞典ノ序文ヲ重ネテ求メラル

七月十二日

舞子滞在中ノ三島君ニ電話シテ今日往訪ヲ断ラントシタルニ既ニ今朝早く急用ノ為帰東セリトノ事  
午后董帰ル

七月十三日

朝本庄氏来訪遂ニ大阪商大学長受諾ノ返事ヲシタルコトヲ報告学部ニテハ明日教授会ヲ開キテ之ヲ議スルコトヲ請求シ置ケリトノ事ニテ図書館長ノ後任ヲモ考ヘ置キクレトノ事ナリツイデ汐見教授来訪本庄氏ノ事ヲ話シ学部ノ将来ニツキテ患フル旨話アリ更ニ午后八木部長来訪マタ此ノ件ニツキ汐見氏ト同様ノ考ニテ総長トシテノ余ノ善処ヲ依頼セラル、学部ヨリ報告アレバ上申手續ヲ運ブ前ニ一応学部ノ一二ノ人と会见将来ノ方針ニツキテ此際余ヨリ懇談シ置クコト然ルベキカト思ヒ居ル旨八木氏ニ話シ置ケリ八木氏モソレヲ希望シテ去ル  
新京松浦、東方文化ノ長広氏等来訪

七月十四日

本庄氏商大学長就任ヲ經濟教授会ニテ満場異議ナク認メタル旨八木部長ヨリ報告アリ

七月十五日

午後大阪市長教育部長ト共ニ来訪本庄氏ノ商大学長就任ニツキ承認ヲ求ムル為ナリ熟考ノ上返事スル旨答フ

七月十六日

午前官舎ニテ石川君ト会见本庄氏転任後ノ經濟学部ニツキ協調精神ニテ進ムヤウ舵ヲトラレタキ旨懇談同氏モ大イニ抱擁力ヲ發揮シテ学部ノ為進ミタキ旨語ル  
八木部長ト一応コレニツキ話合ハレタキ旨モ求メ置ケリ

七月十七日

大阪市長ニ本庄氏ノ商大学長就任承認ノ旨電話ニテ返事ス



七月十九日

午后一時卅六分東上

七月二十日

朝安倍一校長来訪、八月に入り学年短縮ノ実現ヲ見ル曉ニハ辞任ノ積リナレバ日高氏ヲ早く一高ニ迎ヘタク承認ヲ求ムトノコトナリ余ハ率直ニ安倍君ノ当方ノ都合ヲ顧ズ一途ニ自己ノ希望ヲ実現スルコトニノミ邁進シ已ニ再応謝絶シ其ノ後当方ノ事情ニ変化モナクマタ時日モ経ザルニ本人ニ誘ワカケソノ意ヲ動かセルコトニ対シテ不快ノ念ヲ懷クコトヲ述ベモシ聞クガ如キ事情ノ為ニ早ク日高氏ヲ迎ヘントナラバ其ノ局面ノ実現セラレタルトキ更メテ交渉ヲ開クベキナリトテ氏ノ請求ニ対シテ承認ヲ与ヘズ

九時半ヨリ教学局ノ大東亜史要目打合会ニ出席、午后四時頃マデカ、ル、其後永井局長ト会見、大東亜教育學術連絡協議会ガ更ニ技術ノ名称ヲ挿入シ文相ヲ会長ソノ下ニ教育學術ト技術トノ二部ヲ設クルコトニ落チツキタル次第ヲ聞ク。沼田、木原両氏ヲチンジルアン(連)の規那トパズルアン(連)の糖業研究所トニ推薦要員不補充大学ニハ欠員モアルコト故必要ナモノハ提出スルコトニスルコトヲ打合ス

七月二十一日

十時より文相官邸ニテ大東亜史編纂ノ為ノ第一回調査囑託ノ会議ニ出席十二時廿分同邸ヲ出デかもめにて帰西

七月二十二日

四時ヨリ独逸文科研究所理事会六時ヨリ教育総管山田大将航空総監土肥原大将連合ノ招宴ニ出席(都ホテル)

石川教授午后来訪、教授会議事後ニ開カレタル懇談会ノ空氣ハ過日約束シタル

通りニハ行カザリシ旨報告

文学部ニテ西洋史助教候補兩名ノ推薦ヲ史学科ヨリナシタルニ教授会ニテ一名ヲ否決シタル由那波君原君ツイデ成瀬部長ヨリ聞ク、相当諒解ノ下ニ提出セラレタル案ト聞ケルニ内幕解シ難シ

七月二十四日

炎暑ト疲労ノ為カ下痢ヲ催シ気分悪シ一日引籠ル

七月二十五日

小西兵太郎君来訪

七月二十六日

長寄君ヲ招致同氏身上ニツキ新タニ懇談

八月七日

沼田、福原両氏ト共ニ丹波声生ノ演習林視察ノ為出發。九時半過ぎ自動車ニテ宅ヲ出ヅ高尾(連)以北全ク初メテノ旅ナリ小野郷ヨリ本道ヲ外レテ山国村ニ廻リ予テ聞ケル常照寺(常照皇寺)ヲ訪ヒ三陵ヲ拝ス笠峠ノ上ニテ昼食古クヨリキケル周山ノ町ノ余リニモ小サキニ意外ノ感アリ三時前演習林事務室ニ着直チニ軌道ヲトロッコニ乗りテ炭出シ道ヲ視察シ其ノ終点ノ苗圃ヲ見テ事務所ニ引返シ一泊

八月八日

九時過ぎ出發二里半強ノ山路ヲタドリテチヨウジ谷ノ演習林宿泊所ニ向フ途ニ叡山ヨリ少シク低キ峠ヲ越ユ急坂隘路流石ニ汗バム籐椅子ニ竹竿二本ヲ通シ前後二人ニテ昇グ工夫セルモノヲ沼田林長ノ心遣ニテ用意シタレバ時々之ニ乗レルモ奄々タル氣息ヲ聞キテハ乗りツゞケル心地モセズ乗ラネバ人夫四人ノ(交

替ノ為四人ヲ用意セルナリ）随從ガ無意味ニナルベシト福原氏ニ勸メラレテハ又乗ル峠ノ上ニテ沛然タル急雨ノ見舞ヲ受ク二時半頃宿泊所ニ着久シ振りニ山氣ヲ満喫ス夜仏法僧ノ鳴声ヲ聞ケルモ嬉シ

#### 八月九日

折柄ノ雨中ヲ九時出發昨日ノ途ヲソノママニ辿リテ午時前事務所ニ歸着昼食後二時出發一路歸路ニ着ク高尾<sup>(雄)</sup>アタリヨリ朝来ノ大雨ノ跡モ無シ六時前帰宅

#### 八月十七日

予テノ約束ニヨリ東京大藏公望男ノ紹介ニテ華北綜合調査研究所副理事長伊沢道雄氏大学ニ來訪、予テ聞ケル綜合研究所設立ノ經過ト目的トヲ説明シ其ノ顧問ニ成レヨトノ求メナリ熟考シテ返事スベキヲ約スタ景伊沢氏及ビ随員山内氏ヲ招キ松山教授ヲ加ヘつる家ニテ会食

卓ヨリ昨日佐藤大佐ニ書ヲ寄セ衛生兵ノ手落ニテ幹候免除ノ書類未ダニ病院ヨリ進達後レ居リ係リノ医官ハ此ノ二十日召集解除ノ筈ニテ手続進行遲滞ニテ困却セル旨ヲ記シ幹旋ヲ依頼シ來レリト佐藤氏ノ話ナリ本人ノ心事ハ想像スルニ難カラザルモ佐藤氏ニ直接依頼スルナド困ツタモノナリ

#### 八月十八日

此日明千ヶ滝ニ行ク途中豊橋ニ下車卓ヲ見舞フコトニス

#### 八月二十一日

昨日閣議ニテ中学四年高等学校二年ニ修業年限ヲ改定セリトノコトニテ昨日情報局ヨリ發表シタリシガ今日新聞ニテ詳細ヲ發表セリ、国家学制ノ大問題ガ此ノ非常時ニ於テ比較的簡單ニ改定ヲ見ルニ至レルコト好マシキ事ニ非ズ實際教育ニ当レルモノ及ビ見識ノ士ノ意見ヲ広範圍ニ徴シ慎重審議ノ上決定スルノ道

ヲ何故ニ扱バザルヤカ、ル問題文相ノ無力無策痛嘆事ナリ

#### 八月二十二日

本田弘人文部省専門局科学課長來学本秋日本學術協会大会ヲ文部省ノ學術綜合講演会ト共同開催ノ件ニツキ協会役員会ト話合フ

長寄学生主事ノ司書官兼任、及ビ竹林司書官免官ノ發令ヲ見タル由文部省ヨリ電報アリ

夜日高主事ヲ招キ右ノ次第ヲ話シ月曜日辭令ヲ出シテ同氏ヲ課長ニ任命ノコトニ内示ス長キ時間ヲカケテ考案ノ人事始メテ一段落ヲ見タリ近キ将来ニ長寄氏榮転ノ實現ヲ見バコノ事スベテ希望通りノ解決ヲ見ル訳ナリ

#### 八月二十三日

二箇出身ノ木上恒藏氏來訪、少年時代ヲ追憶シテ感慨切ナルモノアリ

#### 八月二十七日

諸学振興委員会法学特別学会今明兩日京大ニテ開催、藤野堀池氏等來学東大穂積氏モ來ル夜例ニヨリ公開講演会閉会ノ挨拶（朝日会館）ヲナス

此日天候不良風雨警報出ツ

部長會議ヲ開ク連合演習ニ学生参加ノ承認ノ為ナリ

#### 八月二十八日

夜藤野堀池原（教学官）三氏を瓢亭に招き夕食

学生課協議委員会ヲ三時ヨリ開ク

#### 八月三十一日

日高課長ヨリ過日余ノ注文シ置キタル事務側トノ連絡ニツキ会計課長ト交渉ノ

要旨ヲ報告アリ

夜京都市忠霊塔建設顧問会ニ出席する家の夕食会に列す魚類皆無全ク精進料理なり配給ノ円滑ナラザルコト此ノ如シ

岩井梅原牧、近藤両部長、石橋（理）教授、佐々木竹苞今西塚本等来訪

明一家東京ヨリ帰ル

九月一日

昨近藤氏ヨリ要求ノ沼田木原氏南方行キノ件ノ経過ヲ聞ク為ニ永井局長ニ速達ヲ出ス書中ニ近藤部長ヨリ申出アリタル武居教授ノマレーのクアラルンプール農事試験所長ヲ希望スル旨モ書キ込ミ置ケリ

朝出校ノ途大谷瑩誠師宅ヲ訪フ不在玄関ニテ夫人ト挨拶シテ辞ス

九月三日

新村博士来訪余ノ五月ノ誕生日ニ会同シ得ザリシ故十月十五日ニ招キタキ旨告ゲラル

九月四日

瀬戸、田中太田岩井梅原氏等ヲ招キ鶴屋ニテ晚餐ヲ供ス

九月六日

午后一時卅六分燕ニテ東上

九月七日

昨夜武者小路宗睦総裁ト電話、今朝九時過ぎ同氏登庁ノ際自動車ヲ学士会ニ寄セ宮内省ニ同伴スルトノ約束、ソノ通りの時間にその通りに宮内省ニ至リ家彦王殿下ノ御卒業式次第にツキ打合ス池田宗親課長栄木書記官モ同席、十時十

分過ぎ辞去

文部省ニ行キ永井局長ト会談郡場君の任命発令の時期沼田木原氏ノ外書面ニテ追申セル武居氏等ノ南方進出ノ見込ヲ質ス郡場氏ノハ確定他ノ分ハ目下大東亜省設立ノコトモアリソレト関連スル点モアルラシク一向撝取ラズトノ事、学制改革ニツキ大学側ヨリノ注文多キ事ヲモ述べ目下評議会ニテ研究中故十七日後間モナク之ヲ纏メテ申出ベキヲ云ヘルニ希望ノ旨返事アリ、昼同氏トアジヤニ昼食

民族研究所長ニ高田氏如何トノ提議アリ考慮ヲ約シテ別ル有光課長ヲ訪ヒ図書館長発令ヲ早クシタキコトヲ求ム、本庄氏ノ名誉教授推薦ハ書類ヲ出シクレ度旨話アリ

東亜史編纂室ニテ鈴木君ト会談三時過ぎ勝君ト共ニ同家ヲ訪フ

敦大分健康ヲ回復シタルガ如ク見ユ

夜新村博士ヨリ沢瀉君ノ国語審議会案批評ニ対シテ一部ノ人々ヨリ批難アル旨ヲキケリ

九月八日

朝九時官舎ニ文相ヲ訪フ短縮高等学校ノ制度ニツキ文部省ヨリ大学ニ意見ヲ求メテハ如何ト提議セリ理由ハ高校二年トナレバ当然大学ノ教育上ニモ影響多ク大学トシテ対岸ノ問題トハ見ル可ラザルコト大学卒業生ノ学力水準ヲ低下セシメザル立場ヨリモ種々注文アルベキコト

文部トシテモ念ノ上ニモ念ヲ入レ大学ニモ意見ヲ求ムルコトガソノ立場上当然ナルノミナラズソノ立場ヲ楽ニスベキコト等ナリ文相快ク諒承ソノ運ビニスベキヲイヘリ、来月ノ聯合大演習ハ事前何ノ話モナイ突然参加ヲ命ジ来ル大学ノ現時ノ情態（夜業迄モシテ課程ヲ進ムルニ努力セル有様）ヨリ迷惑ニ感スルガソレハ兎モ角カ、ル指揮命令ノ仕方ガ果シテ当ヲ得タルモノナリヤ少クトモ事前ニ協議シテ運バレタキモノニテカ、ル形ヲ前例トシテ今後ニ及ボサシメザル

ヤウ希望スル旨ヲ述べ大臣ハ去年東京ニテ行ヘル前例ヲ検ベテ考慮シテ見ルベシト約セリ

次ニ治安維持法ニ触レテ除籍セル学生ノ再入学問題ニツキ日高課長ヨリ報告ノ別紙ニ基キ入学ノ許可ハ大学ニテ為スコトナルニ文部ヨリ司法省ニ対シ先ヅ文部省ニ交渉セヨトイヘル由ノ穩当ナラザルコトヲ述べ置ケリ

コ、ヲ辞シテ東亜研究所ニ大藏氏ヲ訪ヒ過日來催促ヲ受ケ居レル北京ノ綜合研究所顧問ニツキテハ不取敢一昨日電報ニテ受諾ノ旨返事シタルガ更メテ承諾スベキコトヲ述べ置ケリ更ニ原理事ト会谈同氏ニ伴ハレテ岸体育記念館ニテ昼餐猛烈ノ暑ニ辟易シテ宿ニ歸リ、富山房、東洋文庫等ニ電話ニテ当面ノ用ヲ達ス東洋文庫ハ十月十一日ニ白鳥博士記念講演会ヲ催シソノ原稿ヲ東洋学報ニ掲載トノ事

三島君來訪五時過ヨリ同氏新居ヲ訪フケフノ暑真ニ烈シ

九月九日

朝九時ノ燕ニテ出発四時半帰宅

九月十日

書記官学生課長ヨリ留守中府ヨリ求メラレタル防空演習ニ学生参加ヲ丁度試験中ノ為謝絶ノ意志ヲ通ジタル旨ノ経過報告ヲ聴取、五課長ト家彦王殿下御卒業式次<sup>(ママ)</sup>ニツキテ協議。午后一時宮家ヨリ鈴木本田両氏來訪式次第ヲ打合ス、成瀬文学部長ヨリ先般辞職シタル 氏ノ復職ニツキ相談アリ

午后三時部長会議ヲ開キ十七日迄ニ高等学校ノミナラズ大学院制度ニツキテモ考ヘテ答申ヲ得タキ旨話ス大臣及ビ専局長ヨリ大学院ニツキテノ文部ノ考ノ梗概ヲ聞キタルト之ガ実施ノ急ガル、トニヨリ評議會案ヲ得ンガ為ナリ

佐藤大佐ヨリ教練成績合否ヲ報告スルコトニツキ意見ヲ求メラル之ニツキテモ部長ト談合ノ結果昨年総長會議ニテ配將ノ報告ハ学校ニテ及落ヲ定メル際ノ参

考ニ資スト話合ヘル経過ニヨリソノ程度ニ扱フベキヲ話合ヘリ

九月十一日

東京ヨリ教学局指導部長近藤氏東亜史編纂ノ鈴木俊氏外二名來学午后三時ヨリ京都側執筆者との打合会を開く夜つる家にて教学局側より一同を招宴  
八日文相に進言し置きたる「学制改革につき大学側の意見を徴する」通達次官通牒として来る案外敏速に通知し来れり

九月十二日

道代田中及び瀬戸両家ノ婚儀祝の為往訪

九月二十三日

卒業式

家彦王殿下卒業アラセラル

三時久邇宮家ヨリ都ホテルに御催しの茶会に招かる殿下御卒業の御喜の為なり  
四時半独乙文化研究所理事会。上野君理事長ニ就任

終りてつる家にて同研究所の招宴

九月二十五日

かもめにて東上

九月二十六日

九時ヨリ学振第二常置委員会  
これにて常置委員ノ任期終ル  
小倉氏ノ朝鮮方言研究ノ審査報告

午后四時ヨリ第十五小委員会(学士会館) 池内君と居室にて会谈

九月二十七日

三島君に誘はれ午時松屋横ノ天民にて昼食（綾子同伴）午后武蔵野電車にて飯能に至り武蔵野ノ秋景を見る広野原の向ふに秩父の連山を近く見るも目新しき風景なり

九月二十八日

文部省にゆき永井局長と会談高田君の件返事す、来年度予算の企画院との交渉に於て講座は民族（文）量子（理）理療（医）のみ通過といふ法学部法制史は望みなしとのことに然らば別に大蔵省関係者と直接交渉すべきかといへるに永井氏もそれを望むとのことなり

五時より学振理事会（丸之内会館）散会後池内君を訪ふ麹町通りに出てバスをまでも——来らず汽車の時間を外すに近き時になりてなほ来らず冒険して電車にて駅に至る五分前に着、九時二十分発にて帰る

九月三十日

中部軍司令官後宮大将披露宴ニ招カレ出席

十月一日

入学宣誓式

十月四日

田中千代子間人宮地君ノ二男ト結婚。式及び披露ヲ京都ホテルにて挙グ宮地氏ニハ十幾年振りにて逢フソノ長男ノ妻君が吉岡一正君ノ二女ナリトテ吉岡モ披露宴ニ来ルコレモ久振リノ遭逢ナリ長岡ノ前村長二氏が先方の媒介ナリ  
十時ヨリ野上名誉教授記念肖像画贈呈式ニ出席

十月五日

東方文化理事会

伊沢道雄氏ニ学振第十五小委員会来年度事業ニ総合研究所ヨリ便宜供与モシクハ共同従事ニツキ考慮ヲ求ムル書面ヲ出ス

十月六日

安倍能成君来訪三月日高氏招請ノ承認ヲ求ムル為ナリ

十月七日

大学専門学校連合演習に今朝上級生三百名参加  
東方文化理事会

十月八日

懷徳堂招宴（京都ホテル）

十月九日

小野勝年君ニ裁書、伊沢氏ニ逢ヒテ過日同氏ニ送りタル学振ノ件及び東方文化研究所トノ共同ニツキ相談アリタキ旨通ズ

十月十日

黒谷ニテ解剖体祭

神田喜一郎君来訪

十月十二日

午后菅屋貴志家を訪ひ帰路大阪にて武田鋭太郎君と会合



十月十四日

日伊学術委員会十一時ヨリ京都ホテルニ開会

十月十五日

本庄氏来訪光田主事割愛ノ件申込アリ考慮スベキヲ答フ

評議會、議事後去ル五日文部省ニ出シタル学年短縮関係ニヨル対高等学校意見ヲ朗読報告更ニ大学院制度ニツキ各学部ヨリノ答申ニ基キ自分ノ本省ニ答申セントスル案ヲ朗読シナホ意見アラバ個々ニ来談ヲ求メ置ケリ

夜新村博士ニ招カレ余ノ華甲ヲ祝スル為ノ中村屋ノ招宴ニ出席同博士、令夫人令息秀一君列席セラル太田岩井両君モ同席、芳情感謝ニ堪エズ

十月十六日

靖国神社臨時大祭

第十八回日本学術協会大会開会

午后一時開会式二時半ヨリ公開講演

東大教授永井雄三郎氏「航空機ノ性能向上と潤滑油」、四時過ぎヨリ島津氏招待同邸茶会

東大理学部長寺沢氏ヨリ湯川教授ヲ東大ニ兼任ノコトニ内談出来居ル故手續申出ノ節ハ宜シクトノ話アリ

五時王蔭泰<sup>(華)</sup>河北政務委員会実業部長来訪、同氏ガ理事長トナレル<sup>(華)</sup>河北綜合研究所ノ為東京ヨリ帰燕ニ際シ特ニ来訪挨拶セルナリ

十月十七日

武田長兵衛氏朝夫人山本寛一君及ビ山鹿君ヲ伴ヒ来訪

十月二十二日

化学研究所十五周年祝賀ノ名ニテ新旧研究所長ノ披露会京都ホテルニ催サレ出席

十月二十四日

午前十時学部長會議ヲ開キ総長辞任ヲ表明同時ニ各教授宛テ総長候補者詮考ヲ行フベク内規ニ依リ通告ノ旨ノ書面ヲ厳秘トシテ各部長ニ手交、答申日ハ十一月十六日ナリ

十月二十五日

朝小西兵君来訪六校長岡氏来訪午後武田銳太郎君ガ朝日奈三宅両氏ヲ伴ヒテ来訪会談中ニ梅原君及ビ太田君亦来訪千客万来ノ光景ナリ夕景ヨリ武田朝日奈三宅三氏ヲ中村家ニ伴ヒテ夕食八時半過ぎ引上グ

十月二十六日

奈良線八木ノ僧侶田村 氏来訪仏專ニテ曾テ教ヘタル人寺内ニ掲ゲル施無畏ノ額ノ揮毫ヲ押シツケテユク

十月二十七日

尊攘堂小祭

池見猛氏来訪

石橋誠道君来訪

十一月三日

拝賀式

農学祭

夜近藤農学部部長来訪先日農学部玄関上に掲ぐる字を書きたる札の爲の来訪なり  
見事なる林檎一箱を持参せらる

十一月四日

一時卅六分燕ニテ東上

十一月五日

文部省ニ至リ永井本田春山柴沼氏等ト会见

池内氏を訪ひ勝と共に同家を訪ふ

十一月六日

文部省に有光氏を訪ひ長寄の件を催促せしに十月と思ひ居りしも近頃簡素化ノ  
実現に伴ひ始末せねばならぬ人多くなり希望通りに運び兼ね居り更に遅るゝな  
らん次官にも逢ひくれとの事に菊池次官を訪ひしに偶然廊下にて逢ひ単ニ長寄  
の事を是非宜しくと頼み置けり例により承知しましたとの返事、便りなき事夥  
しけれど致方もなし。十時半西山氏と宿にて会見の約あり急ぎ帰れば既に来り  
て待ち居れり民族協会顧問を依頼したしとの事総長としてか個人としてかと尋  
ねたるに両方の立場なりといふ総長としてならば辞任近きに在れどそれをいふ  
べきに非ずたゞ応諾しおけり

島村君も待ち居り東亜考古学会をどうするかにつきて話あり近く役員会を開き  
て相談するが宜しからんといひ置けり

真浄寺を久振に訪ひ転じて東洋文庫に至り田中君の問題を岩井君に話し、また  
此日上京の佐藤長と同座、佐藤より清文鑑音訳の原稿を岩井氏に引渡せり

和田君と東洋史辞典の編纂につき東京側の意向として更に分類目録作製のこと  
を聞く帰洛調査の上京都の態度を定むることにして別る。今夜三島君に招かれ  
塩原にて晚餐、楠宗道君夫妻同席

十一月七日

朝九時発燕にて帰西昨夜来何やら気分異常を覚ふ帰宅後風呂を浴び横臥発熱卅  
八度に及ぶ夜中吐瀉、疲労と風気の上に晩に食ひし蟹にあてられたるものゝ如  
し

十一月八日

終日静養

十一月九日

黒田伯入京下村氏風氣引籠にて逢へずと黒川の電話に致方なく一寸大学に立寄  
り更に京都ホテルに行き黒田氏と会见KBSの支部の将来につき相談近日下村  
氏以下委員と会合相談の上方針を定め来月初め頃黒田氏更に入洛して熟議する  
ことにす

午後静養

池見猛氏大学に来訪

十一月十日

尚ほ気分優れず終日静養す

朝九時篠原市長と大石教育部長来訪市史編纂行悩みに計画を変更して成功を見  
たく助舟を求めに来れるなり

十一月十一日

気分はゞ回復したれど風気尚ほ去らず、押して出勤

貴志家に皇学館より書代仕払方につき彙文堂をして皇学館に電話にて実相を聞  
かしむ夜貴志家に電話して不取敢一兩日前彙文堂に來り居れる二千八百円を同  
家に送附せしむることを話し置けり

十一月十二日

朝八坂佐々木に止宿の荻野氏より電話あり自分より訪問することにし十時過ぎ同家に至り急に近衛家寄託の書籍の始末を求む今夜帰東して相談書物の一見を大学に求めその上急ニ解決すべしとて別る

十一時過ぎ大学に帰れば小西兵君待てり同氏身上につきて一寸聞き居る内二次ぎく訪客殺到午後ハ評議会とて同氏も匆々に引上ぐ

評議会はこれが最後となるべしと思へど別に挨拶はせず引続き部長会議を開く書記の減員割宛相談<sup>（四）</sup>の爲なり

平出大佐けふ金曜講演にて講演大盛況なりし由

夜東亜文学者大会に出席の支満蒙等の客を府市会議所にて招待の席に招かれ出席稲孫君はじめ其他の諸氏と会谈

小西君より貴志家への皇学館仕払につき話ありたれどなほ不得要領、委しく文書にして送附せられたきことを依頼し置けり

十一月十三日

東亜研究所ニ転任の筈の長谷川氏昨夜召集令状をうけ今夜出発応召すとて挨拶に来る時局下致方なき事ながら弱々しそうな体軀を見るにつけ気の毒なり  
山内教授より同氏の故友より所有山林ヲ大学に寄附の件重ねて申出あり

十一月十六日

総長候補者答申日ナリ朝九時迄ニ各学部ヨリ持チ寄りノ答申ヲ九時半ヨリ開封書記官庶務課長ノ外ニ二年長部長小川（医）落合（文）ノ両氏立会フ第一次答申中ノ高点十名ハ羽田戸田中沢森島小嶋大杉高田山田松本信一鳥養ノ順、第二次ハ羽田戸田中沢第三次過半数（七二以上）トシテ羽田トナリ答申ハ之ニテ結果ヲ得テ終ル、余ハ初メヨリ万一カ、ル場合ニハ辞退ノ意ヲ固メ居リシガ答申終了後学部長ノ会合ヲ求メ此ノ意ヲ発表セントスルニ先立ち近藤農部長ヨリ面会

ヲ求メラレモシカ、ル意志ナラバ是非翻意スベク此際考慮ノ余地等ヲ置カズ直ニ応諾セヨト強硬ナル勧誘アリ余ハ部長会議ノ時間ヲ後ラセテ近藤氏ニ本意ヲ告ゲ諒承ヲ求メタルモ余リニ強キ勧誘ニ遂ニソノ意ニ従ヒ何時マデカハ明ラカナラネド或ル期間就任ヲ学部長ニ通ジ十九日評議員会ヲ召集シテソノ意ヲ明ニスベシト述べ置ケリ

夜学部長懇親会に出席（つるや）

寒さ強しまた風邪ノ気味アリ

十一月十七日

昨夜来ノ風邪ノ気味ニ朝来引籠リシガ西山政猪君来訪今夜新村民族学研究協会長ト共ニ夕食シタシトノコトニ昼間ノ経過ニヨリテハ出席ノコトニ返事ス、夕景気分ヨキニ折角ノ事故伊勢長ニ至リ饗応ニ預ル

十一月十九日

重任ノ事書記官ヨリ各教授ニ通告、新聞社ニモ午後五時発表臨時評議員会ヲ開キ（二十六日ニハ上京ノ予定ニテ差支ノ為）重任ノ挨拶ヲスル積リナリシガ風邪快癒セズ引籠ル議事ハ小川学部長代理シテ議了

十一月二十一日

荻野仲三郎氏夕景来訪大学寄託陽明文庫図書ニ関スル打合ノ為ナリ

十一月二十四日

今日暫振りニ出勤

十一月二十五日

今夜東上

十一月二十六日

昼文部省ニ至ル

夜、学振理事会出席

十一月二十七日

夜東洋文庫講演ソレニ先立ち和田君ト辞典編纂ニツキ打合ノ為会见富山房ノ大橋青木両氏モ参加神保町ノ支那料理店ニテ会见近日外山ヲ派シ實際ノコト打合ノコト、ス

十一月二十八日

九時発燕ニテ帰ル

十二月三日

電力瓦斯委員会

三時ヨリ官舎ニテ本庄君ト会见市史編纂ニツキ市長依頼ノ旨ヲ伝ヘ協力ヲ求メ協力ニツキテ氏ノ希望スル方法ヲ聴取ス

十二月四日

朝九時半燕ニテ上京明日ノ東大第二工学部開学式ニ列スル為ナリ

十二月六日

朝汐見氏来訪昨日谷口大蔵次官ニ会见更メテ日本法制史<sup>(物)</sup>物療民族講座ノ通過圖書館予算ヲ繰延ベザルコト等ニツキテ依頼シ置キタル旨報告アリソノ后来訪ノ川田書記ニ委細話シ福原君ニモ通ジ置クヤウ話シ置ケリ

図書館ニツキテハ特ニ柴沼課長に短信ヲ認メ福原氏ヲシテ手交セシメルコト、セリ

一時ノ鷗にて出発八時四十分帰京

十二月七日

西田直君と会见、市史編纂方針ノ改定ニツキテ懇談

十二月八日

米英に對する宣戰大詔発せられて一周年、運動場に壇を設けて詔書を捧読して感激を新にし学生の分列行進、職員学生代表の平安神宮参拝を行ふ午后は特に平常の如く授業し各々その本分を尽す道に邁進す

この日午前一時半明の第二女生る

三時篠原市長大石教育部長<sup>(官)</sup>官舎ニ招キ過日来市史編纂改新ニツキ市長ヨリ依頼セラレテ西田本庄中村柴田諸氏ト話合ヒ昨日西田君ト更ニ会谈シタル結果ヲ報告、十年計画ヲ今後三、四年中の完成ニ切上ゲ計画ヲ縮少シ本庄中村氏等モ従来ノ如ク躊躇セズシテ西田氏ト協力シ成效<sup>(功)</sup>ヲ期スル考ニナリ居レルコトヲ報告セリ

十二月九日

岩井武俊君ヲ総長室ニ招キ市史編纂ニ関シ過日来ノ経過ヲ話シ置ケリ

十二月十日

評議会

夕景大石市教育局長来訪今日市長ト本庄氏ト会见ノ経過ヲ報告急ニ招集スベキ顧問会ヲ市長ヨリ招集スルカ主任トシテノ西田氏ヨリ招集スルカ何レガヨカラシカト相談アリ余ハ前ヨリ西田氏ガ昨日市長ヨリ編纂期間ノ短縮ヲ求メラレタル結果主任ヨリ顧問ニ諮ル形ニテ西田氏ガ招集スルガ宜シカラント云ヒ置ケリ更ニ明日午后三時総長室ニテ大石氏ト西田氏ト細カク打合セ置クベキコトヲ

勸メ置ケリ

【別紙】

私去ル昭和十三年十一月本学総長ニ就任以来先月内規ニ依ル在職期間ヲ経過致シマシタノデ辞任ヲ申出デマシタ事ハ御承知ノ通りデアリマス其後内規ノ総長候補者答申手續ガ進メラレマシタ結果私再ビ任ヲ重ネルコトニ答申致サレタノデアリマス私本ヨリ不才其任ニ非ルコトハ能ク承知致シテ居リ又今更何モ申上ゲマセンガ再任ノコトハ本意デハナイノデアリマスガ諸種考慮ヲ重ネマシタ結果此際兎モ角御引受ケラスルコトニ決心致シマシタドウカ今後モ相変ラズ皆様ノ御支援ヲ戴キマシテ本学ノ発展ノ為ニ微力ヲ捧ゲタイト存ジマス何分宜シクお願申シマス

過去四年間ニ於ケル知見ト目下ノ重大時局下ニ於ケル事情トニ鑑ミマシテ本学ノ使命達成ノ為ニハ諸種内外ニ互ツテ慎重ニ考慮シナケレバナラヌ点ガ少カラズアルヤウニ存ジマス只ダ手ヲ拱イテ自然ノ推移ニ任セルノデハ特ニ今日ニ於テ私ノ任務ハ果シ得ナイト存ジマスノデ今後新タニ皆様ノ御協力ナリ御考慮ナリヲお願スルコトガ多イデアロウト存ジマスガドウカ此ノ時世ニ対処スル本学ノ使命ヲお考下サツテ旧套ニ捕ハレズ新奇ニ走ラズ適正ノ方針ノ下ニ進ムコトニ御協力ヲ衷心ヨリ御願スル次第デアリマス

此ノ挨拶ハ先月十九日ニ臨時評議會ヲ開イテ其ノ席上申述べル積リデアリマシタ所折悪シク風邪ノ為ニ引籠リマシタノデ遅レテ今日ニ至リマシタ次第御諒承ヲ願ヒマス

十二月十一日

聖上陛下伊勢太廟御親拝ノ為此日夕景御入洛ノ由洩レ聞ク此度ノ行幸ハスベテ秘セラレ新聞ニモ書カズ奉送迎モ無シ

三時大石西田氏ノ打合ニ立会

情報局ヨリ来年度予算閣議決定ノ主ナルモノヲ新聞ニ発表

十二月十二日

聖上陛下此日太廟ニ親拝アラセラル聖慮畏シトモ畏シ

夜十一時半頃大学ヨリ電話アリテ警戒警報発令セラレタリト通ジ来ル次デ光田主事ヨリ電話ニテ下上下下加茂等ノ消防署ニ学生五百人ノ派遣ヲ求メ来リタレバ寄宿舎生ヲ始メ連絡網ヲ利用シテ召集中トノコト

十二月十三日

今朝聖駕東京ニ還行<sup>（電）</sup>

午後大阪ニ武田長兵衛氏ヲ訪フ鋭太郎氏ニ誘ハレテつる家ニテ夕食

十二月十四日

一誠堂学校ニ来訪貴志家蔵和漢書ヲ引受ノ希望ヲ述ベ一見ヲ求メタルモ同家ノ事情年末ト病人トニテ取込メル旨ヲ話シ都合ニヨリテハ来年初メニデモソノ運ビトナルベキヲ答フ

大杉農部長来訪沼田氏転任実現ノ際ニ処スベキ方針にツキ意見ヲ徴セラル那波氏ヨリ還暦記念事業發起人ヲドノ範圍ニ定ムベキカニツキ内々意見ヲ求メラル、余ハ先日返事シタル如クタゞ東洋史研究室ダケニ止メ置カレタキ旨答ヘシモ氏ハ前例ヲヒキ文学部教官ダケハ止ムヲ得ザルベシト云ヘリ

十二月十七日

七福会ノ開催セラル、ト聞キ之ヲ譲受ケテ旧現七部長ニ対スル平生ノ謝意ト其ノ一人郡場君ノ昭南赴任送別ノ意ヲ兼ネ表ス席ハつる家なり郡場君隠芸ノ彈琴アリ

十二月十八日

江藤大学ニ来訪経巻代価一二〇〇〇を渡す



十二月十九日

午后武田商店三宅氏来訪沼田氏ニ将来規那及ビ造林事業等ニツキ指導ヲ得タキ旨依頼ヲ求メラル。

岩松君来訪

牧氏ヨリ度々面会ヲ求ムル電話アリ四時半面会セルニ大橋教授ノ辭職願ヲ提示ス理由ハ樋貝某<sup>註</sup>ノ学位論文審査報告ヲ此ノ水曜日教授会ニテ開クニ当リ事前ニ審査主任トシテ可決ノ意志表示ヲナシ其ノ意味ニ於テ審査報告教授会ヲ要求シ乍ラ同会席上ニ於テ俄ニ反対ノ意志ヲ表明シ延期策ヲ弄シタルガ如シカ、ル態度ハ同氏曾テノ誓約(宮本氏關係)ニ背ケルモノニシテ部長ハ同教授ノ臨席セル教授会ニテハ職務ヲ執ルヲ得ズト宣シテ閉会シタリシガ其ノ後ノ推移ニヨリ大橋氏ガ此ノ辭職願ヲ提出スルニ至リシナリトイフ。理由ヲ聴キテ預リ置ケリ國際文化振興会委員会ヲ五時半ヨリ鶴屋ニ開ク黒田常任理事東京ヨリ臨席〔註「樋貝」より線を引き欄外に「文字不明」との記述あり〕

十二月二十日

九州帝大総長荒川氏ヨリ秘速達便到着宿直員ヨリ宅ニ届け来る中ニ同大学評議會ヨリ文相(?)ニ提示セル意見書封入、参考にとテ荒川総長より内示セルモノナリ要ハ「東京都両総長ヲ親任官トスルコトニ方針決定セリト仄聞スルガ其ノ意図ノ奈辺ニ存スルカヲ解スル能ハズ之ハ帝国大学自体ノ間ニ無用ノ差別ヲ設ケントスルモノニシテ重大ナル文教上ノ変革タリ其ノ影響甚大ニシテ他ノ帝大ノ教官ノ矜持ヲ傷ケ新進ノ研究者ノ招聘ニ困難多ク強力ナル教授陣ヲ形成シ得ズ学生ノ教育ニモ學術ノ推進ニモ多大ノ支障ヲ生ズ又東京都両帝大ガ官制上優位ヲ占ムル結果爾余大学ノ卒業生ニ対スル世上ノ評価ヲ不利ナラシメ地方大学ヘノ入学志望者ノ適正配置ヲ愈々困難ナラシム。此ノ如キハ大学機構刷新ノ逆効果ヲ生ジ教育上永ク禍根ヲ残スコト、ナリ本邦學界ノ前途ニ対シ憂慮ニ堪ヘズ評議會ハ之ガ本邦ノ學術及ビ高等教育ノ進展ヲ阻害スル所大ナルモノ

アリト信ジ大学令第七条第二項ニヨリ意見ヲ開陳シ閣下(文相?)ノ善処ヲ切望ス」といふに在リ評議會の意見として至極尤もなり当局がこの点ヲ如何ニ考ヘ居レルヤハコノ案ヲ聞キシ時ヨリ余ノ疑ヒ居リタル所ナリ全帝大総長ヲ同じク親任官トスルコトヲ更メテ当局ハ実現スベキナリ

十二日東北帝大ニテ開ケル学生主事會議ノ雜談中ニモコレト同様ノ話出テタル由日高氏ヨリ聞ケリ。

十二月二十一日

教練査閲。柏少將査閲官トシテ来ル

十時半頃宅ヨリ電話アリ時野谷常三郎君ノ訃音ヲ伝フ直ニ同家ヲ訪フ今朝九時過ギ俄ニ心臓麻痺ヲ起シ来診ノ医師モ間ニ合ハズシテ逝ケリト病臥三年真ニ同情ニ堪エズ夫人茫然トシテ処置スル所ヲ知ラズ勝ノ帰宅ヲ待チテスベテヲ定ムルヨリ外ニ道ナシ夜又訪問勝明朝早ク帰来トノ電報アリタル由ナリ

十二月二十二日

朝時野谷ヲ訪ヒ今朝帰来ノ勝及ビ原君等ト相談明日十二時―一時ノ間ニ仏式ニテ宅ノ弔ヲ行ヒテ密葬(龍安寺)明後二時三時葬式三時―四時告別式ト定ム勝ノ心境察スルニ余アリ然モ落附キテ処理ニ当レルハ頼モシ今夜八時前綾子モ小供ト女中ヲ伴ヒテ歸リ来ルトノコト

追加予算要求アラバ直ニ出セトノ文部會計課ヨリノ来電ニ俄ニ物療<sup>(理)</sup>(イ)棉作(農)各講座機械電気(工)ノ各学科及ビ講座ヲ要求スルコトトシ福原氏明朝東上ノコト、ス

十二月二十六日

安部一高長来訪ノ約

## 一九四三（昭和一八）年

一月一日

大学ニテ拝賀式例年ノ如シ大学ヨリノ帰途上加茂神社ニ参拝

明兩三日前ヨリ風邪肋膜炎ノ気味ニテ臥シ幸子輩ノ二人ノミ祝膳ヲ共ニス母ハ居室ニ坐シテ雑煮ノ箸ヲ執ル

一月二日

腹工合悪シ夜嘔吐、早々ヨリノ失敗ナリ

一月三日

横臥静養今朝下痢一回気分ホヽ回復

一月四日

御用始メナリ大学ニ行ク

鐘江書記官ニ対シ執務ノ熱心ニ讃辞ヲ寄セ然モ対人態度応接ニ注意シテ柔カ味ヲ加フルノ要アルヲ注意ス快ク受ケ入レタリ

午后官舎ニテ日高学生課長ト会谈同氏ヨリ三高相原氏ヲ主事トシテ推薦ス

一月五日

文部省本田氏高田教授ト共ニ午后来訪高田氏ノ就任（兼任トシテ）ヲ諾セル民族研究所長ノ官等ガ過日閣議ニテ奏任ト決シタリトノコトニテソノ為諒解ヲ求メル為ニ入洛シタルナリトノコトニテ余ニモ同時ニ諒解ヲ求メ同氏ノ応諾ヲス、メテホシキ意向ノ如シ奏任トナリシガ為ニ高田氏ガ兼任ヲ如何ニスルカハ兎モ角モトシテ重要性ヲ兼テヨリ主張シ高田氏ヲ専任トシテ迎フベキヲ主張シ

タリト聞ケル文相ガ閣議ニ於テ之ヲ承認セルハ研究所ヲ輕視スルモノト見ラレテモ致方ナカルベク其ノ意味ニ於テ高田氏ガ果シテ依然就任ヲ諾スベキヤ否ヤハ余ノ頗ル危ム所ナリ本田氏ハ頻ニ応諾ノ速<sup>（明）</sup>答ヲ求メタルガ高田氏ハ数日中自カラ東上シテ返事スベキヲ述べ埒明カズ余ハ之ヲ執リ成シテ本田氏ガ今日一泊シ明日大体ノ意向ヲ聞キテ帰ルガ宜シカラントイヒソレニ決シテ高田氏ハ帰ル五時過ギヨリ鐘江及ビ近藤並川<sup>（明）</sup>兩教授ヲ晚餐ニ招キタリアレバ本田氏ヲモ加ヘ五人ニテ食事シ乍ラ十時過ギ迄談笑、バスノ時間ヲ過ギテ皆寒夜ヲ歩行シテ帰ル

一月六日

十時半官舎ニテ牧法学部長ト会フ大橋氏辞表進達ノ時期ニツキ二月ニカ、ルヤウニシテホシキ希望モアリ早クスベシトノ説モアルコトナドヲ語ル今日ヨリ二三日東上スルトノ事故帰来更ニ打合スコトニス次デ本田高田氏ト更ニ会見高田氏ハ昨日辞退ノ決心ナリシガ本田氏等ノ迷惑ト從來ノ經過トヲ顧慮シ兎モ角一応就任ノ意アルモ一応文相ト会シテ研究所ヲ如何ナル程度ニ重要視スルカヲ確カメテソノ上ニ判然返事ラスベキコトヲ述べ本田氏モ之ヲ諒シテ会見ヲ終ル文相ニ会見シテ言質ヲトリ置クベキコトハ実ハ余ガ勸メタルナリ

午后田辺教授ニ総長室ニテ会見学生課ノ将来ニツキ余ノ考ヲ述べ同氏ヨリ賛同ノ意見アリ更ニ日高氏ノ推セル相原氏ニツキテ氏ノ意見ヲ聴取セリ

西田君ツイデ来訪市史編纂ニツキテノ經過ヲ話シ新方針ノ立チタルコトヲ述べタリ

一月七日

午后二時ヨリ官舎にて上野精一君に逢ふ、今朝成瀬君より独逸文化研究所総裁として清浦氏の後に阿部信行氏を推す議あるが意見如何との電話あり格別意見なしと答へ置きしが上野氏来訪の主用も此事なりき成瀬君をも招致し結局阿部

氏にて異存なきことに落ちつけり

一月九日

府庁にて知事発起の時局懇談会十時より開かる中村京都師団参謀の戦局説明從來になく詳密その難局を仔細に説示せり困難の局面なり

梶田教授海軍ノニューギニア資源調査隊員として明日横浜に集合せねばならずとのこと海軍よりも文部省よりも何等照会なき故急電にて秘書課長に照会す

一月十日

この日九時半かもめにて東上

ボーイに頼みて湯タンポを借りてベッドに入れるお蔭にて寒さ知らずに寝るを得たり

この夜志保里にて三島君の招宴に列す鈴木梅、川島大佐、国分加藤氏等同席

一月十一日

文部省にゆき菊池次官に逢ひ民族研究所長の官等問題の経過につき当局が同所を如何に観て居るかにつき質問、同車して官邸に大臣を訪ひ同様の質問により当局にて重要視してこれが将来の発展を希望し居る旨明言することを聞きて引取る池内氏を訪ひ夕景勝君と見附の地下鉄前に落ち合ひ同家を訪ひ一泊す

一月十二日

文部省にて本田生悦住永井諸氏と面談五時学士院例会に出席六時より永井本田氏を招き志保里に会食

学士院にて加藤氏より法学部問題につき話あり既に外間に如此話の洩れ居るに驚く

一月十三日

九時の燕にて帰る

一月十四日

牧、大杉氏等来訪

牧氏に大橋問題の経過を筆答にて報告を求め置きり

専門局大学課長西崎氏来訪

一月十五日

吉野山林を大学に寄附の為上市の坂本氏代理人前島氏以下三人来訪山内沼田佐藤三氏と鐘江氏と同席にて趣旨を聞く竹田省顧問と近く会見手続を定めること、す

一時より二時まで西寄課長中心に学部長集合して会談、新大学院制度につき主として談じ合ふ

田島法学部教授を招き重ねて大橋氏事件の真相を聴取

一月十六日

牧部長また来談

朝大石市局長来訪岩井武俊君に更めて市史編纂嘱託として就任の橋渡しをしてくれとのことなり

近藤教授来訪、並河氏に關しての話あり、事情止むを得ず

一月十七日

漢族の同化力説につきての東洋文庫の原稿を書き了る

藤井善助氏僅に兩三日の病氣（肺炎）にて死去、その告別式に同家を訪ふ

岩井君を招致し昨大石氏との会談の結果を同氏に伝ふ市史編纂嘱託として事務

局を統べる役目を引受けくれよとの話なり同氏快諾すべてを一任することなり

一月十九日

原邦造君ニ招カレ吉富ニテ夕食田中折田両君同席

篠原市長、戸田教授来談

独乙文化研究所理事会

一月二十日

峯山ノ兄来泊

一月二十一日

八木氏と会談学生課長位置ノ成行ヲ話シ兼任ヲ熱望スル旨話ス考慮ノ後月曜位ニ返答すべしとの事

本日評議会。部長会議

牧氏より田島氏ノ辞表ハ部長ニ預り置き九月進達ノコトニ昨教授会ニテ決定セリトノ話アリ

岩井氏来訪、顧問ヲ辞シテ嘱託ヲ応諾シタリトノ話アリ

一月二十二日

成瀬黒田両氏来訪ベンチベニをマライーニの後ニ雇ひ度旨話してゆく

一月二十三日

伊太利大阪駐在総領事バイストロツキ氏来訪伊大使の命としてマライニ氏を東京大使館に奉職せしめ代りニストラジヨクを推薦する旨を通じ来る。文学部教授会に諮りて返事する旨答へ置ケリ

午后高槻化研を視察敷地を見る為なり堀場喜多福原氏等同行、了りて大阪に至り科学動員協会にて催せる多田氏南方調査報告談を聞く

一月二十四日

時野谷君忌明法事を営むとのことに同家を訪ふ勝君昨朝東京より帰宅墓地ニ納骨

夜勝君来訪十時十分の列車にて帰東

一月二十五日

谷口部長来訪東京にて近藤氏より枢密院本会議の席上某氏発言中に京大石川教授は赤なりと主張せりとのことを聞ける旨伝ふ石川氏は今朝谷口氏を訪ひ兎角学部内にデマを飛ばすものありて困る故この次同様の事あらば責任をとらず事にしたしと主張し自己の反省を欠けるは困ったことなりと同氏話せり。間もなく石川氏来訪、谷口氏との話合により枢密院のこと及び文部当局にても氏に嫌らざるものある旨判然と告げ単にデマによりて此等の向きが氏を視て居るには非るべきをいひ反省すべき点あらば反省すべきを諭せり。

八木氏より風邪とて書面にて過日相談したる学生課長ノ件断り来る

一月二十六日

石川氏来訪二三の印刷著述を持参し氏の考がその中に述べあり決して批議せらるべきに非るを主張し機あらばこれを文部当局に渡し置きくれといひて帰る

牧部長と会し田島氏に関する教授会の模様を聞きとる

大橋氏之件につきては経過を書面に認めて持参あり

市史編纂委員会昨夜の経過につき岩井西田大石三氏相ついで来訪報告

八木氏に返事し再考慮を求む

一月二十八日

石川氏二五日以后毎日来訪煩悶を訴ふ今日も面会を求められたれど拒絶明日逢ふべきをいふ、氏は明日都合悪しき故明後日逢ひたしとのことなり

一月二十九日

八木教授ニ学生課長就任ヲ重ネテ希望シタルニ同氏モ遂ニ之ヲ諾シ然モ成ルベク早く退任シタキ旨希望ヲ述ブ

夜東方文化研究所商議員会（つるや）

一月三十日

K、B、S、地方委員会二時より楽友会館にて東亜地域留学生を招きて会合、

新村博士講演

牧氏石川氏来訪

一月三十一日

今夜十時廿五分東上秘書課長より廿八日電報にて大橋教授辞任の事情を承知したき旨通じ来れるにより一日面晤の返事をなし置きたれば主としてこの為の上京なり

なほ石川氏の件につき近藤氏その他に面会事情聴取する為、また長寄氏の件督促の為等

二月一日

有光氏議会に在り、本省にて永井氏と面談高工長候補者履歴ニ通渡し、農学部教授に香川宇都宮農校長招聘の件、石川氏の件等話合ふ。十二時半本田氏と共に議会に至り有光君を待つ間衆議員<sup>(衆)</sup>本会議を傍聴山寄達之助<sup>(博)</sup>氏の質問をきく。有光君に大橋氏辞任理由としてその性格が教授同僚と協調出来ず去年宮本氏に

関する教授会に於ける氏の行動今回ノ学位論文ニ於ける行動等を話し学部長が同氏列席の教授会を統理し得ずと宣して会議を中止したる次第その後の経過等を話し今後在任しては到底学部の将来円満ノ發達を期待し得ざる有様なることを学部長の報告と総長自から二三の教授に質したる所によりて疑無き事実と認め且つ辞表提出後一ヶ月余に亘り何人も反対意見を申出づるものなき有様なるより本人自からの意志によりて差出たる辞表を進達したる旨を話しよく解めさせたとの返事を得たり

更ニ文部省にて近藤教学<sup>(博)</sup>部長と会見石川氏に関する枢密院本会議席上の光景を委しく聞きかねて石川氏持参のパンフレット論文抜刷数種を手交氏の為に利益あるやう考へくれ度旨話し置けり、局にて目下著述につき調査中なりとのこと

二月二日

午前上京中の中出課長来訪、図書館資材獲得の困難を述べ、三島君来訪、十一時過ぎ富山房を訪ふ坂本氏不在青木佐藤両氏に導かれ大雅楼にて昼食一時のかもめにて帰西

二月三日

朝総長室に待てる北京綜研の中野忠夫氏と面会貴志文庫を一括譲受けたしとの申込あり土曜日に荻屋に行き相談の上返電の旨約す

この日楽友会館にて学体振関西支部創立準備委員会及び創立会を開きたる由学生課長より聞く

夜有光氏より松本氏の履歴書届く

二月四日

評議会、瓦斯委員会  
喜多教授来談



阪大新総長真島氏十日来訪ノ旨電話シ来ル

二月五日

田辺教授ニ依頼シ置キタル学生主事候補者相原氏ヘノ交渉ヲ今暫クソノ儘ニ差置カレタキコトヲ話ス

石川氏来訪、近藤教学部長<sup>(局)</sup>ト会谈ノ有様ヲ大略伝ヘ置ケリ

二月六日

午后寒ヲ冒シ芦屋ニ貴志家ヲ訪ヒ和漢書ヲ三五、〇〇ニテ華北綜研ニ譲ル話ヲ纏メソノ旨東京ニ待テル中野忠夫氏ニ電報スコレニテ処分全ク了ル訳ナリ  
北海道今総長ニ有光氏推薦ノ松本良彦氏ノコトヲ速達ニテ問合ス

二月七日

今朝ノ新聞ニ昨衆議院予算委員会席上作田代議士ヨリ(石川氏ノ)新体制理論ノ一節ヲ讀ミテ文相ノ説明ヲ求メ文相ハ該書ハ絶版ニ附セルガ其ノ後著者ノ改悛ノ情顕著ナラザルモノアリ処分攷究中ト答弁シタルヲ見ル同時ニ石川氏ヨリ電話アリコノ新聞記事ニ刺激セラレ又上京シテ文相ニ諒解ヲ求メタシトイフ更ニ来訪、余ハ知人トシテ文相ヲ訪ネルハ随意ナレド進ミテ文部省ニ出頭シテ説明ヲ試ムルガ如キ態度ニハ賛成シ難キ意ヲ表明シオケリ

二月十三日

綾子十日夜男子分娩ノ旨報ジ来ル

K、B、S、黒田永井両氏入洛中村家ニテ京都地方委員会ヲ開ク新村中瀬古両氏モ出席、一昨々日帰来ノ梅原君ヲモ招ジテ仏印ノ情況ヲ聞クソノ後委員会トシテ事務員ニ和田氏招聘ノコトヲ相談、中瀬古氏ヨリ同志社側並ニ本人ニ話スコト、ス。近藤教学部長<sup>(局)</sup>ヨリ石川氏ノ件ニツキ懇談ノ為上京ノ都合ヲ問ヒ来ル

二月十四日

近藤氏二一六日面談ノ旨返電

二月十五日

一時半ノ燕ニテ東上

二月十六日

朝近藤氏学士会館ニ来訪石川氏ノ論述精査ノ結果本人ガ共產主義者トハ認メネド論述中ニハ非難ヲ蒙リテモ致方ナキ点アリトテ一々指摘ス全部ハ同感ニハ非ルヲ述べ又経済学者ノ立場ヲモ考ヘザル可ラザル点ナドモ述べ午後大臣ニ逢フコト、ス、三時半大臣ニ面晤、要スルニ近藤氏ノ云フ所ト同ジ而シテ本省ノ所置ヲ待タズシテ本人ヨリ自発的ニ休職ニナルヤウ願出ルヤウニ総長ニ於テ計フコトヲ希望スル旨話アリ余ハ大臣ガ石氏ヲソノ論述ニヨリ共產主義者トハ認メザルコト、休職ハ復職ノ望アルモノ、単ナル噂ノ如キニヨリテ所置セントスルモノニ非ズ論述ヲ根拠トスルモノナルカ等ノ点ニツキテ確メ大臣ハスベテ之ヲ肯定シ其ノ学説ノ大成ヲ希望スル旨ヲ確言セリ依リテ考慮シテ適當ノ方法ヲトルベキヲ答ヘテ帰ル  
帰途綾子ヲ病院ニ見舞フ

二月十七日

朝九時ノ燕ニテ帰ル

二月十八日

帰宅后平賀東大総長死去ノ旨ノ噂ヲ有浦氏ヨリ電話シ来ル、一昨日橋田大臣ヨリ容態悪ク垣内内科ニテ加養中ノコトヲ聞キタリシガ之ト思合セテ事実ナルベキヲ思ヒシニ夕刊ニハ早クモ之ヲ掲載シアリ痛惜ノ至ナリ

朝石川氏ヲ官舎ニ招キ從來ノ經過ヲ詳細ニ告ゲ自発的ニ静養ヲ願出ルコトガ此際最モ適當ナルベキヲ説ク大体ニ於テ氏モ之ヲ諒シ神戸ノ兄氏ト相談シテ明朝返事スベシトテ帰ル、午后谷口部長ニ石川氏ト会見説示ノ要領ヲ話シ置ケリ  
防衛会議開催

舟岡医学部長ヨリ盛氏ヲ兼務トシテ徳島県立病院長ニ推薦シタキ旨ノ話アリ来  
年定年ノ同君ノ事故宜シカラント返事ス

## 二月十九日

石川氏来訪静養ノ名義ニテ休職ヲ応諾ノ旨返事アリ休職願ヲ認メテ持参、形式ニツキ更ニ考フベキ旨ヲ答ヘ一応預リ置ク同氏ニ対シテ休職中学部ノ事ニ一切言議ヲ挟マザルコト及ビ言動ヲ慎ミ専念研究ニ従ハレタキ旨ヲ重ネテ希望シタルニ氏ハ席ヲ起チテ嚴肅ニ之ヲ誓ヒモシ不穩当ノコトアレバ注意ヲ受ケタク、必ズ平素ノ心懸タル陛下ノ赤子トシテ学者ノ本分ヲ尽スニ邁進スル覚悟ヲ述ブ之ガ実現セラレテ復職ノ日ノ来ランコトヲ切望シテヤマズ

## 二月二十日

石川君ニ医師ノ診断書ノ添付ヲ求メタルニ菊池教授ノ神経衰弱症ニテ当分静養ヲ要スル旨ノ診断書持参アリ  
夜谷口君来訪明日開カルベキ経部教授会ニテ石川氏問題ヲ議スルニツキテノ説明ノ程度ニツキ打合アリ静養願ヲ診断書ト共ニ同氏ニ渡シ之ニ基キテ会議ノコト、ス

## 二月二十一日

十時ヨリ開会ト聞キシ経部教授会ノ結果ヲ午后三時近ク谷口氏ヨリ電話アリ投票ヲ用キズ全員一致ニテ石川氏ノ要求ヲ承認ノ形ヲトリタリトノコト委細明日面晤トノコトナリ

午時前橋田医師ニ詣リ仮義齒ノ取換ヲ為ス

谷口部長ヨリ本日ノ教授会ニテ石川氏ノ静養ノ件証認<sup>〔悉〕</sup>ノ旨通ジ来ル

## 二月二十二日

今夜九時四十分東上

## 二月二十三日

平賀総長学葬ノ日ナリ、朝学士院ニ至リ乗車券明日中ノ手配ヲ依頼、富山房ニ立寄

午後一時半ヨリノ葬儀ニ列ス会衆式場ノ講堂ニ溢レ盛儀ナリ故人ノ徳望ヲ偲バシム帝大総長代表トシテ弔辞ヲ読ム、夕景ヨリ大橋佐藤青木諸氏ニ勝ヲ加ヘ大雅楼ニテ食事

## 二月二十四日

文部省ニ行キ近藤局長ト逢ヒ石川氏ノ件ニツキ大臣ト会谈シタキモ此ノ数日大臣病氣引籠次官モ議會ノ為面会ノ時間定マラヌ故局長ニ「石川氏ノ休職ガ退官ノ前提ニアラズ」トノ大臣ノ証言アラバ休職ノ具申ヲスベキ旨話シ書類ハ同氏ニ預ケ置ク發令後モシ司法關係ノ事起ルモ文部当局ヨリ出来得ル限りノ尽力ヲ為スコトヲモ求メ近藤氏了解、三島君ニ招カレ出井ニ昼食、国際文化ニ黒田氏訪問

強風寒強シ

## 二月二十五日

朝九時ノ燕ニテ帰西、原邦造君同車

二月二十六日

留守中瓦斯使用量問題ニツキ府庁トノ交渉円満ニ解決シタル旨書記官ヨリ報告アリ

夜愛国生命ノ招宴ニ出席

二月二十七日

大阪帝大ニ過日ノ真島総長来訪ノ答問ヲ為ス

緒方洪庵ノ旧居ヲ觀ル

昨夜来腹痛

二月二十八日

佐藤為徳大佐少将ニ進級南京ニ部隊長トシテ赴任スル為中村屋ニ別宴ヲ張ル

三月一日

午后一時大日本体育会京都府支部結成式ニ出席

三月三日

海軍省派遣ノ村上一夫少将ヲ招ジ学内ニテ夕食

三月四日

評議會、部局長會、瓦斯問題又悪化ノ為四部長ト相談會

三月五日

朝書記官府庁ニ至リ警察部長ト面談当面ノ問題ハ諒解ズミトナレリトノコト午  
后ソノ旨四部長ニ報告

三月六日

午后一時ヨリ經濟学部教官ヲ官舎ニ招ジ石川問題ノ經過ヲ報告シ併セテ学部振興ノ為ノ新發足ヲ希望ス出席者高田谷口汐見小島柴田蜷川松岡八木八名ナリ

三月十日

貴志夫人来訪、余ハ逢ヒ得ズ

三月十一日

今夜九時四十分東上沼田氏同車

三月十二日

文部省ニ行キ永井氏ト物理探鉱専校ノ設立ニツキテ話ス 昼本田高田氏ト新橋  
驛樓上ニ昼食

二時ヨリ学士院ニ至リ民族調査委員会ト例会ニ出席

伊沢道雄氏ト電話ニテ話ス

原邦造氏同上

三月十三日

朝文部省ニ近藤部長<sup>同</sup>ヲ訪ヒ秘書課長室ニテ松本氏ト会談學生主事に就任ノ事ニ  
決定ス、昼時之谷ヲ訪問午後四時頃再ビ文部省ニテ永井氏ト会談二十年ノ高校  
卒業生ノ扱方大学院學生ノ選抜方法等ニツキ語ル五時半文相官邸ノ民俗研究<sup>所</sup>  
設立準備委員招待會ニ出席

宴後文相ト会談石川氏ノ件ニツキ話合フ

九時十分出發歸西

次官ヨリ長崎氏ノ件近々取運ブトノ話アリ永井局長ニモ指示シ置ケリトイヘリ  
然モ永井氏ハ先刻三月ニハ専門校長更迭ノ意ナシトイヘリ兩者ノ氣持ニ齟齬ア

ルヲ認ム

三月十四日

終日休息

三月十五日

春光照々蘇生の思なり終日訪客に悩まさる

東条首相十二日ニ出發して十五日南京に至り汪首席を答訪し今日歸來すと夕刊に報ずこの人真に精力絶倫長袖者流の及ぶ所に非ず

三月十六日

朝伊沢道雄氏矢代氏及ビ随員二名ト共ニ來學華北総研ニツキテ其後ノ經過ヲ述ブ、昼食ヲ大學ニテ供シタル後尚ホ二時頃迄談ジ夜ハ同氏ノ招ニテ左阿弥ノ宴ニ列ス

三月十七日

野村前駐米大使ヲ招ジテ學生ノ為講演ヲ聞ク辺幅ヲ飾ラヌ海ノ大將ノ態度ニ先ヅ好感ヲ感ゼシム一昨年紀元節ニアメリカ赴任以來十二月八日ニ至ル迄ノ日米交渉ノ経緯ヲ骨子トシテアングロサクソン民族ノ世界觀対日觀等ヲ率直ニ説キ大ナル感銘ヲ若キ学徒ニ与ヘタリ

化学纖維学科創設委員會終会ヲ開キ夜京都ホテルニテ設宴

三月十八日

評議會、新大学院制ニツキ四月早々総長會議ヲ開キテ協議スル積リト過日文明相ヨリ話アリタルニツキソノ用意ノ為各学部ヨリ意見アラバ申出アリタキ旨ヲ附議事項以外ニ注文シ置ケリ。夜十時半舟岡医学部長ヨリ今夜八時一五分森島名

譽教授逝去ノ旨電話アリ哀悼ノ至ナリ赤間、平賀ニ踵イデ又此人ヲ失フ文化協議會ノ大災厄ナリ

本日附にて石川教授休職の辞令出でたり

三月十九日

打合ニヨリ九大、名大、阪大総長來學四時前ヨリ主トシテ新大学院制實施ニツキ対応方針ヲ話合フ、最モ注意セラルベキ点ハ何レモソノ學生ノ詮考法ナリ結局ノ意見ハ各大學ニ詮考推薦ヲ任セ形式トシテ文部省ヨリ許可ノ形ヨリ外ナカルベシトノコトナリ一大學ニテ推薦シテ許可セラレタルモノガ他ノ大學ニテ研究ヲ希望ノ時ハ余ノ考ノ如ク其ノ學ノ配當員中ニ置キ給ヒハソノ學ヨリ給シ研究ヒハ入學希望ノ大學ニテ支弁ノコト、シタキ希望ニ落ツク

教練ヲ三學期ニモ施行スル件ニツキ昨評議會ノ相談ニヨリ四月中實施トシタキ旨ヲ專田大佐ニ伝ヘシニ同氏ハソレニテハ兵務部長ハ承諾セザルベシトノコトナリシガ午后部長ノ電話ナリトテ明日会见シタキ申込アリ二時〜三時ノ間ニ面談ノコト、ス

三月二十日

午前三菱重工業会社ガ新ニ海軍ノ命ヲ受ケテ經營スル桂ノ航空機製造会社ノ起工式ニ參列

午后柏少將來談四月中ダケノ教練ニテハ這回ノ兵務部長會議ノ相談ト背馳シ時局下困ル故五月中施行シタキ旨申込アル考慮ヲ約ス  
三時医学部穴戸副手ノ葬儀ニ列席

三月二十一日

日高學生課長一高二転任ニツキ学部長ヲ招キテ同君ノ為送別会ヲ催スつるや

三月二十二日

生産科学理事会 中村屋ニテ会食

部長会議ヲ開キ教練ヲ五月中行ヒ最高学年ノ査閲モ五月ニ行フコトヲ希望スル  
コトニ決ス

三月二十三日

物理探鉱研究所創立理事会ヲ開ク中村屋ニテ夕食

専田大佐ニ昨日相談ノ希望ヲ通達

三月二十四日

専田大佐ヨリ当方ノ返答ヲ師団ニテモ快ク承諾トノ返事アリ

今夜学部長懇親会つるや

日高氏出發

三月二十五日

体質研究会理事会辻氏より内科教室ノ本研究会ニ対スル態度ニつき説明シ自己  
ノ心境ノ弁明アリ何レノ部面ニモカ、ル暗流アルハ真ニ困つたものなり

森島名誉教授ノ葬儀（薬物教室前）ニ列シ弔辞ヲ捧グ

三月二十六日

暫振にて宅にて夕食けふも森島氏葬儀ニ参列の為来学せる酒井教学官を招ける  
宴あるを欠席したるなり胃袋強からざれば総長は勤まらずとは真実のことなり

三月二十七日

けふは末広博士夫人の葬儀に列席老来夫人に先立たるゝ人の不幸同情ニ堪えず  
沼田氏来訪、司政長官の辞令は一昨日発令せられたる故挨拶の為の来訪なり

三月二十八日

雨の日曜を久振に終日籠居

堀井氏来訪

三月二十九日

午前川田順氏を訪問、かねて西園寺公の旧居清風荘を大学に譲りうけて保存し  
当大学の創立に深き因縁ある老公、三代歴史の元勳としての老公を忍ぶよすが  
としまたその高風を学生教育の上に及ぼしたき意を川田君に話したることあり  
しが同氏より此旨を住友重役の一人に話したる結果を余に告げんとこの事なりし  
故に訪問せるなり、第一段の工作は施したれば余の其後の意向を確かめたと  
のことなり、此日午后出發東上する故帰学後重ねて面談することを約す、一時  
卅六分東上

三月三十日

白鳥博士ノ建碑式に参列の為雑司ヶ谷墓地に行く去年尋ねあぐみたる奥城の上  
に市村博士の揮毫に係る見事なる碑石の建てるを拝し今更に在世当時の博士の  
倅を忍ぶ

午后学振理事会に出席

文部省にて近藤氏永井氏に会談

永井氏に鐘江書記官優遇問題を相談

三月三十一日

正午陽明文庫評議員会に出席

午后文部省ニ行き有光課長菊池次官ト会談長寄栄軒ノ謝辞ヲ呈シ又鐘江優遇問

題ヲ依頼

夜三島君に招かれ上野明月園に会食



四月一日

十時より白鳥博士追憶坐談会に（学士会）出席、午後時野谷を訪ふ

四月二日

四月十日迄旅客輻輳ノ為列車指定席ナシ学士会ノポーターを頼み漸く燕の急行券を手に入れて出発帰洛、右翼人物としてかねて名を知れる園田新吾氏不在中来訪是非面会したしとのことなりし由石川問題にからむものと思はるこの日初めて春らしき天気なり

四月三日

神武天皇祭

また天気悪し

四月四日

天気なほよからず午后は折角の日曜日も外出も出来ず

菊池次官有光課長及び属一人参陵の為入洛夜つる家にて会食

四月五日

午后園田氏来ル何のとりとめもなき独りよがりの話なり経済学部にはなほ幾人かの赤あり注意すべしとの意なるが如し学部の事情人事等に通曉せること驚くべし、学生のみならず教官中にも同氏に内情を話す人ありと思はる服部病院長より内科助手鷹津正氏に徴用令来れるが同氏は目下極めて必要の人故何とか断る方法なきかとの相談あり書記官を東上せしむる事とす

四月七日

今朝書記官を東上せしむ

四月八日

野間京都府内政部長来訪、須貝清一氏より女専校長に推薦の依頼をうけ昨夜野間氏に電話会見を求めたる為なり

学部長を召集総長会議の問題を示し学部の意見をまとめることを求む

四月九日

永井専門局長夕刻来訪雑談の後中村家にて会食、野間氏をも招く両氏同時の任官にて相識の間なりとのことなりし故なり

新村博士来訪

四月十日

福地劔吉氏札幌控訴院に転任するを駅に見送る

四月十一日

桜半開天気や、よし

吉村正雄東洋ベアリングに転じたしとの希望にて佐々木教授を通して同社中村庶務課長に依頼してありしが愈々話まとなりし由にて挨拶に来る

四月十二日

川田氏を訪問清風荘を譲りうけたきが維持の方法を考ふる為現在維持費を探索してほしき旨を依頼

山本守君来訪

夜有光氏より来電鐘江優遇の内議進めたしとて意見を求め来ル直に宜しく依頼する旨返電す

四月十五日

評議会

会後大阪新ホテルに於ける伊太利総領事館披露宴に出席、初めてインテリ大使と挨拶を交す一見伊太利型ならぬ肥大漢なりバイストロツキ総領事にも挨拶此人は純伊型にてや、神経質らしく思はる、宴後武田鋭太郎君とホテルにて逢ひ（打合せおけるなり）敦煌經三万にて買入れの希望をきく（老人と電話にて打合の結果）

四月十六日

陽明文庫より図書館に預れる図書を文庫に返すに当り幾分を寄附してほしき旨先年来の希望を愈々決定する為荻野水谷川石井三氏入洛けふより点検を始む今夜三氏と新村、沢瀉山鹿氏等を中村屋に招き晚餐を呈す  
北京の菊池栄一氏を招き持参の十二巻と画二面とを合せて三万ならば引取る旨を伝ふ八万の触れ出しを遂にこの額に減ずることに承諾せり  
敦煌出の煬帝潜邸当時の願経を招待席に持参して衆目を驚かす

四月十七日

昨日の菊池氏との相談の結果を武田氏に通じ武田老人より電話ありて月曜十一時に山本を派して取引することに決定  
木村康一助教授嚴父及び川勝正之君の告別式に顔を出す

四月十八日

二時大塚要名誉教授告別式相国寺  
帰途太田君を訪ふ

四月十九日

菊池栄一氏に経卷代三万を渡す為山本寛一氏十一時に来学取引済経卷は山本氏携帯して帰る、陽明文庫関係者ト午弁当を共にし寄附書籍につき寛かに処理を求む  
燕にて東上

四月二十日

十一時より文相官邸にて大東亜學術教育技術連絡會議に出席  
此日卓現役免除トナリテ帰宅

四月二十一日

九時より大臣官邸にて総長會議  
昨夜内務文部農林三相共辞任文相は東条首相兼摂之旨けふの新聞に発表、會議前橋田前文相挨拶に見え昨夜突然退任との挨拶あり十一時過宮中に参内正午御陪食を賜りその後千種間にて言上例の如し午后三時より再会<sup>(開)</sup>  
夜文相の招待宴には橋田前文相和服姿にて出席し食後尺八を吹く襟懷明朗見上げたり

四月二十二日

九時より會議第二日なり午前中東条首相兼任文相として臨席昨日来御前にも一々総長の言上のあるものを手帳に控ふる首相なりしがけふも同じく何かと控を取る様普通の大臣の勿体らしき態度とは似ず得心ゆくまで問糺し問題によりては文部省として従来述べ来りしことも総理として考へ直さざる可らざる故保留すといひきるなぞきびくはして居れど独断専行の態度明らかに見え前文相の総理との対応もこれならば致方もなかりしこと、思はる、夜水交社にて矢牧海軍省調査局長招宴

四月二十三日

朝半日初めて時間を得たり森川氏青木大橋氏等来訪一高に安部日高氏<sup>（僊）</sup>を訪ひ午時時野谷に至る

二時過ぎ同家を辞し三時よりまた官邸の教学局参与官議<sup>（会）</sup>に列す三時親任式行はれ岡部長景氏文相となる六時前会議中に新文相挨拶に来る、八時過ぎ鉄道ホテルに瀬戸氏を訪ひ九時十分出発帰西

四月二十四日

靖国神社臨時大祭御親拝ニツキ休暇

四月二十六日

日本化学繊維研究会合成化学研究会両理事会ヲ開キ決算承認夜鶴屋ニ会食

四月二十七日

朝十一時ヨリ部長ヲ召集、総長会議ノ模様ヲ話ス評議会マデニ時間ノ隔リアル故ナリ

午后康德新聞理事長就任ノ菊池氏披露宴出席ノ為大阪新ホテルニ行ク上野氏ヲ訪ヒテ満洲<sup>（国）</sup>ヲ呈シ武田長兵衛氏ヲ訪フ

四月二十八日

菊池君来ル

四月二十九日

天長節拜賀式挙行祝賀会ニ用キル酒ヲ得難キ為恒例ヲ破リテ会ヲ行ハズ紅茶トサイダーに喉をうるほして休息閑談

菊池君帰ル駅ニ見送り帰途太田君を訪ふ

卓東京より帰ル

四月三十日

名古屋大学開学式ニ参列の為午後二時過ぎ出発

桜木氏に迎へられ観光ホテルに泊す寺田随行

学生課協議員会ヲ一時より開会一時半まで出席して総長会議の模様を話す

五月一日

一時より名大開学式前日大風ノ為設備天幕大小ともに飛び洪沢総長大慌なりし由、二時二十分の燕にて帰洛

今夜新文相岡部子爵を総長官舎に招きて晚餐を呈し懇談、狩野新村両博士同席

五月二日

相国寺吉村兄、佐伯富君等来訪

五月三日

この日より卓住友に出勤

五月四日

大蔵省大平事務官等来訪

戸田教授ノ生活科学研究所ヲ参観

五月六日

評議会

五月七日

橋田前文相入洛ヲ機ニ瓢亭ニテ夕食内山秘書官同招戸田君モ招ク

五月八日

留学生中民国ノ法学部在学者ヲ官舎ニ招キテ会見来会者七名

五月九日

武田鋭太郎君ト三宅君ガ約ニ従ヒ三時来宅四時過ギ来訪ノ沼田君ト共ニつるや  
ニ至る同君ノ南行送別の為なり外ニ近藤大杉並河戸田君も来会主客八人なり並  
河君大酔。

五月十日

護国神社合祀祭ニ参列来賓総代トシテ玉串ヲ捧ゲテ拝礼  
午后五時五十五分京都駅出發ノ沼田君ヲ駅ニ送ル  
独逸北京研究所ノマク 氏来訪

五月十三日

午前十時独逸大使スターマー氏独逸研究所訪問ニツキ同所ニ至リ始メテ面晤

五月十四日

夜諸学振興委員会教育特別学会公開講演会ニテ閉会ノ挨拶

五月十五日

教育学特別学会ニテ来京中ノ近藤部長外数氏酒井教学官等ト官舎ニテ昼食  
第二回民国留学生（経農理）ヲ招致会談八名  
森岡綜研理事長朝来訪

五月十六日

朝十時ヨリ黒谷ニテ故桑原博士十三回忌法要催サレ招カレテ出席永眠以来早ク  
モ十三年ノ経過今更感慨に不堪

夜森岡理事長ノ招宴ニ列シ京都ホテルニ至ル

五月十八日

十一時黒田伯官舎ニ来訪、和田氏ト共ニ官舎ニテ昼食シテ一時過ギマデ語り合  
ヒテ去ル

五月十九日

汐見教授浜口氏ノコトヲ尋ネル為来訪

五月二十日

評議會  
夜信楽会ニ出席

五月二十一日

三時柏兵務部長来訪、会談ノ席上ニ毎日新聞社ヨリ四月末山本聯合艦隊司令長  
官ガ飛行機上ニテ戦死ノ旨ヲ三時大本営ニテ発表セル旨通じ来ル  
K、B、S 京都地方委員会ニテ仏印ノ交換教授ガリヤール氏ヲ招待つるやに夕  
食

五月二十二日

青少年学徒ニ賜リタル詔書捧読式ヲグラウンドにて挙行  
グライダー命名式ヲ挙ゲ比叡ト命名  
ガリヤール氏医学部ニテ講演

夜京都ホテルニ同氏ヲ大学にて招待夕食  
三島海雲君来泊

五月二十三日

三島君朝富士ニテ帰ル

夜瓢亭ニ会計検査院ノ岸本氏以下ヲ迎ヘテ晚餐

五月二十四日

昨日来風氣に今日は朝より静養夜は約束により不得止京都ホテルに於ケル日本  
製鉄広幡製鉄所長梶本軍平氏ノ招宴に出席

五月二十五日

柴沼文部会計課長来訪夜鶴屋にて晚餐会

五月二十六日

三時半体育委員会

五時半阿部独逸研究所名誉総裁歓迎会（中村屋）ニ出席

五月二十七日

最高学年教練査閲ニ午後立合ノ為深草ニ至ル

五月二十八日

独逸文化研究所理事会

上野理事長招待会

アツツ島守備が最後ノ階段<sup>〔段階〕</sup>ニ入り全部隊敵陣を斫ると大本営より発表、これに

先立ち傷病者ハ自決せりと酸鼻ノ極ナリ

五月二十九日

二時ヨリ農場ニ行ク鐘江福原有浦三氏ト大杉部長外ニ寺田藤井等同行

五月三十日

田中二郎君来訪山科ゴルフリンクを此際解散するかも知れずその後の土地処分  
につきかねて大学よりの申込ありたる故今尚希望ありやを尋ぬる為なり

五月三十一日

一時卅六分燕ニテ東上新大学院ニツキテノ会議（二日）ニ列スル為ナリ

六月一日

十時ヨリ学振第十五小委員会ヲ開ク池内原田西田梅原氏等出席、北支一般調査  
ノ実施案ヲ議ス

午后明日ノ会議ノ準備、五時三島君来訪、共ニ同家訪問新内室ニ初見参片岡氏  
同席帰路池袋ニテ神田行キノ電車無ク徒歩ヲ余儀ナクサレルカト危懼セシモ幸  
ニ終電車ヲ拾ヒテ帰宿

六月二日

九時ヨリ文部省ニテ大学院実施案ニツキ懇談会、七帝大総長ノ外官立ノ東文理  
大商大工業大、外ニ私立ノ早慶総長ノ会合ナリ四時終了時野谷ヲ訪ヒ八時四十  
分の列車ニテ帰ル

六月三日

午后評議会大学院ニ関スル懇談会ノ有様ヲ報告学生予算定員ヲ各学部ニテ収容  
スル学科ノ報告ヲ求ム

四時半北野病院評議員会（楽友会館）



織田万博士大学ニ来訪

六月四日

秦てい子七十七才容態悪しとのことに帰途見舞、志保田吉村兩人を伴ひ帰り夕食

六月五日

山本元帥国葬営まる

十一時より部長ヲ招集大学院ニツキテ補充説明ト理学系学部ニ配属ノ助教授五人ノ割合ヲ定メ工2其他1宛トス工学部ヨリハ前ニ簡素化ニヨリ助教授一人ヲ提供シタルヲモ之ニヨリテ清算ス二時ヨリ山科ゴルフ場ヲ見ル田中二郎氏トノ打合ニヨルナリ鐘江福原両氏同行  
峯山吉村来訪

六月六日

午后武田鋭君来訪、昨五日応召解除帰宅ニツキ挨拶ノ為ナリ

六月七日

大東亜学術協会総会ニ顧問トシテ出席中村屋ニテ夕食  
秦てい子昨日遂ニ永眠の由  
小野勝年君ニ書面ヲ出ス  
中村不折氏死去ノ旨新聞ニ見ユ

六月八日

秦てい子今日葬儀、朝十時の出棺を見送り永訣す  
田中二郎君大学に来訪

学士院ニ乗車券を請求す

六月十一日

今夜文部省ヨリ電報ニテ大臣ガ十五日午后二時文相官邸ニテ面談シタシトノコト夜永井局長ニ電話ニテ用向ヲ聞合セタルニ学徒動員ニ関シ東西両総長ニ面談シタシトノコトナリ

六月十四日

一時卅六分燕ニテ東上

六月十五日

岡部大臣ヨリ現情勢ニ処シテ学徒ノ勤労協力強く要請セラル、故協力ヲ求ムトノコトナリ大学ガコノ種ノ協力ニ充分応援ノ態度ヲ取ラザルベシト考ヘ特ニ面談ヲ求メタルモノ、如シソノ誤認ナルコトヲ説キ然モソノ組織ガ十分ナラザレバ無効ナルノミナラズ批難ヲ免レザルベキヲ説キ置ケリ中央ニテ機関ヲ作ル考ナリトノコトナリ

近藤君と勝君トヲ伴ヒ銀茶寮ニ晩食

六月十六日

朝九時発燕ニテ帰西新村博士同車

六月十七日

評議会

六月十八日

第四十六回創立記念祝賀会

夜教官懇談会

六月十九日

K、B、S、京都地方委員会ニテ留学生ヲ四時ヨリ招待（矢尾政）東京ヨリ団君出席新村、駒井中瀬古氏等出席

六月二十日

長谷川清昨突然脳溢血ニテ死去ノ旨吉村ヨリ通シ来ルニ時道代弔問  
富山房大橋氏等三名来訪

六月二十五日

けふ学徒ノ有事即応ト勤労協力トニツキ学徒有事動員ヲ発表セリトノコトニテ  
諸新聞社ヨリ夕景以后頻ニ之ニ対する考ヲ電話ニテ聞キニ来ル

六月二十六日

朝岸興詳君来訪、午後一時学徒体育振興会関西支部発会式  
夜原邦造君に招かれ玉川屋にゆく

新大学院学生ニ徴兵猶予ノ内交渉成立ノコトヲ文部省ヨリ通牒シ来ル

六月二十七日

三島君夫妻来訪  
谷井夫人退院ノ挨拶ニ来訪

七月一日

今夜東上

七月二日

朝青木義君来訪

午后一時半ヨリ大東亜史編集会議に出席

その前西崎課長に逢ひ特別研究生勅令案を秘扱にて受領  
会議后菊池次官と会談

七月三日

会計課長を訪ひ予算大綱を話す、岡部大臣と十時すぎより約一時間面談

午后東大に内田総長を訪ひ特別研究生勅令案及び規定案につき打合す夜九時  
四十分発帰西

西寄課長に勅令案規定案につき意見をのべ再考を促す

七月四日

中島真雄翁の病草まり菊池深谷両君東上したる旨瀬戸氏より報じ来る

七月五日

渡辺鳥養落合大杉四君に文部省の大学院特別研究生に関する勅令案を私的に示  
し渡辺氏に別案作製を依頼す本省案が余りに大学の権限を押へたるに對し西寄  
課長に不服を表し置きたればその意味にて対案を得んとするなり

田中二郎君来訪、その二男の結婚媒酌を依頼せらる

七月八日

けふ宣戰詔書捧読を行ふ緊迫の情勢下新たる感銘（マ）を与へんが為なり

永井局長宛私信にて特別研究科設置に関する勅令案及び規定案を送附二日西崎  
氏より受取たる本省案の余りに大学の権限を端付けたるを訂正したるものな  
り、篠原市長来訪、原与作君来訪

七月九日

砂田南方総軍最高顧問工学部ニテ懇談会ヲ開ク了リテ総長室ニテ休憩シテ帰ル

新任雪沢知事来訪、不在ノ為面会セズ

内田東大総長ニ特別研究科案ヲ送附

七月十三日

内田東大総長ヨリ返信来ル

七月十五日

朝西田幾太郎<sup>(多)</sup>氏より電話あり学校への途中訪問せしに昨夜高山高坂氏等集り東京の一部の人々より此等諸氏ノ言論ヲ非難シテ諸種ノ刊行物にて公けにし敵視せるが如く総長もその派に属せりと認むるが如ければ注意し置くとのことなり  
評議会後に高坂氏ヲ招キ重ネテソノ話ヲ聴取

信楽会（大近）に出席。此日菊池君来泊

七月十六日

菊池君大阪に去る

七月十七日

宮崎氏来訪高坂氏より聴取せる事情を伝へ高山氏に逆襲すべきを説きたりとのこと余はその然る可らざるを戒め置けり

専田大佐来訪野外演習ノ件、教練教師ノ件、及ビ先日就学ノ実無キ工、理各一名ノモノニツキ徴兵猶予取消処分ノ為師団ヨリ調査ヲ求メ来レル旨ヲ述ブ、直ニ鳥養氏ニソノ旨ヲ伝へ善処ヲ求メ置ケリ松本理學部長不在

七月十八日

原与作氏宅ニ来訪

七月十九日

鳥養氏来訪徴兵猶予取消ノ件ハ先日学内ニテ問題トナリ停学処分ニ附シタル清水（？）某ナル旨ヲ聞キタリトノコト

午后更ニ来訪清水父来リテ十七日既ニ猶予取消ノ通知アリテ二十一日（？）ニ

検査ヲ受クベキ指令アリタリトノコトナリト今ハ奈何トモ為シ難シ

新京杉村氏東京ヨリ来訪

作田氏来訪

七月二十二日

山内教授来訪

岩松氏来訪夕篠原市長に招かれ岩松氏と共に井雪にて食事

七月二十三日

鐘江書記官東京より帰任

七月二十五日

けふも朝来大雨

午后橋田医師を訪ひ左上奥歯二本右上二本を抜く抜き取った歯を一々手にとり  
憮然たるもの之を久しうす

七月二十六日

けふも橋田氏に至り下の前歯一本を抜く上の門歯とその次とをも抜く筈なりしもせめて維持し得る限りはとブラ／＼せるをそのまゝに残しその余の型をとり

て仮義齒を入れることゝす

同盟通信より電話にて伊ムツソリーニ首相辭職せる旨の至急報を伝へ来る形勢如何に変化することか深憂の極なり

七月二十七日

門脇中佐福井聯隊区に転任とて挨拶に来る

専田大佐より過日師団に差出したる教練欠席学生の調書を一応師団より取り下げ改めて調製せるものを提示し来る

七月三十日

朝七時卅一分発東上

四時ヨリ学士会館ニテ開催ノ東亜文化協議会理事会ニ出席

七月三十一日

文部省ニ至リ次官専門局長教学局長等ト面談、次官ヨリ軍ガ近時学生ヲ持チ上ゲ過ギ（最近迄ノ態度ト正反对ニ）ノ傾向アリテ却ツテ困ルコト、英米ノ科学研究殊ニ電波関係ノ研究進歩ニ対シ軍ヨリ此ノ方面ノ研究促進ノ要望アリ文部省ニテハカ、ル要求ヲ俟タズ自体ニテ研究進歩ノ方法ヲ講ジタリ大臣モ熱心ニテ今日モ午后ソノ為ノ会議アリ次第二ヨリテハ近ク相談ヲスルコトアルベキ旨ナド話アリ専局長ニハ南方科学研究所ヲ予算ニ計上スルコトニ話合ヒ決定セリ

八月一日

昨夜時之谷ニ一泊、流星ニ夜ハ涼シ朝九時発ニテ帰洛

八月二日

昨日ビルマ独立ノコト今日ノ新聞ニテ発表、此事東京ニテ仄聞セル所ナリ

午后出勤

鳥養氏ニ専門局長トノ会談ニ来ル七日ノ工学部長会議ニハ経費ヲ極メテ僅ニテ工学部拡張ノ工夫アリヤ附属工鉦専門設置ノ意アリヤ兩者何レヲ選ブヤ等ノ問題ヲ附議スル筈ナル旨話ヲ聞キタル旨ヲ伝フ

又大学院特別研究生ハ本年ハスベテ準備整ハザレバ大学ニテ推薦ノ儘ニテ受入レ銓衡委員会ハ事実上開キ難キ見込ナル旨ノコトヲモ伝ヘタリ

八月三日

各部長ニ大学院特別研究生ノ件ニツキ昨日工学部長ニ話シタルト同様ノ旨ヲ伝フ（医経両部長不在）

八月四日

農学部南方研究会ヲ正午開催先日帰学ノ梶田教授ノニューギニヤ所見談アリ数日来気分過<sup>(感)</sup>レス腹工合モ悪シク暑サニ中ラレタル如シ

中島真雄氏昨死去ノ旨新聞ニ見ユ

鐘江書記官官吏優遇法ニテ二等ニ昇叙ノコト電報アリタル旨帰宅後有浦氏ヨリ報告アリ

八月五日

今日出勤セズ静養

八月六日

同上

八月七日

本日出勤

八月八日

午后鐘江君来訪、昇叙ニツキテノ謝意ノ為ナルガ如シ  
卓ト董ト一緒ニ丹后ニ行ク

八月九日

鳥養氏来訪文部省ニテノ工学部長会議ノ次第ヲ報告

八月十日

朝医工理農四部長ニ近ク文部省ヨリ学生定員増加<sup>マデ</sup>増加<sup>マデ</sup>ヲ通牒シ来ル筈故ソノ員  
数ニ応ズル予算概算要求ヲ至急作製アリ度旨ヲ話ス、次デ現下状勢ニ対応シ科  
学研究促進ヲ計リタク近ク相談シタキ故ソレソレ腹案ヲ練ラレタキ旨ヲモ話シ  
置ケリ

午後三時半大阪ニ行キ武田氏ヲ訪ヒ鋭太郎君ノ家督相統祝賀ノ挨拶ヲナス朝日  
社ニテ成瀬氏ト共ニ上野君ト会談

夜堺筋ノ武田氏招宴ニ出席

八月十一日

中島今朝吾中将来訪 九大法文学部長菊池氏来訪

八月十三日

本省ヨリ工学部電気工学ニ講座理学部航空物理第二、燃料地質講座及ビ化研拡  
張充実ヲ予備金支出ニテ十月ヨリ実施ノ考ナル旨通ジ来ル

八月十四日

堀場教授ニ化研拡張充実ヲ予備金支出ニテ十月ヨリ実施ノ積ナリト文部省ヨリ  
通ジ来レル旨ヲ伝ヘ更ニ科学研究体制整備ニツキ懇談

理学部長ニモ二講座新設ノ旨話ス

八月十五日

和田技術院次長ノ招待ニテ中村屋ニ晚餐

八月十六日

専田大佐来訪

中沢工研所長ヲ招キ明日ノ会合ノ要旨ヲ予告ス

八月十七日

医、工、理、農部長と化研工研所長とを官舎に会し緊急科学研究体制につき協  
議

黒正教授来訪本月初頃谷萩報道部長が東京新聞記者会合の席上京大三高を批難  
せしことを列席の記者より東日西野入氏に伝へたるより同氏より更ニ黒正氏に  
伝へたりとて気にかけて来訪顛末を語る

八月十八日

今夜鐘江氏昇格を祝する為中村屋に同氏と福原有浦中出氏を招き会食

八月十九日

あせぶにて気分悪し一日籠居

廿五、六両日科学研究等に関し総長会議開催の旨専局長より来電

八月二十日

太田君けふにて肖像一枚を大体画き了る七日目なり  
岡部大臣宛にて緊急科学研究体制要領を送附す



武田製菓の三宅氏来訪

今夜桑原武夫君東北帝大へ転任すべきを披露の為来訪

八月二十三日

科学研究体制ニトリ入レルベキ題目提示ノ為総務部員ヲ官舎ニ会シテ懇談

八月二十四日

一時卅六分発東上総長会議参列ノ為ナリ

八月二十五日

朝九時ヨリ文相官邸ニテ会議科学研究緊急整備体制ニツキ要綱ヲ議案トシテ説明及ビ意見ノ開陳各大学トモ時局ニ対処シテ此ノ整備ノ要アルヲ一様ニ開陳、要綱ハ八月二十日閣議決定ヲ見タルモノニテ岡部新文相ノ初手柄ナリ五時半ヨリ文相招待ノ夕食

八月二十六日

朝九時半ヨリ陸軍佐藤軍務局長及ビ那須兵備局長海軍矢牧調査第二課長及ビ其他ノ海陸軍ヨリノ戦争状態説明アリ題目ノ意見交換ノ時間ナク昨日議論シタル軍ノ秘密ト称シテ研究者ニ研究課題ノ意義ヲ知ラセザルコト多キハ研究ヲ速進セシムル所以ナラズトノ意見ヲ専局長ヨリ強ク軍部ニ取次グコト、シ十一時半首相ノ招宴ニ赴ク宴ノ前首相ノ挨拶アリ真島洪沢、及ビ余ヨリ東条総理ニ研究ニ関シテノ要求意見ヲノブ午後更ニ文相官邸ニテ思想方面ノ現状近藤局長ヨリ説明アリ更ニ一般ノ科学知識水準昂揚ニツキ談合五時半高松宮御招待ニ参列九時過ギマデ談話シテ官邸ヲ辞ス

八月二十七日

朝九時発帰西

八月二十八日

午后一時ヨリ科学研究総務部員ノ参集ヲ求メ総長会議ノ内容ヲ説明、急ニ本学内研究体制ニテ行フベキ研究題目ニツキ従事員ト部長ノ推薦ヲ求ム

八月二十九日

連日ノ奔走ニテ疲労ヲ覚エ今日ノ日曜ヲ静養ニ費ス

九月一日

十一時研究体制ニテ総務部ヨリ部長ノ推薦アリ明後三日午后一時此等部長ノ参集ヲ求ムルコト、ス

三時半ヨリ陸軍特別操縦見習士官海軍予備学生壮行会ヲ同学会ニテ行フ

十時廿分新兵務部長山県少将来訪

今夕警戒警報発令

南島島ニ米機来襲ノ旨ラジオにて通報アリ

九月二日

朝田中二郎君来訪同家慶事十月五日に繰上度旨話あり

午后評議会及部長会議

評議会審議後研究体制ト文部省ニテノ科学研究整備ノ総長会議ノ結果ヲ報告

九月三日

十時半師団ニ兵務部長答訪、了リテ師団長訪問

専田大佐ヨリ一昨日師団参謀長来学東京陸軍関係方面ニテ谷萩部長ノ大学三高

ニ対スル批難ニ基キ兎角ノ批評アリシ故ソレ／＼弁解シテハ置キタルモ此事ヲ  
余ニ伝ヘ置キクレトノ事ナリシ由伝達アリ  
寄宿舎生送別写真撮影ニ参列、前田三高長訪問  
一時ヨリ研究体制ニテ部長委嘱

福原氏帰任

過日専門局長ニ依頼セルサイクロトルンと航空医学講座トヲ採リ上ゲタル旨報  
告アリ

九月五日

東亜文学者大会ニ列席セル満支蒙ノ文士ノ入洛ヲ府市商会ニテ歓迎ノ晚餐会ニ  
出席（都ホテル）

同席ノ川田氏ヨリ清風莊寄附ノ件ニツキ中間報告ヲ聴ク

大橋理祐氏ヨリ公論所載ノ天野教授ノ戦争観ヲ批難セルモノアルヲ聞ク

九月七日

三月十四日研究ノ途上殉職シタル穴戸講師ニ対シ文部大臣ノ追彰式挙行西崎大  
学課長ヨリ表彰状ト金一封ヲ遺族ノ穴戸教授（令兄）ニ授与

九月八日

疲労ノ気味一日引籠ル

田中二郎君夫妻来訪

九月九日

昨八日伊太利バドリオ政権ハ米英ニ無条件降伏ヲ為セル旨リスボン電ガ伝ヘタ  
リト午時スギ同盟其他ヨリ知ラセ来ル七時ノラヂオ毎日之ヲ報ズ

九月十日  
夕五時半頃地震ヲ感ズ

九月十一日

午后大同ニテパラチブスに罹リ殉職シタル医学部講師間島寿男講師ノ学部葬ニ  
参列

昨日ノ地震ハ鳥取市ヲ中心トスルモノニテ惨状甚シト報ゼラル

九月十二日

愛宕松男氏来訪休養引籠ノ為逢ハズ

九月十三日

舞鶴機関学校卒業式に参列の序に十時前の汽車にて出発峯山に行く、墓参  
夜吉村にて荒川氏と共に夕食

九月十四日

工業組合の自動車にて昼前五箇を訪ひ中西氏の墓に詣で五箇を一巡、懐旧の情  
を医す、更に車を鱒留に駆る比治山を見る積りなり途中田中信太郎宅にて淑子  
チブスにて■■■病院に入院危篤の由を聞く時間の都合にてそこより引返し峯山  
の中央病院を見古賀氏に招かれて和久伝に昼食、三時発にて宮津に至り精輝楼  
に宿す、車中にて松村九兵衛氏と逢ふ、宮津にて同宿、水野書記来ル

九月十五日

早朝宮津より東舞鶴ニ至リ機関学校卒業式ニ列す高松宮殿下台臨  
暑熱強し

五時過ぎ帰宅

九月十六日

評議会、部長会議

夜高松宮別当山内豊中氏より電話あり

殿下より過日東京の宮邸に召されたる時言上したる緊急科学体制その後の経過を聞召されたしとのこと依て明夜研究者を帯同参上ノ事に約す

九月十七日

夜七時半都ホテルに至り高松宮殿下に研究状況を言上鳥養荒勝堀場木原四氏よりそれ／＼鋼の焼入鉄粉より作れる鉄帯（砲丸に巻く）電波兵器研究の狙ひ処、及び種無し西瓜及び南瓜の増産等につき御説明申上ぐ

九月十八日

殿下の御出発を八時京都駅に奉送せんとして駅に至りしも汽車ならぬ自動車にて宿より御出発と聞きそのまゝ帰る

九月十九日

九時立命館大学卒業式に出席

九月二十日

緊急科学研究体制総務部会を十時開会部長辞令を交付し廿二日研究部員を会して体制の説明をし協力を求むる事とす

九月二十二日

今夕東条首相国内態勢強化ニツキテ放送学生ノ徴兵猶予停止、理工科系学生ノ入営延期制等新聞記者ノ今日午後伝へ来リシ件々モ概括的ニ演述セリ

朝防衛企画委員会、午后緊急科学研究体制ノ研究部員全部ヲ会合、体制ノ趣旨

ヲ説明シ強キ協力ノ下ニ綜合研究ノ成果速成ヲ希望ス

九月二十三日

卒業式 夜鳥養氏送別の部長宴

情報局発表ノ新聞ニ載せらるゝ所ニより昨夜の東条放送ノ具体的内容ヲ知ル  
法文系大学専門学校ノ統合整理モ行フト見エ文部当局談ニハ法経文科ノ大学ハ  
コノ際学業ヲ停止スル訳ナルガ教育要員ノ確保徴兵不合格者、帰還者等ノ為ニ  
ハ矢張り継続ヲ考へ居レリト見ユ

九月二十四日

昨夜遅く董帰宅、猶予停止に落付かぬ様子見ゆ

終日閑居

秋季皇霊祭

九月二十六日

今夜東上

九月二十七日

昼坂本守正氏に招かれ大雅楼に昼食

午后東大を訪ひ内田総長ト会谈新態勢ニツキテハ尚ホ何事モ分リ居ラズ

東大ヨリ文部省ニ行ク西崎課長ト会谈

夜原敢二郎中将ニ招カレ通三丁目ノ末広ニテ食事、依託ノ研究ニ伴フ資料繙訳稿にツキ諒解ヲ求メ置ケリ

九月二十八日

午後一時半ヨリ大学院特別研究生詮衡会ニ出席、昨日マデモ文部省ニテハ文科

系ノモノモ今年ハ原案ノマ、通過ノコトニ見込ヲ立テ居リタルニ今朝ニ至リテ軍側ヨリ異議ヲ申出デタリトノコトニテ空氣不穩、開会后果シテ列席ノ那須兵務局長ヨリ新情勢ニ即シテ文科系ヲ考ヘタシトノ申出アリ之ニ対シ大學側ヨリ頻リニ諒解ヲ求メ此ノ系ノ分未決定ニテ解散明日午前中ニ軍ノ返事ヲスルトノコト 今夜帰西

朝池内氏訪問

出発前時ノ谷ニ行キ食后同家ヨリ直ニ駅ニユク

九月二十九日

午后一時ヨリ学部長ヲ会同シ大学院特別研究生詮衡会ノ経過ヲ報告ス  
農学部ニツキテハ在学生ノ入営延期モ軍ニテハ全面的ニ認メヌ方針ヲ持セルコトヲ昨日ノ会ニテ局長ヨリ述べタル旨伝ヘ置ケリ但シ同学部ノ或学科ニツキテハ結局之ヲ認ムベキコト文部当局モ見通シ居レリ

九月三十日

評議会

十月一日

入学宣誓式

一昨日来特別研究生中文科系学生入学許可ニツキ何度カ文部ヘ電報電話シタルモ容易ニ要領ヲ得ザリシガ昨夕初メテ西崎氏ト電話、ソノ結果昨日陸軍次官マデ決裁ヲ得タレド大臣居所不明ニテ尚決済<sup>⑧</sup>ヲ得ズトノコト然モ今日ハ入学式ノ日ナレバ入学許可アリシ含ミニテ宣誓セシメテ然ルベシトノコトニ漸クノコトニケフ式ニ列セシムルヲ得タリ

十月三日

正午ヨリ軍事援護学会関西支部発会式ニ出席  
夜相国寺吉村ヲ訪フ、先日永ラク勤メタル教育会主事ヲ辞職ノ旨通知アリタレバソレヲ機会ニ久振ニ訪問セルナリ

峯山吉村偶然同坐

十月五日

十時過ぎ御宿海軍々需局長鈴木中佐ヲ帶同シテ来訪合成石油視察ノ為ナリ昼招カレテ京都ホテルニ昼食

午后三時ヨリ海軍報道課長栗原悦藏大佐来学講演

医学部笹川内野井上三教授来訪鍊成医学科ヲ置キ度旨述べ陸軍衛生課長ヨリモ文部ニ進言スベケレバ先ヅ大学内部ノ考ヲ定メ当局ニ右設置ヲ要求スルコトヲ望ムトノコトナリシ旨ヲ語ル

十月六日

大学院特別研究生補欠推薦ノ件専局長ヨリ通牒、又大学院定員数決定ノ件二日受付ノ通牒ヲ本日見ルカ、ル取扱ノ遅延ニツキ学生課及ビ庶務課ニ注意ヲ加フ木村素衛教授来室十六師団ノ滋賀県連絡ノ森田中佐ガ八月末カ九月初メニ滋賀県配属將校ニ伝達シタル語中ニ京大学派ニ対スル不穩ノ言葉アリシヲ報告ス遺憾ナリ

十月七日

部長会議ヲ開キ大学院特研補充ニツキ協議  
緊急科学研究体制初回報告会開催各部長ヨリ報告アリ

十月八日

梅原氏来室

折角計画シタル北支ノ古蹟調査ガ九月廿五日頃出発ニ当リテ北京コレヲノ為延期ヲ綜研ヨリ求メ来リソノ後小野、日比野等ノ来電ニヨリ又出発ヲ企テシモ更ニ日比野ヨリノ来電ニテ又見合セタリシガ此日愈々延期ト決定シソノ旨三木次長ニ通知三月ニ実施ノ予定ナル旨申送レリ  
教練ヲ視察ニユキシモ時間遅ク終了後ノ為農学部並河教授ト柳畠ヲ逍遙 夜池内一氏浩輔等ト宅ニテ会食

十月九日

橋田菌医に義菌ノ手入を依頼

商工経済会を訪ひ会頭に記念品惠送ノ礼を述べ大橋氏同席

三井の山西事件が物資を敵側に売リたる利敵行為なるを聞く厳罰も当然なり

十月十日

酒井忠正伯午時前来訪農学部学生ノ入営延期取扱ニ関シ石黒氏等の斡旋経過の大略を述べらる

時野谷勝君山口よりの帰途立寄明一家卓董も帰り来リ池内一君も来リ賑はしく夕食して帰る

十月十一日

橋田氏を登校の途次訪ひ義菌の手入れしたるを受取る入菌は遂に本物に及ばず

十月十二日

十時半本田科学局企画課長来訪科学研究体制と文部省との連絡につき談ず午后二時より体制総務委員一同会合同氏と話し合ひ四時二十分同君去る

この夜学校整理官庁疎開官吏縮減（二割五分）等につき情報局より発表東大の法文系も疎開の中に入れるを報ず文教関係には民族研究所も此の仲間なり  
小泉氏学士院当選の由ラジオ報ず

十月十三日

朝田中二郎君と官舎にて面会

午後水野梅曉君来訪政界秘史を展開して去る

十月十四日

評議会

フイリッピン独立ヲ宣言ス

十月十五日

田中松井両氏子女ヲ帯同シテ来訪

十月十六日

田中二郎松井春生両家（実、久子）結婚式仲人役ヲ勤ム

十月十七日

田中松井両家ヨリ招カレ鶴屋ニ晚餐

十月十八日

矢野田中両家訪問

十月十九日

燃料廠総務部長柳少将来訪



夜同学会征途ニ誓フ会ニ出席

天野氏ヨリ董ノ出欠ニツキ注意アリ

十月二十日

富士ニテ東上

十月二十一日

一時半ヨリ大学商大統合打合会ニ出席

東大、東北、京大、九大各文科系学部統合ハ前者ニ東京商大、後者に神戸大阪商大統合ニツキ文部省ヨリ懇談、東西ニ一箇所宛ノ大学ニ統合ト地ヲ何レニ定ムベキカトノ問題ナリ西ハ京都ニ九大ト阪神商大ヲ合スコトニ大体決定。五時ヨリ田中松井両家婚儀披露会ニ（帝国ホテル）出席挨拶

十月二十二日

九時ヨリ昨日ノ話ニツキ更ニ談合ノ為西部ノ大学関係者ノ集ヲ文部省専局長邸接室ニ開ク九大トハ大体話折合シモ神商大ガ単ニ京大ニ借家ノ形ニシタシトノ提議アリシニ対シ余ハ受託ノ形ナラデハ意味ナシト答ヘ置ケリ、午后有光本田永井氏等ト談ジ最後ニ菊池次官ニモ面談シ科学研究ニツキ予テヨリ宣言セル文部ノ方針ニ拠ルベキヲ強調シ置ケリ夜大和田ノ鳥鍋会ニ出席、九時発ニテ帰西

十月二十三日

午后登学

十月二十四日

終日籠居

十月二十五日

朝海軍技術研究所電波研究部長鈴木大佐来訪鳥養堀場菊川氏ト共ニ会談研究分所ヲ京大ニ置キ総長ヲ分所長ニシテ研究ヲ進メタシトノコト、補任ノ関係ヲ如何ニスル見込ナルヤソレニヨリテ定メタク研究ハ本学研究体制ノ中ニ取入レ進捗ヲ計ルニ異議ナキ旨ヲ答ヘオケリ

午后体制総務委員会ヲ召集陸軍衛生本廠ヨリ薬学関係ノ依托ノ可否ヲ計リ受諾ニ決ス

十月二十六日

一時前ヨリ学部部長ヲ会合シ部長在職期間ヲ最短ニケ年ト定メタキ旨ヲ話シ更ニ文書ニテ通牒ノコト、ス文、農、経等近ク交迭ノ時期ニ達スル筈ナレバ之ニ先立チテ通告セルナリ

午后堀場教授ガ大阪ノ山内氏ヲ伴ヒテ来訪山内財団より科学研究体制ニ一万円寄附スルトノ申込ヲ受ク。篠原市長来訪瓦斯問題ノ仲介ノ為ノ二度目ノ訪問ナリ

十月二十八日

董徴兵検査ノ結果第一乙合格、目方ガ少シ不足ノ故ナリト希望トシテ航空ヲ申出デタリトノ事ナリ当今ノ壮丁トシテ面目上ヨリモ無理カラヌ次第ナリ現下ノ情勢ニ君国ノ為一塵ノ貢献デモシテ呉レ、巴当人ノ生キ甲斐モアリ我ガ望モ足レリ

東方文化晚餐会ニ出席滝氏歓迎ノ為ナリ

十月二十九日

天野氏ヲ訪ヒ先日ノ心遣ニツキ謝意ヲ表ス

海軍大学教頭白石少将来訪夜ソノ招宴（都ホテル）ニ出席

十月三十日

佐藤演習林長昨日南方ヨリ帰レリトテ来訪

十月三十一日

綿貫哲雄君来訪

橋田医師ヲ訪ヒ新ニ義齒ノ出来タルヲ受領

十一月一日

九時半ヨリ太田君来室シテ肖像二枚目ヲ描キ始ム

午后一時ヨリ丸谷神商大本庄阪商大両学長陶山末川河辺外ニ本学法経文学部長  
会同統合ニツキ打合ス

其席ノ相談ニ依リ余ヨリ荒川九大総長ニ裁書九大ソノ後ノ協議ノ様子速報ヲ求  
ム

十一月二日

朝九時過ぎ上京徴兵検査所ニ検査情況ヲ見ル学生ノミノ検査ナレバ普通ノ検査  
トハ様変リ進行モ早ク整然タリ十時半ヨリ太田君描ク

十二時半大学ヲ出デ三時前甲南高校訪問岩寄寺井諸氏ニ面会董近ク入営ニツキ  
挨拶五時武田氏訪問鶴半ニ夕食十時半帰宅

峯山吉村来泊

十一月三日

明治節例年ノ如ク快晴

九時拝賀式

十一時半独逸文化研究所創立九周年記念式正午ノ昼餐会ヲ楽友会館ニテ催ス麵  
麴無ク飯無ク大根ノ煮タルヲ飯ニ代ヘタリ此ノ先キドコ迄行クベキカハ知ラネ

ド今日ノ光景永ク追念セラルベキナリ午后後圃ニ芋ヲ掘ル

十一月九日

ブーゲンビル島沖八日以来引キツゞケル第二次航空戦々果発表セラル戦艦三隻  
撃沈ヲ始メ廿余隻ノ船艦ヲ屠リ海鷲ノ威勲ヲ揚ゲ

十一月十日

午后一時過ぎ岡部文相来学昼食後工学研究所以尊攘堂陳列館農学部理学部(荒勝  
研究室)ヲ視更ニ医学部視察ノ予定ナリシモ腹工合悪シキ為棄学教室ノ陳列ヲ  
見タルノミニテ引揚ゲ七時ヨリ学部長ト共ニつるやに夕食して九時出發帰東

十一月十一日

評議会、会議ノ後先日通牒シタル学部長在任期間最短二年ノ件ニツキ高田評議  
員ヨリカ、ル通牒ハ評議会ニ諮リタル上ニ為スベキナラズヤトノ個人意見開陳  
アリ余ハ此ノ如キハ評議会ニテ決シタル問題ニ非ルト共ニ総長ハ自己ノ意見希  
望ヲ学部長ニ通ズルコトハ少シモ差支ナシ若シ不賛成ナラバソノ旨学部長ヨリ  
答申スベキナリト答ヘ置キタリ

十一月十二日

ラディオオハ昨日ノブーゲンビル島沖第三次海戦々果ヲ伝フ

十一月十三日

十時荒川九大総長東京ヨリノ帰途来訪、統合問題ニツキ大臣ニ九大ハソノ要ナ  
キニ非ズヤト意見ヲ述べ再考ヲ求メタルニ大臣ハ再考スルトモセヌトモイハズ  
只ダ聴取シタルノミナリシガ急速ニ決定ヲ見ルニハ至ラザルベシトノ旨ヲ述べ  
テ去ル

谷口部長同席

二時ヨリ荳屋ニ貴志氏ヲ訪フ

十一月十四日

十時ヨリ羽溪氏還曆祝賀会（教官食堂）ニ出席

今日ラディオハブーゲンビル島沖第四次海鷲戦果ヲ伝フ

十一月十五日

董東京ニ行ク 明東京ヨリ帰ル

十一月十六日

工学部長ニ鳥養教授ヲ瓦斯顧問ニ依頼シタク同意ナラバ部長ヨリ鳥養氏ニソノ旨依頼シテホシキコトヲ頼ム

桑原武夫君仙台ニ赴任ヲ駅ニ見送ル

ブラットフォームニ入ルト同時ニ車ハ動き出シ挨拶スルヲ得ズシテ引上ゲ

夜川西機械社ノ招宴（つるや）に列す

十一月十八日

法隆寺ニ行ク壁画委員会出席ノ為ナリ 夜信楽会ニ出席

十一月十九日

董此日綾子舒子等ト共ニ東京ヨリ帰ル

坂間大阪市長教育局長ト共ニ来訪

十一月二十日

本学出陣学徒壮行会ヲ運動場ニテ挙行千七百名許りの出席、緊張ト感激裡ニ終

了、引続キ出デユク学生ハ構内ノ正門ニ出デ行クヲ残留学生ト教職員ガ正門マデノ沿道ニ見送り、更ニ平安神宮ニテ祈願祭ヲ執行三千ノ学徒戦場ニ功ヲ立テ、帰り来ルモノ幾人ゾ、壮キ毗ノ裂クルマデ緊張セルヲ見ルカラニ有り難キ涙ノ湧キ出ヅルヲ止ムル由モ無シ

十一月二十一日

京都市ニテ出陣学生壮行会及祈願祭ヲ平安神宮ニ挙行来賓代表トシテ玉串奉獻今夜七時五十分発東上

十一月二十二日

豊田氏宿所鉄道ホテルニ訪ヒ来ル打合ノ後同伴シテ海軍省ヲ訪ヒ軍務局第二課長矢牧大佐ト会谈木材工学研究所設置及ビ南方研究所設置ニツキ後援ヲ依頼快諾ヲ得岡局長ニモ挨拶。文部省ニテ永井局長ニ豊田氏ト共ニ海軍省ノ経過ヲ語り豊田氏ハ更ニ軍需省ニ行ク余ハ藤野氏ニ瓦斯供給問題ノ実報ヲ語りテ大学ノ研究ニ差支ナキダケノ配附ヲ府ニ通牒スルヤウ燃料局トノ交渉ヲ直ニ為スコトヲ要求シ明后日中ニ返事ヲ得ルコトヲ要望ス近藤局長清水科学局長トモ面談。夜五時過ギヨリ呉服橋やまとに催せる富山房招提ニ赴キ東洋史辞典編輯ニツキ東京側と打合ス京都ヨリ外山出席

十一月二十三日

新嘗祭ノ一日ヲ江古田三島氏宅ニテ過ス

十一月二十四日

一昨日豊田氏トノ打合ニヨリ佐藤演習林長ヲ招キ同氏今朝着京、豊田氏モ来訪両氏同道シテ海軍省ニ至ル、午時過ギ佐藤氏帰来軍需省ト軍務局トヨリ文書ニテ大蔵文部両方ニ交渉スベキガソノ時期ヲ何時ニスベキカトノ話アリ余ハケフ

永井局長ト逢ヒソノ点打合スコトニス

午後二時岡部文相ト会見、木研、南方研ノコトニツキテモ談合大臣ヨリ第二予備金ヲ求メテハトノ意見アリ会計課長ヲヨビテソノ旨相談、更ニ永井氏ト話合フコト、ス南方研ニツキテハ特ニ大臣ノ尽力ヲ求メ大臣之ヲ諒ス、藤野氏ヨリ一昨日ノ返事ヲ聞ク燃料局ヨリ府ニ通牒ヲ発スルコトナリ文部省ヨリモ同じク通牒ストノコトナリ、夕暮佐藤氏ヲ更ニ招致シ大臣トノ会谈ヲ伝ヘ予備金ニテ行クカ追加予算ニテ行クカ軍ト打合セテ決セラレタキコトヲ求ム。夜七時半発歸西。

昼本田弘人君宿ニ来ル勝ヲモ呼び宿ニテ昼食

## 十一月二十五日

朝六時十分帰着十一時出校 評議会 四時半ヨリ北野病院評議会。昨日菊池君来リ泊スケフ董ハ浩輔ヲ伴ヒ道代ト菊池君ト四人ニテ伊勢参宮ス  
移築ノ離レニ初メテ菊池氏泊ル

## 十一月二十六日

瀬戸君来訪菊池君トソノ同伴ノ白井氏ト太田君ト五人ニテ夕食久々ニテ放談、太田君廿九日発支那ニ行ク為菊池君ニ奉天ノ旅舎ノ斡旋ヲ頼ミニ来レルナリ  
大阪市教育局長朝来訪過日市長来訪シテ相談アリタル市立医専ニ北野病院ヲ附属医院トシテ使用ノ件ニツキ返事ス

## 十一月二十七日

俄ニ一時ヨリ緊急科学研究体制総務部会ヲ開ク  
ケサ川村君ヨリ過日学研ノ特別委員会常置委員間ニテ文部省ノ動員会ニテ取り上グベキ研究題目ト費用トヲ決シソレヲ来月六日ノ特別委員会ニカケテ決スル  
段取トナリ居レルガソノ中ニ本学提出ノ題目ガ殆ンド入り居ラズトノ報ヲ受ケ

タル為対応方針ヲ定ムル為ナリ、文部ガ総額ヨリ控除シテ持テル費用ニテ本学ノ題目ヲ採リ上グルナラバヨキモカ、ル形ニテ本学ノヲ取り上ゲヌナラバ断然本年度ハ此ノ組織ヨリ脱退スベシト一決明夜上京ノ書記官ヨリ此ノ旨ヲ科学局ニ通ゼシム

## 十一月三十日

明日董ノ入営ノ為今夜兄弟姉妹五人菊池君父子及ビ折柄来合セタルコレモ海軍ニ行ク田中龍雄ト前隣ノ小島巳三郎等ヲ会シテ壮行ノ宴ヲ催ス前夜ニモ拘ハラズ当人モ元氣ナレバ一同モ感傷ニ陥ラズ既ニ卓ノ時ノ経験モアリ時世ガ時世ニテ誰モ彼モガ入営スル際ナルニモ由ルナラン  
本部職員一同ヨリ入営ヲ祝フ旗一流ヲ寄贈セラル

## 十二月一日

学生ノ徴兵猶予停止ノ宣言以来二ヶ月余遂ニ入営ノ日トナレリ五時前朝闇ノ中ニ町内ノ有志ト家族一同ニ見送ラレテ董出発ス幼児小学中学ヨリ今ノ姿ニ生ヒ立チシ二十年ノ今更ニ追想セラル春日校ニ集マレル上京ノ学徒ノ情況ヲ視察シ更ニ八時半卅七部隊ニ至リ営門ヲ入ル学徒ノ様子ヲ見ル何レモ元氣一杯ナリ各中隊ニテ入営者ヲ受領スル様ヲ見ル董ハ伊藤隊ニ入レリ岡田部隊長ノ話ニ今日ヨリ数日東福寺ニ泊メソノ後コノ兵営ニ移シ学徒タケノ隊ヲ作りテ訓練スルナリト十時過ぎ営ヲ辞シテ帰ル愛児ノ武運長久ヲ祈ルヤ切ナリ  
東方文化研究所理事会

## 十二月二日

菊池君父子東京ニ向ッテ十時廿一分出発ス駅ニ道代ト共ニ見送ル  
福原氏東上、鐘江氏帰来、南研参考書類ヲ豊田氏宛送付、第三回科研報告会及ビ総務部会ヲ開ク

十二月三日

市長ヨリ入江氏ノ筆ニナレル法隆寺菩薩像ヲ寄贈セラル市史編纂進捗ノ口ヲ聞  
キシ謝礼トノ事ナリ、夕景市長ヲ訪ヒテ挨拶シ兼ネテ先日内談アリタル大学ノ  
瓦斯値上問題ニツキ意中ヲ述べテ返事トス

十二月四日

貝塚氏より海老到来 久振りに落ちつきたる夕食を為す

十二月五日

三島君来訪ビタカルピスを製造スル為ニビタミンB1を武田氏より出来れば三  
キロ最少一ポンドニテモ譲り受け度依頼してくれとの事なり直ちに電話せるに  
当主東上中、老人ハ住吉に在るも腰痛にて籠居とのことに出かけたる足を三島  
君と共に文展に向ける、卓道代同伴  
夜佐竹中佐歓迎宴に列す(つる家)伊ノ潜水艇にて九月独より帰り来りし人な  
り

十二月六日

正路教授来訪科研体制研究員ノ召集方ニツキ懇談アリ、コノ事前ニ庶務課長ニ  
本省へ手続ヲスルコトヲ命ジ置キタルニ今尚ホ運バズ緩慢遺憾ナリ直ニ各部ニ  
照会シ要アルモノニツキテ起案ヲ命ズ

十二月七日

園君昨日ノ学研特別委員会ノ科学動員協議会ノ結果ヲ齎シテ帰来内報ス堀場氏  
ノ書面明日ニモ来ル筈トノコト、ソレニヨリテ科研体制総務会ヲ開クカ否カラ  
決スルコト、ス

大藤名誉教授薨去ノ旨夕刊ニ見ユ、ツイ先日ソノ令嬢ノ身上ヲ依頼ニ来ラレシ

二人生真ニ揣ル可ラズ

十二月十一日

朝大学にて今朝帰学ノ福原氏ニ逢フ

十時廿一分発東上

六時廿四分熱海着瀬戸君に迎へられ来宮梅林通りトンネル上の氏の別墅に宿す  
菊池君と鼎座十二時を過ぎて就寝

十二月十二日

冬とも覚えぬ熱海の光線浴に半日を過し瀬戸氏と梅林を散歩四時頃より梅林入  
口の礼亭に山鳥料理を味ふ  
六時廿四分発東京に向ひ八時半着鉄道ホテル

十二月十三日

朝豊田久二氏来訪

午後二時より国史編纂準備委員会

夜芝公園浪華屋に於ける大臣ノ招待に出席

十二月十四日

朝文部省にゆき柴沼会計課長秘書課を訪ひ午時東洋文庫評議員会に出席三時頃  
再び文部省にゆき科学局にて本田久保田氏等と談合真島阪大総長モ同席、第二  
次ノ学研常置委員会に京大の緊急体制ノ問題ヲ採択セシムルコトニツキ相談、  
五時ヨリ塩原ニ於ケル三島君ノ招宴ニ出席小畑忠良氏以下同席、十時発帰西

十二月十五日

朝八時半京都帰着



午后登学

満蒙史料一部分出来

十二月十九日

離れにて終日揮毫

十二月二十日

十一月十九日以来ギルバート諸島中ノタラワ、マキンニ米軍侵寇廿一日以来通信絶エ廿五日海軍陸戦隊三千軍属千五百全員玉碎ノ旨此日大本営ヨリ発表七時ノラヂオにて放送ス

書記官今夜東上ス

防衛企画委員会

学史一部分出来持参

十二月二十一日

教練査閲、査閲官山県少将、真面目ニシテ氣魄勝レ良好トノ評

道代丹後ニ行ク宮津ヨリ通知ノ魚ヲ取りニ行ケルナリト

十二月二十二日

道代鰯ヲ下ゲテ帰ル後日ノ思出ナルベシ

董来ル二十六日初メテ面会ヲ許サルトノコトヲ通知シ来ル

十二月二十三日

評議会

書記官帰学東京ニテ研究セル岸田事務官関係ノ損害賠償訴訟ハ大審院<sup>(地)</sup>ノ関係判

事ノ見込ニテモ時効ノ関係ニテ勝訴ノ見込無シトノコトヲ報告ス

情報局ヨリ徴兵適令ヲ一年低下スルコト成レル旨発表ス

十二月二十五日

大正天皇祭日なり

書齋の整理に一日を過す

十二月二十六日

董初めての面会日道代卓と共に兵營に行く元氣なれど靴傷に悩める由なり  
けふ天氣寒し

十二月二十八日

ことしは御用仕舞といふこともなく卅一日まで執務のことゝの通達に年末の気分もせねど恒例により本部高等官の慰労会を催す料理屋にゆくも腹充たすを得ざれば官舎に招き上島事務官の肝入りと宅より持参の鶏とにて一同の満腹を買ふ、近藤大杉鳥養三教授をも招く

十二月三十日

師団を訪ひ過日新旧參謀長來訪の答礼をなす、河野師団長に逢ふ積りにて刺を通ずれば出て来た人は見知らぬ秋山義隆將軍なり師団長も交迭と見ゆ、あはたゞしき様なり

けふにて執務を切上げとして帰る

## 一九四四（昭和一九）年

## 一月七日（金）

正午過ぎ清水科学局長木下科学官山本属の車道にて来学昼食後工研始め荒勝戸田氏等の研究室を参観

四時頃官舎ニ来り予て通知して会同せる学研人文部の候補委員たる新村矢野田辺木村西田倉石及び余と合して七名と会談、此の部の研究の進み方につき懇談、六時過ぎ清水氏等の一行を木屋町中村屋に招じ夕食

## 一月八日（土曜）

午前清水科学局長来学学内の緊急科学研究体制総務部員と懇談、午後は学研の西部研究班長会議を理学部にて開く（余は出席せず）

二時より官舎ニ田附政次郎氏と会見北野病院を大阪市より市に寄附して新設すべき医専の附属病院たらしめたき希望に対し本来本学への寄附者としての同氏の意向を聴く、要するに今大阪市に寄附することは見合せ従来通りの経営にて進みたしとのことなり

午後六時過ぎ官舎に当日桃山御陵参拝の岡部文相を招じ夕食歓談  
自動車が寒さの為動かざる為十時過ぎになりて帰宅

## 一月九日（日曜）

二時より執行の下村正太郎君の告別式に列す深草宝塔寺にて営めるなり此日天気寒く一入故人に対する幻滅の情を深からしむ

## 一月十日（月）

この数日雪天寒気甚し、ストーヴ無しには過せぬ京の冬と思ひしも石炭燃やす

べきすべなきことしの冬は身の縮まる程の寒さにも何とかして抵抗してゆかねばならず観念すれば何とか凌ぎ得ざるには非ず但し能率ほとんど拳がらず

## 一月十一日（火）

今夜東上

## 一月十二日（水）

鉄道ホテルに部屋取れずとのことに時野谷に着く。駅にて豊田氏と面談。午時三島君を社に訪ひ、後学士院例会に出席

## 一月十三日

文部省に行き清水局長と面談  
夜海軍々務局課長矢中佐はじめ課員諸氏文部省永井局長西寄課長柴沼課長園部マカッサル研究所長等を志ほ原に招く

先般来此等諸氏に支援を求めたる南方科学研究所設置予算通過し海軍側には別に演習林についても世話になりたるにつき謝意を表する為なり豊田久二氏及び福原河田、外に当日上京の佐藤演習林長も出席

此日文部省より志ほ原に行く道に麻布笄町の 氏宅を訪問

## 一月十四日（金）

午後文部省を訪ひ夜三島君に招かれまた志ほ原にて夕食久しぶりに川西実三氏とも同席、三島克騰君出発間際の列車中に訪問し来り父君家庭内の事情につき苦衷を訴ふ

## 一月十五日（土）

朝帰宅午後出勤

一月十八日

此日学術研究会議人文科学部の会員内定者相会して相談する約束あり官舎に行く筈なりしも昨日以来風邪の気味の為欠席

一月十九日 水

昨日の会合にて田辺氏脳貧血を起し卒倒の由聞く

一月二十日 木

田辺氏を見舞ふ既に回復自から玄關に來りて応接

一月二十四日 (月)

先日東大第二工学部ついで六高に火災あり、時局下批難の声高し、此日部局長を招集火災取締につき充分の注意を要する旨を告げ取締方法を考究すべき旨を告ぐ

一月二十六日

物理探鉱技術員養成所開所式を行ふ

董飛行科適性検査の為立川に行くとして道代駅までゆき面接

一月二十九日

十二月入営の学徒兵の状態視察の招きを師団兵務部長よりうけ居りたれば九時桃山練兵場に至る。機関銃兵の演練最も苦勞に見うける。京大出身者の集合列立せるに面接、手甲皆多少の凍傷に罹れり然も元氣は旺盛、時局下の学徒兵として頼もしきと共に同情の念に堪えず

営内にて董にも面接

夜中村樓にて学士会京都支部委員会に出席、支部の建物を南方研究会館として

譲り受けることに委員一同の承認を経、二月四日前田委員上京翌日本部と相談の事に決す

一月三十日

マーシャル島ニ米軍上陸ノコト二月一日ラジオニテ放送

二月七日 (月)

朝より大阪に行き市役所二坂間市長を訪ひ新設医専に京大出身者を職員として適当に召聘<sup>(留)</sup>ありたき旨を主として懇談、一昨日舟岡部長服部木村両教授の来請によるなり転じて軍需管理部長に新任の長谷川中将を答訪(先日来訪ありたる故なり)朝日に上野氏を訪ひて昼食、更に阪大にゆき真島氏と会談、武田氏を社に訪ひて帰る

帰れば董家に在り明後日神奈川県の飛行学校に転属の事となりけふは外泊を許されたるなりといふ夜明夫妻卓等皆集り賑かに会食

二月八日 (火)

董咽喉が痛く十二月以来の足の靴傷も尚ほ癒えずとの事に十時過ぎ病院に伴ひ柳原氏に足の傷の手当を受け更に真下氏に咽喉の診察をうく、真下氏一寸怪しき節ありとて星野氏の許に伴ひ受診したるに■<sup>(留)</sup>検の結果ジブテリ菌を発見す、手当をすべきなれど兵隊は地方医師の診断を受くる訳にゆかぬとの事種々相談遂に専田大佐ニ電話して隊の意見を求むることにしたるが電話容易に通ぜず時間は十二時半を過ぎ帰営時間も迫りたれば兎も角隊に歸りて受診する事とし一旦宅に歸る、配属将校青木氏より電話にて隊の副官と連絡したるに隊より軍医を大学病院に出すとのことなりしが自分より隊に本人を歸らすとの電話をき、たる故(専田大佐にの)更にこの事を隊に通じ置きたり隊にては医務室と連絡し帰営後直に受診の事に致しありとの事なり、二時半宅を出て自分の自動車に

て三条河原町まで至りこゝより京阪電鉄にて帰營す、甲南高校の友人等五人態々董の帰宅を聞きて朝より宅に來りて待てるあり下宿の主婦福岡氏もまた訪ひ来る厚意謝するに辞なきも本人は突然の病氣と明日出發入校の手筈が全く狂へると更に手当を受ける交渉とにて頭が混亂せる有様見え氣之毒に堪えず然も比較的落ちつき注射後一週間程は静養を要すとの星野氏等の話を聞き此一週間に足も癒して行きますと全く諦めて左程に焦燥せずには歸り行けり

## 二月九日（水）

青木氏來訪、昨夜隊に行きたるに丁度董診察中なりし故その了るを待ち医員に聞きたるに腺化性扁桃腺炎と診断し一週間静養のことになりたりとの旨報告をうく度々青木氏に世話になり感謝に堪えず飛行学校入学等の事は更に相談して決せらるべしとの事なり

## 二月十日

原部隊長大坪隊長森井少尉三谷四郎班長等に裁書董の病氣につき挨拶す

## 二月十一日

拝賀式後各学部長と共に平安神宮ニ参拝学生代表も加はり戦勝祈願

## 二月十二日

午后三十七部隊に董を見舞ひ原部隊長に挨拶青木大尉同行。医官広島大尉及び野田少尉とも逢ひ病状軽く二三日中に帰隊の筈なる旨聞く野田少尉は京大出身にて後にて聞けば薬師山の国島病院より通勤せるなりとのこと幸しも嘗て世話になりたる由なりどこに知人縁故のあるやら分らぬものなり

## 二月十三日

夜野田少尉国島病院より電話し董経過よき故本日より部隊に帰ることになりとのことなり

## 二月十四日

今夜また野田少尉より電話にて董はなほ五日間加養の上飛行学校に行くことに定めたりと通じ来る本人は早く行くことを希望し居れど大事をとると共に足の傷もなほ癒えざる故かく計らへりとのことなり

## 二月十六日

今夜K、B、S京都地方委員会にて共栄圈留学生代表懇談晚餐会を開く渡支の途中の黒田理事も来会新村駒井夫人も出席 寒氣強し

## 二月十七日 木

朝九時東京より大藏公望男大學に來訪<sup>(華)</sup>河北綜研の副理事長を伊沢氏が辞するに至れる事情をのべ遠からず大藏氏も辞するやも知れぬどその際余の直に辞任を見ては困る故今後同研究所が当初の宣言即ち学術的に進む研究所たることとその実全く無きに至らば勿論辞すること然るべきがそれまでは留まり居り呉れるやうとのことにて長岡氏にも同趣旨にて諒解を得置きたりとのことなり余は同所のその後の行き方が当初の話と異なるを感知し殊に伊沢氏が辞めたこともあり余より過日来辞任の意を大藏氏に通じ協議せんと思ひ居りたる矢先きなる旨をのべ然も態々來訪如上の話のありたることなれば兎も角暫く形勢を見送るべしと答へ置けり

ついで十一時黒田氏來訪K、B、Sの地方委員部を京都支部とすること、支部委員として下村氏の代りに大橋氏をとの当方の意向然るべく外に婦人委員として大沢氏の息女にして 家に嫁げる氏が駒井氏と折合よければ依囑然るべき

ことなど話し別に氏の計画せる日華交換雑誌編纂委員長を余に引き受けくれと  
のことなり余はその任に非るを答へしが兎に角近日東上の際永井理事長と会見  
委曲返答致し置くべしと約せり

けふ緊急科学研究体制報告会を開き会後会議室にて晩餐会を催す

二月十八日 金

董京都駅より道代に電話をかけ明日出発飛行学校に行くこと、となれりと報じ  
道代駅にゆき面接したりとの事、明日更に駅に切符を買ひに來り出来れば帰宅  
するとのこと夜野田氏よりも更に同じ旨電話にて通じ来る

二月十九日

朝董帰宅十二時半迄に帰營とのことに十一時同車して三条京阪にて分る夜また  
隊長の許可ありたりとて帰泊、野田少尉より中隊長に依頼してくれたるによるが  
如し。この計ひによりゆる／＼一晚を宅に過し明朝出発すること、なれり

此日ラジオは昨日トラック島にまた米軍の來襲上陸したるを報ず

二月十九日 土

朝九時五十分發にて董出發につき九時道代と共に同車駅に至る十時より学校報  
国隊京地<sup>(註)</sup>地方部發会式を挙ぐること、なり居れる故駅にて別れ直ちに会場樂友  
会館に至る、董は今夜時野谷に一宿明日入校の筈、此の戦局下に航空志願を特  
に思立ちたる当人の氣概親ながら有り難き程の感に不堪偏に武運長久をいのる  
文部省より永井局長西崎課長高橋体育官等來り午前は文部省側主となりて学校  
長及び生徒主事等参会して地方部を結成、午後は既に結成せられたる地方部の  
連絡會議として地方部長が主となりて協議こ、に愈々地方部の發足を見るに至  
れり

夜文部省より關係者を京都ホテルに招きて晩餐

此日午後東条内閣の山崎農商賀屋大藏八田運通各相が辞任内田石渡五島三氏が  
各々新任せる旨ラジオにて発表

二月二十日 日

午前十時より総長官舎にて永井専門局長を招き各学部長会同して懇談、十一時  
半永井氏出發彦根に向ふ

二月二十一日 月

一昨日あたりより少しく風邪氣味にて違和けふは終日静養

東条総理大將が參謀總長島田海軍大將が軍令部總長後宮中軍司令官が參謀次長  
に就任の旨夜のラジオは報ず軍政の一致を要すること急なるものあるが為なる  
べし昨トラックに來襲の米軍を撃退したるも我に巡洋艦二駆逐艦三飛行機  
一三〇等の大損害を被れる旨もラジオにて発表

此頃特に戦局につきての悲感<sup>(註)</sup>説多く憂慮に堪へず新方策立たずんば此形勢を如  
何せん

二月廿五日

夜東上

二月廿六日

十時より学士会館にて学振第十五小委員会を開き去年十一月延期せる北支一般  
調査を三月二決行の事に協議

富山房二至り東史辭典の件につき社長及び大橋氏と協議、東亜研究所に原理事  
を訪ひ史料邦訳文訂正原稿既成のものを昨今に發送の旨を告ぐ四月頃京都にて  
この研究事項中心の講演会を開き度希望なる旨同氏より話あり

四時半学士会館にて山田理事長和田書記長同席にて京都学士会支部の建物を京



大に譲受けの件につき懇談、学士会より同建物土地を合せて京大に寄附、京大南方研究会よりその代価に相当するものを学士会に寄附但しその一部分は實際上学士会より京大に寄附すること、して研究会よりはその額を控除したる額を学士会に寄附すること、その代り京大側にて今後の学士会京都支部の発展に出来る限り尽力すること、することなどを協定す但だ山田氏よりは土地を細川家より購入の時長く学士会にて維持する旨話しあれば建物だけを右の形にて処理し土地は京大にて賃貸することにしては如何、勿論その後事情変化せる故これは絶対的のことにはあらねど成るべくかくしたしとの事なりし故余は帰洛の上急にその点返事すべしと約して話を切りたり

此日政府ハ決戦非常措置を発表し向ふ一年間ノ決戦態制方針<sup>⑤</sup>を示す

夜宿に綾子より電話あり董より明日の日曜日に面会出来る故来てほしとのことにて行く積り故同行せずやとのこと依りて明朝時野谷を訪ひ同行の事とす

## 二月廿七日

十時綾子敦と共に下北沢駅より小田原行き電車に乗らんとせしも満員にて乗れず新宿まで逆行してやうやく江ノ島行きに乗り込む満員立往生なり相模大野にて乗り換へ厚木に着く十二時前なり乗合バスは二時まで無しといふ駅頭に立つこと二時間余纔にバスに乗り込めば中津村指して同じ面会目的にて行く客の為バスは身動きも出来ず折柄の好天氣に車内は窒息せんばかりの暑さなり町を外れて相模川（馬入？）を渡らんとしてバスは機関を損じて動かず乗客を降して修繕に着手すこの調子では仮令中津まで行くとも帰路の乗車は望むべくも非ず小供連れにては三里の道を歩むことと思ひも寄らざれば綾子と敦は此の処より引返さしむやつのことに中津村につけば既に三時過ぎなり二十分余を待ちて董出で来る既に見習士官の服装にて深草の二等兵たりし一週間前とは様子も変りたれど足の傷は尚ほ癒えず練兵も依然として休み居れりとのこと携へ行ける茹卵子煎豆蜜柑菓子麵麴の類を貪り食ふこと曩日深草に於けると同様なり乾柿は

ポケットに藏ひ込む部屋にて同僚に分つ積なるべしひよつとすればお父上が来て下さるかと思つて居りましたとのことよくも訪ね来てやつたりと思へり綾部生れにて董と一中同期の波多野といふが同じく長刀をつるして会見の坐に來り誰か父が面会に來れりと知らせ來りし故出て來りしが羽田と波多野の間違なりしといふ、その氣持を推察して氣の毒に堪へずこれも卵子の分与をうけて立つたまゝにて頼張る何か用事でもあらば便すべしといへば父に葉書を代書して出して呉れとのこと来る五日面会出来る旨を知らせる文意なり態々綾部までかゝる旨を通知したき心情憫れなり承諾の旨を約してわかる

四時のバスにひよつと乗り得ればとの頼みにその前十分校門を去る董門迄送り来る半町にしてふり返れば見事の氣を附けの姿勢に挙手して別意を示す帽を振りながら急ぎ足にてバスを求むバスの影も見えず愈々三里の夕暮路を徒歩踏破の外なしと覺悟して歩を運ぶ早稲田の学生二人が同じく厚木指して急ぐのと同行となるこれも入校せる同窓の友を慰勞に面会に行きしなりといふ卅分許りを歩みたる間にバスの停留所ありその手前にて厚木より中津さして行けるバスに逢ひしが停留場には四人の小供憩ひて今行きしバスの降り来るを待てるなりといふこれに乗り得ればとの一縷の望みの動きて早稲田学生とはこゝに分れ路傍の芝生に腰を下して廿分間許りを待つされど一向にバスの降りきたる様子なしその内自転車にて中津より厚木方面さして乗り過ぎたる下士官が中津のバスは満員にて到底こゝに待つも乗れる見込なしと云ひ去るかくて愈々乗車の見込もたえ貴重なる廿分を空費したるを苦笑しつゝ、更めて厚木さして歩行を続く間もなく日は没し三日月の淡き光をたよりに歩きに歩く厚く重き毛皮外套とおまけに毛皮のチョッキの恨めしきまでに暑く重く襟元より背中に沁み出す汗と吹きつける寒風とに風を引き込むことを恐れ乍らやうやくに今朝バスの事故を生じたる相模川まで辿りつくもう一息と元氣を振り起して七時遂に厚木駅に着、一電車を待ちて新宿駅<sup>⑥</sup>に乘込みたるにこれはまたけふの日曜を利用しての買出し部隊に全く身動きすら出来ず立つたまゝ、どころの事ではなく弓なりに押しつめら

れし体を真直にする余地すらなき混雑、それとても兎も角下北沢に下車帝都線に乗り換へて僅に蘇生の思をなせり子を思ふ親心なればこそ今の我が身にかゝる苦行にも堪へて面会の目的を遂げたれ外の事ならば頼まれても出来ることにはあらざと思ふにつけ恩愛の情の何にも超えて尊きを今更に痛き程に自から覺りつ

時野谷に辿りつき飢えたる腹を兎も角も充たして寝につく

二月二十八日

けさは腰が痛みて起つを得じと自から感念<sup>(感)</sup>して昨夜の寝につきたりしが朝起き見れば何の事もなし馴れぬ歩行と電車の雑踏とはいへ高が数里の歩行と二三時間の立往生なれば左程肉体を勞せざりしが如しそれでも尚ほ用ゆべしと我と我が身に頼もしさを覚えつ勝と共に十時頃文部省に至り永井氏と暫く面談近藤氏とも立話したる後一旦ホテルに帰り昼食

きのふ廿七日政府は逼迫の情勢に鑑み更に非常措置として十五項を発表し向後の一年の非常態勢を宣言したる為その処置を講究する為か文部主脳部は昨夜も局長会議を開きけふも首脳部皆省内に居らず止むなく文部省再訪を断念しそれぞれの用事は電話にて下僚の諸氏と談合し四時国際文化に永井理事長を訪問、支部の名称、支部理事の件日華交換雑誌編輯委員長就任を黒田氏より求められたるに對する辞退の意などを述べ五時より丸ノ内会館の学振理事会に出席、三木氏に一昨日の委員会の経過を告げ急に大東亜省との間に出張委員の北支旅行の許可を求めくれたき旨依頼し置きけり

八時田中経太郎君約により宿に來訪、十時発にて出発帰西

三月五日

時之谷勝大阪に講演に來れる帰途に來泊

三月六日

朝道代勝と共に東京にゆく董に軍刀を届け旁々面会の為なり

三月九日

久しぶりに狩野老博士を訪ふ用談あり大學に來訪するのことに余より訪ねたるなり用談は伊津野氏に關することとなり老齡昔日の如き活動も出來ず松本所長よりも引退させてはとの話ありたるが如何すべきとのこととなり若き人を(長尾)もり立てることにし暫く囑託として後見するがよからんとのことに話合ふ。

三月四日<sup>(マ)</sup>

昨日川田順氏より面会を求めらる話はかねて同君を介して住友に依頼し置きたる清風莊を大學に寄附の件なりとのこと今朝余より同氏を訪問委細を聞きたるに申込以來随分時日を経過せるが大學にて尚ほ希望に變りなくば依頼を受けて応ずることにせず住友の發意にて寄附することにしたく清風莊とその前にある自動車庫の地域とを此際寄附すべしとのことなり

余は今も希望に變りはなくもし寄附せらるれば喜びて之を受け京都大學と老公との縁故並にその高潔なる政治家としての徳化を学生訓育の上に及ぼしたき願望なる旨を説き然もその維持には可なりの費用を要すと思へば此際慇懃しと思はる、やも知れぬどその点も先方に通じて若干の維持費をも併せて寄附を受くれば更に幸なりと述べたるに川田氏はその点は今申出さずして別の機会例へば余の退任の如き場合にしては如何その際には必ず骨を折るべしとのことなりし故氏の考に従ふこと、せり但し先方に<sup>(マ)</sup>の話の間にもし然るべくば余の意向をも反映させて置いてほしき旨希望し氏も之を諒承せり

向一年の決戦非常措置により明日よりは高級料理店も一齊に閉鎖せらるゝにつき俄思ひ付きに川田氏をつる屋に招じ夕飯を供す書記官庶務課長陪席その場での思つきにて川田氏との關係により成瀬氏をも招く

三月八日<sup>(12)</sup>

東方文化研究所理事会商議員会松本所長重任理事重任

三月九日<sup>(13)</sup>

評議員会、緊急科学研宄体制総務委員会

三月十一日 十二日

両日少々風邪気味にて籠居、日曜も執務のことに決戦非常措置によりて定まれるなり但し二週間目の日曜に代り合ひて休むこと、せるなり

十二日田中経太郎君死去の旨長井氏より来電二十八日の会見以来二週ならずしてこの凶報に接し真に人生の墓無きを嘆ず

三月十三日

住友常務理事北沢氏総務部巖氏を伴ひて来訪過日河田氏<sup>(14)</sup>によりて先方に意志を伝へ置きたりしが通じたる結果として本日正式に清風莊寄贈の意を述べらるその厚意を謝し巖氏と書記官との間に寄贈申込の手續につきて打合を為す十日許りはかゝるべしとの事なりし由

五時より北野病院評議員会を病院長室に開く星野専務理事服部北野病院長より辞任を申出づ任期中の辞任は前例なき由にて可なり紛糾したるがその原因が実は先般来問題となりたる同病院を大阪市に寄附し新設の大阪市立医学専門学校附属病院たらしめんことを両氏は希望し居りたるに之が否決されたる点に在りて辞意翻す可らざる有様なること判明したれば評議員会にかゝる問題を決定する権能は定められあらざれば理事会に一任といふことにして先づ服部氏の辞意を認めて評議会に報告しつぎに星野氏については専務理事院長も同時に辞しては外見よりも穏やかならず病院の経営も困る故兎も角当分留任して経営に差支なきやうにすることを希望したる結果星野氏は實際上には力を用ゐると困れ

ど暫く形だけの留任をなすべしとの事に落着けり新院長選挙の結果六票三浦氏四票菊池氏にて三浦氏就任の事となれり  
今夜道代東京より帰る

三月十五日

田中吉雄氏老母倉子氏死去の旨電報し来る

三月十六日

緊急科学研宄体制報告会

道代田中を訪ふ

三月十七日

田中の葬式に午後十二時半出かけ六時帰宅

三月二十八日

三時―五時電気工学及び冶金工学三回生の教練査閲あり此の両科の学生は勤勞作業として会社方面に出動する故教練終了と認め査閲を行へるなり  
今夜東上

三月二十九日

午前文部省に至り科学局を訪ふ局長不在局員二三氏と話合ふ午后二時より文相官舎にて開会の国史編輯準備委員会に出席三時散会後四時十分まで時余に亘りて岡部文相と会談、目今大学教育に対して文相が如何なる方針を持するやを問ひたるに如何にしてよきか考立ち居らずとのことなり考を立て、も情勢の変化により次から次に變へなければならぬ為なりとの事なりこれが実情にて何とも致方もなき事なれど然も仮令變へて行かねばならぬとしても方針としては理



想としては此の際かくやりたしとの考だけは持つて居らねばなるまじくそれ  
なしといふにては文教掌理の責任者として困ることなりとも直言し置けり

文相の話によれば総理は現在徴用工の如きは依頼するに足らず頼むべきは学徒  
のみとの見を持してこそ新聞にも載せたる如く決戦非常措置の一項として此  
の一年学徒の通年勤勞奉仕を制度として定めその力によりて増産と共に徴用工  
を導かしめんと考へ居れりとの事なり

学生の感激による今の奉仕が今の如き勤勞の組織によりていつまで維持せら  
るゝや疑問なると共に此の感激の低下せる時がやがて導くことに望をかけら  
るゝものが導かるべきものに却つて導かれるに至らざるなきやを恐るとは文相  
の懸念なりこの懸念なからしむる為には学徒の感激をして退化せしめざらしむ  
る如くすべての規模施設を整へ真に勤勞甲斐ありと思はしむるやうに仕向くる  
ことが是非とも必要なる旨をも力説し置きたり

なほ石川教授を復職して人文科学勤務に致したき希望をも述べしに文相も然る  
べしとのことなりき

五時宿所鉄道ホテルに帰り待ち合せの三島君と会谈六時同君帰る今月五日以後  
料理店閉鎖の為に食事に行くべき処もなく宿にては外来者の食事を謝絶との事  
に従来例に違ひて共に食事することも出来ず索然たる気分にて別る是非もな  
き事なり

### 三月卅日

朝八時過ぎ昨夜約束したる長井真琴君来訪田中経君の事何くれと語りて九時帰  
る国民服に長靴の出で立ちにて中央商業学校長としての平生の勤め振りをもの  
細に語れり三高時代の様子少しも変らず学校としては特に時局下恰好の校長を  
戴きてよき仕合せといはねばならず

長井君より聞けば近く東新君も遠逝せりとの事なり同友相ついで世を辞す感慨  
無量なり

文部省に至り清水局長と会谈緊急科学研究組織につきては所謂全国班と個別研  
究との二つの立前の外に学内班ともいふべきものを別に認め学内班と全国班と  
の成績の出方を比較研究するがよかるべきことを力説し置きたり

午後近藤教学局長と会谈石川君の今直に旧位置にではなく人文研究所員として  
復職を希望することを述べこの事は先般近藤氏自からの示唆に基づけるものな  
ることを述べ更に満一年前石川君休職処置の当時の話を思ひ出さるゝことを  
も求め氏の意向を聞きしに大体諒承の意を示し次官と相談して返事すべしと約  
せり

午後三時半より蔵前ビルに開会の学振理事会に出席、四時半辞去時野谷を訪ひ  
九時発の寝台車に投じて西帰

寝台車旅行も当分これが最後なり明卅一日夜よりは寝台車を連結せず急行もな  
く一等車も廃止となるなり最後の寝台車と思へばなつかしき気持なりボーイの  
これでお別れですとの挨拶にも感慨深し

### 四月二日 三日

日曜も廃止大学の事務系統は二週目に交代して休む形にて日曜も執務の事は既  
に前々週より定めたることなり二日の日曜と三日の祭日と貴重なる骨休の日が  
続きたるも今年四月に入りても寒気なほ去らず加ふるに二日も三日も大時雨  
去来して全く台無しなり

三月二十八日誰とも知らず東山生なる名儀（書）の書面来り此時局下往復の自動車を  
廃せぬこと心得難しとの旨を記せり自動車によらずして余の今の勤務を要求す  
るものゝ、余りに理解なきを思へど委細を知らぬものの眼にはかくも映ずるなら  
んかと思へば心苦しく出来る限りは使用せぬことに思ひ定め卅一日以来殆んど  
歩くことにせり、時間の空費と身心の疲労とが果してこの状態を続け得しむる  
や疑問なり早く御免を蒙りてかゝる苦勞よりも脱出すべきなり

## 四月五日（水）

けふより春らしき天気となれり

董館林より初めて葉書を寄越せり足の傷もほゞ癒え編上げ靴にも苦痛を感じずとの事なり

日本物理化学研究会評議員会を四時より総長室に開会松井、大幸堀場氏等出席会後教官食堂にて夕食

## 四月六日（木）

評議会、人文一教授二助教授文学部宮崎氏教授昇任及び通則改正（収入金額変更特選給費生規定等）等が主要題目なり

卓先般来意中の人との結婚につき申出で考直すことを度々求めたるも是非にとのことに数日前どうしても考へ直すことが出来ぬならば止むを得ず欲するまゝにする外なきも家庭としては賛成せぬ中に敢て遂行したる事なることを記憶せよと申し置きしに今朝に至りて意中の人と話合ひたる結果その領会の下に一応解消の事にしたりと申出づ論したる甲斐ありしを喜ぶ

先般来病氣中なりし平井祐喜氏今日遠逝の電話あり数日前その病床を見舞たるに自から回復を信じ胃癌の治すべからざるを自覚せざる有様にて頻りに西瓜を慾求せり捜求すべきことを約し岩井君並河教授等にも相談したるも到底得る見込なくその旨通じ置きたりしに更に西瓜なくばメロンをとの希望にこれも諸方を尋ねたるも当節これを得る道なく遂にその最後の望みに副ひ得ざりしことの遺憾に堪えず

この頃病氣をせぬことなりとの感を更に深くす

## 四月十一日

七日夜発にて東上せる卓九日館林に董を訪ひ朝より夕景まで待ちて僅に数分間の面会を遂げたりとて今朝帰来、聞けば既に三〇〇〇米突の高さまで機に乗り

て上り練習をなし居り身体もがっしりとし元氣にて服務し居れりとのことなり

## 四月十二日

朝七時半宅を出で此月一日以来近江高島郡にて勤労作業に従事中の工学部一回生（工業化学及冶金学）の作業を視察す松本学生課長及び角南主事補同行二時間半許りの自動車程を車の故障の爲十時半頃安曇町に着直に沖田村に働ける学生団を視察、消防夫の法被を纏ひて村民と共に泥濘の中に杭打ち泥浚をなせる姿は学生とは見えず隊長の号令にて二列横隊に列びて敬礼するに逢ひて初めて我が学生の一団なるを認むると共に眼底早くも熱きもの、湧き来るを覚ゆ制服制帽と法被、書物と鍬ペント槌さても変化の甚しきかな溝に入りて泥にまみれるを厭はず真面目に規則正しく日々の馴れぬ労働に不平もいはず励み村民の深き感謝を受けつゝ、ある有様を見ては此の時代に生きる我が若人に限りなき感謝を禁ずる能はずついで仁和ついで上寺と同様の光景を見上寺にて安曇町長清水氏以下に迎へられその農会作業場にて学生と共に昼食十二時半更に北して新儀村に至り藁園の暗渠作業に活躍せる冶金学生団を視察、新儀の助役にて農業組合長河合与右衛門氏の案内によりて学生等の掘りたる溝渠暗渠及び暗渠の上に今土をかぶせてつき固めつゝ、ある有様を視る西江州這回の勤労中にて此村が最も村民と学生との間に良き関係の結ばれたる地なりと聞きしが来て見れば真に伝聞の如く両者の間極めて融和し勤労学生二人宛を分宿せしめ居れる農家にては我が子の如くにこれを痛<sup>いた</sup>はり学生は自家の如くに親しむと共に規則正しく日々<sup>日々</sup>の勤学に励み土地の青年団もこれが感化を受けて見かはすばかりに善良の氣風を生ずるに至り毎夜学生の宿を訪ひ或は会所に集りて学生と時局を談ずるを楽しめりといふ河合氏の宅に招ぜられて茶菓の饗を受けよもぎ餅の家づとまでも貰ひて井ノ口に至り更に広瀬村に至るこゝは新に巾一間余りの深さ数尺の溝を開く作業に従へることゝて勞力甚大なり然も村の食糧貯蓄は新儀その他の如く豊ならず割当の四合を過ぎざる給与の爲学生側に不平もある由聞きたり



しが如何なる不自由にも堪え困苦を忍びて時局下学徒勤労の目的を達するやう希望し置けりこれにてけふの視察を終り帰路につく七時頃帰宅

#### 四月十三日

きのふの春景色に引かへけふはまた後戻りせる寒さと雨なり花時晴曇常ならぬことは常なれどことは氣候大分遅れたり午後一時より学内緊急科学研究体制の総務会とついで研究報告会を開催

了りて総長官舎に研究部長と総務委員とを招き慰労の晩餐会を催す料理屋といふものすべて閉ざゝれたる状態下に於ける初めての夕食会合なり酒を得る道も絶えたれど片桐教授の尽力にて二本は得つあまり索然たる光景を恐れて一昨日梅原氏を通して依頼し辰馬悦藏氏に依頼したるに早速快諾昨日三本を持らせ献しくれられたりとの事に予備としてその一部を備へ置けり十五人の会集大満足裡に引上ぐるを見て用意の苦心の報いられたる心地す

#### 四月十四

けふも寒し卓十五日出発京城へ赴任の積りにて軍需管理部の証明を受け昨日朝八時より立ちん坊して汽車の切符を買はんとしたるも十二時売出しに至りて遂に得る能はずけふは朝五時より駅にゆき是非手に入れねばならずとて出かく、致方なき戦時下非常の光景なり(夕景帰宅して聞けば三番目の順番にて遂に購入するを得十六日出発とのことなり)夜明一家も来り卓の為に鶏を割きて夕食の膳を共にす相国寺の吉村を招きありたれど昨日伊勢にゆきまだ帰らずとて来らず

#### 四月十五

峯山の兄と相国寺の兄と来る

#### 四月十六

此日朝東上、卓京城へ午後出発

#### 四月十七日

学振第十五小委員会を開く  
原敢二郎氏訪問 鳥頭会

#### 四月十八日

学術研究会議人文部の会議  
学振評議員会及理事会  
終りて時野谷を訪ふ

#### 四月十九日

帰西

#### 四月二十二日

早朝出発島根県に出動せる学校報国隊の勤労状態視察及び激励の為松本学生課長と住友書記帯同城寄以西初めての山陰の旅なり今夜玉造温泉に宿す知事山田武雄氏は田岡教授の同窓なりとて今夜田岡氏を勤労作業地より伴ひ来り設宴せりとて同席を求められ出席

#### 四月二十三日

県の案内にて松江市を見物旧藩主松平氏の居城を始め別に小丘に設けたる茶室ラフカディオヘルンの旧居等を見高等学校に立寄り原、今石氏等に来松を通知(両君共日曜の事とて不在)更に大社まで自動車走らせて参拝す 今夜は経済学部学生の勤労地川合村に至り土地の旧家にて二人の子息を京大に遊学せし

め居れる原田卯一氏宅に宿す同家及び地方事務所並に農会関係の接遇頗る厚し

#### 四月廿四日

早起宿の直ぐ上に当る寺院に宿泊せる学生を訪ひその朝礼体操等の規律正しき生活を見訓示、終りて学生全部と共に朝食午前中五班に分れたる作業実況を巡閲その真面目なる勤労作業を見て感激す

午後は川合村より二里許を隔れる靜田村に勤労の法学部学生団を視察

夕景温泉津駅に汽車を下りて同地に宿泊温泉津の名に似合はぬ貧弱の温泉なり

今夜両〔以下欠〕

#### 四月廿五日

温泉津には京都工專の生徒が勤労に従事す朝宿を出発してその作業場に向ひしに大雨に襲はる雨中を峠を越えて作業地に至りしも生徒は作業を休めり寺院の門前に集合せる生徒団を激励し更に別の部落に働ける京都専門学校生徒（真言宗）を視察、どの学徒も地方民の気受け非常に好く感謝の的となり居れるは嬉しき極みなり終日雨中を歩みてヘト／＼となりて再び玉造温泉に辿り着く

原今石両君来訪久振りに顔晤して八時過ぎ雨中を帰りゆけり

#### 四月廿六日

朝八時過ぎに玉造より汽車に乗る積りなりしにこれは通勤列車なりとて松江までは一般乗客を乗せず止むを得ずまた県庁の車を煩はして松江に出で（廿分車程）同地より乗車、夕景京都に帰りつく

#### 五月二日

先日来入院加養中なりし八木芳之助教授遂に永眠す、去年四月学生課長に就任を求め爾来温厚にして真摯なる同君の力をかりてこの時局下の学生課の仕事

順調に進め来りしにその出精が直接の禍因でもあるまじけれど少くともこの不幸の遠因の一つとはなりしなるべく誠に気の毒の感に堪えず遺骸の前に敬虔の感謝を捧げて永訣す

#### 五月四日

東上、明日招集の総長会議列席の為なり

#### 五月五日

十時より文相官邸にて総長会議午前中は本年入学志望者の選抜方法を議す各高校既往勤労作業に繁簡の相違ありまた今日以後通年勤労等の事あり例年の如き選抜試験を施す能はざる事情に在りとして選抜方法を志望者につき主として高校の内申と過去の入学率を参照して定めんとする案を文部にて作製原案として提出大体それに拠る外なきを認む

午後は勤労動員に関して協議四時より陸相官邸に於ける陸相招待に列し有末少将（参謀本部 部長）の戦局の説明を聴き終りて富永次官陸相代理の主人役を勤めて設宴

久し振りの甘き珈琲を呑みほした崇りに三時を過ぎても寝られず。

此の日明長男生れ母子健在なる様子池内君への電報ありたりとて同家より通じ来る

#### 五月六日

軍事研究会といふ名目の下に体育局が肝煎りして所沢に近き陸軍航空士官学校を參觀七時半過ぎ東大総長の自動車<sup>（武蔵野線）</sup>を学士会に寄せて貫ひ荒川九大総長と三人にて池袋駅に至り八時武蔵電鉄にて同校に向ふ曾て三島君と共に遊びし飯ノ一への電車なり校長は徳川中将なり終日同校長の入念の案内によりて校内を參觀爆撃練習台飛行機操縦練習台等にも坐りて見たり校内參觀後有志者を乗せて15

分—20 分位の飛行をも試ましめたり最後に生徒の棒倒しを觀て同校を辞す  
今夜九時發にて帰西寢台なき汽車のベンチに窮屈の一夜を明かす

五月七日 日曜日

昨夜汽車の疲れをけふ医する積りなりしも思ふやうに休養も出来ず八木君の弔  
辞などを草す

五月八日

午後八木芳之助教授の葬儀に列す経済学部葬として同部教室にて挙行せるなり  
今更に悲嘆の涙を流す

五月十二日 金

三月 日南方にて殉職せる聯合艦隊司令長官古賀元帥の葬儀の日なり去年の  
山本元帥につゞきてまたこの不幸あり司令長官の重責を帯びながら飛機に搭じ  
て第一線を馳駆せねば指揮の任を尽す能はざる情勢に在るを想像すべく戦局の  
重大を知るべきなりかゝる尊き犠牲の下戦局の好転を切禱すること切なり

今夜同学会協議会を学生集会所に開催閉会の後一旦本部に帰る時九時に近し会  
計課の窓に電灯の煌々たるを見る多忙の為深夜まで執務せるものと思ひ一言旁  
を稿はんと廊下をその室に近寄りしに喧囂の声高し思はず佇立すればやがて歌  
歌ふ声の聞ゆ不思議に思ひて尚も耳を傾くれば高き会計営繕庶務課長の声も聞  
え折柄書記官の不在に当り酒に勢をかりて平素の鬱を晴らせるもの、如し事務  
所内夜更けてかゝる光景を演出せるを目睹してさきの感謝は遺憾の念に変じ頼  
む可らざる人々を幾分にも頼みとしてけふまで過し来りしことに慄然たるを  
覚ゆると共にこの後を思へば俄に眼先きの暗黒を覚ゆ折柄宿直員の廊下の西端  
より進み来るを認め会計室に何事のあるかを聞きしに尚ほ仕事を為し居るな  
らんといへり余に對して一同をかばゝんとする心根の殊勝さに感じつゝ、も大声

挙げ歌ひ乍ら仕事するものもあるまじきといひ残して玄關に出づ宿直員の彼  
等にこれを告げしや否や

五月十三日 土

午後大阪上野精一君約によりて学校に來訪暫く会談の後同車して宅に帰り五時  
頃まで歓談して歸る

五月十四日 日

豊中の田中の老人一昨日死去の報ありけふ葬式とのことに午後同家を訪問葬儀  
に列る二月も経たぬ前に老母に永訣し今また老父の永眠に逢ふ老父は九十一老  
母は八十五の高齡なりとはいへ恩愛の情は年の老少にかゝらず吉雄君の胸中  
推察に余あり

五月十五日 月

東亜研究所第四部西力東滲史研究班が昨年東京に於て講演会を催せしが今年は  
京都にて開催することゝなりけふ東方文化研究所にて東京二人植田、田村京都  
二人内田安部出講す昨夜來東京の人々七人原敢二郎理事を首として來り京都ホ  
テルに宿泊、月曜の事とて聴衆少く氣の毒の感無きに非りしも昨年の東京に比  
すればこれでも優勢なりと原氏はいへり講演終りて後けふは余の誕生日なるを  
言ひ草に原氏を伴ひて帰宅、宮崎君の教授昇格発令がけふの新聞に見えたれば  
祝意を表することゝして同氏をも伴ひ帰り三人にて夕食を共にす折角原氏を伴  
へるなればとて予て上島君に依頼し置きたる肴も都合よく手に入り酒もあり近  
來食ふべきもの、少き事なれば両君共お世辞のみならぬ満足を述べて歸る  
原氏の為狩野矢野新村博士等を招かんとしたれど何れも不在もしくは差支なり  
しは残念なり

五月十六日

けふは東亜研究所側にて講演関係者を集めて桃園亭にて晚餐会を開く、代価をはずみて準備させ置きたるも量に於て不足なけれど質はとんとはえずそれでも東京連中満足して馬食す、酒全く無き設宴なり

五月十七日

東方文化研究所理事会及商議員会、会議終り頃より発熱の気味にて急ぎ帰宅、熱を計れば七度五分、夕景には八度六分夜に入りて九度六分となる気分格別悪しからねど念の為鐘江氏に電話し誰か内科部長の来診を求む九時前真下氏書記官と共に来訪受診たゞの風邪なるべしとのことによ、安堵

五月十八日

けふの評議会はかゝる次第にて休会とす  
熱下る

五月十九日

殆んど回復

五月二十三日

二十一日時野谷勝に臨時召集令状が来り来月十五日横須賀海兵団に入団を命ぜられたる旨綾子より通知来る

五月二十六日

朝十時五十分発東上時野谷に泊る

応召の日を二旬の後に控えて墮落ちつかぬことならんと推察すれど常人既に覚悟も出来案外平然たるに安堵す今一ヶ月も先きの応召ならば国史編輯の官制も

発布せられ身分も定まりて一層落ちつきて出発し得べかりしにと思へば不憫至

極なり身分関係に於ては由来不運につきまとはれて今日に至りしが今また折角すべての準備に長く苦勞してこゝ一月もせぬ内に愈々官制の出るべき間際になりてこの運命に出喰はせしこと本人としても残懷の程思ひやらる

五月二十七日

午時前三島君を会社に訪ひ、一時半より文部省に開催の大学院特別研究生詮考会に出席、夕景時野谷に帰り九時半発の列車にて帰西

五月二十八日

朝八時過ぎ帰宅、十一時過ぎより平安神宮に行き太田貴子嬢と中村丑夫氏との結婚媒酌の役を勤む昨夜疲れたる身体を無理に夜行の列車に托して帰りしはこの役を勤めねばならぬ為なり

式終了後三時半頃より須磨の披露宴場松風荘に向ふ宴果て、電車にて帰り最終市内電車に辛ふじて乗り込み大徳寺前まで辿りつく、これより道代と共に深夜を歩みて帰れば十二時を過ぎたり

五月三十日

朝峯山吉村来訪明方の出産祝の為なり  
十一時より勲章伝達

五月三十一日

夜近藤寿治君に勝の身分に関して裁書

六月一日

昨夜大蔵公望男より電話あり先日東京にて原氏に託して次回西下の際面会した

き旨伝へ置きたるに由るなり今朝大阪にて逢ふ約束を為し置きたれば朝僅かの時間を偷みて訪問三十分余り会談東方文化研究所の経営につき相談、同氏近く杉原大東亜省支那事務局長と逢ふ約ある故その際適当に協議し委細報知すべしとのことなり去月二十日以来内閣の運命急に動揺の由聞く  
午後一時帰学部局長会議を開き学内職員報国隊組織を議す

六月二日

大塚記念奨学会第一回理事会を三時より開く

六月三日 土

農場に招かれ終日場内にて暮す葍は成績悪けれど桜樹に攀じて桜ん坊をもぐなど平日と違った世界に遊ぶ

六月四日 日

時野谷勝君暇乞の為帰洛今夜来泊

六月五日 月

大阪住友を訪ひ清風莊寄贈の礼を述べ古田総理事北沢理事と会談園公遺墨数点を大平賢作氏所蔵の由北沢氏より伝聞、十八日にはそれをもかりて清風莊観覧客の為に展観することにしたくその旨北沢氏より一応大平氏に依頼を頼み置けり  
夕景篠原市長に招かれ無隣庵にゆきて夕食、市史第一巻出来につき挨拶の為なり

六月六日

早天反枢軸軍北仏に上陸の第二戦線活動に入れる旨ラジオ並に新紙報ず

六月七日 水

帰宅の途次中川小十郎氏を立命館に訪ひ園公遺墨を十八日の展観に借用を依頼し快諾

六月八日 木

堀内宗匠父子と清風莊に至り十八日の茶の用意等につき相談  
午後緊急研究体制報告会開催

六月十日

夜太田君来訪

六月十一日 日

午后一時より都ホテルに国際文化振興会京都地方委員会にて催せる共栄圈留学生慰安会に出席、榎茂都の舞踊、杵屋勝太郎一座の長唄等を演出近來の豪華版なり

六月十二日 月

上野川田二君と官舎に会し夕食  
此日朝大橋氏夫人来訪大阪真島氏令息と大橋氏二女との縁談ありとて真島氏の方の調査を依頼せらる今夜早速上野氏にこの件を依頼  
夜遅く帰宅せるも十五日の勝応召前に激励の手紙を届けたく筆とる間に十二時近くなる健康上早く寝ることを努むれど兎角事情はそれを許さず

六月十三日 火

時野谷未亡人今夜東京にゆくと聞き昨夜書きたる勝宛の手紙を梅原氏を経て依頼す



六月十四

欽産資源研究会理事会を官舎に開く

六月十五 木

評議会学部長会木研関係者会合

五時半帰宅の間際に警戒警報発令

六月十六 金

敵機今晚闇二時過ぎの北九州を襲へる旨ラジオ報ず

六月十七

十五日よりサイパンに上陸を企て二度水際に撃退せられたる敵と三度目の交戦中とラジオ報ず小笠原の父島硫黄島をも敵機襲撃せりと

六月十八 日

創立記念日なり時局下恒例の昼餐の用意も出来ず巻脚絆姿にて挙式感慨無量なり十二時半警報解除一時より清風荘の披露をなす陶庵老公の遺墨数十点をも諸方より借用して展観す来客に堀ノ内宗匠の援助を得て抹茶を供したるがせめてもの馳走なり

六月十九

午後四時より住友の古田総理事大平賢作氏北沢常務理事留岡本邸支配人及び川田順氏等を招じて清風荘にて会談展観も昨日の儘なり五時過ぎより総長官舎に移り夕食を供す此度の清風荘寄附につきて一応の謝意を表する為なり

六月二十九日 木

評議会学部長会の後官舎にて南方研究会を結成各学部の同会を連接して本会を設置の事につき懇談各学部とも異議なく諒承す学部長を理事に依頼のこと、し会後夕食を共にして更に懇談

七月三日 月

朝九時十五分頃警戒警報発令

午後毎日よりの情報によれば今朝六時過ぎ陸軍省よりの情報に昨日米機父島硫黄島等を爆撃今朝横浜を去る六〇〇キロの海上にて敵機と戦闘中との事なりと

七月四日

御真影勅語謄本等を非常時奉遷の練習を為す夕景毎日支局よりの情報に本社にての聞込によれば既に空襲の情勢は全くなかりたれど民心緊張の為に尚ほ警報を解かずとのこと

七月五日 水

午後六時頃警戒解除

武田君の使敦煌画一面（麻布に描き天寶二年の款語あるもの）の写真を持来る倉田孝太郎といふ人が北京より持来れるものにて現在方面軍の所有なりとの事価十万といふ

七月六日 木

緊急科学研究体制報告月次会を開く

桜木俊一君来訪せるも面会の時間なく明朝再来を約して帰る

昨日内閣より現下対支声明を発す昨年の新対支政策と東亜共同宣言に示せる方針を堅持し英米撃滅に従ひ重慶軍と雖英米を排撃するものは我が敵に非ずとの

旨を宣せるなり

サイパンの戦は敵勢益々募り火炮は悉く敵の為に破壊せられて今や白兵紛戦の情態に入れる旨昨日ラヂオにて報じ今日の新聞にも掲載、元寇の壹岐対馬の境遇に当る敢闘の勇士と幾千邦人土民の運命に想到すれば悲憤慷慨静坐に堪えず折柄の月夜に南天を望みて偏に天祐を希ふ

## 七月七日

支那事変勃発以来満七年を経たり七年といふ月日の長いやうに思はる、一方短くも思はる

午後一時過ぎ梅原君と共に学校を出て大阪に武田氏を訪ふ戦国時代の土製鏡を見る為なり道修町を訪へば十三の工場に待つとのことに至れば住吉の宅にて見せる積りとのことなり余は今夕六時東京より来れる永井氏と会談夕食を共にする約あれば梅原氏単独にて住吉に武田氏と同行する様勧めたれど武田君は宅にて令室が手打ちの蕎麦まで用意して待ち居らるゝ旨を述べ遺憾の意を表せられたれば無理に辞去するもあまりに心ぐるしく遂に同行することにす鏡は黒陶朱紋様の珍物なり秦代の青銅製のものと同様に副葬品として用ゐたるならんか二面ありて一面は殊に保存完全なり外に曾て見たる同じ黒陶の人形漢代の釜、彩土馬一對等尤物数点を見る

模写に没頭せる梅原君を残して夕飯早々に帰途につきしが官舎に帰り着けば既に九時過ぎなり永井君なほ膳を控へて書記官等と談話中なり私用にて入洛せるなりといふ時局悲観の中央の様様それこれと聴取明日を約して引上ぐ

夜半一時過ぎまた警戒警報出づ三時四十分頃解除

董電報にて四百円送金を求め来る軍装用意の為なるべし電為替にて送附す

## 七月八日

今暁の警報騒ぎに碌々眠れずぼんやりした頭で九時過ぎ家を出て清風荘に至る

永井氏とこゝにて会談の約を為したればなり永井氏文部省の人として初めて清風荘を観る人なり頻りに嘆美す

永井氏との間に油田物理学講座の要求（予備金要求とするか追加通常要求とするかは更に考へるとのこと）食糧増産研究所の要求額拡大のこと、海軍技術研究所分室設置要求に対する態度（余は研究主任を研究所の囑託として総長がこれを承認する形がよからんかといひ置きけり）動員出動学生の健康診断問題等につき話し合ひしが更に学徒動員について話を進むるや氏は人を退けて熱心なる態度にて大臣が過日翼政会のある会合にて此の動員の重要性を説き学校を閉鎖しても大いに此の面を促進せざる可らざる旨を強く主張したることを次官より聞き今の際には情勢上及び既に発令せる以上止むを得ずとするも来年よりは別に考へざれば将来の局面に必ず大臣にその考無きは困ること故近く東西両総長もしくは単独にてゞも大臣にそれにつきての意見を具申してくれずやとのことなり余は先般既にゞ同様の事を大臣に話したるに大臣はその時此回の学徒動員のことは総理の熱心なる主張なるが果してその期待の如く成績を実現し得るや否やまた実現し得たりとするも教育の面より熟考せざる可らざる問題なる旨自から余に告げられたる事などを語り近く機会を得て私見を述べ置くべしといひ置きけり現下形勢は益々非にして既にサイパンは所謂玉砕を遂げたるなるべく生産は量に於てのみ仮令予期を実現するとしても質の進歩が伴はざれば効無きは誰にも分る所なるに当局にこれが徹底せずたゞ学徒を動かして所定の量の産出のみに狂奔する状態の真に憂ふべきこと永井氏と同感なりたゞサイパンを喪ふとも本土の襲撃を受くるともそれにて直に問題の定まることには非ずこの上侵入し来る敵をサイパン以北の諸島と本土とにて極力防禦して長期戦に入りその間に少き量を多くし劣れる質を優位に進め科学的陣立を立て直すと共に精神力を更に發揮して究極の勝利を得ざる可からずその為には来年には仮令学徒動員を継続するとしても或る期間學術に親しましむる方策を今にして立て置かざる可らざること目下の緊要問題なりこの場限りにて戦局を仕末する訳

にはゆかぬこと何人にも分ることなるべし

大臣に対する省内吏僚の気持ちの不満足の有様をこの会談によりて詳に知り岡部氏の為に惜むや切なり要するに永井氏もいひし如く位置をかけて所信を主張し得ぬ不徹底のところがこの不満を生ぜしむるなり

午後南方研究会理事会を開き正式に理事として各学部長を囑託す

この日卓朝鮮より東京大阪に出張を命ぜられ帰宅す

池内夫人今朝入洛せりとて訪問せられたる由初男孫の見舞の為なり

七月九日 月

池内夫人及び明一家に卓とを加へて午餐を宅にて共にす

七月十日 月

朝学校玄関にて清水科学局長の新村博士と立話せるに会し同車して三条の科学技術館を訪ひ始めてその内部を觀覽二条新町の製作工場ノ準備をも見る

寺田書記入營後一月半にして病氣となり病院にて加養の旨通知し来る

七月十一日 火

此頃物忘れすることの多きを自覺す事の多きが為なりと慰め顔にいふ人もあれど之を要するに老の到来なり感慨深し

七月十二日 水

雨降らず湿気強し釜中の思なり

今夕道代卓と共に東京にゆく自からも弱れる体をこの暑さと此の情況裡に態々の旅なり子に惹かされる親の愛情今更に尊くも有り難き極みなり十四日の東亜文化協議会も十七日の法隆寺国宝保存会も学内用務の為とはいへ出席を断りて籠居する自からなるに

中村丑夫氏より鯛を贈らる久振りの刺身に太平の時代を思ひ浮ぶ

七月十八日 火

サイパンの運命は過日来大概想像したところなりしがけふ政府は始めて大本營発表を行ひ七月七日早晩より全力を挙げて最後の攻撃を敢行敵に大なる損害ヲ与へたるも然も十六日迄に全員壮烈なる戦死を遂げたものと認むといひ陸軍部隊指揮官は斎藤義次中将海軍部隊指揮官は辻村武久少将にして同方面最高指揮官南雲忠一中将亦同島に於て戦死在留邦人も終始軍に協力し凡そ戦ひ得るものは敢然戦闘に参加し概ね将兵と運命を共にせるもの、如しといへり元寇の壱岐対馬に匹敵するこの島の悲酸の運命に悲憤禁じ難きと共に既に二〇〇キロの間近に敵の強力なる基地の固められたるを思へば敵の侵寇は早く本土に迫れるものなり損傷を犠牲にして遮二無二物量の力を以て強襲し来る敵勢をどの手を以て防圧せんとするか一に軍当局の神策と国民の奮起による生産増強とに倚頼せざる可らずそれにしてもかゝ形勢を国民の前に隠して今日に至れる当局の方針の時宜を得たるものなりしや否や固よりかゝる方針を持することの必要も決して少からぬは疑無きも今尚ほ能率の所期の如くならざる軍需工場の成績を思へば真相の一般に徹底せざるが一大原因なることは否むべからざるべし

七月十九日 水

毎日の伊東記者より政府が昨日総辞職したる旨聞ける十七日海軍大臣を（島田大将より野村大将に）交迭したる内閣なるにそれだけの補強工作にては現政局を維持し得ざるに至れるものと思はる

七月二十日 木

今早朝ラジオは十八日午前十一時半過ぎ内閣は閣下に総辞職を願出でたる旨通報、昨夜岩井君より小磯朝鮮総督と米内海軍大将とが御前に召されたる情報を

通じ来りしが今日ラジオも此の次第を発表陸海長老の聯立内閣を作つて現下の事態に應ぜんとするものと見ゆ固より昨午後の重臣會議の結果なり

# 七月二十一日 金

新聞は夕刊なき今日の事なれば今朝に至りて始めて総辭職と組閣のこと、を同時に記載せり間の抜けたこと夥しその新聞も配達不規則にて今朝は十時前まで来らず出勤して初めて読む有様なり

毎日より情報として既に一応入閣の交渉成りたる人々の名を通じ来る東条内閣が強力内閣の出現を期すとの理由にて桂冠せる事情に必ずしも應じ得る程の面々にも非るが如く思はる

けふ午後東方文化商議員会

今朝卓東京より一応帰来

# 七月二十二日 土

南方科学研究所設置準備委員会第一回を午後開く自由懇談なり各学部希望の程も殆ぼ推測出来たれば本月中に研究課題を提示しそれを手許にて検討して研究部門の方向を定め八月三日会合して具体的協議に入ること、す

今朝組閣成り名簿を捧呈して小磯新内閣員に対する親任式を執り行はせられたりとラジオ報ず

二十日大宮島(グアム)に米兵約二個師上陸を開始し我軍敢闘中なりと情報局より発表我に予期せる侵寇なるべきがその敢闘の運命また殆ぼ推知するに足る今の形勢下にこの方面の守護に任ずる将兵に対し感謝同情と共に申訳なきやうの氣持に堪えず何とか適當の処置を速に講ずべきなり支へ難しと思はる、形勢下に尊き幾多の將士をそのまゝに置きて見殺しの慘憺たる光景を演出するは余りにも無残ならずやたゝかゝる無残を忍びても戰略の上より一日も永く此等の島々を保有して敵勢を出来るだけ長くこの海域にひきつけその間に撃滅の準備

を急がんとするならんかまたその外に手がなき為ならんか尊き犠牲の將士に対して更めて拝謝し冥福を禱る

# 七月二十三日 日

この三四日はその以前の苦熱に引きかへ冷涼秋の如し新聞僅に伝ふる所によるも東北北陸熊本地方に水害頻々として起り鉄道不通多きが如しこの時局下の天災憂慮に堪えず

終日籠居

卓今朝また東京にゆく

# 八月三日

道代東京より帰る董は七月二十 日卒業し教官として熊谷飛行学校に残ること、なりその教育の為桶川教育隊に転属となり去る廿七日館林より道代同行東京時野谷宅にて一時間程を団欒の裡に過し桶川に行けりとの事なり

# 八月四日

此日東上の予定なりしが新大臣が五日に入洛との事に面接の為延期す  
警戒警報発令

# 八月五日

警戒警報は満洲鞍山大連及び九州西部を襲へる敵機の為なりし由何れも大した損害なしとのこと  
二宮文相入洛延期の旨電報し来る

# 八月九日 水

清風荘に二宮新文相を招き夕食を共にし歓談初めての面接なるが虚飾なく理解



に富める人との印象を受く文政に全くの素人なるは大臣自から口にし研究の上時局下適切の方図<sup>⑧</sup>を講ぜざる可らずと来訪の新聞記者に率直に述べたり

八月十日

今月の緊急科学研究体制報告会を一時より開会、此の会を創設後早くも一年を経たり此間各部互に砥励して或程度の成果を挙げたるは喜ばし然も時局は急激に進展し更に顕著なる成績を要求すること切なり今後一層の努力精進を期待する旨希望して会を閉づ

八月十一日

東上。夜半十二時十三分警戒警報一時過ぎ遂に初の空襲警報鳴りひゞく二時半頃解除満洲と東西九州米子とに敵機来れる由なり

八月十二日

文部省に至り近藤教学部長<sup>⑨</sup>を訪ひ時野谷之件、石川氏の件、文学部学位認可促進の件を話す

本田君と会して持参のパンと同君の取寄せくれたる弁当に昼を過し午後永井総務局長と会談、瓦斯発生<sup>⑩</sup>の為に要する石炭の件、食糧研究所の拡大予算の件、来学年の勤労働員計画の件、人文自然両学科教官の待遇区別の件等につき話す、石炭の件はよく理解せり従つて今後更に数と案とを具して更に交渉を進むべきなり来学年勤労働員は戦局の如何に依つて決せらるべく今の処にては依然本年の制度が来学年も実行せらるれば寧ろ幸にて学徒通年動員を行ふも之に應ずる資材が果して供給出来るや否やが問題なる実情なりとの事これでは今より計画速示を求むる勇氣も出ぬ次第なり

待遇差については何とも致方なし理科系の手当を待遇改善の意味にて文科系にも及ぼして恒常的に俸給の上昇とすることは一般官吏の待遇改善といふ大問題

とならねば実現し難くかゝることは今の時局下到底望み得べからずとのことは編纂事業の如きを文科系大学の事業としそれに対して手当を出して理科系との実際上の差別を除くことも一方法なるべきを説き置けり

科学局組織の変改にも談を進め科学官を増員しこれが先きに立ちて研究者を引つ張つて行くことにせざれば折角の大多算を持しながら到底功果期<sup>⑪</sup>し難きことをも述べたるに科学官は兼任にても然るべきかとのことにそれは本官と兼官たるを問はず要するに人の問題にて自から先頭に立ち研究を導く為に連絡幹旋進行其他すべてを自分に引受けて処理する人をふやさねばゆかずと説き置けり尚ほ所謂学内班の實質上有効なることをも京大の例をとりて主張したり

永井氏はその抱懐せる考として文部省のブレインたるべき比較的若き文科系の人々を主として東大に求め屢々会談して意見を聴取したく適當の人を考へ居れるが誰がよからんとの事なりしが余は東大の事情を詳知せずと答へ置きたり京大にては如何とのことに若いといふ条件ならば木村氏など如何尚ほ田辺、西田氏等然るべし東大和辻君などよからんといひしにあまり老年大家にてはとのこととなりき和辻氏などの已に老大家中に考へ居るものかと今昔の感に不堪

廊下にて有光氏に出逢ひ松本学生主事応召のことを話したるに何も知らずとのこと京大より電報電話また文書にて猶予のことをあれまで申込みたるを秘書課の属官の手にて握りつぶし課長までも通ぜざるものとわかり余りの処置に腹立ちしも時既に遅く松本君は昨日既に支那河南省兗州に向け出発したることなれば今更やかましくいひ出して無功<sup>⑫</sup>と思ひ黙殺の態度に出づ工学部西山教授の猶予問題を質したるにこれも判然知らざる風なればこれを確むべく課長室に引き返し属官より書類を取寄せしらべたるに九日附けてに詮議<sup>⑬</sup>し難き旨の陸軍省よりの通知に接し京大に移牒せりとのことこれは何とかして猶予を求めざる可らずと思へど既にかゝる通牒も発せられたることならばせめて早く帰還の方法を講ずる外なしと思ひ専門局に出かけたるに剣木課長居らず春山君とこの事を談じたるに同氏はこの処置を聞き陸軍と話し専門局より猶予候補者の第一位の



列に置きて猶予者列名に表示しある西山氏（航空機の教授の廉にて）に如此処置を為すならば其の他の大学教官にては猶予せらるべきものなかるべくこれは陸軍の処理の誤りなるべしとの理由にて再考を求めその結果還すことになりたれば秘書課にもその旨通じ大学に詮議し難き旨の移牒はせぬやうにといひあるなりとのことなり余は更に春山氏に依頼し直接電話して兵備課の某少佐に確かめたる結果還すことに定まり居れりとの返事を得たり依りて直に有浦庶務課長宛に電報を發し既に詮議し難き旨の通牒ありたるべきも「西山氏解除の見込」と通じ置けり当人は勿論大学にても重大視せることが単に秘書課属官の心なき処理によりて此の如き扱となること事例少からざることを思へば心■なりかぎりなり

夕景より星ヶ岡に三島君を招じ久しぶりに夕食を共にす中村以四郎君に朝より電話して用意を頼み置きたるなり中村君も同席しその配慮による食膳に暫振りに胃の腑の満足を覚えて引上ぐ残肴を携へて時野谷を訪ひこゝに宿泊

八月十三日

夜九時半発にて帰西

八月十四日

夕景より清風荘に岡部前文相を招じ夕食歓談

八月二十日 日曜

夕景五時頃警戒警報の笛鳴る実に第四回目なり六時四十五分空襲警報、新内閣となりて以来情報局より敵機の行動を速刻ラジオにて報ず情勢判明し一般に非常に好感を与ふ敵の編隊梯団が北九州より東して下関より東に向ひたりとの情報について済州島沖を西に向つて退却敵の数機を撃墜、中三機は体当りによるもの、如しとも報ず間もなく空襲も警戒も警戒を解く

十二時更にまた警戒警報出ず二時過ぎ解除  
此日那波教授支那旅行に発程

八月二十一日 月

真島大橋両氏大学に來訪両家婚約整ひ十月廿三日挙式につき当日媒酌の役を求めらる快諾す

吉村達二月応召以来ニューギニアに出發すべきを形勢一転の為に卅七部隊に為すこともなく止まりしが新に下命ありて二十四日發宇品に集結多分セレベスのメナドに行くならんとのこと今夜同家を訪ふ 相国寺の寿も目下幹候服務にて福知山に在るが昨日葉書を送り來りそれとはなく訣別の意をほのめかす達に聞けばこれもセレベスに行く組ならんとの事なり老両親の心事推察に余りあり

八月二十四日

朝登校前藤井房枝嬢來訪近日セレベスに向つて出發する為の暇乞なり今の女人の壮烈の志感嘆に値す

菊池君夕景不意の來訪、今夜一宿明日大阪に引返し明後日東上数日滞在の予定とのこと

八月二十五日

朝菊池君を停車場に送る

桜木俊一君來訪、けふ理髪

二十三日ルーマニヤがソ聯との間に停戦条約ヲ結ビタリトノ報ヲ同盟ヨリ通ジ來リシガ七時ノラディオも亦た之を報ず但し国王ミハイ一世の任じたる新政府の外に国民政府が親独派によりて建てられ十幾個師団の外のルーマニヤ軍は依然独逸と結びて従來通りの戦を止めずとのこと独逸側の運命愈々非なり

八月廿六日

青柳名譽教授去る廿三日薨去けふ葬式を同家にて営めるに参列  
米軍巴里に侵入独軍との間に市街戦を演じコンコード及びエトワール広場など  
戦闘激烈の由報ぜらる

吉川氏来訪その後対研究所の方針や、東亜省にて具体化せる模様とて東京にて  
聞き来りし大略を報ず田中謙二氏を伴ひ挨拶に来れるなり

八月廿七日 日曜

秋空冷涼を覚ゆ

小山の長男入営するとして暇乞に来る

伊津野氏退職後健康勝れず二三日前まで志摩に静養せりとしてけふ挨拶に来る

九月三日

明日の全国総長事務打合会に出席の爲十時五十分発列車にて東上 九時鉄道ホ  
テルに投宿

九月四日

この二三日また暑さ酷烈

九時文相官邸にて会議開かる初めに新文相二宮治重氏の挨拶あり今の教育の情  
態が常態に在らず後に害毒を及ぼすもの多きことも熟知し居れど目今の情勢下  
誠に止むを得ざる由る事情の好転に伴ひ漸次常態に回すことを考へ居れる旨  
の言説もありたり

会議の主題は(1)科学研究の戦力化(2)勤労働員につき(3)其他につきてにて之に関  
する各員の意見を聞かんとするなり(1)につきては特に大学の研究組織と学研と  
の関聯につき(3)は戦時下重要な文教施設につきての意見を聞きたき旨も電報  
にて予じめ通牒ありたるものなり(1)につきては各大学より学研が単なる研究問

題の選択と研究費の分配に終始せる観あるはその目的とする科学研究の進捗と  
これを戦力化する上より遺憾少からざるを述べ問題が戦力増強の緊急問題のみ  
に限らず甚だ多数の題目が採り上げられ中には緊急ならざるものもありまた緊  
急の急所を狙ふに今の学研常任委員のみにては不備といふに殆んど一致せり之  
に對して八木東京工科大学長が学研側の弁として問題の多きは各大学より提出す  
るものが多く然も皆之を通過せしむるに大努力を成せる結果なり之を少くして  
真に緊急問題のみを研究せんとするならば大学より提示する数を少くすべきな  
り多数を自から提出して置き之を通過させる事に努力し乍ら此会議にて問題の  
多きを難じその圧縮を叫ぶが如きは自己撞着の甚しきものなりといへり全くそ  
の通りなり然もかゝる撞着を生ぜしめねばならぬ理由は別に存す即ち大学に於  
ける平常の基礎研究に対する研究費が殆んど無きにも等しき貧弱なる有様なれ  
ば研究者は緊急科学研究費に喰込みてその支給によりて研究を積まむとして  
かゝる現象を生ずるに外ならず従つてこの矛盾撞着を避け緊急科学研究費を以  
て真に戦力増強の緊急問題のみの攷究に当らしめんとすれば当局が平時の基礎  
研究費を経常費として支出するが最も適當のことなりとの結論に達し結果文相  
より之を予算計上することを希望し文相も之を諒したり(3)につきては東大内田  
総長より大学々生の知識の水準が低下せることは即ち各面の指導者の知識水準  
を低下せしむることなれば之を防ぐべき適當の方法を講ぜざる可からざるを主  
張し、余も人文科学の戦力増強に資する点も決して少からざるを述べ卑近の例  
として三菱航空機製作工場より近く工人の適性検査による増産を考へ之を文学  
部の心理学教室にまた豊川海軍工廠より工場経営の問題を経済学部教授に依  
頼せること等を述べ文科系大学院特別研究生を本年募集せざるが如きは将来に  
對して深憂事にして募集に困難なる事情が生じたるならばその事情を適當に始  
末し僅少数の研究者を養成することは当局に於て努めざる可らざる事なるべき  
こと等を陳述せり

五時半過ぎ首相官邸に於ける首相の招待宴に列す長卓を挟みて席定まる余は総

理の右側に接して坐し総理の筋向に文相座す着席と同時に文相より総理に「けふは基礎研究について大分ヤラレタわい」首「ソウカイ」文「本年は致方なしとして来年は基礎研究の予算を取らなきゃならぬ」首「来年といはず本年何とか出来ぬか予備金支出でもすればよからう」文「そうじゃ本年やるか、明日石渡に話そう」両相爾汝の間柄の事とてかゝる席上に於てもかゝる態度にて基礎研究費支出方針は両相の間に話が進められたり余は首相のこれに対する熱意にたゞ感服して聞き居りしが最後の懇談に首相より「過般政務上奏の節陛下より基礎学研究的の要を御宣示ありその際はよくも分らずに退下したるがその後更に政務上奏にて拝謁し陸海軍技術運用委員会を設け科学研究を戦力化する組織を作りたる旨上奏したるにそれはそれにて宜し但し過日も言ひたる基礎学研究も速に進捗を計るべきなりとの御言葉ありこの時もなほ御真意の程を解しかね側近のものに聞き質して始めて聖慮のあるところを悟るを得たる次第なり」との話あり茲に於て余は先きの食卓に於ける首相の態度も初めて解するを得これある哉と心中に頷かざるを得ざりきよつて余は首相に聖慮誠に深遠畏き極みなり但しこの御思召は今始めての御事には非ず去る昭和十七年大東亜戦争緒戦の戦果に上下驚喜の直後一月十四日の事と記憶せるが時の文相橋田氏の拝謁するや聖上陛下にはこの戦果によりて日本人だけが偉いといふやうなことを考へてはならぬこと、學術の基礎研究に邁進せざる可らざることをその他三点ばかりを諭示あらせられしことを親しく文相より聞きたることありその際余は文相に対しこれは溺れんとするものに投げ与へられたる大綱にも比すべきことなればこの大綱に縋りて此の際にこそ學術振興の大策を建てその実現に邁進すべき旨を力説したることありしがそれが格別の結果を見るに至らざりしは今にして深く遺憾とする処、希くば首相の力により今日の時局下に於てもなほこの面に施策あらんことを熱望せざるを得ずまた聖慮を拝察するに基礎学研究的の対象は必ずしも自然科学の研究のみには限らず人文関係の學術についても広く包含せらるゝものと解すべく思想の根底に培ひ国体の本義を明徴にする等重大なる學術研究

の一般に亘りて考慮せらるべき事なる旨も諸種の例証によりて進言せり希くは幾分にてても余の真意の解せられ施政の上に実現を見るに至らんことを宿に帰れば既に九時なり

#### 九月五日

けふも炎暑酷し朝綾子来訪今月下旬愈々東京を引上げて宅に来る積りなる旨など話す、十一時過ぎ入替に黒田伯来訪重ねて田中謙二氏の支那留学の件につきて打合す

富山房より差廻しの車にて同社に至り坂本氏と会談昼飯抜きにて東亜研究所に原氏を訪ふ新内閣成立の秘話を聞かんと水を向けたるに余の想像以上に今次の内閣交替に同氏の力の致されたるもの多きを知るを得たり即ち原氏等数人会談の結果先輩岡田啓介大將をして今や東条内閣の時局担当の任に非る旨を重臣間に（宮中に？）説かしめしが之を知りて東条首相は岡田氏を招致しその倒閣運動を成せるを責めたりこれを聞きて原氏等一派の人々は大に憤慨したりしが原氏は却つて之を宥め機を待たしめたりその後平沼氏が原氏を招致し意見を聞きたしとの事なりし故腹藏なく東条内閣を批判したりしに然らば後継としては如何なる人が意中に在りやとの問なりし故此際は謙虚にして慎重事に当り且つ曾て総理の経験を有する人を以てせざる可らず願はくは此方針に賛し尽力を願ひたしと言ひたるに平沼氏は賛意を表し承知しましたといへり或は平沼氏が原氏のいふ処を以て平沼氏自身を指せるものと解したるには非ずやとも憂ひたるが原氏は実は米内氏を推したき考を有し如此説述したるが（固より話中その名を出さざりき）その後平沼は重臣間に説き遂に十七日宮中にて（？）内大臣にその意を伝へたり茲に於て内閣補強に腐心し米内を海軍大臣に入れむとして米内氏に拒絶せられたる東条首相は野村大將を以て海軍大臣として急場を切抜けむとしたるも到底頹勢を保持すべからずと見て十八日急転辞表を提出するに至りしなりとさて重臣會議に於ては始め米内氏を推したるも米内は辞して受けず



却つて文臣を以て局に当らしむべきを首張<sup>(五)</sup>したりしが此際文臣にては不可として寺内小磯米内等が推され之を内大臣に通じたるに内大臣は（原氏によればそこが木戸の読まぬ処にて米内の辞退が謙虚の人なる故の辞退と解する能はざる程の人物なりといふ）遂に小磯を奏上することにせり之を聞きて原氏は米内氏に会し苦心してかゝる機運を醸成せるに此際辞退することの大局を弁へざる馬鹿沙汰なりと論じたるに米内氏も然らば海軍大臣を引受けるといへり然も原氏は海軍を引受けるといふても小磯が依頼するとは限らず自分だけ引受ける覚悟をきめても無効の事に非ずやといひ遂に更に小磯米内両氏に大命降下の運びとなるやう漕ぎつけたるなりと大要を語れりこれによれば原氏（恐らくその一派の人々も原氏同様相当深く干与せるならんか）の奔走なければ大命は独り小磯大将に降下すべき段取りなりしなり果してかくなりし暁に海軍側が治まりしや否や疑問なるべく今次新内閣が如何なる成績を示すかは別として之が成立と前内閣の倒閣とは原氏の力のあづかるもの甚大なりといはざる可らず氏曰くその後のまだ米内には逢ひませんとその風格敬服に堪へず

五時半星ヶ岡茶寮に至り中村氏の御馳走に預る三島氏夫妻と綾子も伴ふ

九月六日

朝九時発にて帰西、中村氏同車

九月七日

けふは評議会定日なり総長会議の要領を報告更に緊急科学研究体制総務委員会を開き総長会議の科学研究の戦力化に関する事を詳細に話し置けり

九月八日

けふはきのふの驟雨の後にて涼し、午後木村素衛氏母堂の告別式の為小松原の同家を訪ふ

九月九日 土

田辺朝郎名誉教授去る五日薨去けふ工学部にて告別式を営む参列

九月十一日

大学にて三島君よりの速達便を受取る最少最輕の焼夷彈ヲ工夫し飛行機上より無数に散布して米国の麦畑森林等を一挙火の海と化せんとする案を考へこれが構造を専家に考へて貰てくれとの注文なり既に技術院の創意受附を経、小幡西吉氏と相談して井上同院総裁にも話し米内海相にもその意を書面にて通知せりとのこと着想は敵側にて既に行へる黄燐カードの散布と似たり兎も角もと思ひ鳥養氏を訪ひ考慮を依頼す

九月十二日

内外出版に敦煌文獻目錄仏教部門館藏所収部及び藏外部全部を渡す

九月十三日

午後清風荘に行き卒業式告辞を考案

この日理髪

九月十四日

宇治製造所に勤労働員せる文系三年けふ引上げ離隊式挙行とのことに挨拶旁々同所に至る大学生がかゝる作業に適するや否やを危みて依托したるに予想以上ノ成功を得たりとて所長飯田大佐より過日も態々来訪謝意の表明ありたるにけふも同様に満足の結果を得たる旨をくり返し述べらる若き人々の対時局感激の所産といふべく有りがたき心地なり所の待遇が学生に満足を与へたることもかゝる成績を得たる重要な素因なり他の場合にも深く考ふべきことなり

緊急体制報告会引つゞき部局長会議を開き日曜についての文部省よりの新通牒

を紹介し毎日曜従来の如く主任者が交代制にて出勤し部長以下責任者等は所在を明らかにして連絡の出来る態勢を調へ置くこと、す

## 九月十五日 金

正午ヨリ大阪ホテルニテ調査研究動員本部ノ招キニヨル同部開設披露会ニ出席大蔵総裁ノ挨拶アリ会后同氏ヨリ支那側ト協議シテ大東亜体制ノ根本ニナルベキ憲章(?)ノ編述ノ要アリ京大側ノ協力を願ひたしとのことなり更めて懇談を約して別る武田氏ホテルに來訪同車して十三工場に至り京大薬学科より出勤せる十名の学徒の勤勞情況を視察す夜十時前北大路にて電車を降りると共に雨激しく衣帽雨浸りとなる

## 九月二十二日 金

本年度の卒業式を挙行、卒業生の多数は既に軍に入り出席者少きも出席者には最後の式なれば流石に緊張と感慨とに満つた。平時の如き晴々しき満悦の様子はどの顔にも認むるを得ず殊に生憎今朝八時ヨリ十時にかけて府の防空演習挙行せられ來賓の数も甚だ少く同じ戦時ながら昨年と比して甚しき相違なりき

此日五時ラヂオは敵五百機昨日マニラ地区を襲へりと報ず

今朝より午後にかけて大東亜史編纂打合の爲とて教学局藤野課長と松崎氏が有高山崎両新編纂者を伴ひて来学京大の編纂関係者と会合す六月鈴木氏が思想問題の關係にて拘留せられたる由にてその後本省にて有高氏に編纂を囑し同氏より山崎氏を助手として之に衝に当らしむること、したる旨八月十四日近藤局長より聞きたるがその後の経過は知らず午時過ぎ藤野氏総長室に來訪午前中宮崎氏より東大側にて現在如何なる態度をとれるかそれが判然せざる中に京大側にて新編纂者と打合せて事業の進行を図ることは躊躇する旨力説あり困り居る旨話ありしが四時過ぎ陳列館にて開催中の同会合の席に連りしに話は依然停頓して進まず有高氏は山崎氏と宮崎氏とによりて今後の編纂の進捗を計られたしと希

望せるも宮崎氏は文理大にて力に負へぬことを当方の助力に求められ当方にて此上面倒を引受けなければならぬことは御免蒙りたくまた東大側に対してはその意向を聞かずして有高氏の希望には応ずる訳には行かずと突張り居れり余は当局が鈴木事件の後今後の編纂方法を従来の関係者に一言の相談もなく有高氏に依頼したることがかゝる難局を招致するに至りたる次第にしてもし相談すれば同じく有高氏に頼むにしても今日の如き破目には陥らずすべて協議の結果依頼し円満に成功に導き得べかりしなり此上は当局にてこの点を顧慮して然るべく打開の途を講ずべきならんといふ意を述べ置きたり藤野氏は結局協議は要領に達せずと考へたるならんか五時前会を閉じ夕食を本部教官食堂にて共にし近く重ねて京都側よりも東京に來て貰ひ東京側をも招致して更めて協議すべしと<sup>(挨拶)</sup>挨拶して幕を閉づ

その後松崎君より聞く処を藤野氏の話と合せて判談<sup>(審)</sup>すれば文理側にて東亜史編纂に参加することを予てより熱望せる処に同大学出身の羽田某氏が新に教学局の原氏の後釜として課長となり直接東亜史の責任者に非ずまた従来の事情も詳知せざるに不拘鈴木事件の後編纂事業の停頓するを見るや自から進みて有高氏にその話をつけ山崎氏が国定中学教科書を編<sup>(順)</sup>して意氣盛んにして自分にて来年三月までにはすべて編纂を終るべしといひしを便りに近藤局長も終末をつけて責任を果し得ることを喜びて無思慮にそれに依頼しその後にて松崎市古高橋等に辞任を承認もしくは辞任を求めそれにて易々と事業は進行するものと思ひ居りしが如し全く食指を動かせる文理側の口車に乗せられたるものなるが如し、山崎有高氏等の旧来の東洋史ならば従来彼等の編みたる教科書に多少の尾鰭を附けて来年三月までに出来可能ならんも既に協議して骨子を組みたるものによりて編纂を進め既成の原稿を整理して大成せんとすれば来年三月までに上巻さへも完成六つかしかるべきは何人も疑はざる処、心臓強く見ゆる山崎氏が此の局面に処して如何なる怪腕を振ふものか今後の推移を見るべきなり  
今夜三島君來泊



九月二十三日 秋季皇靈祭 土

午後二時三島君を伴ひて大学に至りその考案による最小焼夷弾の工夫につき予て依頼しありたる藤本教授と会見

大谷瑩誠氏此度海軍予備学生として土浦に行く国史専攻の新法主（二年終了）を帯同して挨拶に見ゆ

九月二十四日 日曜

昨夜珍らしく三島君と共に突つきたる牛肉に祟られしものか今朝下痢工合悪し十時三島君大阪に向つて去りし後床をとりて静臥

九月二十五日

舞鶴機関学校長柳原中将挨拶の為来訪の約あり気分過れざれど登学、十一時同氏と会見機関学校は今次兵学校分校となり機関学校の名は廃せられ従つて故参の同中将は引退する筈（十月一日発令の筈）なれば挨拶に来れりとの事なり

午後帰宅静養

九月二十六日

学生課長代理光田氏また呼吸器病に罹り静養とのことに驚きて同氏のかゝれる医師健康相談所の宮田氏を招き容態を聞く大したことに非る如きもレントゲン診察の結果肺浸潤と診断たゞし今は大したことには非ず如何なる経過を辿るか今後の問題なりとの事なり田畑主事補も同病にて静養を願出で山本氏を初めとして続々と同病の現はるゝは痛心に堪へず  
今夜七時綾子東京より移転し来る

九月二十七日 水

今日四時より近畿軍需管理部ヨリ技術者動員ニ関する懇談会の名目によりて理

工系学部長研究所長を招き京都ホテルにて懇談の催しあり席上長谷川部長より軍需会社方面の技術に関する部面に大学側の一層の協力を求めまた大学のこの方面の研究上に資材等に於て不便あらば援助すべく相依りて現下の増産問題を解決したき旨の挨拶あり余は要請の協力は大学に於ても熱心に望む処なるをいひ現情勢下に処する大学の研究の熱意戦時研究科学研究所陸海軍の委託研究会社方面よりの要望に応ずる依託研究等に応じて熱心込めて従事中の現況また近く三菱航空機会社申出に對する大学の協力等の有様を述べ更に要求としては第一に緊急の実験を行ふべき瓦斯の皆無の状態及び之に對処せる現下の苦況（自家発生の有様）等を述べその為月三十余屯の石炭配当について尽力を切望したるに部長も竹中総務長も諒承して急に工夫する旨を約せり一々の管理部よりの要求は学部長並に庶務課長を通じて提出することゝし両者の間真に隔意なく疏通して予想以上の結果を得て散会

九月二十八日

コークス搬入ノ件ニツキ會計課長ニ戒告ス

九月卅日

七月十一日大宮島二同十三日テニヤン島ニ上陸シタル米軍ニ對シ両島守備ノ我軍奮戦防禦ニ當リシガ人モ物モ衆寡敵セズ九月二十七日ニハ最後ノ一兵ニ至ルマデ殉難シタル旨大本營ヨリ発表

十月一日 日曜

本年度入学生宣誓式ヲ举行  
独逸文化研究所理事会来ル十一月三日ノ十週年記念祝賀会ノ準備相談ナリ  
光田課長代理ヨリ予テ話シ置キタル新村氏招聘ノコト学生課トシテモ希望ノ旨話アリ

十月二日 月

西崎課長来訪新村秀一氏ヲ大学々生主事ニ任用ヲ希望ノ旨文部ノ意向ヲ齎シ来ル余ハ此事既ニ本学ニテ考ヘ具体的ニ進ミ居レバ本省ヨリ相談ヲ持チカケラレテ之ニ応ズル形ヲ取りタク無キ旨答ヘ置ケリ、西崎氏ニ逢フヨリ前ニ新村博士ニ電話シ秀一氏ノ入洛ヲ希望スル旨通ジ置キタリ

十月十日

穂積重遠氏日本教育会副会長トシテ来訪清風荘ニテ各学部長ト共ニ面談夕食ス

十月十一日

東上

十月十二日

朝有浦氏来訪

文部省ニ行キ関口局長ト会谈南方科学研究所官制案ニツキ懇談

一時半池内氏ホテルニ来訪、満蒙史料出版ノ件話合フ共ニ学士院ニ行ク

五時半星ヶ岡ニ至リ三島君ノ招宴ニ出席

鹿毛中佐国分氏同席

十月十三日

三島君来訪楠氏鹿毛氏モ来訪

文部省ニ行キ永井局長ト会谈、南方科学研究所案ニツキ話合フ、民族協会中心ニ共荣圈民族学関係学者ヲ京都ニ招キ学界ヨリ東亜圈結合ノ勢ヲ進メテハ如何トノ提案アリ此事丘氏軍部トノ間ニアル程度話ヲ進メツ、アルガ如シ考ヘ置クベキ旨ヲ答ヘ置ケリ、予テ依頼シ置キタル石炭配給ノ件ニツキ重ネテ経過ヲ聞ク軍需省トノ間ニ話合ヒタル結果トシテ次ノ配当ニ当リ一般ニ減配セラル、モ

ソノ配給ニ当リテ要求ノ趣旨ニ鑑ミ或ル程度ノ加味ヲスベキ意向ナル旨軍需省当局ニテ答ヘタリト聞ケリ

呉服橋ノ陸軍臨時研究所ニ鹿毛氏ヲ訪ヒ水雷防網ヲ東大第二工学部創意ニテ完成既ニ試験済ニテ量産ニ入レル旨ヲ聞キノソノ写真ヲ見ルマニラロップノ網ヲ舟ノ両側ニ張レルナリ、国際文化振興会理事会ニ出席、夜星ヶ岡ニ戸田君及ビ文部ノ春山氏ヲ招キ会食

十月十四日

朝帰西

此夜ラヂオニテ十二日以来ノ台湾東部海上ニ於ケル我が戦果ヲ発表

十月十六日

真島大橋両家結婚式ニ媒酌人トシテ出席式ハ平安神宮披露ハ京都ホテル、多田大將府知事市長等モ列席大橋氏ノ関係ナリ学者ト実業家トノ態度ノ相違ヨク表ハル

十月十七日

神嘗祭日ナリ雨ノ中ヲ予テノ約ニヨリ大原村ニ行キ武居教授ノ施セル植物ホルモンノ稲作成績ヲ視察大杉、堀場両教授、府ヨリ新井知事、田中経済部長等モ臨席、村長ノ苦心ニテ猪鹿ヲ煮テ松茸飯ノ昼餐ニアツカル  
二時半大学ニ帰り華北政府顧問ニテ総研副理事長阪本氏ト会见ス

十月二十三日

道代宮津ニ行ク

松井元興氏嗣子清君ノ夫人ノ逝去ヲ弔問

十月二十四日

稲垣中将告別式、相国寺本坊ニテ営マル、焼香

十月二十五日

十九日以来比島レイテ島ニ来襲上陸シツ、アリシ敵ニ対シ昨日来海上部隊出撃大戦果ヲ挙げタル旨今日大本営発表、台湾戦果ニツヅキテカク敵艦船ヲ多数撃沈破シ驕敵ヲ挫ケルハ現下ノ局面ノ上ニ特ニ対内的ニ至大ノ影響ヲ与フルモノニシテ真ニ喜ニ堪エズ追撃戦ハ尚進行中ナリトノ事ナリ艦船ノミナラズ一部上陸セル敵軍ヲ物ノ見事ニ殲滅スルコト此際最モ肝要ナリ近ク必ズ之ニ関スル快報アルベキヲ信ジテ疑ハズ此ノ一挙ニヨリテ国内ノ人心振起シ敵側ノ意氣沮喪シ形勢一転ノ途ニ向フヲ期待セザル可ラズ

此日峯山吉村来泊

十一月十九日

東上大蔵公望男ト同車龍名館ニ泊ル

十一月二十日

十時半雷門発ノ東武線電車ニテ十二時半頃館林着臼井氏ヲ訪ヒ昼食ヲ供セラレタル後同氏ノ案内ヲ受ケ館林教育隊ニ董ヲ見舞フ此日休日ナリトノコト綾子ヨリ聞キ居リシモ変更トナリテ外出セズトノコトナリ二月末ヨリ九月目ノ対面ナリ飛機ヲ操縦天翔ケル由ナド聞ケバ嘸大人ビタルコト、想像セシモ逢ヒ見レバ依然トシテ去年入営当時ソノ儘ノ姿ナリ親ノ目ニノミカク映ルモノカほまれの袋航空食料ノ紙函入りナド持ち来リテ進ムル心根いとし内密ナガラ近日此ノ教育隊ハ解散シテ校舎ハ航空士官学校トシテ転用セラレ隊員ハ内外各地ニ分散スルコト、ナルトノコト臼井氏ヨリ聞キシガ当人モヨクハ知ラネド近クソノ事ニナルラシト語ル何処ニ転ズルヤラ全く不明トノ事ナリ四時半頃隊ヲ出デ、臼

井氏宅ニ引上ゲタルニ途中道ヲ過リテ大慌テシテ引返スタ食ノ膳ニ向ヘル時董菌ノ治療名義ニテ外出食膳ニ連ル臼井氏ノ厚意謝スルニ辞ナシ八時二十分ノ電車ニテ東京ニ引上グ宿ニ帰レバ十一時ニ近シ

臼井氏一家トハ董ガ外出ノ際同家ノ前ニ友人等ト散策セルヲ同家ニ招ビ入レラレ接待ヲ受ケタルガ縁トナリテ以後屢々訪問シ遂ニハ過般道代ガ数日ニ亘リテ世話ニナリ本月十日ニハ綾子が重ネテ世話ニナリタルサヘアルニ今マタ余自カラモノノ好意ニ浴スルコト、ナリタルニテ真ニ感謝ノ極ミナリ報酬ノ途無カル可ラズ

此ノ十月一日入學宣誓式ノ日館林出身ノ多田生近ク入営ノ予定トテ国旗ニ揮毫ヲ求メシガ館林ト聞キ臼井氏ヲ知り居ルヤト尋ネタルニ知レリトノコトニ挨拶ヲ伝言シ置キタリシガ臼井氏ニ案内セラレテ教育隊ニ行ク途スガラ電車停車場ニソノ父君ガ挨拶ノ為来ラレ更ニ今夜夕食ノ際ニハ小島ト酒トヲ令室ニ携帯セシメテ挨拶ニ寄越サル多田生今前橋予備士官学校ニアリテ元氣服務トノコトナリ

十一月二十一日

文部省ニ行キ近藤部長ニ逢ヒテ石川氏ノ件ニ埒ヲ明ケント思ヒシガ待テドモ——来ラズ遂ニ午前中ヲ空費二時前ニ至リテ漸ク会见、過般ノ石川氏論文ハ必ズシモ出版ニハ及バズトノコト以外責任回避役人ノ常トシテ判然タルコトヲ云ハズ僅ニ復職ニツイテハ次官ト話シ合ヒタルガ東大方面ト考ヘ合サネバナラヌコトモアリ今暫ク時ヲ延バシタストイヘリ余ハ休職期限ノ尽クルモ近キニアレバイツマデモ延バシ居ル訳ニハユカズ大臣次官ニモ直接話サント思ヘドソノ前二局長ニソノ旨ヲ告ゲテ同意ヲ得テ置キタケレバケフ態々カク長時間ヲ待チシ旨ヲ告ゲシガコノ廿八日同氏入洛ノ由聞キ更メテ其ノ節委曲談ジ合フコトニシタキ旨告ゲテ引取ル

勝ノコトニツキテモ話シ近ク官制発布職員任命ノ由ナレバ此際ヲ外シテハ時期

無カルベク当人が国史編纂ニ関与シ来リシ從來ノ経過ト今後ノ同事業ニ重要人物ナルヲ理由トシテ召集解除ヲ求ムルコトニ依頼シコレニツイテハ同氏モソノ運ビニスベキヲ約セリ

転ジテ永井総務局長ヲ訪ヒ過般依頼セル石炭配給ノコトニツキ同氏ノ斡旋ニヨリ第三四半期ニ二〇〇疋ノ加配ヲ受クルコトニナリタルニ対シテ謝意ヲ表ス  
会計課長不在ノ為田中事務官ニ逢ヒ同課ヨリ照会ノボイラー貸出ニツキ暖房用ノランカシヤ型三基ノミハ承認スルモソノ他ハ病院ノ消毒用ナレバ承認シ難キ旨ヲ通ジ置ケリ

十月二十二日

大蔵氏ヨリ会见シタキ旨ノ申入レモアリ其他用務ハ尚ホ多ケレド先般来敵機ノ帝都名古屋等ノ偵察アリ出発ノ際ヨリ何ヤラ形勢不穩ヲ感じ鐵道ホテルノ宿泊ヲモ避ケテ特ニ龍名館ニ宿リタル有様ナレバ早ク引上グルニ如カズト思ヒ九時半発ニテ出発ス富山房ニ頼ミテダットサンノ差廻ヲ受ケテ大助カリナリ米原駅ニテ稲荷ニ列車事故アリタレバトテ乗客ヲ下シコノ列車ヲ中止ス一時間ヲブラットフォームニ待チテ七時半ノ鹿児島行キ急行ニ移乗シテ出発、超満員ニテ身動キモナラズ荒木大將ト偶然同車トナリ洗面場ニ立往生ス草津辺ニテ二時間近ク停車立ツタ儘ノ腰骨ニダルサヲ感ズレド詮方無ク大將ト雑談ヲ重ネテ時ヲ過ス十一時近クニ漸ク京都駅着

十月二十三日

新嘗祭日

十月二十四日

予感的中シ今日十二時過ギ警戒警報発令東京名古屋等ニB 29ノ空襲ヲ見ルニ至レリ発表ニ依レバ格別大シタ被害ニハ非ルガ如キモ今後屢々来襲ヲ見ルニ至ル

ベシ

ケフ一時半軍需省軍務局長鍋島中将来訪研究協力ニ対スル挨拶ノ為ナリ中将ハ舞鶴機関学校長在任時ヨリ相識ノ人ナリ過般ソノ従弟学習院教授鍋島氏ヨリ勝ノコトニツキ同氏ノ配慮ヲ請ヒタルコトモ聞キ居リタレバ打明ケテ姻戚関係ヲモ話シ国史編纂ノ重要人物ナレバ出来ルナラバ解除ヲ願ヒタク斡旋ヲ依頼ス近藤氏ヨリ相識関係トシテ書面ヲ同氏ニ出スト共ニ人事局長ニモ近藤局長名義ノ書面ヲ出サレタクソノ上同氏ヨリ人事局長ニモ話シ都合ヨク運ブヤウ計フベシトノ事ナリ機会ハ何処ニ伏在スルヤ図リ知ル可ラザルヲ痛感ス

ケフ二時ヨリ大日本教育会近畿特設支部準備委員会ヲ左阿弥ニ開キ穂積副会長別所専務理事ガ本部ヨリ来リ京阪神ノ準備委員參集特設支部ノ役員特ニ支部長トシテ京大総長ヲ推薦、依リテ之ヲ承諾シ副支部長參與等ヲ近ク委嘱スベキコトノ諒解ヲ得テ散会

十月二十五日 土

緊急科学研究体制報告会

昨日敵機帝都空襲ニ於ケル我が戦果トシテ敵来襲数七十機許リノ中撃墜五機撃破九機之ニ対シテ我が自爆未帰還七機(中一機体当リ)ト発表

十月二十七日 月

十二時四十分過ギ警戒警報ツイデ空襲警報敵ノ一編隊ハ東京一ハ浜松西部ヲ襲ヒ近畿南部ニモ来リシガ阪神重要地帯ニハ入ラズシテ去ル

十月二十八日 火

峯山吉村来泊

十二月二十九日

宗教戦時報国会ニ来会セル近藤寿治氏ニ会シ勝ノ件ニツキ鍋島局長ニアテ、同氏より出して貰ふべき書面の原稿を手渡しす

十一月三十日

今朝零時過ぎより四時半頃迄の間悪天候を冒して敵機また帝都及び駿遠地方を襲ひ焼夷弾爆弾等を投下したるも被害軽微の由ラジオ報ず二十四日以来偵察を除き三回目の侵入なり

十二月一日

ことは此頃天気悪しく連日雨なり

けふ学生課協議員会を開く

昼前相国寺吉村加藤夫妻と共に来訪加藤はまた東京本社に転勤の由にて挨拶の為に來れるなり

十二月三日

此日白昼B29七十機許り帝都を襲ふ

三十日ノ夜間爆撃は神田神保町界限日本橋三越附近其他ニ火災を生ぜしめたる由噂に聞く

十二月四日

董伊那ノ教育隊ニ転属したる由通知し來ル

十二月六日

宇治火薬製造所ニ勤勞出勤ノ経、文学生ノ勤勞ヲ視察 夜寄宿舎創立記念会ニ出席

十二月七日

一時半強キ地震アリ大煙突ノ上部ノコンクリート剥落、東海道線大垣以東静岡以西切符売止中央線其他モ或ル処ニテ売止トラジオ報ず明日の開戦記念日を控ヘテノ東京ノ警戒ノ為ナルベシ（地震ノ為ナルコト後ニ判明）

十二月八日 快晴

開戦四年目ノ記念日ナリ中国東部警戒警報、又鹿島灘辺ニモ敵機來ルト報ズ詔書捧読式を運動場ニ举行、式後平安神宮ニ参拝祈願

十二月十日

武田長兵衛氏来訪。

十二月十三日

明此日ヨリ井上宅ニ転住

十二月十四日 木

此頃連日一機二機等少数敵機ノ諸方ヘノ来襲アリ昨十三日一時半頃ニハマリアナ基地ヨリB29八十機許り来襲愛知静岡岡地方ヲ爆撃シタリト昨夕報ゼラレタルガ昨三菱ノ李家氏ガ名古屋ノ同社航空機製作所ノ研究室ヲ大学ニ疎開移転ヲ希望スルトテ来談アリシ際本日工學部長トモ相談シテ電話ニテ返答スベキガ大学ニハ左様ノ余地存セズ大学附近ニテ物色シテハ如何ト答ヘ兎モ角電話ニテ連絡スベシト約シ置キタレバ正午電話ヲカケタルニ同氏ハ今朝俄ニ名古屋ニ赴ケリトノコトナリ約束ニ拘ハラズ急ニ名古屋ニ行ケルハ昨日ノ爆撃ノ被害ノ為ナラシカト推セシガ夜太秦同社ヨリ右ノ返事ヲ李家氏ガ名古屋ヨリ電話ニテ尋ネ來レリトテ電話ヲ宅ニ通ジ來レリ依リテ名古屋ノ様子ヲ問ヒシニ発動機工場ニ爆撃ヲ受ケ大困難ナリトノ事ナリ



地震ノ為半田ノ中島工場ガヒドク災禍ヲ受ケタル上ニ今又三菱ガ名古屋ニテ此ノ難ニ遭フ飛機製作成績ニ影響多カルベシ

評議会 会后軍事教官ヨリ在郷軍人京大分会結成ニツキ学部長ニ説明

十二月十五日

星野教授来訪岩井氏ノ件中間報告アリ

十二月十六日 土

朝工学部長ト共二名古屋三菱重工業役員両氏ト京都同社員一人ト来訪、十三日ノ被害ノ様子ノ大略ヲ聴ク

十一時ヨリ真島松井牧野竹田四氏ト会合大日本教育会近畿特設支部顧問ヲ委嘱シ副支部長参与ヲ詮考ス

十二月十七日 日

雪朝来ちらつく。

十二月十八日 月

夜東方文化藪内氏ヨリ電話にて松本所長の永眠ヲ報じ来る数日前真下教授に依頼し診断ヲ求メタルニ衰弱ハ強ケレド今差迫リタル病状トハ見受ケズ気管支炎ハ随分古キ病歴ヲ有シ今起リタルモノニハ非ズ心臓ノ故障モ大したものには非ずとの事なりしが衰弱ノ為ニ老軀ノ支ヘ難カリシモノト思ハル去ル十一月九日研究所ニテ講演ノ際ニ逢ヒ講演ニ対スル謝辞ヲ述べラレタル節ニハ月余ニシテカ、ル悲報ニ接セントハ夢想ダモセザリシニ人生真ニ朝露感ニ堪ヘズコ、ニモ時局ノ影響ノ及ビシモノ少カラザルベク一九一七年当時ノ露西亜ガ飢餓状態ノ為ニ老儒碩学ヲ多数失ヒシ事ナド今更ニ思ヒ浮ベラル

此日敵機数十機愛知ヲ中心ニ襲来、京阪神地方上空ニモ飛来シ朝十時廿分警戒

警報一時過ギ空襲警報発セラル敵機三機ヲ京都ノ上空ニモ認メタル由ナリ病院ノ警戒状態ヲ視察ス京阪地方ニハ投弾セザリシ由ナルガ偵察写真ノ目的ハ達シタルナルベク今後遠カラザル襲来ヲ覚悟セザル可ラズ夜二時ニ至リテ復タ警戒警報発令

十二月十九日 火

朝松本邸ヲ弔問、遺骸ニ永訣ス

十一時過ギ研究所ニ至リ理事会ニ列ス狩野博士ニコノ際所長事務取扱ヲ委嘱シ所葬トシテ葬儀等此際ノ万端ノ事ノ処理ヲ依頼スルコトニシ明日商議員会ヲ開キテ承認ヲ求メルコトニ相談ス

此日九州大村地方ニ敵機数十機マタ来襲ノ由

府ノ清水労政課長ヲ招キ内外印刷会社ノ従事員ヲ徴用関係ヨリ確保ヲ依頼又自動車一台ヲ新ニ登録使用ノ件ニツキ当該係リノ人ニ話スコトヲ依頼シ置ケリ卓ヨリ送付ノ荷物二個ノ中一個ハ先日引取りシガ残りノ一個ヲケフ引取ル数日前既ニ到着シアリシニ相違ナキニ何回電話シテモ未着トノコトナリシガ女子挺身隊ガ扱ヒ居レルニテ碌々調べモツカズケフモ未着トノ返事ナリシニ重ねテ尋ネサセタレバ既着トノコトニテ保管料ハ〇錢ヲ要求セリトイフ何回尋ネテモ未着トイヘルニ保管料ヲ出ス理由ナシト中谷ニ述ベサセタルニ然ラバ二〇錢ニテ宜シトノコトナリシ由、スベテ此ノ調子ニテ乱脈限リナキ有様ナルハ遺憾ナリ

十二月二十二日 金

松本文三郎氏ノ研究所葬ヲ二時―三時ニ挙行ノ予定ナリシガ十二時廿分過ギ警戒警報ツイデ空襲警報発令アリ敵機南方マリアナ方面ヨリ名古屋阪神等ニ波状攻撃ヲ加ヘ京都ノ空ニモ南方ヲ東ニ向フ六機編隊ノB 29 又ハ単機ノ北方ヲ東ニ向フモノアリ更ニ又東ヨリ西ニ南方ヲ過グルモノモアリ爆弾モ焼夷弾モ此地ニハ落サバリシモ三時半過ギニ至ルマデ警戒解除ケズ漸ク四時ヨリ挙式スルコト、

ナレリ此間遺骨ハ階上ノ式場ト地下室ノ待避所トヲ度々上下往来スルノ止ムヲ得ザリシトイフ大谷瑩誠上人導師役ヲ勤メ狩野博士ガ所長事務取扱トシテ弔詞ヲ読ム時間遅レタル為爾余ノ弔辞ハスベテ壇上ニ捧ゲ置カレタリ儀式万端質素ニシテ厳肅故人ノ風格ニ似ツカハシカリシハ悲シキ中ニモユカシサヲ覚ユ  
朝鮮奨学会支部設置ニツキ案内アリ出席ノ筈ナリシモカ、ル次第ニテ欠席ス

十二月二十三日 土

正午又警戒次デ空襲警報出デタルモ単機阪神地方ヲ偵察シタルノミニテ去ル  
五時ヨリ鶴屋ニ於ケル科学興業会ノ宴ニ出席堀場近藤君等ニ勸メラレ滝野孫二氏ノ招キモアリテ出席セルナリ

十二月二十四日 日

正午綿貫哲雄君来訪  
夕景相国寺ノ兄次デ赤沢山中氏夫妻等来訪

十二月廿八日 水

狩野新村藪内水野吉川氏と官舎にて会见東方文化研究所長を引受けよとの事なり  
辞退の意向を述べ置きたるも更に熟考返事すべきを約す

十二月卅日

年末の気分もせねど年末慰勞の宴を官舎に催し本部高等官の外大杉近藤鳥養堀場諸氏と太田君とを招く大原村長に依頼したる猪肉を馳走せるなり

十二月卅一日

朝七時前ニ突然董帰宅一同を驚かすけふあす二日の休暇を利し家庭に正月を迎ふべく昨夕伊那を出発して帰り来れりとのことたゞ一夜の泊りを遠きを厭はず

帰り来れる心情あはれなり珍客に一同浮立ち夜は明一家時野合三人も打集ひ猪をつゝきて大賑なり

## 一九四五 (昭和二〇) 年

一月一日 月曜

寒けれど快晴の元旦なり敵機襲来を警戒しながらの元日の拝賀式感慨無量なり  
後日に忘し難き追想なるべし

登校の際車に同乗して董帰隊す、昨夜より今曉にかけて帝都始め関東には三度  
まで敵機来襲の由今夜放送す東京の住居同情に堪えず三島氏附近にも先日二度  
まで爆弾を投下したる由けふの来信に見ゆ

一月二日 火曜

朝薄雪積る午後また少雪寒さ強し

中村桃太郎君夫妻来訪原与作君来訪夜の食時の際宮西氏来訪、此人酒の為に失  
敗するなるべし卅日夜の招宴に不体裁を演じたるが今夕はその陳謝に来れりと  
の挨拶に拘はらず酒気を帯び举措低劣なり

一月三日 水曜

二時二十分程前警戒警報ツイデ空襲警報発令ツギツギニ敵機ノ編隊ガ潮岬ヨリ  
阪神地方ヲ指シテ北上ト報ゼラレ遂ニ大阪ニ焼夷弾ヲ投ジタルコトモ放送セラ  
レタルガ東シテ名古屋浜松地方ニ向ヒ約一時間余ニシテ遠州灘ヲ南ニ去リ警報  
解除トナル夜七時ノ発表ニヨレバ此日総数B 29約九十機名古屋ヲ主ニ大阪浜松  
等ニソノ一部ヲ向ケタルナリトイフ此外ニモ淡路島ノ北ヨリ神戸ニ向ヘルモノ  
舞鶴方面ニ入りテ更ニ名古屋ニ向ヘルモノ等アルコト時ニ情報トシテ放送セラ  
レタリ

恰モ伊津野直君来訪挨拶ノ中ニ空襲警報トナリタレバ町内会長ヲ勤ムル同君ハ  
蒼皇トシテ辞去セリ ソノ前岩井武俊君来訪

一月四日 木曜

明治十五年一月四日は軍人に給はりたる勅諭の記念日なり今日青少年学徒の軍  
人精神涵養の為にこの日ニ奉読式を挙行せよとの旨を文部省より通達し来る通  
達は追ふて次官より為すべく前以ての通牒として旧臘廿九日附にて専門局長よ  
り発せるものなり受附日を検すれば卅一日に宿直員が領収せるが中一日を置き  
て二日夕刻書記官より電話にてこの旨通じ来る文書扱方の緩慢さ何度注意して  
も依然たるは困ったものなり四日に奉読しようにもこれでは通達の時間も方法  
もなし四日に部長を会して奉読日を定むること、しこの日十一時より学部長会  
議を開く八日の記念日十時十五分に挙行のこと、す時局下殆んどすべての学生  
は軍籍に在りこれに対して此の勅諭奉読式を挙行することは何等議せらるべき  
余地なき事ながら特に文部省よりかゝる通牒を発してこの式を挙行することは  
果して文部当局の本旨なるか或はこれを余儀なくせられたるには非るか文部の  
存在益々影薄きを痛感せざるを得ず

別に祝園部隊土木事業に勤労働国隊員七〇名宛本月十二日と廿三日との両度派  
遣の要請が京都府統監たる知事より到着併せて協議す

狩野博士を訪ひ旧臘考慮を約し置きたる東方文化研究所長之件辞退の意を表明  
したるに老博士更に事情をのべて再考を求めらるはつきり断る筈の処同所の為  
に老体のかくまで心労せらるゝに對し儀礼の上からも同情の上からもなほ考ふ  
べきを述べて引取らねばならぬ場面となれり

十二時前就寝の間際に警戒警報発令然も大阪府より奈良県三重県に向ひ遠州灘  
に逸去せりとて警報解除  
田中実君駕淵夫人太田夫人等来訪

一月五日 金曜

十時十分前また警戒警報、間もなく解除

一月六日 土 晴

午後川田順氏を訪ひ清風莊維持資金につき住友家に重ねて厚志を願ひ度斡旋を依頼す同氏快諾今感冒の爲静養中なるも半頃には大阪にゆき話すべしとのことなり住友一家に依頼すべきか他にも依頼すべきかにつき同氏の意見を求めたるに額にも依ることなるが現在金利の薄き時故金利だけにて維持する資金の寄附を乞はんとすれば巨大の額に上るべく従つて今より十年位の間を維持するに足る費用だけの寄附を此際同家のみに求め十年先きにはまたその時の事情と工夫とによるがよからんとの意見なりしが余は今十万円も寄附をうければ殆んど永久的にその金利に依存して維持するを得んと述べしにそれ位の額にてその見込が立つならば多分話は纏るべしとの見込にてその積りにて先方に話して見るべしとのことなりき

夜半すぎ一小时前また警戒警報出でしも間もなく解除、此地方に向へる方向をまたも米原より東に向け名古屋に向へりとの情報なり

一月七日 日

寒気強し

三時大谷瑩誠氏来訪務台氏につきて問合せの爲なり中村 氏来訪

一月八日 月

十時十五分より軍人勅諭奉読式、文部よりの通牒によるなり 此夜敵機中京地方に來襲京都にも空襲警報出でしが直ちに解除

一月九日 火

日中三回に亘りて警戒警報出づ

道代宮津にゆく

一月十日 水

八日米軍ルズン、サンファルエン、リンガエンに遂に上陸の旨ラジオ報ず、道代宮津より帰る

福原氏ヨリ井口不仕末ノ件報告アリ

志保田氏ニ補助技術者養成所主事ヲ依嘱ス同氏快諾

一月十一日 木

府の矢盛氏来訪、西ノ京ノ航空電器社長ヲ帶同シ來ル西村教授ニ紹介

旧臘來ノ問題ナリシ岩井教授ノ件当事者昨日会谈解決ノ由同氏報ズ全ク訳ノ解ラス説明ナレド兎も角重ネテ當時者ヨリ何カ云ヒ來ルマデ打チャテ置クコトナリ

井口ノ件福原氏ヨリソノ養父ニ話シ養父ハ必ズ弁償シナケレバナラザルモ尚本人ヨリ聴取シテ処理スルトノ事ナリシ由

一月十二日 金 晴

十時廿三分発列車ニテ東上此ノ形勢下ヲ特ニ東上スル第一ノ要件ハ石川問題ヲ片附ケルコトガ主眼ナリ休職満期ハ三月十八日ナレバソレニ間ニ合フヤウニ復職問題ヲ処理シ余ノ責任ヲ全フスルコトガ面倒デモ何デモ余ノ職責ト考フルガ爲ナリ

汽車ハ予想通り満員ニテ席無ク随行ノ住友書記ニ用意シテ携帯サセ置キタル三脚ヲ組立テ洗面室ニ陣取ル寿工業ノ西川氏トイフガ同ジク洗面室ニ余ニ先立ちテ入り兩人ト住友氏トニテ二等車入口ノ硝子ノ破レタル儘ニテ寒風吹き込ム中ノ此ノ室ニ名古屋マデ籠居名古屋ニテ三等車ニ都合ヨク空席ヲ占メ得タリトノ住友氏ノ報ニ西川氏ト共ニソレニ座シテ僅ニ洗面室籠城ノ難ヲ免レ一時間程ノ延着ニテ九時半頃東京駅着、鉄道ホテルニ投ズ



一月十三日 土 晴

昨夜ハ必ズ敵機ノ襲撃ニ逢フベキヲ予想シ可ナリ戒心シテ就寝セシニ一昨夜三回モ受ケタル空襲ガ昨夜ニ限りテ一回モ無ク安眠スルヲ得タルハ仕合ナリキ昨夜真浄寺ニ電話シ今日ハ用事ヲ終リテ後同寺ニ世話ニナルコトニ定メ置キタレバ僅カノ荷物ヲ住友氏ニ持タセテ同寺ニ遣シ置ケリ朝三島君ヨリ朝食ノパン其他ヲ態々届ケラル好意毎時乍ラ有リ難シ

十時過ギ文部省ニ藤野次官ヲ訪ヒ難関ト思ハル、石川氏問題ヲ端の二切り出し当初ノ約束通りノ復職ヲ此際急ニ運ブコトヲ求メタル経済学部ニ直ニ復職セシメズ一応人文科学研究所員ニ補スルコトニシタキ積リナル旨モ述ベタリ次官ニハ兼テ近藤氏ヨリモ度々ノ余ノ請求ヲ通ジ居リタルモノナルコトハ先般近藤氏トノ話合又同氏ヨリノ書翰ニテ知リ居リタリシガソレニテ大概藤野氏モ考ヲ定メ居リタルモノ、如ク案外素直ニ余ノ要求ヲ容レ議會閉会ガ二月半頃ノ筈ナレバソノ終了次第手續ヲ進メルベケレバ大学ヨリ書類ヲ出シテクレトノコトニ落チツケリ尤モ文部省ニテハソノ運ビニスベキガ内閣ニテ異議出ズトモ限ラザレド既ニ書記官長モ交迭シタル今日デモアリ異議出レバ自分ニテ釈明シテ通シ得ベシトノ見込ミヲモ述ベラレタリ余ハ更ニ大臣ニ余ヨリ一応話スベキカトイヒシニ考慮ノ後ソレハ藤野氏自分ニテスベク若シ必要アラバ通知スベケレバソノ際ノコトニシタシトノ事ナリキ別ニ石川氏ガ一応近藤局長ニ逢ヒ現時ノ心境ヲ同氏ニ話シテ呉レルコトヲ希望スルトノコトナリシガ余ガソノ事ハ石川氏ガ已ニ簡單ナル論文ヲ草シテ提示シ近藤局長モソレニヨリテ同氏現在ノ思想情況モ知リテ諒トシ居ル旨ヲ述ベシニ然ラバ其ノ要モ無シトノ事ナリキ

カクテ此ノ鬱陶敷問題モ文部省ニ関スル限り解決ヲ見ルニ至リ俄ニ肩ノ荷ノ下リタル氣持ヲ感じタリソレヨリ永井氏ニ逢ヒテ沼田氏復任ノ希望ヲ述ベコレモ書類提出ノコトニ話ヲ纏メ更ニ近藤氏ノ外出先キヨリ歸リ来レルニ逢ヒテ次官トノ会談ノ模様ヲ話シタルニ近藤氏ハ先日余ノ差出タル書面ニ對シテ返信シ篤ト次官ト話シクレタキ旨申シ送リタリトノコトニテ(此ノ書面ハ余ノ出発迄ニ

ハ到着セザリシナリ)コレモ都合ヨク運ビタリ尚時野谷ノコトニツキテモ鍋島氏ト横須賀ノ人事課長ト両方ニ書面ヲ出シタル旨ヲモ話アリタリ。カクテ両方トモトモカク好都合ニ話ガツキ挺身東上ノ目的ヲ達スルヲ得テ安堵セリ更ニ関口局長ヲ訪ヒテ簡單ナル立話ニテ南方科学研究所官制ノ進行ヲ要請シ又沼田氏ノ件ヲモ話シ置キタリ

科学局長ニ逢ハントシタルモ會議ニテ不在ナリシ故本田君及ビ動員課長ニ逢ヒテ矢田部氏ノ新要求ヲ希望ノ如ク運ビクレタキ旨ヲ依頼シ目下考究中ノ第四次ノ採択中ニ入レルカ或ハ同氏旧所屬班ノ九州ノ福田班ヨリ費用ヲ出サセルカ何レカニスベシトノ言明ヲ聞ケリ

有光秘書課長ニ逢ヒ有浦庶務課長ノ転出ニツキ考慮ヲ求メ置キタリ五時前真浄寺ニ落チツク。火ノ氣モ無キホテルヲ去リテ久シ振リニ寺田氏兩所並ニ泉君等ノ款待ニ接シ此ノ危急情態下ノ東京ニ在ルヲ覺エズクツロギテ款待氣持チヨキ風呂ノ款待ヲモ受ケ樂々トシタ氣分ニ寝ニ就クケフモ終日空襲モナクシテ終ル

一月十四日 日 快晴

十一時頃三島君來訪打チツレテ同家ヲ訪問卓ノ縁談ニツキテ同氏夫妻ノ懇切ナル斡旋ヲ謝シ尚ホ候補者村上氏ニツキ種々聴取重ネテ依頼シ置キタリコ、ニテモ時代錯誤的ノ饗応ニ預リ好意ニ浴シテ五時頃真浄寺ニ歸ル夕景和田君來訪ノ約束ナリシ故大急ギニテ歸リタルニ同氏持病ノ発熱ノ為ニ來訪出来ズトノコトニ寺田氏一家ト重ネテ今夜モ閑談、近所ニ宿レルナリトイフ神田氏長男來訪此日外宮ヲ敵機爆撃セリトラジヲ報ズ

一月十五日 月 快晴

朝九時半ノ列車ニテ出發駅マデ坂本氏ノ自動車ヲ借用シテ乗リツク此日モ亦敵襲ニ会セズ僅ニ数十分ノ延着ニテ無事帰京ス必ズ敵襲ニ出喰ハスベ



キヲ覚悟シテノ上京ナリシニ案外無事ニ往復スルヲ得タルハ仕合ナリキ

一月十六日 火 晴

寒氣強シ

此夜京都ニ初ノ爆撃ヲ蒙リ京都女專ノ寄宿舎ニ爆弾ヲ受ク

一月十七日 水 晴

此日モ夜ヨリ朝ニカケテ敵襲アリ但シ京都ニハ襲来セズ阪神ヨリ名古屋方面ニ向フ

一月十八日 木 晴

昨夜ヨリ朝ニカケ少雪

寒氣酷烈風呂場ノ水道凍リテ水出ズ此家ヲ建テ、以来初メテノコトナリ

一月十九日 金 晴

この日二時頃より時余に亘り警戒空襲警報下敵機数梯団二分レ八十機許リ阪神地区ニ来襲 夜モ亦タ少数機来襲、既に東都中都ヲ襲ヒ今度ハ此ノ地方ニ来襲セルナリ

高坂所長ヨリ石川氏人文就任ニツキ一期（三年）位トシタキ意志表示アリ

一月二十日 土 晴

昨夜ヨリ今晚ニカケ三度少数敵機来襲

高坂氏ト昨日ノ石川氏ノ件ニツキ話シ合フ高坂氏ハ初メニ判然コノ旨ヲ明ラカニシテ人文ニ入レタシトノコトナルモ余ハソノ点ハ余ヨリ又石川氏ノ友人達ヨリ旨ヲ含マセル程度ニシタキ意ヲ述ブ経済学部ニ帰り得ザル人ヲ永ク人文ガ背負ヒ込ムコトハ所長トシテ責任上困ルトノ考ナリ一応尤モナルモ学部教授トシ

テハ適任ナラズトスルモ研究所ニ適任ノ人モアリ一概ニハ言ヘザルナリ望ム所ハ此ノ三年程ノ間ニ事情ヲ洞察シテ石川氏自カラガ転身スルコトナリ此事余ヨリモ氏ノ友人関係ノ人ヨリモ篤ト同氏ニ含マセ置クベキコトナリ諭示ノ方法ニツキテハ尚未考フベキ旨ヲ高坂氏ニ答ヘ置ケリ

一月二十一日 日 晴

昨夜来今晚ニカケマタ三回ノ警戒警報出ヅ

終日家ニ在リテ雨戸ノ目張りナドス

一月二十三日 火

敵機編隊梯団ニテ一時過ギヨリ阪神地方ニ来襲

一月二十四日 水

高坂氏ト<sup>阪</sup>蜷川経済部長ト同伴来訪、石川氏ノ件ニツキ両氏協議ノ結果蜷川氏ハ人文ニテ二年ヲ在職最長期間トシテ認ムルコト、シ其ノ間ニ同氏等ノ斡旋ニテ石川氏ヲ転身セシメ人文ニモ累ヲ及ボサズ石川氏ニモ復職ノ面目ヲ立テシムルコトニシタシト言ヒ高坂氏<sup>阪</sup>モ之ヲ諒シ而シテ此ノ二年間在職ノコトヲ研究所ニテ協議員会ヲ開キテ石川氏ヲ専任所員ニ任用スルコトヲ決スル附帯決議トシテ議事録ニ留メタシトノコトナリシガ余ハ前回会谈ノ際三年ト高坂氏<sup>阪</sup>ガ主張シタル期間ガ更ニ蜷川氏ノ意向ニヨリテ二年トナリシコトハ同氏ガ此ノ期間ニ何トカ転身ノ道ヲ講ズル見込ヲ附ケ居ルモノナルベケレバソレニハ異存ナキモ任期ヲ限りテ任用スルガ如キコトハ前例モ無ク機構ノ上ヨリイフモ穩ヤカナラザレバ之ハ協議員ノ間ニ於ケル了会事項トスルニ止メタク既ニ蜷川氏ガ高坂所長ト同席ニテ余ニカク判然ト同氏ノ意中ヲ述ベタルコトハ同氏ノ之ニ対スル責任ヲ明ラカニシタルモノナレバ此ノ上ニ大体上協議員ニモソノ含ミナル旨ヲ明ラカニセバ足レリトスベク特ニ記録ニ止ムルヲ要セザルベシト言ヒシニ高坂氏ハ何

トカ差支ナキ文字デモ之ヲ記録シテ置キタキコトヲ最後マデ主張シソノ差支ナキ文句ハ別ニ考ヘテ明日ノ協議員会前ニ余ニ示スベシトテ引取レリ

田辺教授ノ来訪ヲ求メ同氏ガ予テヨリ石川氏ノ身上ニツキ同情シ来談アリ余モ何回カ同氏ト相談シタルコトアル關係上今次ノ石川氏復職ニ関スル経緯ヲ話シ置キタリ同氏ハ石川氏ガ果シテカ、ル条件ニテ復職シ人文専任所員トナルコトヲ承諾スルカ如何カ氣遣シクソレヨリモ経済学部ニ復スル形ニテ進ムガ当然ナルベシトスル意中ヲ述ベタリ之ハ休職ノ際ノ文相ノ約束ヨリイフモ固ヨリ当然ノコトニシテ余モソノ方向ニテ文部当局ト話ヲ重ネ来レルモソレニテハ一向ニ当局ガ乘リ来ラザルノミナラズ余ノ打診ニヨレバ学部自体ガ同氏ノ復帰ヲ認めザル形勢ナルコト明ラカトナリタレバ止ムナク石川氏ヲ助ケル為ニカ、ル方向ニ進展ノ途ヲ開キ来レル旨ヲ述ベ要ハ本人ガ之ヲ応諾スルカ否カニカ、ル旨ヲ話シ置ケリ、此ノ他人文協議員会ニテノ紛擾ヲ避クル為、或ハ経済前部長トシテ此ノ件ニ直接關係ヲ有シタル人トシテ谷口氏ヲ初メ法学部長渡辺、文学部長落合、協議員石田、黒田又経済学部ノ会議ニ対スル用意トシテ汐見等ノ諸氏ニモ復職ノ経緯ヲ一応私的ニ説明シ置ケリ

#### 一月二十五日 木

緊急科学研究体制報告会及ビ会後総務委員会ヲ開ク、部長交迭、新班組織、ソノ後ニ高坂氏ヨリ人文協議員会ニテ石川氏ヲ所員トシテ迎フルコトヲ昨日協議ノ要領ニヨリテ無事通過シタル旨来訪報告アリタリ記録ニツイテハ別控ノモノヲ議事録ニ残スコト、セリトテソノ写ヲ示シ明日清書シテ差出スベシトノコトナリ

#### 一月二十七日 土

七十余機ノ編隊数梯団トナリ帝都ヲ襲フ都心被害アリタル旨情報発表アリ

#### 一月二十八日 日

昨夜来降雪寒氣強シ朝来ノ少雪ヲ冒シテ本学在郷軍人分会聯合分会結成式ニ出席、学園今ヤ殆ンド全ク変ジテ兵営トナル時難ニ応ズル姿トシテ止ムヲ得ズトハ言ヘ無量ノ感慨ヲ禁ズル能ハズ此ノ間ニモセメテ学園一縷ノ命脈ヲツナギテ国本ニ培ハザル可ラズ

#### 一月二十九日 月

朝狩野博士ヲ訪ヒ研究所長ノ件ハ何度考慮ヲ重ネテモ結論ハ同一ニテ謝絶スルガ研究所ノ為デモアリ余ノ立場ヨリモ当然ノ儀ト心得ルモ実情ヲ考フレバ理屈ダケニテハ処置スルヲ得ズ当分研究所ノ為ニ何ノ力ヲモ致スヲ得ザルコトヲ領會セラル、ナラバ名議<sup>(義)</sup>ダケヲ預ル位ノ意味ニテ受諾スベキヲ述ベタルニ博士ハ遂ニ嘘啼流涕シテ今ノ時トハ言ヘ折角ニ今マデ育テ来レル研究所ノ余ガ不承諾ノ為如何ナル運命ニ到達スベキカヲ患ヒタルガ之ニテ安堵スルヲ得タリト余ノ立場ヲ了解シテ謝意ヲ示サル老博士ノ心情ヲ推セバ今朝家ヲ出ヅル時マデモ謝絶ハ分應諾二分ノ氣持ナリシヲ逆ニシテカ、ル返事ヲセザルヲ得ザルニ至リシナリ人間己ノ為ニノミ生クルコトノ至難ナルヲ今更ニ痛感セザルヲ得ズ近ク大学ノ任ヲ辞シテセメテ幾年カノ残年ヲ仕残シタル学業ニ捧ゲントノ希望モカクシテ殆ンド水泡ニ帰スルニ至レリ今ハ止ムヲ得ヌコトナレバセメテモノ微力ヲ研究所ノ發展ニ尽シ老博士始メ研究所員ノ期待ノ一部ニデモ添フ外ナキナリ

#### 一月卅日 火

経済学部教授会ニテ石川氏ノ人文研究所員専任ノコト承認シタル旨部長ヨリ報告アリ

#### 一月卅一日 水

石川氏ヲ招致シ文部省トノ昨夏以来復職ニ関スル交渉ノ顛末、経済学部ノ内情

人文科学研究所ノ態度等ヲ仔細ニ告ゲ前記ノ如キ条件ノ下ニ応諾復職ノ希望アリヤ無シヤヲ聴ク氏ハカ、ル事情ナラバ人文ニ補職ノコトハ寧ロ喜ンデ応ズルモ二年トイフ短キ期間ニ自分ニテ転身ノ工夫出来ルヤ否ヤ疑ハシク少シク躊躇アレバ一兩日ノ猶予ヲ得タキ旨申出アリ余ハ蜷川氏等ノ意中ヲ審カニ聴カレ決意セラルベキコトナラント述べ置キタリ

二月二日 金曜

朝石川氏来訪復職ヲ前記ノ条件ニテ応諾ノ旨ヲ述べ余ノ対文部及対内部ノ交渉ノ勞ニ感謝ノ旨述べラル

二月三日 土

石川氏復職申請ノ手續ヲトル

東方文化研究所商議委員会ニテ所長トシテ就任ヲ求メラレ前記ノ次第二ニテ応諾大東亜省ノ承認ヲ求メルコト、ナル

二月四日 日

寒氣酷烈ナリ

此ノ数日敵機毎日毎夜来襲今日ハ百余機ニテ二時頃ヨリ神戸明石ヲ中心ニ一部ハ三重県松坂<sup>(坂)</sup>ヲ襲フ

大橋氏ヨリ安田氏ノ調査返事朝電話アリ

二月五日 月

寒氣なほ激烈水道ハ外部ノミナラズ風呂場洗面所等モ凍結ス昨夜ヨリ今曉ニカケテ三回ニ及ビテ敵機侵入シ重ネテ神戸ヲ襲フ非島ノ戦モ振ハズ既ニ昨日マニラ郊外ニリンガエン上陸敵軍ガ迫リ来レリト報ゼラル、ニ歐洲東部ノ独軍モ後退又後退既ニベルリンニ六十余キロノ線ニ達セリトイフ深憂ノ極ミナリ

二月七日 水

この日及び明八日兩日文部省にて外国留学生ヲ時局下地方ニ地区的ニ分散スル方針ノ下ニ京都帝大ニハ中国留学生ヲ配シソノ全般的協議ノ為會議ヲ開ク、光田主事ヲシテ参加セシメ余ノ意見ヲ書キツケテ持參セシム

二月九日 金

午后文部省森田科学局動員課長来学二時頃ヨリ科学研究会議地方部設置ニツキ文部省ノ案ヲ説明、各部長參集

星野結核研究所長ト岩井氏ノ処置ニツキ協議

二月十日 土

大谷瑩誠氏来訪、皇太子殿下御學問所御設置ニツキ先日來談ノ務台氏ノ外ニ国史担当者ニツキ広幡伯ノ書面ヲ持參シテ意見ヲ求メララル暫時考慮ノ時日ヲ求メ置ケリ

董今明兩日ノ休日ヲ利シテ今朝帰宅今日少尉任官ノ筈トイフ相変ラズ元氣ナリ福原氏ノ行動ニツキ鐘江氏ヨリ報告アリ

此日午後敵機九十機許リ關東北部ニ來襲群馬馬場太田町其他ヲ爆撃

二月十一日 日 晴

稍暖シ

紀元節拜賀式ヲ挙行

帰宅スレバ武田長兵衛氏待テリ夕刻マデ話シ合フ

董夕六時 分ノ汽車ニテ出發帰隊

数日前敵一機帝都ヲ襲ヒ本郷ヲ爆撃セシ由聞キシガ今日光田主事ヨリ聞ケバ肴町一帶禍害ヲ被レリトイフ根津権現社内モ跡方ナシトノコトナリ<sup>(坂)</sup>

二月十五日

井上以知為氏來訪過日書面ニテ招致セル為ナリ東方文化主事ニ就任ノ希望アル旨返答アリ

二月十六日

敵ノ艦載機約延一千機関東及静岡浜松地方ヲ襲フノ報アリ同時ニ機動部隊硫黄島ニ襲来上陸ヲ企ツト

二月十七日 土

此日亦タ昨日ニ引続キ約六百機許リ同ジ地方ヲ襲フ、硫黄島襲来ヲ撃退セリトノコトナリ

杉村勇造氏來訪

二月十八日 日 晴

夜ヨリ十九日ニカケ三回ニ及ビテB29中部軍管区地方ニ侵入ノ報アリ

二月十九日 月 晴

一時過ギ警報出ヅB29百機バカリ東海ヨリ東部軍管区地域に侵入トノコトナリシガ七時ノラヂオは大部分ガ帝都ニ入り所在爆撃シタル旨報ズ

今朝着ノ書面ニテ科学局ヨリ学研関西第一支部長ノ委嘱（発令前ナルモ）ト地域表ヲ送附シ来リ且ツ副支部長幹事ノ人選ヲ求メ来ル

敵硫黄島ニ上陸

二月二十五日 日

B29大挙帝都ヲ襲フ

二月二十七日 火

今夜東上、坐席無ク持参ノ三脚ニ一夜ヲ過ス

二月二十八日

朝九時過ギ東京着学士会ホテルニ投ズ

神田橋辺ヨリ学士会館ノ裏マデ二十五日ノ空襲ニテ全焼ノ光景ヲ目撃慘状筆舌ノ尽シ得ベキニアラズ上野駅方面更ニ被害大ナリトイフ

三月一日

住友君宿に来リ今朝の新聞に余の親任待遇を賜へる辞令を見たりとて祝辞を寄す新聞をまだ見ぬ余の知らざる所なり辞令欄を見れば荒川総長と余との待遇の旨記載あり荒川氏は退任の為の優遇なるべきが余の優遇は面はゆき心地す十二時前永井局長の文部省にて語る事情を聞けば九大荒川総長の後任として百武海軍大将の就任を見ることゝなりたるが山梨学習院長との釣合よりいふもこれを親任待遇とせざる可らず他の現任の総長を差し措きてこの九大新総長のみを優遇することは文部省として困難なり依りて二三の総長の優遇をこの際実現せんとしたるも内閣にて中々承知せずよりて余のみをかく扱ひ百武氏に一日先立ちて発令したるなりとのことなり

三月二日

永井氏の言の如く百武総長の発令と共に親待を賜ふ旨新聞に辞令見ゆ 午後真浄寺に至り一泊

三月三日 土

昼原邦造君に招かれ蝶屋にて食事三島君同席、三島君と共に同氏宅に至り一泊

三月四日 日

この日空襲の恐ありとて昨日態々三島君誘ひくれたるに従ひてこゝに一泊の世話になりたるが朝来飛雪の中を七時過ぎ果して警報出で敵飛行機の爆音盛に聞ゆ防空壕内にて朝食薄暗き雪の空に黒烟落合方面に上り燃え藁くず三島君の庭までも飛来す、後にきけば巣鴨辺の燃えたるなり

午后雪を冒して凄惨の気分にて三島氏宅を辞し文部省にゆき関口局長等と会し中国留学生の件を談合

三月五日

学研自然人文連絡会議（大東亜会館）

三月六日

学研支部長会議（文相官邸）

三月七日

総長会議、午前拝謁午後会議、夜首相の招宴、終りて九時出発帰洛

三月十日

早晩来B 29百二十機帝都二入り夜間爆撃ヲ行フ広域二亘リ被害大ナル模様

三月十三日ヨリ十四日早晩ニカケB 29大阪ヲ夜間爆撃ス被害甚大

三月十五日

前夜半ヨリ今早晩ニカケ敵機更ニ神戸ヲ襲フ

三月十八日 日

B 29早晩百五十機許リ復々名古屋ヲ襲フ別ニグラマン艦上機西九州四国方面ヲ襲フ

向フ一年学業停止ノ原則ヲ兄玉文相議會ニテ安藤正純氏ノ質問ニ対シテ答弁ノ旨ラジオ報ズ

三月十九日 月

早朝ヨリグラマン機西九州四国阪神地方ニ襲来夕景五時頃マデツク

麓教学官来訪

卓東京ヨリ帰来

学業停止ノコト新聞ニ掲載

三月二十日

朝三時頃B 29数機四国近畿中京方面ニ一機宛侵入、グラマン機けふは来らず前兩日中に航空母艦一隻戦闘艦若くは母艦一隻戦闘艦モシクハ巡洋艦一隻撃沈其他ニモ戦果ヲ挙ゲタル由ナレバコノ為一旦近海ヲ機動艦隊ノ遠ザカリシモノナラン

府ノ特高課長森本氏主任岡氏ヲ招キ昼食ヲ共ニシナガラ中国留学生取締ノ件ヲ協議ス

午後二時ヨリ部局長ノ参集ヲ求メ防衛協議ヲナス

三月廿一日 水

春季皇霊祭

第二防空壕ヲ庭前二掘リ始ム

花島ヲ野菜島ニ作り替ヘノ為終日鍬ヲ振フ

去る十七日夜半硫黄島ノ最高指揮官栗林中将以下生残全員敵陣ニ突入中将ハ皇



国ノ安泰ト必勝トヲ祈念スル電報ヲ発シソノ後ノ通信絶ユト大本営ヨリ発表  
噫皇土ノ一角遂ニ敵軍ノ蹂躪スル所トナル元寇ノ壱岐対馬ニ当ル元軍百万進ム  
デ博多ニ迫リテ全滅ノ運命ヲ招キシ先蹤ヲ今米虜ヲシテ踏マシメザル可ラズ神  
明照鑑加護ヲ垂レ給ヘ

廿日モ我が空軍南方避退ノ敵機動部隊ヲ追撃シ航母一隻轟沈一隻大破其他ノ戦  
果ヲ挙ゲタリト大本営発表ヲラジオ報ズ

### 三月廿二日 木

雨降り四辺暗鬱、けふ敵機京都ヲ襲フトノ流言頻リナリ下着ヲ纏ヒ洋服ヲ枕頭  
ニ置キテ眠ル折柄ノ暖氣に夜半目覚ムレバビッシヨリ汗ニ濡レ居レルモ笑ヘヌ  
用心ナリ

畑ニ取敢ズ掘リタル待避壕ノ外ニ庭前ニ更ニ一個ヲ掘ル昨日以来前ノ小島氏ヲ  
頼ミテ掘リ初メタルガ今日尚ホ了ラズ今夜マタ雨降ル水溜トナラザルカヲ恐レ  
タルガ雨量ハ音の割合に少キモノト見エ杞憂ニ終レリ

緊急科学研究体制報告会ヲ午後開会

鱒留田中氏夜来訪

### 三月二十三日

貴志家ニテ良雄君相続ノ旨通知シ来ル未亡人前年来ヨリモ重ル不幸に堪エ来レ  
ルモノト同情ニ不堪

今夜久振リニ七時ノ報道ニ軍艦マーチを聞ク十八日以来二十一日ニ亘ル綜合戦  
果ノ報告ナリ正規航母五隻戦艦二隻巡洋艦三隻其他ノ撃沈飛行機百八十機撃墜  
等ノ外未確認ノ戦果モ多シトノコト我方未帰還百五十機ナルガソノ半ハ特攻隊  
ナリトイフ隠忍シテ時機ヲ待チタル将士ノ今こそト身ヲ機ト共ニ碎キテ驕レル  
敵艦船ニ突入シ遺恨ヲ晴ラシテ皇国ノ危期ヲ救ヘル崇高無比ノ光景ヲ眼前ニ彷彿  
タルヲ覚エ感涙禁ズルヲ得ズ此上戦局更ニ緊迫シ敵ノ本土ニ迫リ来ルニ当リ

テハ飛機ヲ能フ限り増産シテ此ノ戦法ニ依ルノ外方途無カルベシ近海ニ敵ヲ引  
寄せテ皇軍ノアラユル補給ヲ便ニシナガラ驕虜ト雖限リアル物量ニ依存スル敵  
ノ艦船ヲ片端ヨリ撃沈スルノミガ元寇ノ神風ニ匹敵スルモノナラザル可ラズ今  
ノアラユル力ヲ飛機ノ製産ト航空戦ニ要スル準備ニ捧ゲザル可ラズ

### 三月廿四日

去る十日の空襲ニ東京真浄寺全焼の由二三日前ニ伝聞真否ヲ泉君宛ニ聞合セタ  
ルガ昨日寺田君ヨリ葉書ニテ寺院全焼ノ旨報知アリ感慨無量今夜悔みの書面を  
出す近く二回同寺に宿泊して厚遇を受けたることも深き因縁に結はれたる感に  
堪ヘズ

午后東方文化研究所に行き初めて研究員と会談希望ヲ聞ク

武田長兵衛君龍安寺八代氏宅より電話し来る龍安寺停留場まで車を駆り同車し  
て帰宅、同氏も京都に家を捜せるなり

### 三月廿五日 日

今晩零時頃より二時頃までB 29百三十機復た名古屋を襲ふ同機同地の夜襲三度  
目なり

九時半頃太田君の案内にて平松氏父子及び赤松氏来る太田君の仲介による卓の  
縁談の進行の為に一度自分及び本人と逢ひたき先方の希望の為なり午後太田君  
より更ニ四月に見合を嵯峨野間氏宅にてさせたしとの先方の希望を通じ来る

### 三月二十六日 月

B 29百数十機大村大牟田等北部九州ヲ襲ヒ機動部隊ハ沖縄本島及び南部九州ヲ  
襲撃ト報ズ

三月二十八日 水

沖繩本島ノ南部ケラマ以下三島ニ敵ノ一部隊上陸九州ニハ之ト共ニ南部ニ艦載機侵入トノコト

福原會計課長割愛ノ交渉昨日有光氏ヨリ来電今朝福原氏ニ通ズ、割愛ハ諒承、可成ヨキ位置ニ考慮ヲ希望ノ旨返電ス、先方ヨリハ教學練成所事務官ニ割愛ヲ求メ来レルナリ

三月二十九日 木

沖繩ノ敵機動部隊ニ対シ二十六日ヨリ二十八日ノ三日間ニ我ガ航空隊ハ戦艦一戦艦モシクハ巡洋艦六ヲ初メ撃沈十六撃破十四計卅隻ヲ撃沈破ノ戦果ヲ挙ゲタル旨ラジオニテ報ズ

大学内ノ木造建物除去ニツキ営繕課ノ意見ヲ基ニ部局長會議ニテ討議

三月卅一日

科学研究補助技術者養成所第一回卒業式举行

宮崎申郎氏来訪

四月一日 日曜

入学宣誓式举行

児玉文部大臣十一時半来学学部長ト共に昼飯会食零時四十分退去

学生大会決議ヲ寺尾主事の上京の序に二十九日文相及び首相に届けさせ置きしが文相は代表等を招致して激励の辞を与ふたゞ即刻他の大学始め諸学校にも呼びかけ等しく奮起を促せよと激励したるには少からず閉口せり学生等の此の動きを余は制止し置きたるなり理由は他の学校にまでよびかくるならば呼びかくるもの自からが先づ一時の感激興奮でなく如何にして此の局面に対処するかにつき充分の用意の下に具体的方法を考へ置かざる可らざるに学生等の間にはま

だその用意なしと見たること、呼びかけられたる学校がかゝる問題にて他より引っぱられて立ち上る時の心持を考へれば頗る慎重の態度を必要とすと考へたるによるなり故に大臣の辞の後余は特に代表等に論し諸子の感情はどこまでも活かしたければかゝることも必ず余に諮りて後に実行すべきことを忘るゝ勿れといひ置きり

四月二日

一昨日来風邪を冒して登学忙しき二日を過したる為熱も少しく出で遂に引籠る米軍遂に昨日沖繩本島に上陸し南方にも上陸を企てしもこれは撃退、然もなほ多くの艦船をこゝにも集め上陸を企図しつゝ、ありと報ず、何としても至る処に敵の上陸を阻止し得ぬとは情なき次第なり特攻隊の戦果は相当以上に挙がり居れど態と見縊らんと努むる敵の量の力が質以上に物をいふを如何せん

四月三日

二三日来急に暖く桜も色づきそめたる神武天皇祭日なれどこの情勢下陰鬱至極なり 卓今早朝東京に出発北陸線にて上田にまはり董に逢ひ二行くといふ第二の防空壕の掩蓋ノ土固めに従事すこんな仕事にかゝる日を終日従事しようとはかけても思はざりしをと感慨無量なり

瀬戸氏芦屋の住居を危み丹後浜詰に什器を疎開の為その地に在りとして書面を送り来る

四月四日

けふは登学、朝より来訪者多く夕景までたえず

四月五日

名誉教授足立文太郎博士一日午後遂に永眠、けふ二時より解剖学教室にて教室

葬、恬淡洒脱にして篤学の風格今更に忍ばる

午時前岩井擁南氏より小磯内閣総辞職の内報ありしが今夕七時情報局より公然発表す。此の際の内閣の更迭（理由は一層強力なる内閣がこの時局に当面して必要とするに由るとのことなるが）果して是認せらるゝことなりや否や強敵前門に迫りて城内尚ほ彼此の意見の対立では史にこれを徴するまでもなく心細き限りなり今の内閣の力にて飛機の製産困難なりとなれば次の内閣にも望をかくべきに非るならんか而して今の対処方針はこれを成就するより外に途なかるべきを思へば真に慄然たらざるを得ず敵は沖縄の腰部を遂に西岸より東岸に達したりといふ特攻隊の青年勇士百人に依頼して敵の百隻を屠るとすれば僅に千機の飛機を以てして敵の後続を断つ望みなきに非るべきを今にして尚ほこの数の飛機を産出し得ざるにや痛恨の極みなり

四月六日

昨夕組閣ノ大命鈴木貫太郎海軍大将（現枢密院議長）ニ降り今閣員詮衡中トノ事ナリ

四月七日

鈴木内閣成リ今夜名簿捧呈海軍ハ米内司法ハ松坂留<sup>留</sup>任爾余更新シテ陸軍阿南内務安倍、文部ハ平沼ノ幕下太田耕造氏トノコトナリ

四月八日 日

六日以来陸海ノ特攻隊沖縄ノ敵艦隊ヲ攻撃シ空母戦艦巡洋艦其他ヲ轟撃沈或ハ破壊シ大戦果ヲ挙ゲツ、アル旨夕七時ノ放送ニテ軍艦マーチノ前景氣ニテ発表我方マタ戦艦一ヲ始メ損失ヲ報ゼラル

朝田中二郎君午後太田君来宅綿貫哲雄君亦タ草鞋バキ姿ニテ例の突然来訪相変ラズノ怪物ナリ

四月九日 月

引続キ沖縄ニ於ケル特攻若松ノ崇高ナル猛攻ノ戦果続々発表セラルコ、ヲ先途ト奮戦ノ有様元寇ノ博多湾頭の光景ニモ増シテ頼母シクモ有リ難シ是非ニコノ一戦驕敵ヲ撃破セザル可ラズ敵上陸以来陸ノ戦果敵ヲ殺傷スルコト三千五百我方四百トイフ敵ノ報告中ニモ我が猛攻ヲ述ベ此ノ形勢二週間続ケバ今次ノ作戰ハ悲劇ニ終ルベシトイヘリト報ゼラル

四月十日 火

桜漸く開けど人心陰慘

先日來洛中諸所ニ大がゝりの家屋疎開ヲ始メ新ラシキ宏壮ノ家モ五日間ヲ限リテ破壊セラル、モノ多シソノ材料ヲ安価ニテ希望者ニ引取ラセテ防空壕等ノ資材ニ用キシム引取ラントスルモノモ勞力ト運輸ノ方法トニ工夫ツカズ手ノ下シ方ナキ有様ナリ

南方留學生十二人挨拶ノ為來室ビルマ、ジャワ、仏印等異色トリドリなり対応の挙止言語思ひしよりも生彩に富めり

太田新文相の談話を新聞ニ載せたるものを見るに国本社風の考へを述べ国体感<sup>感</sup>念を學生にハッキリさせること困苦の間に勉強すること自然科学のみならず更ニ大なる立場に立ちて英才教育を施さざる可らずまた教育を文部が自分の考にて為さざる可らず等といふ如何なる方策を如何なる程度に於て之が實現を期するにや多少ともこれが具現を見るを得ば幸なり引っぱり廻されて独自の方針なしに進む文部の現状を腐<sup>腐</sup>甲斐なく感じ居りての言説なるべし

四月十一日 水

山口吉郎兵衛氏代理山口合資会社理事長森信氏来訪山口氏長男格太郎君結婚媒酌依頼ノ為ナリ過日貴志かめ子夫人ヲ通ジテコノ依頼アリ更ニ山口氏夫人主人ヨリモ電話アリシガ今日重ネテ来訪懇望セラル謝絶シタク思ヘド貴志氏トノ関

係上断リモナラズ格別ノ差支ナクバト遂ニ承諾、本月二十二日日曜日ノ予定トイフ

狩野老博士午后一時来訪コレ亦細川護貞氏ノ為ニ媒酌ノ形ヲ勤メヨトノ事ナリ他ノ事ナラバ喜ンデ犬馬ノ勞ニ服スベキモ此ノ事ハ余リニ自分ニソグハザレバトテ断ル、狩野博士無理ニ押シツケノ形ニテ引取ラル明日ニモ重ネテ断リ置クベキコトナリ

午後二時ヨリ研究所ニ至リ研究員ト会談コレデ第二回目ノ会談ナリ（第二、第四水曜ガ当分ノ定日ナリ）防空設備殆ンド全ク無キ故目下東上中ノ藪内氏ニ打電シテ大東亜省ニ防空設備費一万円ヲ申込マシム書類後送ノ旨モ電文中ニ記ス今夜鐘江氏ヲ東上セシム原邦造君ニ先般来同氏ノ身上ヲ依頼シアリ同氏ヨリトモカク上京セシメヨトノ返電ガ四五日前ニ届キシ為ナリ新制ノ事務局長ニ就任セシメテ後引退セシメンカトモ思ヒシガ文部ノ意向之ニ賛セザルヲ知り得タレバ新事務局長ノ任命ヲ見ル以前ニ転身セシメテソノ面目ヲ保タシメタシト思ヒ過般来原氏二度々依頼シテ急速ノ進捗ヲ求メタルナリ一人ノ始末モ情誼面目等スベテノ方面ヲ顧慮シテ処置セントスレバ中々骨ノ折レルコトナリ

卓々景東京ヨリ帰来

太田君ヨリ十五日ニ見合ノコト平松氏ヨリ差支ナキ旨電話アリタリトテ通ジ来ル同日午後三時嵯峨野間氏宅ニテ会見ノコトニ約束ス

#### 四月十二日 木

午時前岩井擁南君ヨリ電話アリ米大統領ルーズベルト昨日死去ノ旨只今本社（毎日）ニ入電アリタリトノ通報ナリツイデ同盟通信ヨリモ同様ノ情報アリタ景ノラジオオモ之ヲ放送ス昨午後一時半頃脳溢血ニテ急死セリトノ事ナリ

#### 四月十三日 金

今朝B 29百七十機帝都ヲ襲ヒ宮城大宮御所赤坂離宮ヲ始メ諸所ニ投弾明治神宮

本殿拝殿共ニ焼失シツノ他被害多キ様子今夕ノラジオニテ放送、沖縄ニテ昨十二日以来特攻隊ノ敢闘ニヨリテ戦果挙ガレトルズベルトノ死ニヨリテ米ノ戦意衰ヘザルヲ示ス為ト其他諸種複雑ノ事情ニ由リテ企テタル侵寇ト思ハル

#### 四月十五日 日

昨日以来ノ春暖ニ桜ハ既ニ満開、春酣ニシテ人心却ッテ陰慘ナリ午後卓見合ノ為附添ヒ嵯峨野間氏宅ニ赴ク太田君夫妻赤松君先方ハ両親ト当人ナリ、会见後当方ヨリ太田君ヲ経テ扇子ヲ贈リタルニ対シ先方ヨリモ同ジク扇子ヲ贈ラレ茲ニ婚約ヲ固ム

#### 四月十六日 月

昨深更ヨリ今晚ニカケB 29二百機マタ帝都ヲ襲ヒ京浜西南地区ヲ主トシテ爆彈焼夷彈ヲ投下被害相当大ナリト今夕ラジオ報ズ交通モ東京市内ノ電車等運轉停止多ク東海道線モ大船以東ハ切符発売セズトノコト

中瀬古氏逝去朝悔ニ午後告別式ニ列ス

狩野博士ヲ訪ヒ細川氏縁談仲介ニハ是非奮発ヲ煩ハシタキ旨ヲ述ベタルニ老博士モ遂ニ承諾ノ旨答ヘラル

総長室ニ午後太田君来訪結納ノ事ナド話合フ

今午前十一時ヨリ吉田寮後援者辰巳少将以下五人来訪懇談、大学ニテ中国留學生ノ教育輔導ヲ一手ニヤレバ吉田寮ヲドウスルカトノ苦情半分ノ会談申込ナリ今日B 29一機正午少シ前太秦三菱工場ニ爆彈ヲ投ジタル由ナリ

戸田君ヨリ電話ニテ岡田厚相ノ招電ニテ明朝東上ノ旨通ジ来リ諒解ヲ求ム、帰途校門前ニテ邂逅立話シテ別ル

#### 四月十七日 火

コノ四五日申分ナキ春晴ナリ午后僅ノ時間ヲ儉ミテ学内ヲ漫步僅ニ春光ヲ楽シ



ム

四月十九日 木

評議会。会后学部長ヲ会シ民国留学生教育ニツキ協議員ヲ依頼シ協議会ヲ設ケ各学部ニ於ケル専攻学科ノ教授以外ニ特別教育及ビ寮生活補導等ニツキ協議シタキ方針ヲ述ベ協力ヲ求ム各学部長ノ外ニ若干ノ協議員ヲ別ニ依頼ノ考ナルコトモ述ベ置ケリ  
昨日附ケニテ勲一等ニ叙セラレタルコトヲ新聞ニテ知ル

四月二十日 金

感冒ト下痢ト併發真下教授ニ来診ヲ求メ終日床ニ横ハル

四月二十一日 土

けふも尚ほ気分勝レズ引籠ル

四月二十二日 日

気分尚ほ重けれど予て依頼を受ケ居りたる山口吉郎兵衛氏長男格太郎君の結婚媒酌ノ為十時道代ヲ伴ヒテ芦屋ニ向フ。車ニテ大宮通リヲ南ニ下リ林ノ藤ノ木ノ手前マデ進ミシニ竹殿町ノ角ニ人衆罵り合ヒ車ハ急停車セリ今敵機ノ爆彈ガ附近ノ屋上ニ落下シ直ニソノ火ヲ消シ止メタルガ近松附近ノ畑ノ中ニモ落チタリト仰ギ見レバ東方高々度ニB 29ノ飛行雲ヲ引クガ見ユ、宅ヲ出デントスル時即チ僅ニ五分程前警報ガ鳴リラヂオガ敵機浪花方面ニ向フ云々ト報ジタリシニ既ニカク京都北部ヲ飛ベルナリ、大シタコトモ無キ様子ニソノ儘新大阪線ニ至リ十二時過ギ山口邸ニ着(宅マデ山口合資会社ノ渡辺理事迎ヘニ来リシナリ)新婦ノ父君野寄丹斐太郎氏トハ初対面ナリソノ姉ナル人ハ佐谷有吉君ノ夫人ナリコトモ奇縁ナリ邸内ニテ神式ニテ儀ヲ了ル僅ニ双方極近親者二十名許リガ集

リテノ式事ニテ一般披露ハセズ時世ニフサハシキ床シキ行キ方ナリ五時頃ニハ済ムトノ事ナリシニ八時半ニナリテモ尚スベテハ終ラズ京都ニテ電車ガ無クナルヲ恐レテ八時半辞去、僅ニ終電車ニ間ニ合ヒテ十二時前帰宅疲労甚シ

四月二十四日 火

赤軍早クモ伯林ニ突入ノ由報ゼラル突入ハ陥落ニハアラネド呼号ニ似合ハズ拒守ノ余リニモ脆キニ驚ク赤軍ノ超非常ノ数ト量トニ由ル戦果ナルベシ東方ノ事益々勝ニ困難ヲ加フルニ至ルベシ

朝来平松家ヘノ結納目録ヲ書キ太田君ヲ訪ヒテ明日先方ニ納メテ貰フコト、ス

四月二十五日 水

夜太田夫人ヨリ平松家ヘノ結納ノコト滞リ無ク結了五月一日挙式ノコト承知ノ旨返事アリ

四月二十六日

太田君夫妻及び赤松君ヲ招ジ夕食ヲ共ニス

四月二十九日

天長節拝賀式挙行、コノ緊迫ノ際ニ御真影ヲ拝シテ聖寿無窮ヲ禱ル感慨無量也上野精一君大学ニ来訪、狩野新村両博士ト共ニ会談上野氏ハ所蔵貴重文献疎開ノ場所ヲ相談ノ為ニ来レルナリ陽明文庫ニ依頼スルコト然るベキ旨ヲ答ヘ文庫ノ田中ニ電話セシモ不在ノ為明日余ヨリ電話ニテ照会シ大阪ニ返事スルコトニス

十一時過ギヨリ中国留学生集合教育ノ為ニ寄宿舎トシテ借入レタル洛東アパートノ開寮式ヲ行フ寮名ヲ光華ト名付ク卿雲歌中ノ日月光華且復旦ヨリ取レルナリソノ出典ハ尚書大伝ニ遡リ吉川君ノ選ニヨル式ハ簡素ナガラ府ヨリ森川特高



課長ヲ始メ二三■モ来リ警察憲兵隊ヨリモ参加ス連絡ヲ密ニシ交渉ヲ滑ニシテ  
留學生ノ輔導ニ從來ノ如キ厭ハシキ有様ヲ出現セシメザル為ノ用意ナリ  
六時半頃新任報告ノ為桃山陵ニ参拜ノ新文相太田耕造氏ヲ清風荘ニ迎ヘ晚餐ヲ  
共ニ學術ノ發達ヲ計ルコトが目下ノ急務ニシテ學術ノ範圍ハ自然科学ニノミ  
偏スベキニ非ズ人文科学研究ノ奨励保護ヲモ出来得ル限り講ゼザル可ラズナド  
語ル余モ例ノ基礎研究御重視ノ聖慮ニツキテ当初以來ノ經過ナド述べ人文学関  
係ノ大学院特別研究生制度実施停止ノ現状ヲ是非ニ是正シタキ旨ナド話シタリ  
シガ食事中ニ内閣ヨリ電報ニテ大臣ノ帰京ヲ促シ来ル明日八時ヨリ閣議ヲ開ク  
為ナリトイフ問題ハ独逸ノ形勢ニ対処シテ急ニ廟議ヲ定ムル為ナルベシト大臣  
自カラノ説明ナリ七時半蒼皇トシテ去ル

## 五月一日 火

此日卓結婚式ヲ挙グ二時ヨリ下鴨神社ニテ挙式ノ予定ガ殆ンド一時間遅レテ三  
時少シ前ヨリ開始、終リテ清風荘ニテ式参列者一同祝宴ヲ開ク此ノ時局下故別  
ニ披露宴ヲ催サズ式ニ参加シタル双方ノ近親ノミナリ太田君及ビ夫人並ニ赤松  
君ニハ発端ヨリケフニ至ルマデスベテヲ世話ニナリシコト感謝ノ極ミナリ平松  
ヨリ九人当方ヨリ八人媒酌ヲ合セテ廿人ノ祝宴ナリ

食事材料ヨリ献立ニ至ルマデ工夫ヲ要スルコト多ク随分面倒ヲ重ネタリ料理ハ  
和親会松尾ニ依頼シ道具ヨリ料理万端普通以上ノ出来栄エニテ参会者ニ満足ヲ  
与ヘタルガ如シ給仕ノ事ハ瓢亭ニ依頼シ女主人ガ二人ノ女中ヲ伴ヒ来リ呉レ之  
モ都合ヨク運ベリ新夫妻ハ都ホテルニ引上ゲテ泊ル、峯山ヨリ兄態々参会、随  
分疲労ノ様子見エ氣ノ毒ナリシモ余一家ノ為又吉村一家ノ為満足ノ様子ナルハ  
嬉シ

清風荘ヲ構ヘ給ヒシ陶庵公モノノ亡キ後カ、ル事ニ莊ガ使用サレヨウトハ思シ  
召サヽリシナルベク余モ亦カ、ル事ニ此ノ莊ヲ用ヰ得ベシナド夢ニモ思ハザリ  
シヲ世ノ變転ノ測リ知ル可ラザルコトスベテ此ノ類ナリ来会ノ人々ノ此ノ時世

下ニカ、ル由緒アルカ、ル落チツケル場所ニ図ラズモ一宵ヲ樂シムヲ得タルヲ  
喜ベル様ヲ見テ一方何ヤラ勿体ナキ氣持ト共ニ一方自カラノ仕合ヲ有リ難クモ  
思フコト深シ  
当日ノ参会者ヲ記シテ後ノ記念トス

赤松俊秀君  
吉村保君  
小山末次郎君  
平松令三君  
羽田明  
時野谷綾子

太田喜二郎君

平松乾三君

卓

平松夫人

ミホ子

自分

太田夫人

道代

君 木鈴  
君 秋正間野  
君 盈村吉  
人 夫木鈴  
人 夫間野  
子 圭松平

## 五月二日 水

午后出校、同盟通信社ヨリヒットラー總統ガ官邸ニテ薨去シデーニツツ新總統  
ガ繼承シタル旨ヲ通ジ来リシガ夕七時ノラジオ報道モストックホルムヨリノ報  
トシテ卅日夜新總統ガ宣言ヲ發シテヒットラー總統ガソノ日戦死シタル為代リ  
テソノ後ヲ繼承シタル旨宣言シ独逸國民ニ共產主義ト戦フベキ旨ヲ宣シタル由  
ナリト放送ス独逸國民ノ大多数ヲ自己ノ主義理想ノ下ニコ、迄引ッパリ来リシ  
英雄ノ最後ノ心思想像スルダニ痛々シク一掬同情ノ涙ヲ禁ズル能ハズ然モ國ノ  
運命ヲ定ムル責任者トシテハ自己ノ主義主張ニ終始スルニ忠実ナリシコトノミ  
ヲ以テソノ責ヲ全ウシタルモノトハ言ヒ難カルベシ今次ノ大戦開始以來ヒット

ラー総統ノ真ノ狙ヒ処ガ何処ニアルカハ容易ニ把握シ得ザリシ所ニシテ初ヨリ共産主義打倒ノ心底ナリシナラバ対英仏ノ行動ニ於テ充分ニ解シ得ザル所アリマインカムプニ記セル本来ノ主張ヲ徹底的ニ具現スルコトハ勿論ソノ真意ナリシナルベキモノノ為ナラバ東ニ軍ヲ向ケル際ニ已ニ英仏ニ対スル態度ガ今少シク巧ミニ執ラレソウナモノナリ自己ノ勢ノ過信ニ出デタルモノトスレバ案外ニ不明ノ沙汰ナリ史料ヲ後世ニ待チテ判断スベキ事ナガラ独逸一國ヲ一人ノ主張ト判断トノ為ニ滅亡ニ導キタリトセバ真ニ恐ルベキ事ニシテ局ニ当ルモノ、殷鑑トシテ深く省ザル可ラザル処ナリ

昨日新聞ハムッソリーニ統帥ガイタリヤ解放委員会ノ手ニ捕ハレ処刑セラレタルコトヲ報ジタリシガ今日ハソノ遺骸ガミラノニ公開セラレタルコトヲ報ゼリナチ、ファシスト党主<sup>⑤</sup>ノ時ヲ同ジウシテ悲酸ノ最期ヲ告ゲタルコト感慨殊ニ深キヲ覚ユ

## 五月六日 日

朝十時ヨリ清水科学局長来学学研支部幹事集合シテ午前中会談、午後ハ科学者養成特別教育研究ニ関シ関係者ト会谈余ハ列席セズ  
此日卓出發帰、九日以後ハ連絡船ナク十一日ニハ簡閲点呼ヲ受クル故七日カ八日ノ連絡船ニ乗込マザル可ラズノ為一両日繰上ゲテ出發セルナリ

## 五月九日 水

東方文化研究所理事会及商議員会ヲ一時半ヨリ開ク  
道代ミホ子を伴ひ初めて一身田平松家ヲ訪ふ縁組ノ土産ノ返しノ儀の為なり此日先方ニ一泊

岩井大慧氏より十三日大和村一帯の爆撃火災ノ有様ヲ詳報シ来ル自宅ヲ焼ケ行クニ任セテ文庫ノ為ニ敢闘シ遂ニ之ヲ救ヒ得タリトノ事独リ文庫ノ為ノミナラズ将来ノ東洋研究ノ為ノ大功ナリ敬服ニ堪ヘズ

## 五月十日 木

五月七日独逸ガ英米ソニ対シテ無条件降伏ヲ申出デランスニテカイテル元帥ガ調印セリトノ旨新聞ニテ報ズ英米ニ対シテノミ降伏ソ聯ニ対シテハ戦争ヲ続ケルトノ申出デハ容レラレズ遂ニ全面的降伏トナリテ初メテ休戦ヲ見ルニ至レリトノ事ナリ新総統デーニッツの独逸国民ニ対スル苦シキ宣言スルモノ聞クモノ共ニ悲憤ノ情推察ニ余アリ然モコレよそ事ならず我が時局ヲ奈何セントカスル

此日緊急科学研究体制月次報告会ヲ開ク

## 五月十二日 土

外国留学生教育協議員会第一回ヲ開キ特別講義ニツキ協議

午時前董突然帰宅ノ由宅ヨリ電話シ来ル

## 五月十三日 日

平松氏夫妻ミホ子ト共ニ来訪、平松氏ト共ニ太田赤松両家ヲ謝礼ノ為ニ訪問  
疲労ノ為十時頃就寝、寢所ニ董来リ電灯モツケヌ儘ニシテ今次賜暇帰宅ノ事情ヲ述ブ母ニハ告ゲズ父ニノミ密カニ語ル雄々シキ決意、親ニハマダ小孩ノ如ク思ハル、彼乍ラ既ニ廿三才ノ一角ノ丈夫ナリ涙モ見セヌ訣別ノ辞何時ノ間ニカ此ク迄偉ク成リ呉レシヤ、心弱キ父ノ胸ガ杜ガリ涙セキ来ルノ恥カシキ哉、態トサアラヌ態ニ輕ク聞キ流シタゞ此上ニモ輕拳ヲ慎ムヤウトノミ注意シテ寢ニ就カシム連日寢不足ノ疲労モ眠ヲ誘フニ至ラズ愛スル彼ノ運命ノ薄キニ悲嘆スルノミサハレ薄倖ハ独リ彼ノ上ノミニ非ズ同ジ思ニ沈ム親兄弟ノ世ニ如何ニ多カルベキ國ノ危急今日ニ至リテハ若キ命ヲ捧ゲテ皇基ヲ護ルハ生ヲ此ノ國ニ享ケタルモノ、固ヨリ進ミテ任ズベキ所タゞ骨肉生別ノ愛情ヲ忍ビ克ク大義ヲ心得テ泰然死地ニ就カントスル我ガ子ヲ目前ニ置キテハイデラシクモ尊クモ覚エ輾転反側禁ズル能ハズ

五月十四日 月

正午留学生集合教育準備ニ協力ヲ受ケタル府庁ノ諸氏ヲ清風荘ニ招キテ会食、川合内政部長杭迫警察部長農政林務課長ヲ始メ岡持高主任其他二三氏来会

午後二時過ぎ一旦帰宅三時頃ノ列車ニテ出発帰隊スルトイフ董ヲ車ニ乗セ道代ト共ニ駅マデ送ル、駅頭ニテ之ヲ最后トハ思ハネド（東京ニ行クコトアラバ信州廻リニテ今一度面会ノ機ヲ得ント思ヒ居ル故）後髪引カル、思ニテ車ヲ回ス最後ノ時マデ遠クアレ

駅よりつる家にまはり独逸研究所理事会に出席きのふに変わる独人処遇の問題などを話合ふエッカルトの主事をやめさすにつき誰か大物を立て、円滑にエッカルトをして肯はしむる工夫をすべきなりとて新村老博士を主事にとの希望が若き人達ノ間より出で同氏も之を承諾せられたりと自分が一寸座を外した間に定まり同氏を煩はすこと今更のことにて気の毒なれど同氏が引受けられたりとあらば此上の幸なしたゞ主事といふ名は如何にもそぐはぬ気持ちすると申出で置きたり

成瀬常務理事は定年退官と共に近く岐阜に疎開するとのことにてその後釜を松本信一氏に押しつけ居りたり

董のこと寝不足の頭にコビりつき終日快々

五月十五日 火

けふは自分の誕生日なり六十を越した人を見れば大概成程老人と感ぜらるゝが多きが自分が満六十三に達した今日人の見る目も面はゆし

予て思ひ定めたところによりけふ三時極秘裏に各学部長と書記官とをお茶に託して清風荘に招じ総長辞任の申出をなす理由としては、再選の際辞退の考なりしも某氏の強き勸説に動かされて一年位の積りにて就任したるが諸種の事件のつながりの為今日に至りしこと、近頃健康衰へ思ふやうの活動も出来ざること、現情勢下身共に壮健の人の大学を統率することが特に必要と感ぜらるゝ

にかゝる老年と健康とにて到底自信なきこと、諸事今恰も一段を画し得る情態に在ること等を挙げ直ちに後任者の推薦手続きを進められたきことを申出でたり之に對し学部長（黒田法学西原工学両部長不在欠席）より全く意外の事なりとて秘密密裡の会合にもあり申出でを取消してこのまゝ、在任を希望すると強く要求せられたるも自分も一時の思ひつきには非ず既に長きに亘りて熟慮したる結果なれば是非に希望を容れられたしと重ねて述べて六時過ぎ散会帰宅

この日外国留学生入学式を十時より法経第一教室にて挙行せり

五月十七日 木

評議会

朝十時前卓帰宅、ミホ子を伴れて行く為また都合をつけて帰り来りしなりといふ

ミホ子夕景伊勢より帰宅

評議会後学部長代表として大杉落合両部長来室一昨日の余の申出に對し学部長全部（黒田氏には昨日西原氏には今日余の申出をなし置きたり）の希望として辞任を思ひ止まりたく誰が新に立つも相當に習練の時期を要し現下の重大形勢に對処するに困難なると共に此の時局下に於ては是非に余の在任を希望するとの趣旨なり余は重ねて一昨日述べたところを繰返し切に余の申出をそのまゝ、に受け入れられたき旨を述べたりしも両氏はこの挨拶をき、このまゝに歸りて一同に報告する訳にはゆかぬとのことに然らば余もなほ一応熟考すべしとて別る

五月十八日 金

滝精一氏逝去の由新聞に見ゆとて井上以知為氏来報、あの元氣の人も七十三才になりては抵抗性のよほど衰へたりしものと見ゆ心臓麻痺と新聞に見えたり悔みの電報も時局下の制限にて打てず明日帰東すといふ文部省の荻田氏に依頼し

て東方文化研究所の弔辭を託す

近藤金助教授を清風荘に招じ十五日学部長に対しての余の申出でその後学部長の来訪余の返答などを詳かに述べ再任の際同氏の強き勸説に従ひて就任したる關係上初めにこの度の余の申出を同氏に話し置くことが順当なることをよく承知し居りたるも若し同氏にとめられるやうのことありては余の申出での機を失ふを恐れ態と同氏には話さず後に了解を求むる積りなりしことを述べ余は再考したるも此際翻意しかねる故迷惑の儀ながら再任受諾の際の事情に鑑み同氏より大杉氏に対し余の希望をそのまゝに受け入れるがよかるべき旨すゝめて貰ひ度しと依頼す

五月十九日 土

朝卓ミホ子一身田にゆく

午時前近藤氏来訪、氏としては熟考の結果余の気持も推察し申出でに同意するも同氏より大杉氏に対し余の依頼の旨を取次ぐことは学部長以外に此の話が洩らされ居らぬにたゞ同氏だけに余よりこれを通じたりとありては好ましからぬことなれば余より直接話す方然るべしとの旨返事あり余は十七日大杉落合両部長に対し余の申出でを拒絶せらるれば再任の際の事情を想起しある人に応援を求めて希望達成を助けて貰ふかも知れずとも述べ置きたれば今近藤氏を煩はしても格別穩当ならずとは思はねど近藤氏の深き思慮と厚意とに従ひ午後農学部長室に大杉氏を訪ひ落合氏にも参加を請ひて再考の結果やはり余の申出をそのまゝ受け入れられたく他の学部長諸氏にもこの旨取次かれたしと述べ両氏はそれでは十五日の申出でと少しも変りなくこのまゝ取次ぐ訳に行かぬとのことなりしも余も当初申出での通りにて別にこの点をかくしたしなどとの希望ある訳ではなければ初めと同様の希望を繰返す外なきなりとて辞し帰る

五月二十日 日

久しぶりに終日無客の日曜を楽しむたゞ宮田夫人中村夫人母子相携へて卓結婚の祝の爲とて来訪ありたるのみ  
昨夜京城卓の寮より電話あり出来るだけ早く帰るやうのことなりこの旨一身田に電話にて伝ふ

五月廿二日 火

大杉農学部長来談各学部長打集リテ先日来ノ交渉ニツキ重ネテ面談シタシトノコトナリ明後廿四日午后一時清風荘ニテ面会ノコト、ス  
午後京都府庁ニ開催ノ留学生教育会準備委員会ニ出席

五月二十三日 水

卓夫妻本日午后出發下ノ関ニ向フ平松氏夫妻圭子嬢其他太田夫人野間夫人等も京都駅迄見送り呉れたる由余は車にて駅頭まで兩人等を送り直に引返せり  
今曉藤井乙男博士急逝

五月二十四日 木

七学部長と清風荘にて会談余が十九日大杉落合両部長に重ねて辞意を述べたるに対し各学部長より辞任の理由をそのまゝに認諾し難し。今此の大切の時余が辞任しては全学の士氣に關す。適任者にとのことなれども余がいふ如き適任者を求め得ず。共に死ぬる積りにて在任せよ。個人的には辞意を認めたきも大学の為を思へば是非に踏み止まることを求めざる可らず。十五日当初以来今日に至る迄各学部長一人として辞意を認めんとするものなく必ず翻意せしめねばならぬとの意見一致せるは喜ぶべき事にして余もこれを諒として引続き在任すべきなり等々意見を述べて強く留任を求めらる更に何か余が表に述べ居りざる別の理由ありて辞せんとするならば打明けてそれを聞きたしとの申出もあり



余は既述以外何等別の理由の存するなく、再任受諾当時より余がこの任務の適任者に非ることを自覚せるも折角の推挽辞するによしなく乍不適任精々一年位の積りにて一応受諾するが穩当ならんと考へて就任したることなれば既に疾く辞すべかりしを諸種の事件の引かゝりにてかく二年半も在任すること、なりたる次第にて今の辞任は余としては遅過ぎることを感ずるのみ今頽齡にして氣力なく現下大切の時に当りては平時に於けるよりも一層不適任なるを自覚し諸事恰かも一段落を画し得る今の時期に於て辞任せんとするにてその以外秘せる理由は無き事を述べ三たび重ねてその承諾を求めたるも七氏かはる／＼上記の趣旨を強調して譲らずいつまで話合ひても協調を得ずこゝに於て余も遂に決意しかほどこまでに懇請を蒙り乍らこの以上我意を貫かんとすることは或は余が時艱逃避の利己的態度と認めらるゝ、かも知れず不本意の儀にもありまた七氏の余に対する厚意に対してもこの上我意を張り難く適任ならざるを自覚しながら在任することは心苦しき限りなるも暫く諸氏の意見に従ひてこのまゝ在任すること、致すべし然れどもこの先き余にては背負ひ切れずと認める場面に遭遇する時は任期に閑せず改めて辞意を申出づる事あるべきやも計られざるにつきその際には重ねて引とめられることなく必ず余の申出を受諾せられたし勿論一旦かく決意せる上は軽忽にかゝる申出は為さざる積りなりと述べ七氏よりもこれにて安堵せりとの挨拶ありてこゝに余は予てより固く決意し居りたる辞意を翻すの止むなきこと、なれり十五日以来七部長の熱誠を込めての留任勧告は余の期待せざりし処にして余としては光榮の至りなると共に益々責任の重大を痛感せざるを得ず人生意氣に感ず此の上任期中の行ける処まで自から鞭打つて努めざる可らず

五月廿五日 金

午前近藤教授をその研究室に訪ひ先日以來昨日までの辞任問題の経過を話し置けり

二十三日夜より四日未明にかけB 29 四百機帝都を襲へる旨昨夜ラジオにて報道せられたるが被害甚大にして文部大臣も私邸官邸共に焼かれたる由新聞にて報ぜらる

真島若夫婦夕景来訪

五月二十六日 土

高槻農場を訪ひ終日薫風を追ひて逍遙農場長の厚意による鮮菜の料理と目もさむる紅玉色の苺に飽き生き回したる心地なり菊池近藤両氏同行  
廿五日より今未明にかけまたB 29 帝都を襲ふ被害甚大の由

五月二十七日 日

二十三日卒然として薨去せられたる隣家紫影博士の告別式の日なり午后一時過ぎより自宅にて行はれたる式に列し学士院長の弔辞を代読

上野精一君藤井邸を弔問しての帰途来訪新村太田両老も来訪夕景まで雑談

二十五日―六日の敵襲は宮城表御殿大宮御所宮家多数外務大東亜海軍諸省を始め帝都諸区に亘り甚大の被害にて戸数卅万罹災者百五十万と概算せらるゝ、由上野氏の話なり

五月二十八日 月

午後大阪に至り武田氏を訪問（吉岡均二の為に挨拶）の後住友本社に北沢理事を訪ひかねて川田氏を通して依頼し置きたる清風莊維持資金の寄附を願たき旨申込む同氏の挨拶には去年清風莊寄附の時当然考へらるべきこの問題を口にせざりしは川田氏より維持につきては総長にて別に考ありと聞きたるに由るが如何のことなり余は当初より維持につきては当然資金を用意せざる可らざるがこれが設定は広く諸方に寄附を求むべきか或は住友一家に願ふべきかを決し居らざりしのみ今日も尚ほその何れにすべきかを定めかぬ次第なるがもし住



友家より十万円程度寄附を仰ぐを得ば他には依頼せずこれを資金としてその以上に要すると思へば大学の経費にて弁済することに致し度き存意なりと述べたるに北沢氏は旨を諒し住友家及び総理事等とも相談して返事すべしとのことにて引取る

留守中広畑鉄工所長梶本金平氏より牛肉と魚とを贈らる

陸軍省軍務課より小荷物到着靴下着上下襪等を寄贈せらる

五月二十九日 火

近藤佐藤並川<sup>河</sup>三氏を招き宅にて昨日到来の肉を馳走して夕食を共にす

B 29及びP 51合せて六百機白昼横浜より一部は帝都にもまた侵入せりとラヂオ報ず

五月三十日 水

二十五日の敵襲の爲石井菊次郎織田万氏夫妻谷口恒二氏等死去との旨新聞にて報ず池内君三島君の罹災如何と案じたりしが池内氏よりは何の通知なきも今朝速達にて三島氏より会社の事務室工場倉庫等全焼の旨通知し来れり遂に災厄を免る、能はざりしは気の毒至極なり

五月卅一日 木

評議会（予算会議）部局長会議部長会議を開催

六月一日 金

朝十時前ヨリ敵B 29四百機ガ十機乃至卅機の編隊ニテ大阪ヲ襲ヒ約二時間ニシテ脱去同市各区ニ互リテ被害甚大ナルガ如ク烟雾京都ノ空ヲモ蔽ヒテ曇天薄暮ノ如シラジオは市民に呼びかけ夕景までには鎮火せしめよと激励せり朝日新聞も火を發しつゝ、あり駅ノ西側大坂城北側炎上中等とも伝聞

四時より川西航空機会社ノ招宴（つるや）に出席名古屋桜木俊一氏宅も去ル十四日ニ全焼の由同氏息健古氏より入営報知と共に通告し来る知友の罹災相つぐ、この地の災禍も到底免かるべきに非るべし

六月二日 土

衣類の一小部分等疎開用意の爲上賀茂演習林研究室二階の物置を学校よりの帰途検分にゆくどこが安全かは分らねど今となりては多少の用意をして置くべきこと、思ひ定めたる爲なり

法経学部にて本館と旧館とを通ずる地下道の入口をふさぎて貯水槽に転用する計画を立て実見を求められたる爲視察す両学部長及び教官の防空熱意敬服なり西原工学部長が大谷助教授を伴ひかねて加藤教授より聴ける暗視と熱線捕捉装置を総長室に運び来りて説明せらる研究者苦心の結晶なり一日も速くこれを飛機に装置して戦局の危急を救ふべきなり

六月三日 日

中谷運転手を雇ひ代用セメントを練らせ余自から之を両防空壕ノ上に塗りテ雨の浸透を防ぐ工事に従事、終日作業、左官仕事に従ふ  
朝平松令三君来訪

六月四日 月

予て通知ありたる通りけふは朝九時より戦時教育令学徒隊組織につき本省より永井総務局長入洛第一高女を会場として近畿行政協議会区域の各府県関係官及び大学高専校長等会同令を説明し隊ノ組織を求む

六月五日 火

昨日に引続き今日は関口専門局長劔木課長等入洛して一高女にて大学高専の校

長会同し学校集団整備要領草案を中心に協議、近畿地区（第一？）集団長二京大総長が当ることに満場一致協議、二時閉会。局長課長と共に清風荘に至りこゝに待合せたる七学部長（工学部長欠席）と会談

此日午前八時過ぎより敵機四百許り阪神地方を襲ひ主として芦屋以西神戸以東を爆撃す

六月六日 水

六月七日 木

緊急科学研究体制報告会、終了後学部長を会し四日、五日ノ会議につき趣旨伝達

この日また十時頃より敵機阪神地方に侵入曇天の空より工場施設を狙ひて爆撃、爆音京都にも響き硝子窓震動頻りなり

六月十二日 火

朝剣木課長来学学部長会同シテ学徒隊学校集団ノ編成につき各学部長ノ質疑ニ答フ正午前二阪大真島総長平沢学生課長ト共ニ来学学徒隊地区集団地区ニツキ阪大ノ希望ヲ容れ奈良県を大阪ニ入レルコトニ一応賛同ノ意ヲ表ス

六月十四日 木

午前阪大ヲ訪フ総長モ平沢課長モ不在訪問ノ目的ハ一昨日担当地区ニツキ奈良県ヲ大阪ニ入レルコトニ一応承認シタルモ昨夜熟考シタルニコレニテハ京大ヨリモ阪大ノ区域ガ一県多クナリ将来地方行政協議会ニテ大学関係ノコトヲ考フル時此ノ学徒隊ト集団トノ両事項ノミナラズ他ノ事柄ニツキテモ之ヲ標準トシテ両大学ノ割当ヲ考フル事アリテハ困却ノ場合ヲ生ズベキコトヲ憂ヒ改メテ奈良県ヲ京都ニ編入スルコトニ再考ヲ求メントスルニ在リシガ欠勤中ニテ意ヲ達

セズ要領ヲ書面ニシテ総長ニ届ケテ貰フコトニシテ帰学

午後評議会会後部局長ヲ会シ木造建築物第二次除去ノ態度ニツキ話合ヒ後二過日約束シ置キタル重要研究従事員配当ノ食糧加配ニツキ協議

六月十五日 金

夜昨日ノ件ニツキ真島総長宅ニ電話シタルモ雑音多クシテ要領ヲ得ズ

此日敵機マタ大阪ヲ襲ヒ主ニ東部南部ヲ爆撃ス

六月十六日 土

関口局長宛地区問題ニツキ事情ヲ述べ或ハ文部省ノ指定ヲ求ムベキコトヲ通知ス

六月十七日 日

昼頃真島総長ノ使佐々木氏書面ヲ持参再協議ハ迷惑ナレバ先日ノ協議通りニテ承認ヲ求ムトノ要旨ナリ返事トシテ之ガ迷惑ハ尤モノ儀ナレバ改メテ文部省ノ指定ヲ求ムベキヲ通知ス

夜明日ノ記念式ノ訓示要領執筆中疲労ノ為カ悪寒戰慄ヲ起シ寝ニ就ク

六月十八日 月

気分悪シク熱モ昨夜九度近ク上リ今朝モ七度八分許リナレド止ムヲ得ズ出勤式ヲスマセテ歸リ就床

此日閑院宮載仁親王ノ国葬ヲ行ハセラル

六月十九日 火

欠勤静養

鐘江書記官ヲ招致同氏身上ニツキ専門局長（？）ヨリノ来電ヲ示シ同氏ノ意向

ヲ聴ク氏ハ一応大村氏ニ電報シテ相談シタシトノコトナリ

六月二十日 水

府庁ニ新知事来訪ニ対スル答訪ヲ為シ午前中執務午後帰宅静養

六月二十一日 木

学部長会議ヲ開キ学徒隊規則ヲ協議

本日ホヽ快癒

六月廿二日 金

留学生特別講義第一陣ヲ勤メル筈ナリシモナホ健康十分ナラズ延期

六月二十三日

学校集団長協議ヲ二時ヨリ開ケルガ欠席シ書記官ヲ臨席セシム

六月二十七日

静養 本田弘人氏招電ニ応ジテ入洛宅ニ来訪ヲ求メ懇談、科学局ノ岡野事務官  
モ来訪

六月二十八日

出勤、教学局ニテ開催ノ哲学会ガ昨日ニ始マリ今日終ル朝日奈局長小沼教学官  
等ヲ清風荘ニ招ジ夕食会ヲ催シタルガ余ハ気分勝レザル為欠席

本田君ト重ネテ学校ニテ打合

六月二十九日

西田幾多郎博士追悼会ガ妙心寺ニ催サレタルモ欠席

六月三十日 土

科学研究補助技術員養成所第二回卒業式ヲ举行

七月三日 火曜

部局長会議ヲ開キ第二次木造建築物撤去ヲ協議

七月五日 木

緊急科学研究体制報告会

来ル十四日文部省ニテ大学院特別研究生詮考会開催ノ通知アリタルガ健康尚ホ  
案ゼラル、故或ハ学部長中ノ誰カニ代理ヲ願ヒ度旨学部長ニ話シ駒井部長ガ  
十六日ニ上京ノ予定ナレバモシ余ガ上京シ難キ時ハ同氏ヲ煩ハスコトニ依頼ス

七月十日

先日来ナホ気分重ク常態ニ復セス今日病院ニ至リ菊池教授ノ診察ヲ受ク  
血沈、レントゲン検査迄モ行ハル格別悪キ所モ無キヤウニ見受クルガ熱度早朝  
三六・八ハ少シク高キニ過グ疲労シ易キハ注意セザル可ラズ東上ハ見合スベキ  
ナリトノコトナリ

吉村セキ姉先日來營養失調下痢ニ基因シテ食欲全ク衰ヘ起居モ自由ナラズ目下  
ノ情態ニテハ回復モ案ゼラレ加フルニ空襲ノ現情下病院ニ入レテ加養サセタシ  
ト兄ヨリ電話シ来リ更ニ学校ニ来訪シテ相談アリ直ニ菊池教授ニ依頼シ上島君  
ニ万事面倒ヲ頼ミ明日入院ノコト、ス

七月十一日

敵ノ空襲益々激シク此頃ハ中小都市ヲ連日爆撃、諸方ニ分散攻撃ヲ行フ近畿地  
区ニモ十一時頃ヨリ侵入ラジオ情報ニヨレバ主トシテ若狭湾方面ニ機雷ヲ投下  
スト

七月十二日 木

今日ノ大雨中ニモ十時過ギヨリ空襲警報頻ニ鳴リ京都ノ空ニモ爆音強ク響ク連日睡眠足ラズ

文部省機構ヲ改メ総務局ヲ廢シテ学徒動員局ヲ置キ体育教ヲ廢スト報ズ<sup>(稿)</sup>

七月十三日 金

総長室ニ保管セル武田氏ノ敦煌文書ヲ情勢下疎開移転ノコト、シ此日午後山本氏自動車ニ積ミテ一部ヲ持チ帰ル残リハ明後日曜ニ再移ノ筈

昨夜雨中ノ襲撃ハ東ハ松島ヨリ西ハ中国西端ニ及ビ所在ヲ爆撃セル由ニテ宇都宮前橋敦賀等被害甚大の由同盟ヨリ報知アリタリトノコトナリ

京都ハ今マデ被害少キダケニ対策ニ益々周到ナラザル可ラズ府ノ斡旋ニテ大学及ビ東方文化ノ蔵書モ北桑ニ一部ヲ疎開スル方針ヲ定メ目下大急ギニテ準備中ナリ、同時ニ吉田山防空壕掘鑿、木造建築物ノ撤去、水ノ用意、機械器具ノ移

転等大童ニテ進行ヲ計レド諸事意ノ如ク進捗セズ函ガユキコト限り無シ

三島君東京ノ会社焼災ノ後甲府ニ会社ヲ移シテ経営ノ準備中ナリシ所七日マタ全焼ノ厄ニ逢ヒタル由今日通知シ来ル積年ノ苦心一瞬ニシテ水泡ナラヌ火焰ト

化シ心境想像ニ余リアルガ書中一行ノ泣キ言モ見エズ十六日ヨリ山中ニ移リライ麦ノ栽培ト馬鈴薯ノ種子ヲ作りテ県民ニ配給スルコト等ガ戦争中ノ自分ノ仕事ニ御座候と見ゆこの辺同君の面目躍如たるを覚ゆ

菊池教授より過日検査ノ結果報告アリ両肺炎共ニ古疵アレド今ノ問題ニハ非ズ血沈三十二テ早ク診断ニヨル少シク熱ノアル情態ニ応ズルモノナリレントゲンの種板ノキズの為ニ判明セザル部分アリ来週重ネテ写真ヲ撮ルトノコト、兎モ

角旅行等ハ見合セ成ルベク安静ニシ勤務モ早引ニテ帰ルヲ要ストノコトナリ

七月十五日 日

尚重苦シキ気分ニ朝ノ東方文化研究所ニ於ケル現代支那研究講座終講ノ挨拶ハ

欠席

午後一昨日ノ続キトシテ大阪ヨリ山本寛一氏来学文書引渡シノコトニナリ居リタレバ努メテ出勤全部ノ引渡シヲ終ル、責任ノ輕クナリタルヲ感ズルト共ニ此ノ事局下ヲ無事ニ保存セラレンコトヲ祈念シテ止マズ思ヘバ宋初ノ禍乱ニ敦煌ノ土窟ニ封藏セラレタルコノ文書ガ五十年ノ昔ヨリ再び世ニ出デ輾転東海ヲ渡リテ此地ニ至リ愛蔵セラル、コト数年更ニ又禍難ヲ避ケテ諸方ニ流転セントス数奇ハ人ノ上ノミカハ、運ビ去ラル、車ノ後ヲ眺メテ感慨切々タリ

敵機ノ襲来ハ愈々繁クB 29ノ所在ノ夜襲昼襲ニ加ヘテ関東東北ヨリ北海道地方ニカケ機動部隊ヨリ発セル艦載機ノ攻撃アリ陸奥湾仙台湾ニハ敵艦入リテ艦砲射撃ヲ行ヘル由報ゼラル

七月十六日 月

此日自動車ノスベテガ故障ニテ動かザル上ニ昨日活動ノ崇リニヤ気分又重ク終ニ欠勤昨夜就寝ノ際ニハ七度三分熱ヲ示シタルガ今夜モ七度二分ニ上ル

七月十七日 火 大雨

けふは気分や、良し出勤用務蟬集終日休む暇もなし昨日も関東地区始め諸方ニなほ艦載機B 29ノ侵入共に行はれたる由ラジオ報ず

七月二十三日 月

先日来入院加養中の相国寺吉村嫂薬石効無ク今朝八時過ギ死去、一昨日既ニ危険ノ報ヲ菊池君ヨリ得直チニ病室ニ至リシニ兄独リ枕頭ニ佇立シテ肅然タル有様ノ如何ニモ氣ノ毒ナレバ帰途志保田及ビ吉村仲子ヲ訪レ然ルベキ援助ヲ求メ置キシガ一昨夜深更峯山ヨリ長兄モ来着シタル由ナリ娘達二人モカクマデ危期<sup>(稿)</sup>ノ迫リシヲ知ラザルニヤ一昨日モ病床ニ侍セズ僅ニ一人ノ附添ノ看護ニ依頼セル有様ナリ時節下ノ手当スベテ思フニ任セズ情景慘憺タリ、上島君ヲ煩ハシ寝



台車ニテ十一時相国寺ノ自宅ニ帰ルコト、セリ  
本田事務監着任ス

七月二十四日 火

夕景吉村ヲ弔問

此日敵機朝来執拗ニ来襲各種合セテ二千機ニ及ベリト報ゼラル広ク本土諸地方  
二分散襲来セルナリ形勢益々緊迫

七月二十五日 水

朝十一時吉村密葬女ノ子等ハ皆集リタルモ肝腎ノ長男壽ハ軍ニ従ヒテ比島ニア  
リテソノ運命モ明ナラズ嫂モ最後ノ懸念ナリシナルベキガ兄ノ心情ヲ推察スレ  
バ真ニ同情ニ堪エズ

一兩日前京城ノミホ子ヨリノ書面ニ菊池浩輔去年十月 日戦死ノ由記セリ七  
条駅出発ノ日時、乗込ノ艦名ト台湾沖ノ海戦等ヲ綜合考察シテ或ハ既ニ戦死シ  
タルニハ非ズヤト想像シ居リタルコトノ事実トシテ報ゼラレタルナリコノ日悦  
子ヨリ道代宛ノ手紙到着シタルモノニヨレバ戦死ノコトハ既ニ当方ニ通知ヲ出  
シタルガ如クナルガソノ書面ハ不着ニ終リシト見ユ

七月二十六日 木

評議会。

豊中の妹昨夜来泊、けふ帰るこれも長女文子の問題ニ長ク悩メルコト氣ノ毒ナ  
リ

六月十三日董ニ宛テ、之ガ最後ニナルヤモ知レズト思ヒテ書キタル手紙ヲソノ  
後投函スル氣持ニナレズ一月余ヲ持チ越シタルガ情勢ハ益々切迫シ彼ノ覚悟ヲ  
実行ニ移ス日モ或ハ遠キニ非ルベキカヲ思ヒ遂ニ今夜追記ヲ附シテ封緘、明日  
差出スコト、ス二三日前董ヨリ道代ニ宛テタル手紙ヲ見タルニ覚悟ハ疾クニ定

マリテ何ノ未練モ無キガ如ク淡々タル氣持ノ程看取セラル敵ヲ屠ル腕前ノ自信  
モ出来タリ一度操縦ノ様子ヲ見セタシナド、モ書キタリソノ腕ヲ振フ日ノセメ  
テモ能フ限り遅カレトハ女々シケレド恩愛ノ情願ナリ

七月二十七日 金

大学高専学徒隊ヲ義勇学徒戦闘隊ニ転移スル準備協議会ガ催サルトテ府ヨリ出  
席ヲ求メ来ル第一女ニテ九時ヨリ開会、木村聯隊区司令官以下出席シテ説明ス

八月二十五日

颱風四国南部ニアリ今夜ヨリ明朝ニカケテ警戒ヲ要ストノ氣象情報ナリ  
日記ノペンを執ラザルコト一月ニ垂トス書キ附ケ置ケベキ重大事ノコノ間如何  
ニ多カリシコトゾソレニ拘ハラスペン執ラザリシコトノ今更ニ後悔セラルレド  
此ノ間極暑ト深憂ト更ニ八月六日頃ヨリ一週間程ニ亘リテ足部出疹ノ祟リトノ  
為帰宅スレバ全ク疲労困憊シテ日記ノミカハ書斎に入ル勇氣無ク夕食後ハ直ニ  
床上ニ横臥シテ僅ニ体ヲ持チ耐ヘル程度ニテ止ムヲ得ザル仕儀ナリシナリ日々  
ノ重大ノ形勢ハ新聞記事ニ譲ラザル可ラズソノ間ノ起リ事ノ重要ナルモノノミ  
ヲ追記シテ後ノ思出トスベシ

八月六日朝広島爆撃ノ報ガ八日頃ヨリ新聞記事トシテ大キク注意ヲ惹クニ至リ  
シガソノ爆撃ガ従来ノ焼夷弾爆撃ニ依ルモノトハ異リ一瞬ニシテ広島ヲ全滅セ  
シメ原子爆弾ノ使用セラレタルモノナルコト九日ニ至リテ新聞ニ報ゼラレヤガ  
テ敵側ノ発表ニ依リテソレガ更ニ明ラカニセラレ又実地研究ニヨリテ動カス可  
ラザル事実ナルコト証セラル僅ニ一弾ニヨリテ半径六キロニ亘リテ被害ヲ生ジ  
特ニ中心部ニ於ケル破壊力ノ強サ戦慄スベキモノアリトテ続々被害ノ有様報ゼ  
ラルツイデ長寄ニモ之ヲ用キタル由ナルガ此ノ方ハ初メノ間詳報無シ我ガ方ニ  
テ実現ヲ希望シタルモノガ敵ニヨリテ実現セラレタルナリ更ニ 日ソ聯宣戦  
ノ報ニ驚ク 十日頃ヨリ何ヤラ形勢ノタゞナラヌモノアルコト感知セラレ十日



夜ニハ重大放送アルベシナド新聞記者ヨリ伝へ来リシガソノ事無クシテ経過ス  
 タゞ下村情報局総裁ノ放送ニ国体ノ保持ト民族ノ名譽トヲ最後ノ一線トシテ奮  
 闘セザル可ラズトイフヤウナ文句アリテ何ト諒解スベキカ種々憶測セシムベキ  
 種トナレリ 十二日上野精一君暑サヲ冒シテ来訪、東方文化研究所ニ氏ノ所蔵  
 品ヲ寄托シテノ帰り途ナリ慎重ナル同氏ハ聞知セルコトモ明カニハ述ベザリシ  
 ナルベキモボツダム宣言ニ対シテ我が方ヨリ交渉ヲ続ケ居ルラシク輪廓アル程  
 度ニ感知セラル、モノアリトイフヤウナ旨ヲ極メテ曖昧ニ話シ一兩日中ノラヂ  
 オニ特ニ注意スベキ旨ナドヲ語リテ去ル 十四日夜ノ放送ハ明日正午ヲ期シテ  
 聖上御親ラマイクヲ通ジテ重大ノ御声明アルベク国民残ラズ謹聴スベキ旨ヲ伝  
 フ 十五日正午折柄来合セタル戸田正三荒勝文策ノ両氏ト共ニラヂオノ前ニ立  
 チ大詔ヲ謹聴ス学生職員等スベテ所在附近ノラヂオノ前ニテ拝聴セシム  
 嗟々コレゾ戦争終結ノ大詔ナリ録音ニ依ルモノト拝シタルガマイクノ前ニコノ  
 大詔ヲ宣ハセラル、聖上ノ御心境ヲ拝察シ奉レバ誠ヤ胸モ張り裂クル思ナリ三  
 人等シクタゞ頭ヲ垂レテ暫クハ一語アルナシソ聯ノ我ニ対スル宣戦ニツイテハ  
 判然トハ御説示無クタゞ国際情勢ノ変化トノ御言葉ニ包マセラレ新タナル残酷  
 ノ爆弾ノ使用ニヨル災禍ヲ見テハ此上赤子ノ苦難ヲ忍ブ能ハズト宣ハセラレ今  
 ハ忍ブ可ラザルヲ忍ビ耐ユ可ラザルヲ耐ヘテカノ宣言ヲ受諾セサセラルニ至リ  
 シコトヲ明ラカニ宣シ給フラヂオノ工合良カラズシテ判然大詔ヲ聴キ能ハザル  
 所アリシガ午後ソノ印刷ヲ新聞社ヨリ取寄セ初メテ詳ニ拝スルヲ得タリ嗚呼万  
 事休スケフノ日ノ今少シク早く来リシナラバカクマデ見<sup>(修)</sup>ジメノ局面ニ遭遇スル  
 無クシテ事ヲ拾集<sup>(取拾)</sup>スルヲ得タルベキヲ当初ヨリ言論ノ自由ハ拘束セラレ集会結  
 社モ制圧セラレテ国民真個ノ声ハ発スル由モ聞ク由モ無ク一部ノ勢力ニ引キズ  
 ラレテ悪クモ悪キ方面ニト進ミ進ミタル結末ガコ、ニ極リシナリ

八月二十七日 月

時野谷勝今夜突然帰来、応召解除一旦東京に出デ一日ヲ其地ニ過シテ帰レルナ

リトノコト

八月廿九日 水

総理宮殿下内閣新聞記者ト御会談過去籍口令ノ下ニ国民ガ拘束セラレ自由ニ意  
 志ヲ表スルヲ得ズシテ今日ノ局面ヲ招致セルヲ露骨ニ宣ベラレ今後言論集会結  
 社ノ自由憲兵特高警察ノ改革等ヲ実施シ民意ノ伸張ヲ計ルベキヲ強調セラル

八月卅日 木

ケフマクアーサー厚木飛行場に着直ニ横浜ニユ―グランドホテルニ入りタリト  
 ラヂオ報ズ第一声ハ日本ガ降服条件ニ従ヒテ流血ノ惨事モ無ク平穩裡ニ事ヲ進  
 メ得ルヲ認ムル由語レリトノ事ナリ下村陸省<sup>(相)</sup>今夜重ネテ軍人軍属ニ論ストテ冷  
 静対処苟クモ事ヲ誤ル無カラントヲ希望ス苦衷ノ程想像ニ余リアリ

八月卅一日 金

吉村銘子忌明ノ仏事ニ列ス(午後二時半)  
 昨日牧健二君令室ノ告別式ニ同家ヲ弔問シタルニ引続キ令嬢モ死去(奎扶斯)  
 トノコト同氏ノ心中想像ニ堪ヘタリ。野村徳七氏永眠コレモ今日告別式、本田  
 君ニ代理参列ヲ依頼ス

九月一日 土

府庁ヨリ青木警察部長大学ニ来訪南京政府ノ陳公博及ビ周仏海等京都ニ一時来  
 住ニツキ清風荘ヲ借用出来ヌカトノコトナリ即答ハ避ケタキモ亡命客(少クト  
 モ表面的ニハ)ノ為ニ此際官有ノ建物ヲ提供スルコトハ面白カラザルベキ意ヲ  
 述ベ置ケリ

九月二日 日

横浜沖六マイルの米艦ミゾリーニ於テ我ガ代表重光外相梅津參謀總長ガ聯合國側ノマックアーサー司令官始メ各代表ノ面前ニ於テ降服文書ニ記名シ各国代表亦タ記名シテ調印式ヲ終レリト報ゼラル聯合國側ニハ輝ク光榮ノ我國ニハ痛恨ナル屈辱ノ永遠ニ亘ル記念日ナリ光輝アル国史ノ上ニ此ノ屈辱ヲ残セル禍因ヲ深く考ヘ武力ニ依ラヌ真個ノ雪辱ヲ目指シテ今日ヨリスベテノ国民ガ忍苦ノ歩ヲ続ケザル可ラズ痛恨極リ無ケレド今更過去ヲ追フモ寸効ナク只タ過去ヲ反省シテ将来ニ資スルノ外ナキナリ

此日朝十時頃ヨリ又違和ヲ覺エ就床熱度卅八度七分ニ上ル原因自覺ナシ昨夜サルゾールを重曹無シニ飲ミタルニ因ルカ風邪カソレトモ前回レントゲンに写リシ胸部ノ故障ニ起因スルカ

午後董除隊帰宅ス特攻隊トシテ出撃ノ任務ヲ帶ビ旬日ノ後ニハ最後ノ運命ニ会スベカリシ危キ瀬戸際ニ此タビノ急變ニ依リ再ビ家門ヲ潜ルニ至レリ運命真ニ測リ知ル可ラズ

九月三日 月

本田局長ヲ宅ニ招致今日午後召集セル緊急科学研究体制總務会ニ体制中今ノ局面ニ合セザル題目ヲ廃シ新ニ適當ナルモノヲ入レ体制ハ依然維持シテ綜合研究ノ実ヲ挙げタキ意向ヲ伝ヘシム尚ホ府庁ニ至リ過日青木警察部長依頼ノ件ヲ円滑ニ謝絶セシム

勝君今夜東京ニ出發

九月四日 火

臨時議會召集セラレケフ開院式ヲ挙行セラル

今日気分殆ンド回復

九月五日 水

議會ニテ總理殿下ヨリ戦争ノ始末經過ヲ説明終戦ノ止ム可ラザリシ事情ヲ明ラカニシ国民ノ諒解ニ資セラル前触レ程ニハ軍部事情ノ解剖深カラザリシモ戦ヲ止メザル可ラザリシ事情ト国民今後ノ奮起ヲ求ムル点ニ於テハ意ヲ尽セリ。

新党組織ノ機運益々動ケル由ヲラジオは伝ふ尾寄鳩山芦田氏等ヨリ政府ニ対シ今度ノ戦争ノ敗因責任所在等ニ関スル質問提出セラレタルコトモ報ゼラル  
本田氏来訪一昨以来ノ諸種報告アリ

九月六日 木

本日出勤、小西兵太郎君来訪、今後ノ皇學館大学ノ行キ方ニツキ意見ヲ述べラル要ハ文農大学トシテ晴耕雨読の学園トシテ存立セシメタシトノ考ナリ

今朝十一時知事ト会見ヲ約シ支那人其後ノ事モ聞キタク又聯合軍ノ一部ガ京都ニ司令部ヲ置キ相当兵員ヲ進駐セシムル由警察特報ニテ報ゼラレタレバ之ニツキテモ情況ヲ聴取シタキ希望ナリシガ知事ハ俄ニ外出ノ要務出来タル故追フテ電話スル迄待チ呉レトノ電話アリ午後三時前マデ何ノ報知モ無カリシ故内政部長ヲ訪ヒ之ヲ質ス内政部長ハ前項ニ関シテハ関知セズトノ事後項ニツキテハ今夜終戦連絡事務局ノ一行ガ入洛府庁ニ陣取リタシトノ申入アリシ為急ニ大騷ニテ部屋ノ用意中ナリトテ氣ノ毒ナ程ニ慌テタ準備最中ナリコノ為ノ建物等準備中ナルガ大学ニハ迷惑掛ケヌ積リナリトノコトナリ更ニ警察部長ヲ訪フ、支那人ノ宿所ハ余ガ憂ヒタル如ク米軍ノ進駐モアリ市内ニテハ面白カラズ別ニ考慮中ナリトノコト知事ハ此為ニ等持院辺ニ出掛ケタルモノ、如シ昨日専門局長ヨリ事務局長ニ電話(電報?)アリテ清風莊ヲコノ為貸与シ呉レトノ事ナリシ由ナルモ既ニ余ヨリ府ニ謝絶シタル後ノコトニモアリ又文部ノ依頼ニシテモ余ハ之ヲ面白カラズト思ヘル故ソノ儘ニ聴キ流シ置クコト、ス

## 九月七日 金

本田君ヨリ用事アレバ同氏ガ宅ニ来リテ連絡スル故静養スベキヤウ屢々勸メクル、好意ニ従ヒケフハ在宅、午后同氏ト東京ヨリ帰来ノ桜井佐々木両氏打伴レテ来訪両氏上京ノ報告ヲ聞ク

五時ノラジオニテ明日十一時マックアーサー東京ノ旧米国大使館ニ入ル旨ヲ伝ヘ之ニ伴ヒアル建物トホテルトヲ要求シ建物候補ノ第一ニ東大ガ擬セラレ居ル旨報ズ東大ノ迷惑推察ニ余アリ然モ京都進駐軍ノ為ニ京大ガ同一ノ運命ニ遭遇スルコト無シトハ誰モ断ジ得ザルトコロタゞ偏ニ此ノ事無カラシムコトヲ祈ルノミ新聞ニハ東部ノ建物三箇所ヲ之ニ擬シ居ル旨記シ昨日府庁ニテモ美術館公会堂等ヲ準備シ居ル旨聞ケリ

ケフノ新聞ニ陸海軍学校ノ学生ヲソレゞ文部管下ノ大学高専等ニ転入セシムルコトニ定マリ編入ノ細項マデ文部省ヨリ発表セル旨見ユ此際ノ事ナガラ当局ノ専断ト不明驚クニ堪エタリ学問課程ノ差異ハ兎モ角陸海軍学校ニテソノ学生トシテ教育シ軍隊精神ヲ強ク植ツケ来レル学徒ヲ今後ノ世界ニ平和ニ勝利ニ進ムヲ立前トシテ教育スベキ大学生ノ中ニ入レテ都合ヨク教育ノ目的ヲ達シ得ルヤ否ヤ一寸考ヘテモ難事ナルコトヲ知ラザルニ大詔渙発以來二旬ニシテ既ニ此ノ如キ方針ヲトリ方法マデ定メテ発表スルトハ輕挙ト言ハザル可ラズ余ハ予テヨリ此ノ教育ノ重要事ナルヲ思ヒ此等ノ学徒ノ為ニ別ニ指導講習会ノ如キモノヲ設ケ適宜ノ教育ヲ施スベキヲ考慮中ナリシガ今突然コノ発表ヲ見テ心外ニ堪ヘズ

前田新大臣十日夕桃山陵参拜ノ由秘書課長ヨリ電通シ来ル

## 九月八日 土

独逸文化研究所理事会、苦勞性ノ上野氏善後策ニツキテ頗ル煩悶ノ体ナリ

## 九月九日 日

終日家居新聞伝フル所ニ依レバ滿鮮不穩ノ狀況尚去ラスソ兵ノ暴戾半島民ノ跋扈ノ為滿鮮ノ我ガ居留民慘憺タル境涯ニ在リト菊池一家卓夫妻等ノ身上ヲ憂慮スレド致方モナシ

## 九月十日 月

夜七時過ぎ前田文相ト京都駅々長室ニテ会谈川合府内政部長及田中高工長同席陸海軍学校学生及出身者ヲ大学其他ノ学校ニ編入ノコトニツイテハ軍ノ解隊ニ伴ヒ軍当局ヨリ此ノ情勢下切望アリテカク取扱フコトニシタルナリトノコト既ニ東大ヨリモ強硬ナル不服申出デアリタリトイフ余ハ今更致方モ無カルベケレバ之ヲ一括シテ特別ニ教育スル方法ヲ講ジテハ如何ト言ヒ置ケリ文相ハ文部ノ学校ニテ引受ケルコトダケハ約束シアレド其他ノコトハ来年四月迄ニ定ムベキコトナレバ然ルベキ方法ヲ案出シテホシトイヘリ其他自然科学ト共ニ人文科学ノ發達ヲモ考フベキコトヲ始メ一時間許リ雑談シテ八時十六分發列車ニテ出發歸東、十人許リノ解放捕虜ガ最後部ノ貨車ニ乗ルコト、ナリ居レルヲ文相ニアテタル二等車ニ乗セヨトイキマキシガ駅員ノ承認ヲ得ズシブゞ貨車ニ乗リテ出發ノ光景ヲ見ル

## 九月十一日 火

此ノ数日曇雨ケフモ尚ホ晴レズ、昨日ノ二百二十日ハ風無カリシガ例年コノ頃ハ天候穏ヤカナラス時ナレバ致方モ無ケレド一層陰鬱ヲ感ズ

今夕七時ノラジオハ聯合軍總司令官マックアーサーより東条英機大將ヲ聯合軍ノ規制ノ下ニ置クコトヲ要求セリト報ズカ、ル要求ハ必ズ提起セラルベキコト何人モ疑ハザル所ナレバ去月十五日以後ノ然ルベキ時ヲ選ビテ潔ク自決スベカリシナリ堂々敵中ノ法庭ニ所信ヲ述ベテ然ル後覺悟ノ運命ヲ迎ヘント決意シテ今日迄ノ姿勢ヲ持シ来リシナランカト推察スレド思フニソノ法庭ハ氏ノ期スル

が如キ論難ノ余裕ヲ与ヘザルベシ此ノ大事件ノ第一責任者トシテ対処スル道ハ果シテカ、ル法庭<sup>(電)</sup>ニテ論難ヲ希望セシナラバ寧ロ所信ヲ心血ヲ灑<sup>(電)</sup>ゲル遺書ニ認メ是非ヲ内外ト現在及ビ未来ニ問フト共ニ事ノ志ト違ヒ君国ヲ今日ノ破局ニ導キタル大罪ヲ謝シ敵手ニ辱ヲ受クルニ先立チテ自決スルガ我が武士道ナルベシ縲<sup>(電)</sup>綑ノ下ニ置カル、我が宰相ニ対シテ眼ヲ蔽フベキ今ノ国民ノ感情ヲ推知セズヤ傲岸遂ニ最後ノ醜ヲ残セシヲ悲シム原氏ノ曾テ彼ヲ罵リテ国賊ト称セシコトノ今ニシテ肯綮ニ中リシコトヲ追想スルヤ切ナリ

寺内元帥病ニシテ調印ノ場ニ出席シ能ハズトノコトニアイゼンハウアーハ医師ヲ派遣シテソノ真否ヲ確かメシガ医師ハ出席ノ不可能ナルヲ診断セシカバ其ノ回復ヲ待チテ届ケ出ヅルマデ調印式ヲ延期スルニ至レリト同時ニラジオノ所報ナリ

#### 九月十二日 水

昨聯合軍司令部ヨリ東条氏ヲ連行ノ為使ヲ派シタルニ東条氏ハ初メハ面接ヲ拒ミツイデ窓ヲ開キテ応接シ連行ノ為ノ使者ト判明スルヤ同行ヲ諾シテ窓ヲ鎖シ室内ニテ拳銃ニテ自殺セシガ弾丸急所ヲ外レテ重態トナリソノ儘横浜ノ聯合軍司令部麾下の病院ニ移サレタリトノコトナリ既ニ死期ヲ誤リ又死ヲ誤ルドコ迄モ拙キ最後ナリ

#### 九月十四日

杉山元帥自決、夫人モ亦タ見事ニ之ニ殉ズト報ゼラル

#### 九月十五日

橋田文相毒ヲ仰ギ小泉厚相亦タ自決スト報ゼラル<sup>(電)</sup>慘鼻の報続々トシテ伝ハル午后二時大野外務省管理局第二部長汐見教授ノ案内ニテ来訪東方文化研究所ノ行キ方ニツキテ希望ヲ述ベツイデ研究所ニ案内シ所内ヲ一巡研究員諸氏トモ面

接懇談ス

夜同氏ヲ清風荘ニ招キテ会食

#### 九月十六日 日

医学部荒木教授ニ山崎内相ノ知人(後ニ聞ケバ沢野氏トノコト)ガ大学病院ハ聯合軍ノ進駐ニ際シ接收セラル、予定トナリ居ル由告ゲ来リタレバ注意スルトノコトナリシ由ニテ同教授ヨリ上島事務官ヲ事務局長ノ許ニ派シ適応ノ処置ヲ求メ来レリト局長ヨリ電話アリ明日府庁ニ行ク筈ナレバ質シタル上ニテ方法モアラバ講ズベキ旨答ヘ置キタリ

一昨日ハ理学部ニ米将校来リテ施設ヲ見小川荒勝両教授ト会談ノ報アリ又府庁ヨリ大学ノ乗用車提出ヲ準備スベキ旨ノ通牒アリ漸次圧迫ノ勢迫リ来ルヲ覺ユ如何とモ致方ナキコトナリ

#### 九月十七日 月

十五日ニ来訪ノ筈ナリシ坪上日華協会理事長ノ一行今朝入洛ノ由ニテ十時半過ぎヨリ大学ニテ面接光華寮関係ノコトヲ話シ合フ

二時過ぎ府庁ニ三好知事ヲ訪問病院接收ノ噂ニツキ見込ヲ質ス何等具体的ノ話ハナクタゞ用意ニ調査セルノミニリトノコトナリ

府ヨリ進駐軍受入ニツキ準備委員会ヲ作リソノ参与ニナレトノコトニテ承知シ置キタリシガ本日委嘱シ来ル

府庁ニテ代議士今尾氏ト会見十五日汐見氏ヨリ一寸聞キタル如ク民間ニテ委員会ヲ作り進駐軍ニ応接シタキ故ソノ委員長ニナレトノ事ナリ余ハ顧問其他適当ノ事アレバ協議ニハ喜ンデ参加スベキモコレハ純粹ノ民間事業トシテ発足スルガヨカルベク且ツ近時ノ健康ニテハコノ多忙ナルベキ会務ノ処理ニハ当リ難キヲ述ベ謝絶シ置キタリ

夕景ヨリ清風荘ニテ坪上氏一行ト会食



九月十八日 火

九月十九 水

清風莊ニ客ヲ避ケ二十二日ノ訓示ノ稿ヲ草ス二時半東方文化研究所ニ行キ光華  
寮予算ヲ日華協会側ト議ス  
了リテ中村屋ニ於ケル協会ノ招宴ニ列ス

九月二十一日 金

正午少し前岡部子爵来訪、評議会 夜本田君ヨリ電話アリ広島出張ノ真下教授  
一行ガ十七日夜ノ風水害ニ罹災シタル旨ノ通知アリタルヲ報告シ来ル

九月二十二日 土

本年度卒業式  
昼坪上氏ニ招カレ鶴屋ニ会食岡部狩野本田氏同席

九月二十三日 日

此頃雨続きにて鬱陶しくけふも朝来大雨  
西宮（甲子園）矢部氏ノ息杉村氏朝来訪、大阪商科大学予科二回より応召豊橋  
予備士官学校に在りたるが除隊帰宅来年四月より京大に入りたき希望にて訪ね  
来れるなり  
午后田中二郎君来訪夕景まで雑談

九月二十四日 月

雨始めて晴る

九月二十五日 火

秋晴れの快晴なり此日より明日にかけ聯合軍第六軍京都に進駐とのこと京洛の  
地もけふよりアメリカ始め聯軍の武力の下に置かれるなりいつまでこの形勢の  
続くものにや憂鬱のことなり  
学内を歩きまはつて農学部並川教授<sup>（前）</sup>の部屋に至り風致委員会を結成して学内及  
び清風莊の風致回復及び維持を計ること、し関口教授の来室を求めこれに工学  
部森田教授を加へて下相談をして貰ふこと、す

九月二十六日 水 晴

朝東方文化研究所に行く昨日東京細川氏より藪内研究員宛に来書、来年度研究  
所予算を卅万程度に要求しては如何、国宝保存関係のものも著しく増加せら  
るゝ様子でもあり時局下発展性あり吉田外相にも話し置くべしとの由見ゆ、管  
理局第二部の所管にて過日大野部長来訪の節来年度十五万として要求予算を出  
すことにせりとて好意を示してくれたる直後の事なれば更めて卅万を要求するこ  
と如何かとも思へど細川氏の好意も無視すべきにあらねば昨日吉川藪内二氏に  
とりあへず卅万の要求予算をも作り十五万のものと共に出す用意を整へるやう  
依頼し置きたりしが今日一応の案成り藪内氏明日携へて東上すること、せり

九月二十七日 木

また雨なり

一時半より清風莊に緊急科学研究体制の十三部長及び文科系の学部長を会し体  
制出発以来今日至るまで格別尽力の労を謝し茲に一旦この体制を開散<sup>（暫）</sup>し更に同  
じ姿勢にて新世局に対して新題目を選びて出発すべき旨を告ぐ 二年前これが  
発足の時を顧て感慨深し

今朝天皇陛下マックアーサーを御訪問相成訳官一人を従へさせられて御対談あ  
りし旨ラジオ報ずモーニングにシルクハットの御服装なりし由も報ぜらる急激



の世の変転に無量の感慨を催す

## 九月二十九日 土

理学研究所理事会ヲ一時ヨリ開催故野村徳七氏記念ノ為同家ヨリ囊二百万円ノ寄附アリ国防理学研究所ヲ創立シタリシガソノ第一回理事会ヲ此日開催会名モ国防ノ二字ヲ削去セルナリ

午後三時ヨリコロムビアノ Dr. ヘルマン氏来訪五時過ぎ迄会談、氏ハ東京ニテ田中佐野其他ノ諸氏ト会談セル由ニテ対談ヲ一々ノートす話題ハ用意セルモノヲ次カラ次ヘト持チ出シ随分キワドキ質問ナリ就中現時日本ノ立テル危期<sup>(機)</sup>ニ当リ将来ヘノ進行方針如何、日本ノ教育ハ考ヘサセズシテ教ヘ込ム方針ト聞クガ之ニ対スル所見如何日本ノ歴史教育ハ事実ヲ歪曲シテ例ヘバ紀元ヲ数百年遡ラセ、満洲事変以後二天子並立ヲ秘スル等ノ如シ此レニ対スル所見、日本ノ科学<sup>(段階)</sup>発達ノ階段ガ欧米ノソレト比シテ如何ソノ将来性如何、将来ノ国民ヲシテ平和的国民ニ教育スルコトハ可能ナリトスルモ現在ノ青壮年ヲ同様ニ導クコト可能ナリヤ、神道ト軍国主義トノ関係如何等ガ主題ナリキ談話ニ誤解アリテハト思ヒ文学部事務室勤務ノ池田君ガ会話ニ長ゼリト聞キ同氏ヲ介シテ話シタリシガ充分ニ余ノ意ノアル所ヲ尽サルモノアリコノ場合ニハ余自カラ之ヲ補ヒ又ハ是正シタリシモ尚ホ充分ナラズ長ク英語ヲ聴クコトモ話スコトモ無カリシ故隔靴搔痒ノ感無キ能ハズヘルマン氏ノ職業ハ態ト聞カザリシガ思フニ応召シテ日本ノ文化面ノ調査等ヲ担当セルナルベク来週火曜ニハコロムビアに帰ル予定トノコトナリ此ノ談話ガ如何ナル形ニテ如何ニ現ハル、ヤ多少ノ興味ヲ覚ユ

談話中新村松本両博士来訪会谈ヲ終リテ面接セルニ西洋文化研究所ノ接收益々氣遣ル、形勢ナリトノコトナリ月曜ニ本田事務監ヲ終戦連絡事務局ニ派遣シ重ネテ事情説明ノコトヲ約ス

## 十月二日 火

昨日本田君府庁ニ行キ終戦事務局ノ中村公使ニ逢ヒ楽友会館及ビ西洋文化研究所ノ聯合軍接收ニツキ交渉セントセシモ中村氏不在ノ為係リノ人ニ仔細ニ説明シ出来得ル限りソノ運びニ至ラザルヤウ依頼シテ帰リタルニ不拘本日午前中中村氏ヨリ面会ヲ求メ来レル故又同氏ガ府庁ニ赴キタルニ両方トモ接收ノコトニナレル由ニテソレモ明日ヨリ直チニ入り込ムトノコトナリシ故本田氏ヨリ止ムヲ得ザル儀乍ラ従来ノ当方トノ連絡ノ仕方ノ不充分ヲ難詰シテ帰リ来レリトノコトナリ当世役人ノ仕方ノ不行届ナルコト今更乍ラ皆此ノ類ナリ

近衛家大徳寺ニ於ケル告別式ニ焼香

## 十月三日 水

新村松本両博士来訪研究所ニハ既ニ米人來リテ荷物ヲ持込ミ今夜ヨリ宿舍トシテ用キル故直ニ研究所ハ移転セヨトノコトナルガ余リニ急ニシテ移リ先キモ無ク関係者ノ会合相談スル部屋モ無ケレバ総長官舎ヲカリテ暫ク此ノ為ニ使用スルコトヲ承認セヨトノ事ナリシガ余ハ明日評議會後学部長ヲ招キ辞任発表ヲ決意セルコトナレバ官舎ヲ仮令一時的ナリトハイヘ貸与シ之ヲ後任者ニ引継グベキニ非ズト考ヘテ理由ハ述べ難ケレド不同意ノ旨ヲ述べ代リニ本部会議室ノ次ノ間ヲ使用セラル、コト差支ナキ旨ヲ答ヘ置キタリ

## 十月四日 木

六月以来兎角健康勝レズ積極的ノ行動ニ出デ難キ情態ニテ今日ニ至レリ<sup>(局)</sup>事局ハ益々多事多難トナリ教育界モ必ズ間近ニ種々ノ大問題ヲ生ジ帝大総長トシテ積極的活動ヲ要スルコト多カルベキハ必然ノ勢ナルニ此ノ健康ニテハ心細キト共ニ一面過去七年ノ学内統率方針トハ全ク別個ノ立場ニ立チテ将来ニ処セザル可ラズ過去ノ方針ハ勿論国家ノ大学教育方針ニ従ヒ乍ラ然モ出来得ル限り學術ノ府トシテノ立場ヲ守ルニ勉メ石川教授ノ事件ノ如キモ此ノ精神ニ於テ対処シ来

リシコトナルガ然モカク俄ニ情勢ノ一変ニ逢ヒテハ之ニ適応善処セントスレバ余リニ急激ニ姿勢ノ変改ヲ要スルモノ多キニ忸怩ノ感無キ能ハズ此ノ際心身共ニ旺盛ノ新人ガ立チ新世局ニ処シテ大学統率ノ任ニ当ルコトガ適當ナルベク余ガ此ノ儘在職スルコトハ学ノ為ニ計リテ忠ナル所以ニ非ズト先日来熟慮ノ結果思ヒ定ムルニ至リ今日評議會散會後學部長ヲ招致シテ辭任ヲ發表セリ但シ理由ハ健康勝レズ此ノ大切ノ時ニ積極的ニ動キ難キ点ノミニ置キタリ理學部長ヨリ他ニモ何カ理由アルニ非ズヤト質問ナリシカバ此際過去七年間の在任者トシテ責任ニツキテハ余ハ別ニ考フル所アルモノソレハ今理由トスル所ニ非ズ此ノ点ハ各帝大総長皆同一ナレバ余ガ之ニ対シテ余ノ考ヲ述ブベキ時ニ非ズタゞ不健康ノ為大切ノ時ニ活動出来難キコトハ余ノ特別の理由ニテ此ノ為ニ辭意ヲ固メ新人ノ活躍ヲ本学ノ為ニ切望スルニ外ナラズト述ベ置ケリ

去ル五月十五日一旦辭意發表ノ節大杉農學部長ニハ特別ニ配慮ヲ蒙リタルガ如クニ覺エ深く感謝セル所ナレバ今一言モ断リナシニコ、ニ辭意ヲ發表スルニ忍ビザルモノアリシカバ昨日同氏ヲ訪ヒ意中ヲ述ベテ諒解ヲ求メントセシモ病中引籠ト聞キ今朝同家ヲ訪ヒ簡單ニ此ノ旨ヲ述ベ置キタリ又落合文學部長ニモ同様氣ヲ揉マセタルト文學部トイフ余ノ特別ノ關係トヨリシテ同氏ニモ評議會ノ前僅カノ時間ヲ利シテ予メ意中ヲ述ベ置キタリ又本田事務監ハ先般余ガ特ニ有光氏ト談合シテ來任ノ地固メヲ為シタル關係モアリ同氏ハ恐ラク余ガ任期中在任ヲ予定シテ來任セルモノナルベキヲ思ヒ余リニ他人行儀ナルヲ遺憾ニ思ハル、モ心苦シク矢張り昼食後ノ時間ニ前以テ意中ヲ伝ヘ置ケリ部長ニハ附言シテ形式ハ從來通り責任アル答申ノ形ヲ取り、事ハ勿論秘密ニ運バレタク而シテ新タニ大学關係ノ当局ヨリ問題ノ提示セラレザル以前ニ新任者ト入レ替ルヲ便トスル故急速ニ手續ヲ運バレタキ旨ヲ希望シ置キタリ

十月五日 金

今日ノ新聞報道ニ昨日マックアーサーヨリ思想言論信教出版等ノ自由ニ関シテ

治安維持法以下多クノ法令ノ撤廃警察機關ノ廢止及ビ從來之ニ關聯シタル内務大臣以下警視總監警保局長始メ全警察部長等ノ退任ヲ求メタル由報ゼラレタルガソノ後内閣ハ総辭職ヲ決シ午後辭表ヲ捧呈シタリトラジオニテ報ズ夜九時ノラヂオハソノ理由トシテ現内閣ノ態度ガ総ジテ對等ノ位置ニ於テ聯合軍總司令官ニ対応シソノ要求スル所ニ添ハザルモノ多キニ因ル旨ヲ解説セリ敗戦者ノ悲運漸次具体化シテ現ハレ來ルニ外ナラズ何処の辺マデ押シツケラル、將來ノ日本ノ運命ナリヤ

十月六日 土

幣原喜十郎男<sup>電</sup>二組閣ノ大命下レリトノコト  
午後一時より原子爆彈調査班殉職者學葬委員會ヲ開ク十一日午後二時ヨリ本部階上大広間ニテ神式ニ依リ挙行ノコト、ナル

三時半頃帰宅四時半頃本田氏ヨリ電話ニテ文理兩部長ト共ニ來訪ノ旨通知アリ  
三氏來宅一昨日ノ余ノ通告ニ対シ本日各部長（農學部長病欠、書面ニテ意見開陳アリタリトノコト）集合協議シタルニ病氣トアレバ此度ハ止ムヲ得ズト諒解シ後任答申ニ進ムベキガ内規ニ定ムル日数ヨリモ早ク答申ヲ終ル為ニハ内規ヲ定メルタル機關ノ評議員会ニ一応領會ヲ求ムル要アルベケレバ月曜三時ヨリ同會議ヲ開キ呉レヨトノコトナリ余ハタゞ學部長ニ通告スルヲ以テ足り其ノ余ノコトハ學部長ニテ適當ニ運ビ呉ル、コトヲ希望セルモノ内規則變更ノ為ニハ評議會ニ諮ルヲ必要トストノ見解モ尤モナレバソノ要求ニ応ジ臨時評議會ヲ月曜ニ開クコト、ス但シ文書ヲ以テ召集セズ各學部長ヨリソレゞ口頭ニテ通達スルコト、ス

十月七日 日曜

マタ雨ナリ、幣原内閣員漸次定マレルモ尚全部ニ及バズ米内氏高血圧症ニテ留任ヲ拒ミ吉田前田（外、文）ハ留任、洪沢大藏、下村陸軍、等ホゞ定マレル旨

ラジオ報ズ

鐘江君東京ニ移転ノ為暇乞ニ来訪

十月八日 月

午后三時ヨリ臨時評議會ヲ開キ現行総長推薦内規ノ一部改正ヲ議シ原案通り可決ソノ要点ハ本月二十日ヲ答申日ト定メタクソノ為ニ現行規則第五条等ニ規定セル時日ヲ短カムルコトナリ

新内閣成立

十月十日 水

民国学生主催シテ教官食堂ニテ双十節祝賀式ヲ挙グ式ニハ時間ノ都合ニテ列席ヲ得ザリシガ昼食ノ席ニ出デ祝辞ヲ述ブ式ニハ亜米利加軍ノ情報関係(?)ノ士官モ学生ヨリ直接私的ニ交渉シテ出席シタル由ナリ  
加藤昇三君三時過ぎ来訪

十月十一日 木 晴

午後二時ヨリ真下教授ヲ始メ大野浦病院ニテ殉職セル十氏ノ為ニ学葬ヲ営ム阪大ヨリ総長代理トシテ高木医学部長来学シ全帝大総長代理トシテ弔辞アリ中国軍司令官ヨリモ代理ヲ派シ来レリ文部大臣モ弔辞ヲ送り来レリ

此日朝来連日ノ雨始メテ止ム

本田弘人氏ヲ伴ヒ帰り夕食ヲ共ニシ乍ラ就任以来ノコトヲ何クレト話ス

十月十二日 金

久シブリノ快晴ナリ、同学会ニテ帰還学生ヲ迎フル会ヲ三時ヨリ開ク落合教授ノ講演ニ先立チテ挨拶ヲ述ブ。

細川護貞氏ト今朝会談ノ筈ナリシガ同氏急ニ帰東スル為朝早く来訪スベキヤト

ノ本田氏ヨリノ電話ナリシモ近々東上シテ逢フベケレバトテ断ル急ギノ所ヲ遠方マデ来訪ヲ乞フコト氣ノ毒ナレバナリ

天皇陛下御退任ノコト漸ク具体化シツ、アルガ如シトノ報ヲ同盟ヨリ通ジ来リシ由光田氏ヨリ聞ク

佐々木惣一博士今朝細川氏ト共ニ東上セリト本田氏ヨリ聞ク今朝ノ新聞ニ同氏が宮内省御用掛トシテ憲法改正ニツキ近衛公等ト共ニ研究ニ当ル旨ヲ報ゼリ

十月十三日 土 快晴

朝十時家ヲ出テ大阪ニ行ク朝日ニ上野氏ヲ訪ヒ学葬ニ花ヲ贈ラレタル謝辞ヲ述べ持参ノ弁当ヲ同氏ト共ニ開キ二時大学ニユク真島総長ハ先般負傷後病院ニテ療養シソノ後適塾ニ泊リテ静養シタリシガ昨日初メテ宝塚ノ宅ニ帰り本日ハ出校セズトノコト高木部長ニ逢ヒテ一昨日会葬ノ礼ヲ述ブ

久シブリニテ電車ニ乗りテノ大阪行キナリシガ乗客群集シ車内ノ汚穢甚シ整頓ノ手が早く及ビテ戦時頹廢氣分ヲ一掃スルコトヲ望ムヤ切ナリ停車場ニ亜米利加軍ノ停車場司令部アリ白ヘルメットノMP.ガ立テル様ナド始メテ見ル光景ニ重々戦敗国ノミジメサヲ覚ユ大阪ノ新ホテルモ駐屯軍ニテ接收シ住友ビルニモ

星条旗ガハタメクラ見ル

北尾キヨミ朝鮮ヨリ一月カ、リテ帰り来レリトテ子供ヲツレテ来訪、帰り来リテモ食フニ糧無キ情無キ有様ヲ語ル

宮内省ノ憲法改正研究ニハ東大ノ高木教授モ御用掛ニ任命セラルベキ旨新聞報ズ、別ニ政府ニテモ松本國務相ガ之ガ研究ニ従事シ宮内省ノ改正研究ト密接ニ連絡スルトノコトナリ

十月十四日 日

けふも快晴ナリ一昨日来時野谷ノ親子四人ガ白河ニ行キ卓ハ昨日一身田ニ董ハ未ダ上田ヨリ帰り来ラズ快晴ノ日曜ニ久シ振リニ夕方マデ静寂ヲ味フヲ得タリ

今朝朝日新聞ニ米人記者ト近衛公トノ対談トシテ天皇御退任〔以下欠〕

十月二十日 土

曇リナガラ纔カニ晴ルケフハ総長候補者答申ノ日ナリ第一回ハ昼前ニ終リ鳥養  
47戸田39駒井22西原22天野21大杉21高田19中沢17橋本15松本信一14落合14ノ  
十一氏ノ順ナリ最後ノ両氏ハ同数ノ為ニ十一氏ヲ候補者トセルナリ第二回ハ鳥養  
59戸田49天野36（以下高田29駒井28西原27落合26松本22大杉22橋本19中沢17）  
ナリ第三回鳥養74戸田48天野43ニテ鳥養氏過半数ニ達セズ依リテ更ニ第四回決  
選ヲ行ヒ鳥養97戸田65ニテ鳥養氏第一候補者トナル夜帰宅シ鳥養氏ニ電話ニテ  
諾否ヲ聞キタルニ大体承諾トノコトナリ依リテ明日更ニ会見委曲ヲ話スコト、  
ス  
同氏ノ常識ニ富ミタルト円満ナル人柄ト事務ノ才幹ニ豊ナルトヲ学部長諸氏ガ  
ソレトノ立場ヨリ輔佐スレバ此ノ時代の難局ニ対処シテモ無難ニ大学ヲ統率  
スルコトヲ得ベク大学ノ為ニ賀スベキナリ

十月二十一日 日

終日籠居静養

十月二十二日 月 晴（東京ハ雨）

朝十時廿分発ニテ東上態々随員ヲ大阪マデ派シ席ヲ得ントセシモ能ハズ洗面所  
ニ三脚ヲ据エテトモカクモ腰ヲ下スヲ得タリ同行ノ本田君及ビ随員宮谷君共ニ  
立ツタ儘ナリ米原辺ニテ席ヲ譲リ呉レル人アリトノコトナリシモソノ人ヲ立タ  
セテ自分ガ坐スル訳ニハ行カズ名古屋マデソノ儘ニテ行ク名古屋ニテ漸ク席ヲ  
得本田君モ坐ス前席ニ坐スル人ガ先キニソノ席ヲ譲ラント申出デ呉レタル人ナ  
ルガ聞ケバ吉村ノ静子ノ嫁セル谷口氏ノ叔父ニ当ル人ニテ先方ニテハ余ニツキ  
テ知り居リソノ為ノ申出デナリシコトヲ知ルヲ得タリ

八時半頃東京ニ着ク小田原附近ヨリ又雨トナリ東京ハ大雨ナリ駅ニ富山房ノ乾  
氏ト阿部（？）氏トガ迎ヘ呉レシガ予テ依頼シ置キタル龍名館ガ満員ニテ他人  
トノ相宿ヨリ外ニ方法無シトノコト今更致方モ無ク東大ニ依頼シテ置キタル自  
動車ノ迎ヘニ救ハレテトモカクモト龍名館ニ着ク相宿ヲ諾シタル人ハ坂下徳道  
氏トテ岸和田附近ノ出自ニシテ佐々木惣一氏ニ関西大学ニテ講義ヲ聞キタルコ  
トアリソノ佐々木氏ガ今夜此ノ宿ニ着ク予定ナルガ部屋無クシテ宿主ガ困リ居  
レリト聞キ旧師ノコトナレバ相宿ヲ諾シタルナリトノコトナリソコニ見知ラス  
自分ガ飛ビ込ミタルコトナレバ先方モ腑ニ落チヌ顔ニテ甚ダ落チツカヌ場面ヲ  
現ジタルモ佐々木氏ト自分トヲ宿ノ番頭ガ混同シテ同氏ニ伝ヘ然モ佐々木氏ハ  
都合ニテ今日ハ来ラザリシコトガ分リ坂下氏モ諒解シテヤット同宿ヲ快諾シテ  
呉レルコト、ナリタリ同氏ハモト警視庁ニ奉職シ後満洲国警務部ニ勤務シ居リ  
シ人ナリトノコトナリ従来随分宿屋ニ泊リタルコトモ多ケレド他人トノ同室相  
宿ハ此ノタビガ初メテナリ先方ニモ氣ノ毒ナレドコチラモ随分窮屈ナリ明日ハ  
室ノ都合ヲスルトノコトニ一夜ノコト、我慢シテ寝ニ就ク

十月二十三日 火 雨

相宿ノ一夜ハ雨ニ明ケタリ坂下氏ハ朝食後直チニ外出、ソノ後ニ予テ書面ヤ電  
報ヲ出シ置キタル館林ノ臼井伊三郎氏来訪昨年以來丸一年ナリ相変ラズノ調子  
ナリビタミンB、C、注射薬及ビ錠<sup>劑</sup>縫針松茸一籠トヲ贈ル為ニ繰合セテ来訪  
ヲ求メタルナリ一時間程雑談後雨ヲ冒シテ歸リ去ル、浦和ニ昼マデニ行クナリ  
トノコトナリ妙ナ縁故ニテ思ヒガケ無キ所ニ知人ヲ有スルニ至レルガ漸次ソレ  
コレト聞ケバ同氏ノ夫人ト鈴木虎雄氏トハ同周造君ヲ通ジテ縁辺トノコト又文  
部理事官春山順之輔君ト同家トハ格別ニ懇親ノ間トノコト、人間不覚ノ裡ニ縁  
故ノ繩ニテ繋ガレ居ルモノト今更ニ感慨ヲ深クス

午后本田君来訪、共ニ文部省ニ行ク次官モ大臣モ用事ニテ面談ヲ得ズ田中耕太  
郎局長ト会谈聯合軍側ノ注文タル民主主義教育ノ方針等ニツキ談話ヲ交ユ追放



教授ノ復歸問題ニツキテモ新聞ニテモ報道セル通り聯合軍司令部ヨリ申込アリ  
ソノ方法ニツキテモ通達シ来レリトノ事ナリ局長ノ意向トシテハ教授会中心ニ  
之ヲ定メ別ニ本部ニ委員会ヲ作りテ教授会ノ意見ヲ審議スル方法ヲ取ルコトニ  
セントスルニ在ルガ如シ

文部省ヲ引上ゲ池内君ヲ訪フ案ジタル程ニハ無キ健康状態ナリ同家ニテ夕食ノ  
馳走ニナリテ帰ル

帰途電車内ニテアメリカ兵士ト我ガ若キ婦女トノ痴態ヲ見暗澹タル氣持ニ陥ル

# 十月二十四日 晴雨

朝文部省ニ至リ十時過ぎ大臣ト逢ヒ健康不振ノ為辭意ヲ固ムルニ至リタル旨ヲ  
述ベテ辭表ヲ呈出、同時ニ後任ヲ推薦ス大臣ハソレハ意外ノコトナリトイヘル  
モ余ハ健康上此ノ際ニ於ケル活動ノ困難ナルヲ述ベ活動シ能ハザルモノガソノ  
職ニアルコトハ余トシテ堪エ得ザル所ニシテ既ニ大学内部ニテモ之ヲ認メ文部  
省ノ認ムル内規ニヨリテ後任者ヲ推薦セル以上申請ノ通りニ処理ヲ願ハザル可  
ラザル旨ヲ重ネテ述ベ大臣モ大学ノオートノミーの上ヨリ如何トモ致シ方ナシ  
トテ辭表ヲ受理セリ後任者ニツキテハ工學部教官ヨリ出ヅルハ同學部ノ講座ガ  
多キ為ナラズヤ在野時代東大現總長ガ立テル時ニモカ、ル事情アリシガ如ク聞  
キ居レルガトノコトナリ余ハ工學部ニ講座ノ多キハ京大ニテモ同様ナレド他ノ  
六學部ノ總數ヲ以テスレバ工學部ノミノ意向ガ全局面ヲ支配スルコトハ有リ得  
ズ此ノ答申ハ公平ト見得ベキヲ信スル旨ヲ答ヘ置キタリ此レニ先キ立チ次官ニ  
懇談セントシタルモ局長會議ガ開カレ居リ時間之余裕無キ様子ナリシ故極メテ  
簡單ニ辭意ト事情トヲ述ベテ了承ヲ得發表ノ期日ヲ如何ニ定メルカヲ協議シタ  
ルニ三十日カソノ次ハ十一月二日ニ閣議ガアル故ドチカニシタシトノ意向ナリ  
シヲ以テ十一月トナレバ丁度七年トナルヲ以テ差支ナケレバ左様ニ運バレタキ  
旨ヲ述ベ置キタリソノ後本田局長ガ次官ト話合ヒタル二十一日二日ハ金曜翌日  
ハ天長節<sup>(明治)</sup>ソノ翌日ハ日曜ナレバ發表ニ工合悪キ故十月卅日ノ閣議ニテ定メ十一

月一日ノ日附ニテ發令シ二日ノ新聞記事ニ合フヤウニ同日發表スルコトニ  
シテハ如何トノコトニソノ辺全ク余ニ格別ノ希望ナキ故適當ニ定メラレタキ旨  
答フ尚次官ニハ疎開費ノ予備金支出手續ノ遅延ノ為事務担当者ノ困難セル事情  
ヲ話シテ急速ノ進行ヲ求メ尚有浦氏ノ青師校長トシテノ転出ヲ考ヘ呉レヨト依  
賴シ置キタリ

午時有光局長ニカネテ有浦氏処置ニツキテ依頼シアル關係上次官ニ右ノ旨依頼  
シ置キタル旨ヲ告ゲ同君ヨリモ然ルベク援助シ呉レタキ旨頼ミ置キタリ

帰途富山房ニ立チ寄り乾氏ニ逢ヒ明日和田清君ト会见辭典問題ヲ協議スル準備  
ヲ整ヘクル、ヤウ依頼ス更ニ東亜研究所ニ原敢二郎氏ヲ訪フ同氏相變ラズノ元  
氣ナルガ聯合軍側ヨリ政府ヘノ指示ニ鑑ミ同氏ト陸軍出ノ三木氏ト共ニ理事ヲ  
退キ然モ同氏ハ囑託トシテ實際上従来通り第四部長ノ職務ヲ執ルコトニセリト  
ノコトナリ依託事業西力浸透史ノ一応ノ切り上ゲハ過日入洛セル市古氏ヨリノ  
報告ヲ聞キ現在ノ実情ガ研究員ノ研究ヲ妨グルモノ多キト題目ト現情勢トノ関  
係ヲモ顧慮シテカ、ル方針ニ出デタルモノトノ釈明アリ余ガ先日ノ返事ニ満足  
ニシテ且ツ費用殘額ノ処理ト三月頃迄ニ何カマトマリノ出来タルモノヲ得ラル  
レバ幸甚トノ事ナリキ

同氏ノ談ニヨレバ今度ノ終戰処置ハ米内氏ノ力ニ俟チタル処多ク同氏ガ終始一  
貫ソノ主張ヲ變ヘザリシ為ニカ、ル終決ヲ導クニ至リタルモノナリト云ヒ同氏  
ハ到底勝算ナキヲ知り米軍ガ琉球ニ上陸セバ之ヲ機會ニ降伏ヲ申出デテハト原  
氏ニ話セシ故ソレニテハ尚ホ機熟セズ今暫ク局面ノ進展ヲ見ザレバ国内ヲ纏メ  
ルコトノ困難ナルベキヲ説キシガ米内氏ハ六月頃ヨリ既ニ終決ニ力ヲ用キツ、  
アリシナリト云ヒ現内閣ニ<sup>(マツ)</sup>留任モマツクアーサーガ豊田氏ニテハ現ニ司令官  
トシテ戰場ニ見エタルモノヲ此ノ際ニ大臣トシテ對手ニハ出来ヌニ非ズヤトノ  
意向ニテ止ムヲ得ズ米内氏ガ留任スルニ至リタルナリトノ説明ナリ、鈴木首相  
ノ甚ダ決斷ニ於ケル手際ノ拙カリシコトモ隱ス所無ク聞カセ呉レタリ  
昨朝宿ニテ靴(董ノ新調セルモノ)ヲ失ヒソノ上今日ニナリテモ尚ホ部屋ヲ作



ラザルニ憤慨シ番頭ヲ叱責セルニ漸ク狹隘ノ一室ヲ都合セリ今ノ東京ノ生活ノ慘憺タル有様ヲ見テハ小言モ言ヘネドスベテガ責任ヲ忘レテ違約ノ如キハ念頭ニ無キ有様ヲ見テハ憤慨ヨリモ悲嘆ニ陥ラザル可ラズ障子ハ破レ畳ハ汚レタル上ニ縁サヘモ破レ蚤ノ這ヒ廻ル北向キノ小部屋ヲ僅ニアテガハレテソレデモ一人住ミノ気安サヲ覺エカボチャ、オカラ、何ヤラ知レヌ小片ノ僅カニ浮ベル汁一杯ト豆ニ米ヲ混ジタリト云フベキ半碗程度ノ夕飯ニ飢ヲ凌グ持參ノ罐詰デモ無ケレバ今ノ健康ニテ堪ヘ得ベシトモ思ハレズ加フルニ聯合軍司令部ノ次ギヨリ次ギヘト出ス指令ノ圧迫ハ日々加ハリ陰慘益々深キヲ加フ

此ノ有様ニ東京滞在ヲ早ク切上ゲルコトニ決心シ明後日朝急行ニテ出発ノコトニ定ム

正午前ノ暫時ヲ文部省次官応接室ニテ河合<sup>(註)</sup>外務次官ト会谈倉石君ヨリ聞キタル件ニツキ同氏ノ意向ヲ確カム成程聞キシニマサル官吏放レノシタ理想家肌ノ人ナリ

## 十月二十五日 木

東大ニ内田氏ヲ訪ヒ過日ノ学葬ニ弔辞ヲ受ケ又一昨夜自動車ヲ借タルニ対シテ挨拶ヲ述べ兼テ在職最後ノ訪問ナリシ意ヲ後ニテ通ゼント思ヒ須田町ニテ電車ヲ待チシモ一時間余ヲ待チテ本郷ユキ一台ノ電車モ来ラズ遂ニ訪問ヲ思ヒ切り富山房ニ至リ電話ニテ事情ヲ述ベテ挨拶ヲ述べ

文部省ニ一時ニ行キ坪上氏ニ逢フ約束ヲ昨日久保田理事官ヲ介シテ結び置キタレバ十二時過ギ富山房ヲ出テ神保町ニテ電車ヲ待チシモコレモ又一時ヲ過ギテ尚ホ三田行キガ一台モ来ラズ漸ク来リシ時ハ已ニ一時十分ナリ日比谷ニテ最早電車ヲ待ツ勇氣無ク公園ヲ横ギリテ文部省ニ駆ケツク坪上氏ハ既ニ来リテ待チタルモ余ガ遅キ故他ニ出デ行キタリトノコトナリシガ間モ無クマタ同氏ガ来リテ余ヲ待テリトノコトニ大急ギニテ次官応接室ニ行キ漸ク同氏ト会ス、光華寮長交迭ノ件ニツキテ事情ヲ語り誤解ナキヤウニ了解ヲ求メ置ケリ留学生ノ現在

ノ落チツケル状況ヲモ詳細述ベ置キタリ同氏ハ余ノ含ミ迄ニトテ近ク日華協會役員ノ戦争関係色ノ濃キモノハ一応退陣ノコトニスベク学者等ニテ割合ニカ、ル色彩ノ薄キモノニ委任ノコトニナルベキ旨ヲホノメカセリ

一応帰宿休息ノ上四時過ギヨリ富山房ニ行キ和田君ト会シ辞典編纂ヲ主トシテ京都側ニテ当ルコトニ和田氏異議ナキ旨ヲ確カメ十二月中ニ東京側一卷分ノ原稿ニ和田君ガ目ヲ通シテ京都ニ送ルコトニ約ス富山房ニ依頼セル夕食ノ才蔭ニテヤット宿屋ノ夕食ノ難ヲ免カル

時野谷勝夜来訪

## 十月二十六日 金 晴

宮谷隨員切符ヲ買ヘズ余独リニテ朝八時廿五分ノ急行ニテ帰ル旅客ノ雑踏往路ニモ勝ル

近衛公爵辞爵ノ意向ヲ諸新聞報ズ木戸内大臣ガ目下公ノ憲法改正攷究ノ御沙汰ヲ拝シテ從事中ノ事ナレバ此ノ終結マデ公ノ申出ヲ延バスヤウ要請シ公ハソレニ従ヘルナリトノコトナリ

## 十月二十七日 土 快晴

流石ニ京都ハ否自宅ハ東京ノ旅寓ニ比シテ楽天地ナリ食糧ノ不自由モ彼此対比スレバ比較ニナラズ

出発ノ前ヨリ気ニカ、リタル東方文化研究所ノ接收問題ハ森川氏ガ進駐軍ノビング大佐ニ市民トシテ研究所ノ重要性ト事情ヲ話シ意向ヲ聞キタルニ始メテソノ性質ヲ聞キタリトテ先方ニテモ了解シ之ヲ接收スル意向ナシトノコトナリシ由森川氏ガ同所ニ来訪ノ上吉川君ニ報告セリトノコトヲ吉川君ニ電話シテ聞キ安心ス

秋山終戦事務局長来訪快談ス、河合<sup>(註)</sup>次官ヨリモ秋山氏ニ面談シテモシ接收ノ意向アレバ善後策ヲ講ズベキ旨余ニ語り同氏宛名紙<sup>(註)</sup>ヲ余ニ渡シタルコトナドモ語

リ置キタリ

夜牧野同志社総長ヨリ電話アリ過日依頼シタル件ニツキ森川氏ヲ進駐軍ニ派シタル結果ヲ通知セラル

宮津ヨリ鮮魚ヲ携ヘテ吉岡ノ娘来ル夜道ヲ迷ヒテ彷徨シタル由氣ノ毒ナリ

十月二十八日 日 快晴

天空一碧ノ快晴ナリ身モ心モ暫ク振リニ伸ビ／＼ス朝永井浩氏宛ニ書面ヲ認ム今回ノ東上中同氏ニハ是非一度逢ヒテ長キニ亘リ公務ノ上ニテ受ケタル配慮ヲ謝スル積リナリシガ二十五日東大ニ同氏及ビ総長ヲ訪ハントシテ電車無キ為其ノ意ヲ得ズシテ帰りタレバ書中謝意ヲ表セントセルナリ昭和十三年余ガ就任以來回顧スレバ内閣從ツテ文相ノ交送幾度ナリシカ曰ク荒木曰ク河原田曰ク松浦曰ク橋田曰ク東条曰ク岡部曰ク二宮曰ク太田曰ク前田、橋田氏ガ少シク長ク在任シタル外ハミナ一年カ一年足ラズノ短命ナリ此ノ間ニ計画的ノ文部行政ナド出来ベクモ非ズソレト其ノ場其ノ場当リニ終始スルノミ大学ニ関シテハ善カレ悪カレ殆ンド永井氏独リニテ処理シタルモノト言フベク從ツテ公務上余ノ最モ緊密ニ接触シタル当局ナリシナリ現前田氏ノ文相ニ任ジタルヲ機トシ一方ニハ現時局ニ対スル責任上ナルベク他方ニハ別ノ理由モアリシ如ク聞ケド長キ専門、更ニ大学教育局長ノ椅子ヲ棄テ、奨学会理事ノ職ニ移リタルガ過般書面ヲ寄越シテ一応此ノ椅子ヲ離ルレド多年文教畑ニ奉公シタル身ハ更ニ他日ヲ期シテ斯道ニ於テ奉公スルコトヲ期シ居レリト記セリ今後野ニ在リテ時世ヲ見抜キ見識ヲ養ヒ真ニ世ノ為國民ノ為己ヲ棄テ、乗リ出ストセバ善キ文政当局トシテ重キヲ為スニ至ルベシ民ノ為マタ國民ノ為早クソノ日ノ来ルヲ祈ル午後久シ振リニ董ト共ニ自転車ヲ連ネテ上賀茂演習林ニ至リ林間ヲ逍遙、秋ノ茸ヲ探セド松茸ハ出ル地ニ非ズシメジニハ早クシテ得ル所無シ椎茸数本ヲ家ヅトニモギ取リテ帰ル尚ホ乗り足ラザル氣持ニ又堤防ヲ上ニ走リテダムニ至ルコ、ニモ進駐軍ノジープガ止マレルニ嫌氣ヲ生ジ直ニ引返ス近来ニ無キ心ノ余

裕ヲ得タルヲ喜ブ

十月二十九日 月 快晴

今日モ秋空一碧ノ好天氣ナリ長ク馴レシ文書ノ檢閲捺印モ今明兩日ガ限リト思ヘバ感慨深シ吉川敷内両氏倉貫君ト共ニ來訪、倉貫君ニ久保田君ヨリ東京ニテ受領セル研究所經費上半期分五万円ノ小切手ヲ転交吉敷両氏ハ余ガ東上中外務省ニテ外郭団体ヲ如何ニ処置スルカニツキテ何カ感知シタル所ナキカラ尋ネニ來レルナリ余ハ河合氏ヨリ聴取セル所即チ現在ノ見込ニテハ拡張ハ見込無キモ現状維持ノ經常費支出ハ続クベキヲ答ヘ且ツ外務ノ補助ガ仮令止メラル、モ或ル方法ヲ講ジテ研究団体トシテ自存シ得ル見込ハホゞ立チ居ル旨ヲ告ゲ置ケリ之ニツイテハ狩野博士トモ談合シソノ上理事会商議委員会等ニモ諮ルベキガ研究員諸氏ハ安ンジテ研究ニ従事スベキナリトモ話シ置ケリ研究所費援助機關設立ノ見込ニツキテハ何事モ告ゲズ、別ニ五億ノ国費ヲ以テスル学振ノ研究所援助ニツイテモ近ク八木氏ト交渉スル考ナル旨ヲモ述ベ置キタリ

三好京都府知事ガ内閣副書記官長ニ転任ノ為挨拶ニ來ル、富山房坂本氏ニ電話ニテ来月初メ会见辞書編纂ニツキ和田君トノ協議ニ基キ新方針ヲ決定スルコト、ス、同社富森氏芳賀氏來訪重ネテソノ旨ヲ述ベ置キタリ 宇治伯爵ガ荒勝研究室ニテ研究ニ従事スルトテ挨拶ノ為來訪

府庁ニ秋山公使ヲ答訪、不在、太田參事官ニ逢フ、知事官舎答訪、更ニ同志社ニユキ牧野森川両氏ニ謝意ヲ表セントシタリシガ両氏トモ不在、名紙ヲ殘シテ歸ル

帰途清風莊ニ寄リコ、ニテ鳥養氏ヲ招キ東京ノ模様及ビ内部事情ヲ話シ置ケリ終リ頃ニ黒田法學部長來訪、教官復帰方針ニツキ文部省ニテ田中局長ト語り合ヒタル大体ヲ話シ置キタリ同学部ニテハ復帰ト若ク罷免トガ混同シテ起生シ外部ヨリノ批評ヲ招クニ至ルナキヤニツキ苦慮セル様子ナリ

川田氏ニ電話シテ清風莊維持費寄附ニツキテノ住友ノ返事ノ有無ヲ質シタルニ

未ダシトノコト尚ホ暫ク待ツ外ナシ同社自体ノ重大問題ニ直面セルコトナレバ  
カ、ル問題ニ深キ注意ヲ払ハザルモ無理カラヌコトナリ

十月三十日 火 晴

今日閣議ニテ余ノ辞任承認ノ筈ナリ

狩野博士ト午后清風荘ニ会シ初メテ余ノ辞任ヲ告ゲ且ツ河相氏ヨリノ話ヲ伝ヘ  
ソノ始末ヲ協議ス

十月三十一日 水 晴

愈々最後ノ勤務ノ日ナリ

武田長兵衛君ニ電話シ会见ヲ求ム同氏午後來訪トノコトナリ午后会见マデノ時  
間ヲ農学部ニ大杉氏ヲ訪ヒ雑談三時過ギ武田氏來訪ノ電話アリ清風荘ニテ会  
見、辞任ノコトヲ話シ且ツ南方研究会ニ同氏ヨリ受ケタル寄附金残余ヲ大学ノ  
為適宜ニ使用ノ承認ヲ得タリ一部ヲ清風荘維持費トシテ大学に寄附スル積リナ  
リ会谈後久シ振リニ瓢亭ニ至リテ共ニ夕食

午前滝野孫二氏來訪、同氏会社ニ招聘ノ学士六人斡旋ノ依頼アリ

十一月一日 木

けふも快晴なり始めて家族に今日発令あるべき旨を語り夕の浴後仏前ニ香を焚  
き報告す 夜のラヂオにて発令ありたる旨報道す此日十一時より新聞記者ノ需  
に應じて鳥養氏と共に面接余は退任の鳥養氏は就任の弁を語る。

夕景大同董氏來訪

蛭川部長より石川氏が部長ニ復帰ヲ求メタル旨ヲ聞ケリ部長ハソノ内授業担当  
デモサセ徐ニ学部復帰ヲ考ヘ居ルトノ意中ヲ述ベタリ又福知山兵營ヲ譲リウケ  
ル機運ニ向ヒツ、アル旨語ル

十一月二日 晴 金

けふの新聞は皆総長ノ交迭記事を書せたり鳥養氏と共に市内ノ官衙学校等に挨  
拶廻リし学内七部長をもそれ〴〵挨拶の爲訪問各部長皆不在。この数日聯合軍  
司令部より文部省ニ対シ自由主義教授ニシテ官ヲ追ハレタルモノヲ復帰セシム  
ベキ要請アリタリトノコトヲ各新聞ニ好箇ノ新聞種トシテ掲載シ京大ニテハ法  
学部長ガカノ法学部事件ノ為辞任セル教官ノ処置ニツキ近ク東上当局ト協議ス  
ル旨語リタリトノ記事モ掲ゲタリ諸方ノ学校ニ盟休等ノ事アリ教育会漸ク騒然  
タルヲ覺ユ

十一月三日 快晴 土

明治節ナレド更衣参賀ノ要モ無シ俄ニ解放セラレテ悠然タル気分ヲ樂ムヲ得タ  
リ 瀬戸氏ヨリ來翰此際ノ辞任上々ノ出来ナリト祝シ來ル菊池一家ノ消息ヲ心  
痛シ皇國護持ニアレホドノ熱意ヲ示シテ論議シタルコトナレバ処遇如何ト痛ク  
氣遣ヒ家族ノ為家ヲ用意シ置キタク心懸ケクレトノコトナリ友情ノ深厚感謝ノ  
極ミナリ

毎日支局長ト伊藤記者來訪

十一月四日 晴 日

終日家居

十一月五日 晴 月

農林学校ニ菊池校長ヲ訪ヒ挨拶ノ積リナリシガ同氏不在安部氏ニ逢ヒ挨拶  
昼坂本氏ニ招カレ木ノ升ニ昼食辞典ヲ京都ニテ編纂ノコトニツキ協議ス  
大学ニ行キ住ミ馴レシ総長室ニ入り跡片付ケヲ為ス、午後菊池氏大学ニ來訪  
夜太田君ヲ招キ夕食

十一月六日 快晴 火

大阪ニ行キ阪大真島総長ニ挨拶昼食ノ接待ニ預ル午后上野氏ヲ朝日社ニ訪ヒ転ジテ住友本社ニユキ北沢理事ニ挨拶更ニ武田氏ヲ訪ヒ五時京都駅ニ帰着  
真島総長モ辞期ヲ考ヘ居レルガ如ク来年一月頃辞任ノ意ヲホノメカス。北沢氏ニ清風莊維持費ニツキテ返事ヲ早く希望ノ旨ヲ告ゲタルニ同氏ハマタモヤ当初余ニ考モアル故ト川田氏ガ話シタルヲ楯ニ応諾ニ難色ヲ示ス

十一月七日 晴 水

研究所ニ行キ三幹事ト談話、了リテ研究員一同ト弁当ヲ食ヒ乍ラ雑談  
川田順氏ヲ挨拶旁々訪問シ昨日北沢氏トノ会見ノ大略ヲ告ゲ更ニ尽力スベキ旨ノ答アリ昨日日本社秘書ヨリ同氏ニマダ取込中決定セヌ旨ノ返事アリタル故余ニ同氏ヨリ電話シタルモ電話故障ノ為通ゼザリシトノコトナリ  
復タ大学ニ至リ後片附ニ従事

河相情報局総裁入洛ノ由新聞ニ見エタレバ倉石氏ニ連絡ヲ依頼シ会談セントシタルモ終ニソノ機会ヲ得ズ倉石氏ハ十一時過ぎ迄俵屋ニ待チタル由ナリ

十一月八日 木

晴時々時雨アリ寒シ終日家居

十一月九日 金 快晴

研究所ノ開所記念日ナリ研究所トシテハ大苦心ノ跡ノ見ユル午餐会ニ所員一同ト食事ヲ共ニス一時ヨリ東方文化講座開始初メニ挨拶ヲ為ス

二時研究所ヲ出デ桃山御陵ニ退官ニツキ参拝ス有浦庶務課長同行ス明治大帝ノ神霊今日ノ国情ヲ如何ニ見ソナハシ給フラン御陵前ニ額キテ黙想スレバ万感交々至リ案内の守衛ノ待遠シサヲ姿勢ノ上ニ示セルヲ知り乍ラ頭挙ゲ得ズ

今日ノ新聞ニ中国ヨリ天皇ヲ戦争犯罪者表ノ劈頭ニ挙ゲ東久邇宮ノ名モ表中ニ

記シタリト記セルコトナド今一入悲嘆ヲ深カラシムルアリ御陵ニ近キ伏見街道ヲ亜米利加兵ノジープガ右往左往スルニ逢ヒテハ哀愁益々痛切ナルヲ覺ユ  
今日本田君ガ東京ニテ受領シ来レル依願免官ノ辞令ヲ有浦氏ヨリ受領六十四才初メテ免官辞令トイフモノヲ手ニシ愈々隱居ノ境涯ニ入りシヲ今更ニ自覺ス発令以來既ニ週余身辺匆忙尚ホ余裕ナク研究所モ可ナリ繁雜ナリ形式ノ隱居ト實際ノ繁忙ト伴ハザルヲ恨ム

十一月十一日 日

十二時四十分發ニテ峯山ニ墓参ノ為行ク途中ヨリ雨夕暮峯山着、兄足腰不自由急ニ老衰ノ態ナリ

十一月十二日 月 晴

朝展墓退官ヲ報告久シ振ニ老両親ト対談ノ思ナリ  
兄ト共ニ五箇村訪問病院ノダットサンヲ提供セラレタレバ昼過ぎニ峯山ニ帰ルヲ得タリ安田定門鱒留田中信太郎氏等ニ逢フ一日中郷里ノ山河ヲ逍遙シタカリシモ兄モ同行ノ事トテ他日ヲ期シテ引返ス  
夜宮川吉村大同父子諸君ト兄ノ招待ニテ会食雑談

十一月十三日 快晴

病院ノ車ヲ借り浜詰ニ瀬戸君ヲ訪フ兄同行、高田太右衛門氏ノ離座敷ヲ借用セルナリアレ程活躍セル同氏ガ時勢下此ノ辺地ニ雌伏閑居シテ糧食佳肴ニ飽キ悠々ノ生活ヲ送レリ他日ノ雄飛ニ備フルモノ、如シ事情ニヨリテハ急ガズ騒ガズ徐ニ英氣ヲ養フ此人真ニ偉人ノ類ナリ

午後瀬戸氏夫妻ト海岸ニテ魚ヲ釣ル大小数尾ヲ獲タリ帰来直ニ調理シテ食膳ニ上ス美味無比ナリ二尺ニモ近キ鯛其他ノ鮮魚ヲ用意セシメテ饗応セラル好意謝スルニ辞無シ九時又車ヲ峯山ヨリ呼びテ帰ル



今日天皇陛下御入洛大宮御所ニ泊マラセラル、由新聞ニテ予テ報ジタリ

十一月十四日 水

午時古賀精一氏ニ招カレ宮川院長ト共ニ旭屋ニ昼食

午後宮地董君間人ヨリ態々訪問夕食ヲ共ニシテ六時氏ハ間人ニ帰ル

十一月十五日 木 雨

朝来雨ナリ、大同氏、中西孫七氏等態々訪問、明後日東方文化研究所ニテ講演

ノ約アル為此日三時半出發帰宅

大野迄大同氏ト同車、夜八時半二条帰着董ニ迎ヘラレテ帰ル

ケフ陛下東京ニ還御アラセラル

十一月十六日 金

家居明日ノ講演ノ準備

北尾英夫昨日帰京セリトテ来泊

十一月十七日 土

東方文化研究所ニテ元代史ノ講演

十一月十八日 日

東方文化講座終了ノ為講師所員ト共ニ山端平八ニ夕食、料亭ノ折角ノ食膳モ数日峯山浜詰ニテ飽キタル盛饌ノ後ニハ箸取ル氣ニモナレズ土地ノ相違ガ現下カク迄食膳ニ影響スルコトヲ経験ス、瀬戸氏ノ賢明サニ服ス

十一月十九日 月

研究所ニ行ク

十一月二十日 火

快晴ナリ、大阪ニ武田氏ヲ訪フ三島氏ヨリノ依頼ヲ果ス為ナリ同氏不在、書面ヲ残シテ帰ル

十一月二十一日 水

研究所ニ行キ午後二時ヨリ清風荘ニテ滝野氏ト会见

十一月二十二日 木

評議會ニ挨拶ノ為大学ニ行ク先日來法学部教授ニシテ往年法学部事件ノ為大学ヲヤメタル人々ノ復帰ガ新聞紙上ニ頻リニ問題トシテ取上ゲラレ居リシガ鳥養氏自カラ此等ノ元教官ニ復帰ヲ求メ法学部ニテハ教授会ニテ自発的ニ七教授ガ辞意ヲ表明シ黒田部長モ問題一段落ヲ見タル上退任ノ用意トノコト急転直下ノ形勢ナリケフハ山科ニ鳥養氏ト黒田氏トガ打ツレテ滝川氏ニ復帰ヲ求メル為訪問スルトノコトナリ 今夜時野谷勝東京ヨリ来ル

十一月廿三日 金 快晴

新嘗祭ナリ新穀ヲ嘗メサセ給フ至尊御感慨拝察スルダニ畏シ  
退官以後初メテユックリ家居書齋ノ片附ケナド二一日ヲ送ル  
昨日滝野氏ヨリ糧食窮狀ヲ憫ミ白米三升ヲ贈ラル厚意謝スルニ辞ナシ先日來道代營養失調連日下痢止マズ井上教授ニ依頼シ寄生ノ條虫驅除ヲ為サントスルモ衰弱ノ為絶食服藥ニ堪エザルベシトノコトニテソノ前ニ營養ノ回復ヲ計レルモカ、ル有様ニテ益々衰弱ヲ増ス、白米食摂取ノ為コノ状態ニ拘ハラズ宮津吉岡ニ行キタシトノ希望ナリ放置ス可ラザレバ之ヲ禁ズルト共ニ白米ノ工夫ヲ考ヘ一昨滝野氏ニ話ノ序ニ窮狀ヲ語リタレバ同氏ヨリ此ノ贈与アルニ至レルナリ、今日ヨリ多少元氣ニナリタルガ如シ



十一月二十六日

医学部ニ菊池、井上教授等ヲ訪ヒ挨拶ト共ニ自分及ビ道代受診ノ札ヲ述ブ

十一月二十七日 火

新旧総長交替式十時ヨリ挙行ニツキ大学ニ行ク学生ノ集合数甚ダ少シ総長ノ挨拶ヲ聞クヨリモ休ミノ時間ヲ利シテ通学時間ノ余裕食糧ノ工夫等ヲ試ミルガ目下ノ重要問題ナルガ為ナルベシ夜清風荘ニテ部局長ノ両総長招待晩餐会開カル大学ヨリノ帰途農学部ニ並川農場<sup>河</sup>長ヲ訪ヒ更ニ狩野博士ヲ訪ヒ東洋文化研究援護財団設立ニツキ懇談農場ヨリ紅白ノ鏡餅ヲ贈ラル場長ノ厚意深謝ニ堪ヘズ

十一月二十八日 水

夜蕪庵ニ於ケル支那留学生ノ晩餐会ニ出席  
午前ヨリ研究所ニ出務、倉石教授ト会談帝國銀行ノ村上支店長ヲ招キ財団預金ノ件打合

十一月二十九日 木

総長官舎ニ部局長ヲ招キ新旧両総長ヨリ就任ト離任トノ挨拶ノ為ノ晩餐会ヲ開ク  
安田銀行支店ニ立寄り昨日倉石氏トノ打合ニヨル件ヲ村井支店長ニ話ス

十一月三十日 金

午后雨ヲ冒シテ大阪近郊鴻池新田ノ鴻池氏ノ別墅ニ至リ同氏ノ招宴ニ列ス近藤堀場両教授以下オクダ電気関係ノ諸氏十余人ノ同座ナリ鳥養氏風邪ノ気味トテ不参

十二月一日 土

研究所ニ行キ帝國、安田、住友三支店ヲ招キ財団預金ヲ為ス倉石氏同席

十二月二日 日

平松氏夫妻夕景來訪夜洛バスニテ引上ゲ

十二月三日 月

峯山吉村兄來泊、卓ノ為高槻ノ兄ノ家ヲ借ルコトニ相談  
今夜ラヂオニテ梨本宮殿下ヲ初メ五十九名ニ対スルマツクアーサー司令部ノ逮捕命令ヲ伝フ局面益々凄慘ヲ加フ

十二月四日 火

朝大野ノ大同董氏來訪過日來食糧關係ニテ同氏ヲ煩ハスコト多ク深謝ノ儀ナリ午後兄ト共ニ家ヲ出デ大学ニ行ク中華民國王昌銳海軍中佐ガ昨日光華寮ニ來リ更ニ研究所ニ來リテ吉川氏ト逢ヒ在支一般人及ビ軍人等ノ処遇ガ公平ニ行ハレ居ルコトヲ話シ成ルベク多クノ人ニ此ノ事ヲ伝フル機會ヲ得タシトノ事ナリシ旨吉川氏ヨリ電話アリ今日二時ヨリ大学ニテ懇談会ヲ開ク故出來レバ出席ヲ希望スルトノ事ナリシ故出席セルナリ王氏ハ極メテ謙讓ナル態度ニテ総長ト余ト同席ノ総長室ニテ卅分許リヲ話シ合ヒタル後懇談会ニ出席トテ辞去今夜大学ト研究所トニテ氏ヲ晩餐ニ招キタルモ差支アリトテ辞退  
河辺中西孫七氏ヨリ來信甘諸大根少々送ルトノコト友情感謝ノ至ナリ  
武田氏ヨリノ使來リ依頼シタルロゼーン等届ケラル

十二月五日 水

事務高等官ヲ総長官舎ニ招キ慰勞ノ晩餐会ヲ開ク

十二月六日 木

朝十時二十分発列車ニテ伊勢神宮ニ退官御礼ノ為参拝鳥養総長モ就任ノ為ニ同行参拝ス宮谷書記随行ス神宮皇学館ニ道寄りシテ小西君ト会谈、夜鳥羽ノ待月ニ宿ス劔木君七時前京都ヨリ約二依リテマタ来泊鳥養氏ノ友人ナル神戸製鋼常務取締役ナル小田島修三氏ノ世話ニナリ参宮ノ自動車ヲ始メ夜ノ招宴等ノ好意ニ浴ス

外宮ノ罹災ハ二月東京ニ在リテラジオニテ聞キタルコトナリシガ実情ハ大シタコトデ無ク當時一種ノ謀略トシテ大キク伝ヘラレタルモノ、如シ両宮大神ノ前ニ額キテ現下ノ情勢ヲ顧ミレバ悲涙禁ジ難シ

十二月七日 金

朝九時半ノ列車ニテ鳥羽ヲ出デ途中一身田ニ下車始メテ平松家ヲ訪問五月以来氣ニ懸リ居リシ問札ヲスマス昼食ノ饗応ヲ受ケテ一時半出發後レテ鳥羽ヲタチタル鳥養君ト合ス夜六時帰洛

十二月八日 土

十二月九日 日

家居

十二月十日 月

日本合成化学纖維化学両研究所ニテ正午理事会ヲ開キ総長在職中理事長トシテ所務ニ携ハリタル慰労会ヲ催ホサレ記念品ヲ贈ラル

研究所ニ至リ年末手当ヲ始メ其他待遇改善ニツキ幹事諸氏ト話ス

十二月十二日 水

研究所ニ出務大久保幸徳氏倉石教授等来訪倉石君ト援護財団ヨリ今月ヲ始メトシテ研究所ニ援助ヲ為スコトヲ打合ス

十二月十六日 日

終日家居 午后三時ノラジオハ近衛公爵ガ今晚服毒自殺セル旨報ズ支那事變ヲ収拾セントシテ却ツテ事端ヲ繁クシ大東亜戦争ヲ未発ニ遏メントシテ遏ムルヲ得ズ今日ノ破局ヲ齎セル理論上ノ責任ハ免レ難シトスルモノソノ心情ヲ察スレバ同情ニ余リアリ終戦以来衆論囂々トシテソノ責ヲ問フ無理ニハアラネド公ノ心事ヲ顧テ今少シク情味アル論鋒ノ向ケラレンコトヲ希望シテ止マザリシニ此ノ冷酷ノ批難ハ今日最高司令部ノ指令ニヨリ巢鴨ニ収容セラル、間際ニ遂ニ二世ニ望ヲ断チ公ヲシテ此ノ拳ニ出デシムルニ至リシモノカト思ハルモトヨリ深キ交誼トイフニハアラネド既往に接シタル所ニヨリテ推知スル公ノ性格ニハ不羈独往ノ面モアレバ場合ニヨリテハ幾分力捨鉢のノ所モアリシヤウニ思ハル昨夜肉親親戚ヲ集メテ収容前夜ノ告別ノ小宴ヲ催シ深更マデ雑談シタルモ誰モ自殺ノ氣配ヲ感ゼザリシトイフ最後ノ瞬間ニ於テ幾分捨鉢のノ氣分ニ陥リタルニ非ルカ公ノ二男道隆君ト二時ヲ過グルマデ語り合ヒソノ心事ヲ紙片ニ録シテ

〔アキママ〕

ト述ベタリト以テ心事ヲ推知スルニ足ル太平無事ノ時ニ逢フカ若シクハ支那事變ヲ所期ノ如ク拾収<sup>(収拾)</sup>シ得タリシナラバ興隆日本ノ大宰相トシテ声望大職官ヲモ凌グベカリシニ不幸邦家ノ大變ニ遭遇シ經國ノ事志ト違ヒテ終ニ此ノ悲劇ニ終ル国家ノ悲運ヲ前二公ノコノ最期ヲ思ヘバ国政ニ任ズルモノ、苦難真ニ同情ニ堪ヘズ公自カラ功罪ハ後世ニ定マルト述懐セリトイフ興憤ノ情漸ク治マリ静ニ今次ノ事局ヲ考フルトキ幸ニ公正ナル史筆ガ三度相位ニ在リシ公ノ罪ヲ糺スニノミ急ナラズシテ止メントシテモ止メ得ザリシ国家ノ情勢ヲ真実ニ觀取シテ過ラザランコトヲ冀望セザルヲ得ズ

卓高槻二居ヲ定メ引越ス

十二月十七日 月

朝起キテ見レバ両腕顔面等ニ赤キ腫アリ別ニ気分ニ変リハ無シ終日書齋ニ在リ  
夜大村次官ヨリ電報アリ「貴族院勅選議員ニ推薦シタキモ差支ナキヤ返」ト見  
ユ思ヒガケナキ事ノ時々起ル世ノ中ナリ今時局下両院制度ノ改革ガ頻ニ叫バレ  
衆議院ハ既ニ選挙法改正ノ議ヲ了リ貴族院ハ頻ニ之ガ論セラレテ次ノ議會ニ議  
ストイフ此際此ノ報ニ接ス好意ハ深謝スベキモ一向ニ興味モ乗ラズ

十二月十八日 火

研究所ニ行ク。夕暮大学ニ寄り本田君ニ大村氏ヨリノ電報ノ旨ヲ話シ事情ヲ知  
リ居ラバ聴取セントセシモ同君ハ此事ヲ関知セズトイヒ却ツテ文化勲章ノコト  
ニツキ過般東上ノ節聞知セシガソレハ時期既ニ間ニ合ハズトノ話ナリシ由モ聞  
ケリト云ヘリ余ガ大村氏宛ニ厚意ハ深謝スルモ辞退シタシトノ返電ヲ出サント  
スルヲ強ク引止メヤメルコトハ何時デモヤメラレル事ナレバ此際ハ大村氏ニ任  
セテハ如何ト勸ム成程ヤメントスレバヤメラレル儀ナレバ推薦事情モ判明セザ  
ルコトニモアリ一応一任スルコトニ決意シ「御好意ヲ深謝シ御一任ス」ト返電  
ス

董館林ニ行ク

十二月十九日 水

夜九時ノラディオハ勅選八名ヲ発表ス吉田茂外相坂内務次官、余、<sup>〔安倍〕</sup>阿部能成一  
高長原口中将、明石照男帝銀頭取、外二人ナリ  
峯山吉村来泊不自由ノ足ヲ引ズリテ府会ニ出席セル様痛々シ

十二月二十日 木

明日吉村ノ兄ヲ井上硬教授ニ診察シテ貰フコトニ依頼シ置ケリ

十二月二十一日 金

乗物不自由ニテ大学病院マデ受診ニ行クコト困難ナリトテ兄ハ受診ヲ見合セル  
旨電話シ来ル老年ノ足ノ不自由ニテ別ニ良キ療法ノアル訳ニモアルマジケバ別  
ノ機会ヲ待ツモ可ナラント思ヒ強イテ勸メズ

十二月二十二日 土

秋山終戦連絡事務局長ヲ鳥養総長ト共ニ清風荘ニ招キ懇談連合軍司令部ノ方針  
トシテ教官適格審査ヲ大学ニテハ評議會ニテ為スコトニ同意ノ意向ナリト聞ク  
二三日前ノラディオ所報ニハ教授会ガ之ニ当ルト定マレリトノコトナリシガ同  
氏ハ然ラザル旨ヲ強ク<sup>〔主〕</sup>首張シ教授中ニハ生活ノ為ニ考ヲ左右セラレル人モアル  
ベクソレデハカ、ル審査ハ任サレズ評議員ナラバカ、ル憂モ少ク又現在評議員  
ニハ立派ナル経歴ノ人ガ任ゼラレテアリ向後モ評議員ノ任命推薦ニ注意シテ此  
ノ機関ニテ審査スルコトヲ妥当トスル意見ナリト云フ司令部ガ評議員ノ経歴人  
物ヲモ探査シツ、アリトハ思ハザリシガ秋山氏ニヨレバ先方ニテ既ニ調査シア  
リトノコトナリ或ハ然ラン果シテ然ラバ想像以上ニ細カキ用意ノ下ニスベテヲ  
処理シツ、アルナリ日本人在来ノ考方ハカ、ル点ニ於テモ一新スベキナリ

十二月二十三日

山本寛一氏来訪

十二月二十四日

此日卓帰来今日ヨリ武田会社ニ出勤ノコト、ナレリトイフ

十二月二十五日 火

夕景小林政次郎氏ニ招カレ上御霊前ノ瓢亭ニテ夕食田村、林田、吉村及ビ小林氏夫妻同席、寒氣厳シ

十二月二十六日 水

奥田電機会社ニ招カレ旧八尾政ニテ支那料理ノ饗応ニ預ル勘定台ニ聞エル声ハ何レモ千円台ノ計算ノ呼声ナリインフレーションノ実況ヲ現実ニ見テ無量ノ感慨ヲ催ス曾テ一九二〇伯林ニ在リシ当時尙ホ其ノ後ノ如キ光景ニハ非リシニセヨ既ニ暴落セルマーク貨ト物資不足ノ為ニ独逸国民ノ苦惱セル中ニ外国人ノミガ巾ヲキカセテ遠慮モナク贅ヲ極メシ当時ヲ回想シ我が国民ノ自覺ト政治力ノ發揮ニ依リテ此ノ難局ヲ打開セザル可ラザルヲ痛感ス

十二月二十七日 木

昼前太田君ヲ久振ニ訪ヒ中尾ノ写真ヲ渡ス予テ依頼セル同氏ノ肖像画ヲ武田氏ノ為ニ画ク材料トシテナリ研究所ニ行キ本年最後ノ事務ヲ処理、更ニ大学ニ立寄り本田君及ビ鳥養総長等ト雑談シテ帰ル

十二月二十八日 金

奥田電機専務滝野氏来訪今度田中、末岡、高島、辻沢四人ヲ同社ノ依頼ニヨリテ詮考推薦皆入社シタル為ニ謝意ヲ表スル為トテ来訪セルナリ

京都大学文書館資料叢書 1  
羽田亨日記

編集・発行 京都大学文書館  
発行日 二〇一九年三月二十九日  
印刷 ヨシダ印刷株式会社